

コロニア文学・第五号



コロニア文学・目次・第五号

一九六七年二月

小説

貞 (ていじよ) 女 (77枚) .....	原 奈保子	6
香 れ バ ラ (41枚) .....	高山 東作	57
移 植 (32枚) 第四回 .....	川 原 奈 美	86

虚構の果て(30枚)……………伊那 宏

埋 葬(26枚)……………福村 琳

夏(なつよ)代(15枚)旧作再録・四……………片山 耀子

A・T a m a r a……………A n t o n i o N o j i r i

### 私の終戦

#### 特集《第3回》

終戦の思い出……………織田 糸音

私と終戦前後……………瀬古 義信

終 戦 前 後……………細川 末葉

私 の 終 戦……………田端 月詩

私 の 終 戦……………長谷川 清水

私 と 敗 戦……………中村 建男

#### 詩

訪 問……………狩海 亘

断 層……………藤田 勇

クワレズマ……………可児 三平

ペスターナ街……………横田 恭平

パイネイラ……………吉原エミリオ

愚の座……………芳賀 芳朗

しあわせの園……………小野 政子

野良犬の独白……………永田 泰三

旭日・ロマン派……………水野 林

評論

コロニア人の日本美術巡礼(1)(美術)……………半田 知雄  
映画に於ける倫理の追求(映画)……………小瀬 毅  
パウリスタ文学賞作品感(文学)……………妹尾 三郎  
詩と展望(コロニア文学)……………横田 恭平

短歌

朝に夕に……………瀬崎 涛声  
夏逝く……………陣内しのぶ  
燃える鬼火……………川原比露思  
鎖……………福田 広元  
片明り……………南条由喜夫  
野を行きて……………貞野 雅子  
喪うもの……………西田 季子  
紫を恋う……………佐藤 博三  
つけ入る声……………大場 時夫  
さわやかな背信……………木村 正和  
音なき笛……………小笠原 正好



随筆

野鳥記	……	務台一郎
ブンジオケイ	……	清水 卜斉
短歌と生活	……	大場 時夫
ミッ	……	風早 南瓜
御尤	……	三浪

俳句 川柳

木の椅子	……	殿岡 萩花
茶の花	……	間島稲花水
マウア高原	……	風早 南瓜
シクラメン	……	小笠原夕蛇
父の訃	……	佐藤 閑人
近作	……	坪井柳念坊

特集 「私のコロナ時代」

◇健康を第一として	……	加藤 梅晨
◇幸（こううん）運	……	長島 完一

研究

詩を語る「座談会」	……	スザノ詩話会
コロナ文学・第三号・合評	……	文学研究会
「牛の男」（農協文学賞入賞作品）	……	清谷 益次
ジオルジエ・アマード、その人と作品	……	山添 良一



## 地方文学界動静

クリチーバ地方	……まや・あきら	119
パライーバ地方	……江尻 潤	122
トメアスー地方	……加藤三浪	123

## 選 後 感

選後の感想	……尾関興之助	115
選後寸評	……矢島健介	116
作品を読んで	……弘中千賀子	118

## 書評

大場時夫著「岩霧草」	……	66
石井青泉編「番茶句集」	……	101

## 展 望

短歌・俳句	……	85
川 柳	……	90

## 会員募集 作品募集 新入会員 後 記

☆表紙	……高岡由也	☆扉カッタ	……沖中正男
☆目次カッタ	……沖中正男	☆カッタ	……高岡由也
半田知雄・沖中正雄・田中重大・吉留要			

小説

貞 ていじよ 女 (77枚)

原 奈保子



軒場を烈しく叩き出した雨の音で、眠りからはじき出された様に起き上がると、旗江は急いで裏口へと廻った。貧弱な家のつくりが、雨の時には一層軒の低さを思わせる。こんな家に何時迄も住んでるから、と、口に出して云えない歯痒さが、ピリピリと後髪を引吊る様に頭にのぼってくる。

狭い裏口の壁は、すでに風に叩きつけられた雨で幾条ものしみをくま取っていた。細目に引開けた扉の向うには、亦あの汚水が泡立った俣段々にふくれて拡がっているのが見える。低地である上に、地盤が弛んでいるらしく亀裂が出来て、ひどい雨降りともなれば、雨水が流れ込んで来て泥を運び去ってしまう。

一雨ごとに凹みの巾は拡がり、女では一股ぎしかねる程になっている。ボンヤリと点った台所の電灯が、白みかかった闇のとばりを写し出して尾を引くようにゆれた。一瞬、きものの裾をめぐられた様な冷気が、足もとから這い上がった。雨脚にたじろぎ乍らも、台処の隅から長靴を取り出し、レインコートを羽織ると、女持ちの傘を拡げて旗江は裏庭へ出た。一言声をかければ、息子も嫁も起き出してくれることは解っているけれど、旗江はそつと音に気を配って動いていた。隣家との境界の柵に沿って泥を削り落とし、捌け口を作って水路を掘り起すと、凄まじい勢いで水は退いて行った。あとには以前よりも大きな凹みが姿を現わしていて、地肌が生きものの様に暗い中に拡がった。旗江は、肌を這うおぞ氣に急いで向きを変えたと台所へと走り込んだ。戸締りをして自分の部屋へ戻ると、三人の孫達の安らかな寢息が、先刻と変らぬ息遣いで聞こえていた。時計を見ると可成りの時間が経っていた。誰も旗江の起き出した事は知らない様であった。寢床のぬくもりにやつと人心地がついた頃、コトリと小さな音がして隣りの部屋の扉が開いた。息子の猛らしかった。洗面所で暇取っている所を見ると、ひげでも剃っているらしく、かすかにものものふれ合う音がして可成りの時が流れた。何時も起き出す時間よりはずつと早い様な気がして、旗江は声をかけてみようか、とも思ったが、黙った俣足音の戻ってくるのを待った。旗江の部屋の前迄来て立ち停った足音は、ためらう様にして静かに玄関の方へと遠ざかった。出掛けるら

しい気配である。嫁のすみ子は赤ん坊に添乳でもしているのか、起きてはいるらしいが立って見送る風でもなかった。旗江は起き直ったものの、出そびれて何となく坐ったままで猛の出て行く足音を聞いていた。

昨夜もおそくまで猛とすみ子の間で口論が続いていた。夫の不景気が家庭の生活をおびやかしている事は否めないけれど、誰もが陥入っている社会環境の中で、ひとり足掻いてみた処でどうなると云うのであろう。

「俺がつまらん男だから、お前も苦勞するのさ。苦勞するのが嫌だったらいつでもおやじさんの処へ帰って良いぜ」

「何云ってるのよ、今更何と云うてうちへ帰えれると思うの。うちじゃね、しんせきがみんな良いから、今頃子供連れで泣き事でも云って帰ったら、お父さんから一ぺんで追出されるわ」

猛とすみ子の結婚のいきさつについては、旗江は委しく知らない。只手紙の上だけで結婚する事になったと知らせてきただけで、ブラジルと日本との距離が余りにも遠かったのと、義理の母子と云う関係で余り立ち入った処迄質さなかつた故もある。外国への飛躍という若い夢を羽搏かせて、猛がブラジルに渡つてからの便りは殆ど皆無と云ってよかつた。

” 単独青年はとかく、コロニアの人達から敬遠されています。何故なら、契約期間が大体四ケ年で、それを了える頃は矢も楯もたまらず嫁さんが欲しい頃ですから、僅かばかり蓄えた資金で、嫁さんは貰い度し、独立はしたし。これが仲々両立出来な

いのでノイローゼになる奴がふえるんです。

先輩移民に云わせると今頃の若いもんは、と説教されるんですが、僕も凡人の域を越えず、やっと恋人を得て、気の合う友人達と共同で仕事を始める事になりました。"といった簡単な便りが届いたのは、四、五年も経ってからの事だった。

猛のオフィシーナが三人の共同出資で廻転していたのが、先年日本人が健康上の理由で一人退いてから、伯人と猛の二人の経営に移った。技術屋として实际的に仕事の責任を任されている猛が、年長の伯人にうまい具合に利用された揚句、資金廻転難を口実に解散を宣告された。解散に当って、当然の分け前の金は銀行になくて、機械類を処分して雇人に清算する段取りになった。がその大部分は借金の担保に入って居り、新しく買入れた機械は未だ長期の支払が残っていた。仕事をしただけの金は入っていた筈であるのに、伯人は上手にその金を着服していた。猛は裁判にかけてでもと息まいて、弁護士を雇おうとしたが、莫大な経費の捻出には到底手が出なかった。法的に解雇者に支払わねばならない金だけでも工面しなければという焦りが先に立っていた。残務整理のかたわら、時間ぎめでよその仕事を手伝ったりもしでみたが、結局、思った程の足しにはならなかった。

猛が思い余って兄の真一に苦境を訴えて便りを出したのは三年程前であった。たった一人の弟の窮状を救ってやり度くも、真一的生活状態では如何とも手の施しようが無かった、高校の

教師位の給料では自分の家族を養うのが精一杯といった処である。旗江は継母という立場から未亡人になると、真一の家族とも離れて自分の生活を樹てて来た。気まずい何かがあるというのではなくて、余り開きの無い年令の差が相対的な生き方をのぞんでいたからと云えよう。旗江の生き方が、誰にわずらされる事もなく気俣であったのと背中合わせに、其処には誰にも理解されずに成長して来た女の過程があった。

外地引揚げ、親の死、終戦、結婚、夫の死と僅かの期間にめまぐるしく展開したこれらの現象は、幼なさの抜け切れないままで旗江を大人に仕立て上げた。ひととおりの人生のコースを辿ったとは云え、それは旗江の四十余年間の人生に於いて、全く飼い馴らされた家畜の様に運命に従順にしたがった生きかたであった。斗いは多かった。斗うという事に於いては、誰にも負けない程の姿勢を保ち続けて来たと思う。しかし、それが旗江の裡で誇りとか支えとなっていたのではなく、反対にいつもそれからのがれたいと希い続けてきたのは、一体何がそうさせていたのであろう。此処迄考えてくると、旗江はいつもきまって暗い淵をのぞき込んでいる自分の姿を、見せつけられた様な気持ちになった。

外国への憧れは旗江のこうした内面的な悩みを幾分かでも和らげてくれはしまいか、と自分から煽り立てて渡伯したのであった。

幼い孫達を起こして幼稚園に行く準備をしてやっている処へ、

嫁のすみ子が入ってきた「お母さん、猛が別れようと云うのよ。この子達の幼稚園の費用も続かないというの。あたしには赤ん坊を連れて実家に帰れと云うの」

しばらく泣いていたらしい瞼の腫れがふちを隈取り、眩しそうに瞬いた。

「別れてどうなるというの、男らしくないわね。猛さんも余り我を張ってばかり居ると、一生を棒にふるってしまうわ」

旗江はそう云い乍ら、すみ子の顔に、一つの決心の色が浮んでいるのを見た。下手な口出しはしない方が良い、と常々自分に云いきかせて今迄は、息子夫婦のもめ事になるべく介入しない様避けてきた旗江である。だが、すみ子の思いがもうすでに猛から離れようとしているいま、義理とは云え、母として何か云わなければならぬ立場にあった。旗江は心の中で「こんな女なら、もつと早く別れて仕舞えば良かったのに」と憎悪に近い感情が走るのを感じた。反面、終生を誓い合った男と別れようとしている女の気持ちの、ぎりぎりの限界も解る様な気がした。

それは第三者から見れば、姑母が嫁に向って抱く一般の心理であろう。

渡伯四十幾年という来歴の地主の娘として育った嫁は、体一つ、腕一本という身軽な単独青年との結婚が今になって、やっぱり後悔のもととなっているのだ。軽薄と呼ぶだけでは済まされない多くの問題が、其処に起こってきていた。

旗江は穏やかにすみ子の気持ちにふれてみた「猛さんもね悪い人じゃないわね。善い人だから真面目に此処迄頑張り続けてきたのよ、不正の出来ない人なの。あんたも貧乏は辛いだろうけど、猛さんにとって、たったひとりの味方はすみちゃん、あんただけよ」旗江は言葉尻がふるえて続けられなかった。すみ子は暗い表情の俣で宙に眼を据え吐き出す様に云った。

「フランシスコの奴ばかり、あの店だって、車だって、借家も三軒も買ったじゃないの、それも儲かったからだわ。それなのに名儀は奥さんや息子のものになってるから、誰からも突つかれる心配が無いのよ。どうして、どうして猛だけが四年も五年も借家住いでがまんしてなきやならないの。」

シスコの奴、自分は何一つ持たない裸だからってしらふを切ってるけど、うちの父ちゃん位馬鹿正直な者も二人といるもんですか」

冷く響く声だった。家族のために、実家へ無心に行くという手だてもすみ子は考えていない風である。或は猛が意地でそれをとどめているものかもしれない。

「とに角猛さんも自分の仕事には自信があるんだから、もう少し運が向いてくる迄、お互いにかまんして行かなくちゃ仕方ないでしょう」

月並な言葉ではある。だがそう云うより他に猛の立場を弁護してやる方法を知らない旗江なのである。本当の母子じゃないから……とすみ子も判えている故に、旗江のそんな云い方に口

ごたえする風でもなく、静かに部屋を出て行った。すみ子のしをれた後姿に、疲れた女の溜息がふくらんでは吐き出されていた。この月に入ってから、旗江は手内職の人形造りの材料が大部不足しているので出聖して買物に歩きたい希望だった。だが先刻のすみ子の言葉通りに、孫達の幼稚園行きが止めさせられるとなると、留守の間にも慰めてくれるものもなくて、どんなに淋しがって泣くことだろうと思うと、予定していた出聖も気がはずまなくなっていた。旗江は自分で仕事して得たお小遣いで行くのだから、息子達にも気兼ねする筋合いは無いのだが、おばあちゃんと馴つかれて、幼稚園に送り迎えする二人の孫と手をひいて連れ歩く下の子供達の無心な瞳に出合うと、ふっと血の通うのを覚える。この子供達の慰めを奪ってしまったはいけない。旗江はいじらしくなって子供達の頭を胸に抱き寄せ本能的に愛撫を繰り返した。

言葉の通じない外国での生活は旗江の考えていた程叙情的でもなく、親密でもなかった。商売をしたくても資本が無い。働き度くても言葉が駄目。頼ろうと思う日本人社会は何故か冷たい感じ。そんな事も馴れて仕舞えば年と共に普遍性に自分も溶けこんでしまうのだろうけれど。旗江は日本で紙屋という商売を十年余りもやって来て、小規模乍らマーケットの片隅に自分の店を張ってきた。渡伯がきまって、養子の様な格好で店を手伝わせていた青年に嫁をもたせ、委託という形で残して来た背景がある。それは処分してしまえば僅かなものでしかない。幾

度か思い立った事ではあるがやはりブラジル迄来てみて永住するつもりも無い今の生活では、それを処分する気にはなれなかった。せめて、猛の生活がもう少し安定する迄と、はげましの意味で付き添っているつもりが、何の足しにもなっていない様で旗江は心苦しかった。だが子供達の果物やお八つは旗江のお小遣いから出るので、子供達にとって母親以上におばあちゃんが必要な人となっている。

雨上りの道を二人の子供の手を引いて旗江は出かけた。幼稚園行きをやめりせられたら、この子達は毎日の親のけんかを見せつけられてどんな成長を遂げるのだろうか、と思うとたまらない気がして身震いが出た。

すみ子も解らない女ではない。しかし、自分から働き出そうという意欲はもっていない。この仮仮に実家に帰った処で、肩身の狭い思いで子供達をいじけさせてしまうに違いない。旗江は小さな子供達を中心に、この問題は解決されなくてはならないと思った。それには旗江の人形作り位の手内職では追いつかない、もつと手ごたえのある現実のものが必要であった。

旗江の裡に、この時何らの前後の関連性もなくふつと足立家の御隠居が浮んでいた。渡伯以来のたった一人の知己と云える人だった。

「やっぱり行ってこよう」

気分的に駆り立てられるように思いが決まると、帰りに子供達のお八つを一週間分程買い込んだ。かなりの袋包みが二つ出来

ると、旗江は両手に孫がぶらさがっている様な感じがした。ふり仰ぐと洗い流した様な雨のあとは、雲が美しく流れる空模様に変っていた。

其の日のうちに旅支度を整えると、翌朝の出発に備えて買物のメモを取り、何時もそうするように隣家から花苗を貰ってきて、足立家の御隠居の贈り物等を用意した。夜になると、子供達はおみやげの注文だといって、騒々しく旗江を取り巻き、ある限りの知恵を出しきって、欲しいものを並べ立てていた。

「うん、うんみんな良い子にしてたら、おみやげ沢山買ってきて上げる」旗江はひとりひとりを寝かせつけてから、食堂兼居間へ戻った。猛はまだ帰っていない。何でも遠くへ主張とかで夜半になるらしかった。すみ子は、赤ん坊を寝かせつけてやれやれと云った表情でソファに坐り込んでいる。

手にしている刺しゅうは一向に涉っていない様で、前に見た色と同じ色合いの糸が布にさした俣になっている。ひと通りの女の仕事は仕込んであっても、其の人人に依って、得手不得手というのがあつて、本人は左程迄思っていないくても、はたで見ていて歯がゆくなる程、らちのあかない仕事をする人がある。すみ子もそうした方で、飽く事を知らない様な根気をつけて、何時迄も同じ仕事に取り組んでいる。旗江は声をかけ乍ら、すみ子と隣り合つて坐り込むと、布の端を手にとって見た。掛布だと云う襟の部分に、糸を引抜いて模様を作り、そこをかがって色とりどりの糸で同じ間隔に刺しゅうされている。出来上つて

はさぞ美しいものになるだろうけど、それに費す時間と労力は計算外のものである。旗江は危うく溜息が出そうになった。油気の少ない髪が、すみ子の広い額におちかかり、白い肌にもいくつかしみが浮いている。子供を持つと女は老ける。子供を産んだ事の無い旗江は、すみ子のやつれ方が気の毒な感じがした。あんなに毎日の様に夫婦げんかをくり返して子供が殖えて行く。すみ子はやっぱり猛を愛しているのに違いない。ふっと肉感的な思いで傍に腕を露わにしているすみ子に視線が走った。肩から胸にかけてこわい様に盛り上がっている。赤ん坊にたつぷりの母乳を与えているのだから、この張りは自然のものであろうけれど、経験の無い旗江には何かしら生理的な嫌悪を覚えさせた。

旗江が妻としてその務めを果したのは僅か五年足らずであった。それも戦後の住宅難の頃で、夫婦と二人の息子は二部屋きりの借間で不自由この上もなかった。一間は仕事部屋で其処に夫が寝起きし、旗江と二人の男の子は僅かばかりの世帯道具を積み上げるように並べた間に体を寄せ合う様にして寝ていた。その頃の日本の家庭的習慣は、夫婦が一つ床に枕を並べるということを、恥ずかしいことのように思いがちだった。夜半迄仕事をしている夫の許え熱い番茶を運んで行くと、時には背を向けた俣、有難うと云われるだけで、振り向いて貰えない事もあった。先妻を失ったあとの幾ばくかの期間を経たとは云え、夫の年令では若い夫婦の様な甘さも激しさもなかった。旗江はそれ

でも、天涯の孤児となって不安の中に縮こまっていた頃の自分をふり返ると、身の置き処を得られたという喜びが大きくて、夫の愛撫だけに満足していたと云えよう。夫婦の年齢が十八も開いていて、時には父に甘える小娘の様に、或る時は教師に叱られている生徒の様に、識らず識らず寄りかかっていたら、充足感があった。十九才といっても、旗江の女としての性は完全に発育してはいなかった様である。子供も出来ないまま五年足らずで夫に死なれてみると、童心を失った未成熟の女の生き方が哀れであった。二人の息子と云っても旗江とは、八年と十一年の年の開きしかないのだ。母と呼ばれるには余りにも面映くて、子供達の母の座についても「お姉ちゃん」で通していた。

夫の仕事が地味な電気屋で滅多に外出する事もなく、子供と連れ立って歩く機会の多い旗江は、よそから見ても気楽なお姉ちゃんといった感じであった。しかし夫が亡くなってしまおうと、旗江は歴然とした戸籍上の母であった。父兄会にも顔を出さなければならぬ。近所の寄り合いにも出席しなければまずかつた。若い未亡人としての注目と、生さぬ仲という世評の好餌にされて、旗江は殻にとじこもるようにして生きる道を歩いた。自分の腹を痛めなかったという事で、息子達にひげ目せ感じた日もあった。

いっそ離籍して自由な身になって再婚したら、とすすめてくれる人もあったが、旗江はいつも首を横に振るだけで、発育盛りの男の子達の腹拵らえに、出来る限り飛び廻って買い出しを続

けた。身軽で健康な体は何よりの支えだった。重いリュックをかつぎ続けて近所の主婦達から羨ましがられると、甘いものを拵らえて近所の子供達に食べさせたりした。そんな逼迫した食糧事情もどうやら平常に戻る頃になって、長男の大学入試のための猛勉強が続いた。毎晩おそく迄机に向っている彼のために、暖いものを運んで部屋に入ると、父親と瓜二つの恰好で後向きになっていたりする。精力的な斗志を肩のあたりに漂よわせて、心を注いで書籍に見入っている姿には、夫に感じられなかった若さがあった。ふっと振り向かれて、じっと見入っていた自分に気付き、旗江の裡で叫び出しそうになる何かの衝動があった。その頃激しい誘惑が旗江の心にしのび寄っていた。夫を失った頃、二人の男の子が淋し気に沈み込んでいると肩を抱き寄せ、共に涙を流し合えたのに、こんなに成長してしまうと、そんな真似は許されない限界が恨めしく思える事があった。ひとりの女の苦衷はこの頃から始まった様だ。

二男の猛は中学生としては比較的大きな凶体をしながらも、良く「お姉ちゃん」と肩に倚れてくる事があった。

「おれ、何かうまいものが食い度くなっちゃった」

父親ゆずりか手先が器用で、父親の遺した道具をそこらじゅうに拡げてラジオ修理や組立のアルバイトをやっている猛である。「猛ちゃんはいつまで経っても甘いものが好きね。お父さんとは丸反対、でも、あたしも甘いもの好きだから、作ってくれ、って云ってくれる人があると張り合いがあるわ」

旗江の救いは、猛とのこんな軽い調子でもものが云える事である。長男の真一は学者肌で余りものを云わない。それでいて、憎らしい程に亡夫の悌をそっくり受け継いでいる。時折猛との冗談がすぎて、感情の昂ぶりを遮り無二何かにぶっつけ度くなる時がある。じつと背を向けている真一の背に武者振りについて行き度い様な衝動が起るのもそんな時である。潮の様な激情に襲われて、旗江は幾度か夜の戸外へと逃れ出た事である。本当の親子だったら、こんな思ひは起こらないであろう、と思うと、忽ち突き落とされた様に惨めな女の姿に気付かされて、旗江はひっそりと泣いた。

そんな遠い日の想い出が 旗江の胸のうちを去来している頃、脇のすみ子は白河夜舟で盛んに漕いでいた。猛の足音が帰って来たのはそれから間もなくだった。旗江が扉を開けて迎え入れ台処に立って行く。猛の通ったあとに強い酒の匂いが尾を引いて漂った。

熱いお茶を入れて客間に入って行くと猛がひとりソファに崩れていた。

「やあ、お母さん、おそく迄済みません。すみ子は寝呆けてるから寝ろと云ったら、さっさと寝ちやいましたよ」

「あら、折角甘いものを出して来たのに」  
疲れ切って投げ出している両足の裾が、土埃りで白っぽく光っている。猛の大柄な体がソファ一ぱいに倒れ込んでいる傍に立つと、先刻迄胸にあった幼い日の猛の悌が、そのままよみが

えってきて、頬ずりをしてやり度い様な衝動に駆られた。ぼんやりとした表情の中で、眼だけが峻しく輝やいている猛は、じっと茶を注いでくれている横江の手許を見ていた。白く立ちのぼる陽気の向うから、半身を起して猛は茶碗を受け取った。考え込む様にして湯気を吹き二、三口つけると、急に肩を落として顔を旗江の方に向けた。

「折角、お母さんにブラジル迄来て貰ったけど、こんな貧乏暮しばかり続けて済まなく思うよ。今朝もすみ子に話したんだけど、俺達しばらく別れようと思うんだ。それで旅費は何とかするか、お母さんはまた日本に帰ってくれないか」

藪から棒とはこの事だろう。旗江は猛の口許を睜め乍ら、しばらくは耳のうしろの方でなるキーンという音を聞いていた。

「俺はひとりになって、もう一度やり直し度いんだ。足手まといがあつては思いきり動く事も出来ない」

「足手まとい、なんてそんな。……」

「いや、云いすぎた。ごめんなさい。つい日頃の夫婦げんかの調子になってしまつて」

旗江は猛の云わんとする処も解る様な気がして、視線を落とし、た俣黙って茶を啜っていた。猛が退儀そうに体を動かした気配に旗江は視線を戻した。

すーっと生きものの様に猛の鼻腔から赤黒い線が延びて頬を伝っていた。

「あら、鼻血」

「えっ、今日はこれで三回目かな。この頃どうも続いて出るんで弱ってるんだが、やっぱりコーサンからの呼出しかな」

「コーサン、て、あの輸血の」

「そう、大低月に一回か、一月おきにコーサンに輸血してたんですよね。でもこの間から政府の役人達が、俺達からただで血を採っておきやがって外国へべらぼうな値段で売りつけて、うまい汁を吸ってる、という話を聞いたんで、ここ三ヶ月程やるもんかと思つて」

「そんなひどい事つてあるもんですか」

「そう思うんですよ、誰だつて。だけど、そこがお役人の役得とでも云うのかな。民衆はうまい文句におどらされて何だ彼だとしぼられるだけしぼられてさ」

「だつて、そんな事が民衆に知れたら、いくらブラジル人がお人好しだからつて」

「そうさ、自分の国の乞食には認可証をブラ下げさせて公然と商売をさせている。一方じゃ外国資本の入ってる主な経済体系にはごっそり持って行かれちまう。だけど一般民衆はどんぐりの背較べ位の処で、スマートに生きようとするから、決して他人事には交渉しない処がいい処だろうな。とに角貧乏人が病気でもしようものなら哀れな話ですよ。俺なんか金出してまで血を買わなきゃならんような怪俄でもしたら、死んじまった方が早い」猛の乾いた笑い声が部屋の中でぐるぐる廻っている様な錯覚に、旗江は頭の芯が疲れているのを感じた。

「この国の病人に血が足りないから協力してくれっていうあの看板は、あれ、真赤な偽物なのね」

「いや、不足してる事は事実なんですよ。いわば民衆の血を吸ってるダニなんですよ、奴らは。俺達みたいに定期的に血を採らないと体の調子がおかしくなるような者は、有難く貰ってもらえるものなら、と云う結果になる」

「じゃあ……」

旗江はふっと浮かんだ言葉を云おうとして飲み込んだ。一滴の血もあだおろそかにしてはならないと、小さい時から教えられてきた旗江の中で、いま浮かんだのは忌わしい思いであった。（そんな役人なんかには儲けさせる位なら猛さんの血を直接売ったらお金になるのに）毒気にでも当たった様に背すじに寒寒を覚えて旗江は急いで首を振った。

静けさが沈黙したふたりの間に時の自覚をよびました。

「猛さん、さっきの問題は一週間程考えさして項戴。あたし、明日から買物でサンパウロに行つてこようと思うの。ね、帰つてからにして、それ迄保留しておいて」

旗江は茶盆を片付けながら、虚脱した男のろろした動作を見ているのが苦痛でならなかった。母として叱りつけるのが此の場の当然の責任だろうか。それとも涙をもって説得抗弁するのが彼の奮起心をかき立てる事になるのだろうか。いづれも旗江の心の核心を掠めただけで、その思いは言葉にはならなかった。

汽車の旅は比較的のんびりした表情の旅客が多かった。たまに日本人の顔があっても、指定された席からは患らわされる様な視線は届かない。オニブスでは停車毎に何か落ちつかない気分が嫌で、旗江はいつも汽車を利用する。昨夜からのショックがまだ体のどこかにくすぶっている様な感じである。軽く目をつぶる。ガタンガタンとゆるやかな震動が背骨から肩へかけて伝わってくる。背をもたせかけて、何時見ても変化の無い沿線の景色ながら、遠く変って行く様を見ていると、泌み泌みと旅に出たという思いに包まれ、旗江は何がなし嬉しくなっていく。朝の陽が高く射し始めると、漸くいやなくすぶりが溶けて行く様だった。窓を開けると風当たりが強すぎて、ガラス越しの陽光は眠気を誘う様なぬくもり程度である。いつも出聖の折は、エスタソンにつくと直ぐ宿に向かい少し休んでから足立家を訪う。御隠居の老婦人の相手をしながら、それでも知人の多い彼女に依って、いろいろな人に紹介されたり便宜を計って貰う事は多かった。街に買物に行くのにも、大抵一緒に品定めに行き、良いものを安く買うという女連れのあの楽しい漁り買いもプランの一つである。しかし、今旗江の心はそれらの予定行動を計画してみてもはずんでは来なかった。目的が大きく展開して、人形を材料を仕入れる事よりも、生活のためののんびきならぬ問題をひっさげて、旗江は足立家の玄関に立つ自分を想像している。十年余の商売で得た知識というか、体験で貸借問題にも左程神経質ではなくなっている旗江ではある。が、足立家の老

婦人の肉親にも似た愛情にふれてきて、いま商売人に立ち返って彼女を動かす事は容易に出来ても、旗江の心を戸惑わせているものが別にある。老婦人の次男で、妻を失って以来独身でいる足立治作の存在がそれである。老婦人が訪日の旅を了えてサントスに帰った其の日に、同船者の一人として旗江も紹介されていた。税関等の手続きでそれぞれ離れ離れになり、初対面に引合わされただけで忽々に別れてしまったので、関心を持つ程の余裕もなかったと云えよう。四〇そこそこ聞かされていた彼の風貌が、余りにも縹々としていて、日本の職人が着る様なハッピーでも被せて鉢巻でもしたら、一時代前の人間が見られるのではないか、といった第一印象が残った位の処である。何処かのネジが一本ゆるんでいるのではないかと思われる程、動作に間のびしている処がある、と其の後に訪問して旗江は観察した事があった。が、そんな息子の様子を老婦人はいとむ様に眼を注いでいる。

「旗江さん、こうして見ると、あなたとうちの治作の気性は面白い様に正反対ね」

「あたしって、もの心ついてから余り落ち着きの良い子ではなかった様ですね」

「こればかりは傍でやいやい云ってみたって生まれつきのものだから、何ともならないのよ。でもね、誰にだって良いところってあるものね」

「そうですかしら、中年になってしっとりしてくる人を見ると、

あたしとても惹かれるんですよ。でも、あたしなんかいまだにおっちょこちよいで」

「いいのよ、人間は生地の俣が一番いいの、無理に粧ってみても、生地は必ずいつか現われてしまうもの」

何時ともなく遠まわしに旗江の心にさぐりを入れてくる御隠居、掴み所の無い様な世間話の中で、陽気な笑い声を残して別棟になった仕事場に直ぐ席を立てて行く治作。そんな屈託の無い親子の姿が、今迄抵抗に自我を張って生きてきた旗江の心に、さざ波の様な憧れの映像となって浮かび始めた事である。

幾度か訪問するうちには老婦人が席を外して、治作とふたりになる時間もあつた。そんな時、カラカラと糸車をくる時の様な乾いた声が、治作の腹の奥の方から響いてくる様で、いささか軽蔑の眼を向けたりしたものだつた。だが妙に話の上手な処があつて、旗江がそんな処に感心していると、ついと話が飛び出して来る。気取りもしない代わりに、単純な処は拍手拔けさせられる様な時がある。そんな彼のどこが旗江の心を惹きつけていると云えるのか、説明のつかない状態である。しかし、旗江の気付かない処で、この気の置けない友達の様な男を異性として感じとっていたとしたら、それは初恋とも云える未経験のものであつたらう。

汽笛が続けさまに鳴っている。ふっとそう気付いた時には急停車の余波をくって、旗江は危うく前のめりに放り出されそう

になった。反対側の窓ぎわに居る人々が半身を乗り出し、ガヤガヤやり始めたが、放牛の群が鉄道線路を横断しようとして、逃げた牛が線路の上を歩き廻っているという話だった。人騒がせな時間を潰して、その時間を取り戻すかの様に間もなく汽車は滑り出していた。汽車の震動が再び正常に戻ると、旗江は忘れていた時間に気付いて時計を見遣った。もう一時間足らずでサンパウロの街につく筈であった。背後から急かれる様な落着かない気分が旗江の心を焦立たせ始めた。もう一度考えをまとめ直しておこう。自分が計画し、自分が実行しようというのに、他人事の様な雑念が入り込んで、思いが一つになり切れない事に旗江は思い度くもない妄想を引張り出したりした。足立家の老婦人に持ち出すには、以外に決心がいる事をこの時になって改めて考えさせられた。ありのままに云うつもりではあるが、老婦人はきつと治作との結婚を考慮に入れた上で、旗江がそれを持ち込んだと考えるであろう。しかし、自分にはつきり結婚の事は断っておく。たとえそれが御隠居の感情を損う事にはなっても、今の場合それを餌に治作親子に接する様な結果は、自分が嫌であった。いまは商売に就いての目標しか置いてはいけない、と自分に云いきかせ乍ら、旗江は心に鎧を着せかけた。飽く迄も、女の貞操は愛をもって貫き度い。その時激しく心に刻んだ言葉であった。

予定通りのサンパウロ入りは、未だ勤め人も学生も街を歩いて居らず、TAXIを掴むのも容易に出来た。行きつけのホテル

ルで部屋を取る頃にはそろそろ黄昏れ始めて来て、あたりの騒音が漸く活気付いて来た様にあわただしい感じになった。受付で電話を借りて足立家の番号にダイヤルを廻した。幾度もかけた紙片を掌で押さえ乍らしばらく待ったが、閉社時が迫っている故か、線は仲々空きそうもなかった。たまに通じたと思うと他の線と混線してしまつて、先方には通じなかつたりした。やつと通じて足立家である事を確かめると、子供らしい幼い声が電話口に出た。

「もしもし、おばあちゃんは」

「あのね、おばあちゃん、きのうからチチアの処へ行ったの。赤ちゃん産まれたからアジューダにいったのよ」

「そう、じゃお父さんは」

「お父ちゃんはシダーデにお仕事に行つてるの、晩にしか帰らないのよ」

末娘のスザナの声だとは直ぐ解つたが、旗江は写真でしか識らないこの子の母親の生前の悌が、このスザナに最も良く似ていると思つた。御隠居が亡くなつた嫁をよく褒める時にスザナのもつてる癖が、母親ゆずりの野放図に明るい性格だ、という事だった。

「あたしね、ツツパンの旗江おばちゃんよ、いまさつきサンパウロに着いたの、じゃまたあとでお電話しますって云つていてね」

「はい」と聞えたかと思うとガチャリと切れてしまった。テレビでも観ていた中途だったのだろう。走って離れて行くスザナの細く長い脚が眼の前に躍っている様な感じがして、旗江は思わず微笑んでいた。

御隠居と呼び馴れて、老婦人と識り合う様になってからいろいろ訓えられた事があった。女の課程を卒業した老婦人ではあるが、何一つ無駄のなかった人生を送って来た様子である。と云うのは愚痴を絶対云わない人で、三人も青年期に入る直前に子供を失ったと云う悲しい経験にも、潔よく諦めを持ってしまっているらしかった。何かしら信仰の様なものを裡に秘めて生きている人の様だ、と旗江は常々思っている。

二人居ると聞いていたどちらの娘のお産手伝いに行ったのだろう、市内に住む娘の所なら今夜にも自宅へ帰れるかも知れない。しかしモジに行ったのだとしたら恐らく泊りがけと云う事になる。ふっと溜息が口をついて出た。御隠居が留守と解っている家に訪ねることが、何故かためらわれてならない。今迄にも留守に行き当たった事は幾度もあったが、別に大きな目的もなく行くので次の機会にゆずって出直したものである。しかし、今夜のうちにもう一度電話しておかないと、治作が請負仕事で外に通っているものだとすれば、明日も一日潰れてしまう事になる。そう気付くと、どうしても、もう一度電話口に立たなければといった重い気分になって、再び腰を上げた時にはもう八時を廻っていた。

初めてきく治作の声は、普通聞き馴れた調子とは違って、驚く程歯切れ良く量感が伴っていた。

「もしもし、あたし旗江です」

「ああ、夕方着いたそうですね。丁度仕事に出ていたもんだがら」「お母さんはお留守だそうで」

「ええ、モジの妹がお産で昨日迎えが来て出掛けちゃったんですよ」

「向うに長く泊られますの」

「ええ、そう一週間居るんじゃないかな、何ですか、おふくろに急ぎの用事でもあれば連絡してあげても良いですよ」

「そうですか」

旗江の立っている受付を出入りの人が行き交う。こんな所で長話しは良くないと思うのだが、この時間に公衆電話を探して夜の街にひとり出歩くのも退儀であった。

「もしもし、少し、いえ大きな御相談があつて出て来てます。でも、あなたも明日お仕事に出られるんでしょう」

「ええ、請負ってる店の造作があるもんで出るけど、時間はとれますよ。僕で良いんですか」

「ええ」

旗江は扉のすぐ向うに治作が立っている様な気がして、落ちつこうとしても声がうわずっているのを感じた。

「明日おひる頃時間を作って、そとで食事でも一緒にしますか。おふくろが居ないから女中じゃ面倒だから」

時間と場所を打合わせると通話は切れた。ほっと被っていたものを脱いだ様な感じがした。部屋に帰ると、いつも孫達と過す食後のひとときが手持無沙汰になった。入浴を済ますと明日の買物について、ひと通り眼を通しておく事にした。一回毎に材料も値上りして行く。いくら安いものをと眼を走らせてみても、安物はとかく見栄えがしなかった。第一趣味のものであるから、買う方もぜいたくに目が肥えてる人が多い。外人達から迄贈り物に頼まれて作る事もある。出来る丈良いものを上手に使う事が製品を引立てるコツである。旗江が作る人形は、大工の治作がガラス張りの箱を作ってくれて、御隠居が売り込んでくれる手順になっている。

「治作はね、あんなにしてるけど仕事の面は父親以上の腕があるのよ。自分の息子を褒めるようだけど、これも素質なのねえ」よく聞かされる御隠居の言葉である。実際仕事場を見せて貰った時にも、性格に似ずきちんと整頓されてあった。何処にこの男の几帳面さが隠されているのだろうと、旗江は意地悪く興味を抱いてみる事がある。天性と云えるものかも知れないが、笑いにはぐらかしてしまふ様な陽気な性格の反面に、人の真似を許さない様な純粹性がひそんでいるのではなかろうか。

個性というものはつきり持った職人気質というものかもしれない、とこの点治作の人物を大いに買っている旗江である。先刻迄心に重くのしかかっていた厄介な気分が、入浴後すっかり霧散した様で、いまは単純に治作との商談にのり込んで行けそ

うな気がした。寛いで寝台に横になると、安物の額が壁にかけられてあって、それにはカレンダーのモデルの様な派手な顔つくりの女が、妖艶な微笑を体中から発散させているように描かれてあった。

御隠居の留守という事がいまは反って救いのような気もしている旗江である。御隠居を通せばどうしても触れないで済まされない問題がある。それは女同志で感じとるインスピレーションが、必ずそれを嗅ぎつける事が予想される。芝居をする気も無いが、仕組んだ事の様に取りられるのも嫌だ。

飽く迄も一線を劃しておき度かった。打算的と云われても、申開きの出来ない様な事ではいけない、と自分なりの自信を納得させて眼をつぶった。

汽車の旅ではいつも眠る習慣がついているのに、こんどばかりは目的の大きさが頭を一杯に占領していて、眠気さえも起こらなかった。スタンドの淡い光が遠く近くゆれ出したと思うと、引き込まれる様な眠りに誘われ、あたりがうすい幕で距てられた様に記憶の中から姿を消して行った。

旗江が目醒めた時、窓から射し込んでいる細い陽光があった。カーテンの布地がうすいので、いくつものひだにわかれてキラキラ眩しい程に透けて壁に反射している。子供達の寝息もなく静かに迎えた朝である。しばらく呼吸をととのえてから起き上った。

と、窓の外にとりつけられた日覆いの枠だろうか、細い一本の

線が灰色の壁に這っているのが見えた。旗江は何となく猛の鼻血をへい想した。穏やかな朝の気分の出鼻を挫かれた様で、不安な心の状態に置かれている自分が情無かった。何かに縋り度い様な自信喪失に陥入りそうだった。

（あたしは治作さんに愛情といったものを本当に持っているのかしら）と旗江は自分に問いかけていた。僅かながら、（本人はそう思ったがっている）異性として意識し始めてから、不意に取り縋ろうとする心と、商取引のために敢えて愛の対照者として考えようとしているに過ぎない、と自分を突き離そうとする心とに責め立てられて、旗江は自らにそう問わずには居れなくなっていった。いま、旗江は一方的に愛しているという意識を強く持ち度かった。そしてそれに勇気づけられて治作と逢い度かった。無精に長く思われる時間の経過であった。

街の騒音の中に身を置くと、それでも目まぐるしく行き交う人や車の波で、自分の姿が隠れてしまうようで、先刻までのもの思いもうその様に消えてしまっているのを、旗江はくすぐったそうに思い返していた。予定の買物を了えて、打合わせた場所に行くと、もう治作は先に来ていた。食堂は割に空いていて窓よりに二人用の席がとってあった。

「何だか浮かない顔してますね」

治作にそう云われると、今朝がたの旗江の裡に起った葛藤が思いかえされて、予定していた言葉が危うく横へそれてしまいうになった。平衡を失った心の状態が拮がらない様にと旗江は

一生けん命で胸を張っていた。

「おふくろがね、お産の手伝いに出掛ける時こんな事云ってましたよ。旗江さんは自分で痛い思いも知らずに、立派な息子さん達からお母さんお母さんと大事にされて、女の一生もいろいろだねえって」旗江は男の無神経さが憎らしかった。

「モヂの妹は四〇近くなって、帝王切開で死ぬ様な難産だったし、それにこんどもまた胎児が横になってたとかで、ひどいつわりのあと、衰弱した体で可愛そうな程でしたよ」

治作は無造作に汁椀を口に持って行きながら旗江を睥めた。向き合った姿勢で視線がぶつかった。旗江は意識しなかった笑いが、ふと頬に浮んでくるのを覚えた。

「女は弱し、されど母は強しと云いますからね、やっぱり母の体験を持たないと、一人前の口はきけませんわね」

「いや、子を産まない女だっていくらも居ますよ。育ての親だつて立派に母の資格はある」

「資格だけで母の座についている者にだって、赤い血は流れてるんですものね」

治作は笑いそうな表情になりかけて、旗江の神経質に引締めた唇のあたりを見遣った。カラカラといつもの様に笑い飛ばして欲しかった。(笑ったらいいじゃないの。あたしが自分の立場に戸惑う程笑ってくれたらいいのよ) 実際、旗江は腹を立てそうになっていた。衝立の向うに幾組もの客が入って居て、それらの人々のあたりかまわぬ声高なおしゃべりが、緊張した旗江の

癩にさわっていた。

「旗江さん、そんなにおっかない顔しないで飯を食ったらどうです。何も此処で時間が終りという訳でもないでしょう」

とうとう治作は例の開け放しの様な声をあげて愉快そうに笑った。いつになく腹の中を見透かされている様で、故意に仏頂面を作ってはみたものの、張り合う気にもなれなかった。食事が終ると、治作はガラスに預けてある車をとつてくると云って足早やに出て行った。見馴れない車であった。

明るい空色がスカツとした感じを与える。

「いい色だこと、そして新しいのね」

「うふふ。前にあったものの方が余程新しかったんですよ。これは中古品、でも化粧し直したら、ツヤは負けないでしょう」

治作の運転は始めてではない。旗江がサンパウロの用事を了えて帰る時は、大抵エステソン迄御隠居が治作の車で送ってくれる。

「天気は良いし、車は快調、何処かに行きましようか、こんな機会は滅多にない」

「そんな不良じみた事は云わないで下さい」

「不良だなんてひどいな」

旗江は治作のくだけた態度に心で喜び乍ら、携えて来た問題をどう切り出したものかとつつおいつしていた。

「何処かに車を停めないと、どうもまわりに気を使ってたんじゃない、うるさくて叶わん」治作はしばらく走らせたあとで、病

院らしい建物の陰に車を停めた。丁度街路樹の茂みで午後  
の陽射しも程良い木洩れ陽を見せていた。

「治作さん改まってお願いがあるんです。お金を借り度い  
んど」

「僕に、僕はこの通り素寒貧の大工稼業ですよ。だが借  
りてあげる道はいくらも知っている、借りてどうするん  
です」

旗江は一気にしゃべった。日本帰りの事も、嫁の実家  
帰りの事も、ひと通り説明した。治作は、窓に片肘を  
預けた恰好で終わり迄黙って開いていた。

「つまる処、息子の嫁さんと一緒に店でも出して、息  
子さんの仕事事が復帰する迄食いつなごうと云う訳です  
ね」

「あたしは日本に帰ろうと思えばまだ行先はあるん  
です。でも、あたしが帰ってしまったら息子の生活は目  
茶目茶になってしまふんです。そんな気性があの人  
の中にあるのを知っているから、何とかしたいん  
です」

「折角、あんたもブラジル迄来て骨を埋めるつもり  
じゃなかったのかな」

「骨を埋める、って、ブラジルに。そう、そう思  
った事もありませわ」

「ひとつあんたが骨を埋める気になってみてはど  
うだろう」  
治作の視線が旗江の返答を促すように一点に集中  
した。その眼の色には柔しい光があった。求愛の表  
情が示されている様でもあった。いまはつきり  
と治作の口から愛していると云う言葉が

現われたら、その告白に応えるだけの自信は旗江の裡に用意出来ていた。云うまでもなく、筋書通りに事はここ迄運ばれて来ている。(愛を告白する事が極く自然の状態に置かれていて、あたしはこの人を自分の一部の様な感覚で頼りにしている)

旗江は自分の感情で相手を計ることに馴れて来ている。永い間の独身生活が識らず識らず自己中心的なものの考えになってきていた。云わば自己防衛の手段ともなっていたのである。治作は黙った俣ポケットから煙草をとり出して火をつけた。旗江は次の瞬間に吐き出されるであろう治作の言葉に期待した。うすい紫色のけむりがガラス窓に当って靄のように車内に拡がった。一本の煙がもえ尽きる迄治作の指にあった。それは旗江にとつてずい分永い時間に思えた。灰になって落ちてしまった吸殻の吸口の処が、運転席の小さな抽出式の小ばこからのぞいている。道路にものを捨ててはならない、といった考えからだろうか。それとも病院の附近といった心くばりからであろうか。とに角小さな事にも気を配る男だと云う感じがして、旗江は何となく緊張させられる思いがした。すべてのものが動きを停止している様な、音の無い時間が過ぎた。試みるつもりもなく期待していた治作の口からは遂にあとの言葉は続かなかった。反対に試みられている自分の姿を其処に見た時旗江は、余りにも甘すぎた自分の計算に気付かされ狼狽した。もう今となっては自分の気持ちを告白する時期は失なわれていた。相手の心の動きを待つ迄もなく、商売人は先に取り組んで行った方が勝なの

だ。それは旗江の裡で充分に訓練された技法であった筈なのだが、治作に対して、こんどばかりはすっかり徒爾を踏んだと云う悔が胸一杯に拡がった。

「あたしは貸し借りする以上は、間に何も感情をさし狭み度くないんです。

少しばかり商売の経験もありますから」

言葉裏に言外の意味をこめた強い格調で云った。他に頼る者もなく、愛の感情を意識したからこそ頼りにし、家庭の内幕まで暴露しておき乍ら、潜在的な自負心の故に弱点を晒してしまった。悔んでもどうにもならない羞恥が潮の様に旗江の裡で拡がった。

「どうせ、今日明日と云っても無理だから、一、三日ゆっくりして行っていていいでしょう。そのうちにおふくろも帰ってくるだろうし」

「いいえ、お母さんにでなく、あなたにこの問題は御相談しに来たんです。

ですからこの事が決まったら、あとはお手紙で用は済みますわ」事務的に云ってから、旗江はさすがに責められる思いがした。自分の裡の思いも治作の思い遣りも裏切った様な気がしたからである。ふたりの間に鼻白んだ空気が流れた。

「じゃ、そういう事にしておこう」

治作は姿勢を直すとエンジンにスイッチを入れた。震動が小刻みになって除行し出すと、急に周囲の景色が一変した。舞台が

変ってしまったのだ。

そう思うと、旗江は取り残された様にくすぶっている未練に取り続いた。

静かに嗚咽が上がって来た。屋敷の立ち並んだ此の一带は、道路の真中に安全地帯があつてうっそうと茂る大樹が、左右に枝を伸ばして生い茂っている感じでうす暗かった。景色を見るふりをして窓に顔を寄せている旗江が静かに瞬きをして涙を払ったのを、治作は気付いてはいない風であつた。

サンパウロの旅行から帰ると、三人の孫達が重なり合つて武者ぶりついてきた。すみ子の表情にも取り立てて心配する程のかげも見えなかつた。

すべては旅行前と変つていない様子である。旗江は自分だけがひどく疲れ切っている様で、気分が沈み勝ちなのが辛かつた。五日程して治作から速達便が届いた。始めて見る彼の字体に旗江は驚きの眼をもつて眺め且つ噴き出さずに居れなかつた。まるで幼児に筆を持たせた様な不揃いの字体が紙一杯に並べられてあつた。すると気張っていた心が綻ぶ様に治作の笑い声が聞えてくる気がして、旗江はなつかしさといった和やかな気分ですれに眺め入った。

“先ず僕は手紙を書く事が一番きらいです”と書き出してあつた。箇条書きに記された用件は次の様な文面である。

一、金は希望通りの額面で期間は二ヶ年、利子は年に一回乃至二回に分割払いも可。

一、店を出すことは田舎町では儲からないからサンパウロに出て来た方が良い事、借家は世話してあげます。

一、店の造作は僕がしてあげます。但し材料費だけは払って下さい。

一、引越荷物は最少限に始末してくる事、サンパウロの家はみんな小さいですからそのつもりで。

大体こんな意味に読めた。カナが多く漢字になると字画がなっていないのが多かった。一本の線にもあんなに技巧的な仕事をする治作の腕に、こんな拙い一面もあるのかと思うと、銜うという事を知らない人間の一端さを其処に見出した気がした。折返し返事を出して其の夜猛の帰宅を待つて始めてこんどの件を持ち出した。猛の傍で一緒にこの話を聞いていたすみ子は、旗江の説明の半ばで別人の様に顔を輝かせてのり出していた。すみ子の喜び様が余り端的なのに旗江は面喰った程だった。猛はむつつりと腕組みの姿勢を崩さず、チラとすみ子に視線を投げたが、旗江の前に顔を上げると気のり薄といった表情でポツリポツリと云った。

「お母さんが心配して下さるのは有難いけど、女ふたりでやって行けるんですか。僕は商売なんてやった事ないから其の方の事はタッチ出来ないな」

「そりゃ、あんたは自分の仕事してたらいいのよ。ねえ、お母さん。バザールなんて仕事は女でやって行けるわよ、ねえ、お母さん」

すみ子はすっかりその気になっているらしく、しきりに旗江の気分を促すようにまぜ目を送ってきた。旗江にとつてもすみ子に働いて貰わなければ、この案も効果を失う処であるが、すみ子の素人考えが少しオーバーなのに重荷といった感じももたされた。旗江は猛に向かつて開き直る様に云った。

「あたしを日本に帰すために作ると云ってくれたあのお金も、ちゃんと予定に入れてあるんだけど、作ってくれる」

猛の返事が少しおくれたが、しかし頷いて出来るると云った。旗江はこの時機をそらさずに云って良かったと思つた。本当は予定にはいれてなかつたのである。だが、どうせ引越やら、手続きやらで相当の見積りが予想されてきたので、先に手を打った訳である。

猛は賛否いずれも吾関せず、といった調子で、女達が身の廻りの整理を、始めても、手伝うという素振りも見せなかつた。旗江が猛の気持ち以案じてゴタゴタは昼のうちに片付けるように、とすみ子に云い含めてあるのだが、すみ子達の部屋は日増しに散らかる一方で、仕事から遅く帰宅する猛を焦ら立たせるばかりであつた。それでも治作からの第二便が届く頃には最少限度にまとめられた荷物が、客間の隅にうづ高く積まれてあつた。猛は仕事の都合もあり、馴れた土地故に顧客も失い度くないといつて、居据る事になりペンソンに移って行つた。あんなに意地にならな、くとも、と旗江は淋しい思いでトランクを提げて出掛ける猛の後姿に涙ぐんだ。女達に先を越された、といった

感情も交っていたかも知れない。だが何よりも、十年近くの才月を棒にふって仕舞った無念さに、泣くに泣けない男の意地で突張っている姿があった。それでも、まだ猛には別れて住むとしても妻子がある。その責任からは逃がれる事は出来ないのだ。後をふり向かずに路を曲って行った猛は、それから二、三日してサンパウロ向け旅立つ妻達の前には姿を見せなかった。すみ子は口汚く猛を罵った。

「ねえ、お母さん、猛はわたし達がサンパウロで生活するのが面白くないのよ。自分が仕事に失敗して、妻に働かせるのに顔も見せないなんて、だから、わたしは実家に金を借りに行く事も考えたけど、あんな意地張りだから素直に頭を下げる人でないと、うちのお父さんは絶対貸してくれない事解ってるから、わたしわざと知らん顔してたの」

素直という言葉がすみ子の口から出た時、旗江はいやな気がした。すみ子の父親の金に対する執着ぶりを見て知って以来、彼の家の者の示す態度が、猛をいよいよ異端者扱いしているのはつきり見えた。旗江は猛の口に出さずに居る部分も垣間見て心を痛めているのだが、当のすみ子は、実家の権力を笠にきたような態度で冷く夫を見て来たのだ。同じコロニアという枠内で、旧移民と新移民と区別して呼ばれる段階に、こうした育てられ方をした人達の居るのが、旗江には我慢ならなかった。これといった思想もなく、妙に年寄りみた意地の様なものを張りがたがる。かえって外人化しているのであればその方が接し易い。

家財道具の一切を売り払って移り住んだサンパウロの家は、治作が簡単な嵌め込みの棚や組立式の物入れを急造してくれて、ガラス風のセメント床ながら、どうやら住いらしく形が整った。店続きの一間きりの家に軒をおろして小さな炊事場が出来ると、始めて世帯を構える時のような、ささやかな期待も湧いてきて、後妻に入った旗江が遂に今迄経験しなかった、新家庭といった雰囲気を感じてみたりした。

仕入れやら手続等で半月程は夢の様に過ぎた。一月程して猛が様子見がてら出聖して来た。旗江が「どお」と云った顔で猛を店の方へ引張って行くと、うづ高く積まれた商品の箱へ眼を流しただけで、狭いですね、と云っただけだった。旗江は笑った。猛は旗江の笑い声にふり返ったが少々狼狽の色を見せて視線をそらした。その夜のうちに折返し帰ると云う猛を無理に引張る様にして、旗江は足立家迄猛を案内した。治作と猛とは思ったよりも打ちとけて職業上のいろいろな話を交していた。ロードビア迄治作が送ってくると云うのを辞して、旗江は猛とふたりで足立家を出た。猛は別れる間際になって、

「治作さんで良い人だな、誠意がある」と、ひとり呟くように云った。

比較的住宅の建てこんだ軒並みに、商店もかなりあって、旗江達が始めようとしているバザールも其処彼処に眺められた。治作は弟子を一人連れて来て寸法を取らせ、段取りを指挿しては化しそうに帰って行った。三日程で造作は出来上った。商品

を並べてみると、ペンキの色も新しく、戸棚もカラの時と違って、華やかな色彩に光った。店という構えになった。今迄と違って、髪もきちんと結び上げ、化粧をして服もきちんと着込むと、すみ子がすっかり若返った。そしてハキハキとした動作が見えた。ブラジル語の出来るすみ子は、屈托なさそうに外人客とおしゃべりをし愛想をふりまいている。旗江は店のそとに立って、そうしたすみ子の笑顔を見ていると、何となく嫁、姑といった感情のそとに立った満足を覚えて寛いだ。

店の新しきに加えて、すみ子の客好きがボツボツ客を呼んで、週末ともなればふたりで手の廻らない様な忙しい時もあったりした。治作に連れられて幾度か店の様子を見に来た足立家の御隠居は、旗江の照れるのもかまわずにすみ子の前で云った。

「あなたはいいお嫁さん、だけど旗江さんみたいないいお母さんに可愛がられるなんて、あなたは倍も三倍も幸福者だつてこと、よく覚えておくのよ」

すみ子はにとと八重歯をのぞかせて、旗江に笑顔に向けてくる。戸籍上の親子ではあっても、子を持った事のない旗江には、猛もすみ子も同一線上の他人でしかない。その他人に親切を尽すというのも、性来の旗江の孤独が絶えず愛の対象を求めて息づいて来ているからである。単に義理の感情だけではなかった。世間では義理固い人として旗江をほめてくれる。ほめられる事は嬉しい事である。親切をしている間は、相手がふり返ってくる。その時が過ぎると、どうでも良い様な顔をされるのが辛

かった。何時も自分に笑顔をふり向けて居て欲しかった。損得を越えた処で、旗江は身近にその事をのぞんだ。親子という名称に依ってつながれている事で、旗江はかけがえの無い充足感を味わう事が出来て喜んでゐる。

半年、一年をふり返っている暇の無い程、目まぐるしく日が過ぎて行った。幼稚園に行っていた上の孫が小学校へ、そして子守りの役はいっからか、近所に住む子沢山の家からはみ出したような女の子が、旗江から小遣いを貰って真面目につとめていた。女ふたりの商売がどうやら軌道にのって、約束の利子も支払ってしまうと、一年の才月の流れに今更の様に驚ろかさされた。猛も仕事の都合で、二、三ヶ月毎に顔を見せに出聖したが、次第に明るい表情を見せる様になっていた。毎日の生活が累積の一刻を記し、旗江は克明に売上げを計算し、きちんと預金も蓄えた。

二年の期限迄に返済を了えて、余剰金で小さな家を買う処迄漕ぎつけ度い、との希いも芽生えていた。年賦でならどうか売り上げで支払って行ける。一日店に立っていても、旗江はそんな希望を胸算用したりして、左程に疲れを覚える事もなく過していた。時折訪ねてくれる治作にも、今は淡々とした笑顔を向けていられる旗江である。しかし、時として受けとめた治作の視線が、何かを語りかけている時があった。すみ子の手前を考えてか旗江の他人行儀な態度に、治作も歩調を合わせている風である。すみ子だって、夫と離れてひとりで淋しい夜もある

うのに、と思うと、意識しながらも気付かぬ素振りを粧わねばならをかった。そう思うと治作の訪問に負い目を覚えて、真底から避けようとしているのではない情感があるのを旗江はいとおしく感じた。四〇を越えたばかりの女の孤独のいのちに赤い蕾が綻ろび始めた、そんな表現も旗江の裡に起こって来る程、生活にも想いにもゆとりが出来ていたといえよう。自分を押える事に馴らされてしまうと、どこかしらに歪みを生じて性格が不安定になってくる。経験が必ずしも人格を円満にするとは限らない様だ。ガムシヤラに突張って生きた様でもあり、馴れるべくして馴らされた習性の様に、惰性で転がり続けて来た感じもする。

すみ子が髪を結いに行くといつて出て行くと、午さがりのバルコンで暖い陽射しを受け乍ら、旗江はひとりの思いに耽っていた。

(猛の生活が安定して、すみ子との楽しい暮しが元に戻った時、あたしは一体何を目標に生きて行くつもりだろう。そうなったら、あたしの存在はどこに価値を求めるべきか)

眼底が灰色に波立った様な不安が浮かんだ。旗江の想いに治作の顔が浮かんできた。その眼はじつと旗江の心に注がれていた。治作の求愛にも冷く背を向けて此処迄斗い続けて来た事の意義が、曖昧になって来たようだった。旗江は、誰かにこの想いを聞いておいて貰い度い気がした。其の時、黒一色に身を包んだブラジル婦人が店に這入って来た。思いを中断されて旗江はあ

わててバルコンのケースを離れた。客は三日程前に夫を失った向い側の家の主婦であった。悲しみの色がまだ濃く眼もとに漂っていて、目をそらさずに居れない程の思いに旗江は何と言葉をかけたものかと戸惑った。五人の男の子ばかり残されたというこの未亡人は、これからの毎日を子供らのうえに、夫の悌を写し重ねて生きて行く事であろう。墓に持って行くといって造花の白い百合を買って帰った。男の子らに踏み荒らされた庭には、花一本咲かせる余地もない。さりとして生花を買うには金が続かない、とこぼしながら、それでも亡き人の好んでいた百合の花で墓前を飾ってやりたい、と云う。言葉の合間に袖で眼頭を拭っている姿は悲哀そのもので、旗江は黙って頷いているより他に慰めようもないと思った。葬式の日彼女は、子供の前もかまわず、夫の名を呼び声張りあげて泣いていた。

声をあげて泣く事の出来る人は仕合わせだろうと思った。泣きたい時に泣きたいだけ泣ける人がふっと羨ましい気がした。ここがブラジルという感慨が、何となく背後から旗江を襲って来た時、久しく忘れていた郷愁といった感情が立ちはだかつて来た。思いがけなく幼かった日の事も浮かんで来たりして、急に感傷的な気分のなかで母の名を呼んだりしていた。

この時軽いクラクションを鳴らして見馴れない車が店の前に滑り込んで来た。助手席に居た男が旗江の方から見えない向う側に降り、丸い背を見せ乍ら運転席の男と話し込んでいる間、旗江は気持ちの建直しに懸命だった。動き出した車を見送って

片手をあげているのは治作であった。急ぎ足に店に這入ってくる治作を見た時、旗江はふっと湧いてくるなつかしさを覚えた。明るい笑顔で迎え入れている自分に気付くと、飄然と人の気を変えさせる何かを治作がもっている様で、旗江は子供の様な無邪気さにかえって治作を眺めた。

「あら、車はどうしました」

「やっちゃまってね。昨日からテクテクなんですよ。神風みたいなタクシーがいきなり横から飛び出してきて、怪我はなかったけど大分ひどい目に会いました」

「お怪我がなくて済んで良かったこと」

「僕は軽業師みたいなもんで少々高い処から落ちても滅多に怪我なんてした事ないんですよ。自分の体の調子は解ってるから、金のかかる様な無茶はしない事にしてるし」

細柄の身体に最近では大分腹が出て来て、といつもズボンのバンドに手を置く習慣を、治作は旗江の前でも何気なくやっている。そんな治作を、今日の旗江は打ちとけた感情で見遣った。

「いま僕をのせてきてくれたあの男はパラナの大金持ちの息子でね、インテリの婚約者が出来て、ふたりで貿易商をやるんだって、あの男の父親とうちの親爺が昔からの友達だもんで、店の造作を頼みにきたんですよ」

治作の話では場所が良いからはやるだろう、とか、材料は飛びきり上等のを使ってくれというから、仕事に張り合いがある、とか結構楽しい気分にいるらしく仕事の説明にかかってきた。

旗江は男の生活と女の生活の違いを思い乍ら聞いていた。日本でやってきた店だって、ブラジルへ来てここ迄漕ぎつけたこの店だって、旗江にとっては一つの事業である。

（女のあたしだって仕事をやってる時のファイトは男のそれと変りはない筈なのに、どうして力が抜けて行く様な、生理的にも思える負い目がつきまとうのだろうか）

「あ、忘れる所だった。おふくろがね、民謡会に入ってたね、こんど仲間で発表会をやるとかで、旗江さんにも聴いて貰い度いと招待状を寄越しましたよ」

治作の差し出した封筒に手を伸ばした時、先刻の自動車がまた店の前に来て停った。

「足立さん、どうも素人じゃ買い物にならん、済みませんけど一緒に行って呉れませんか」

「そうかね、じゃ行くよ、どうも厄介だな」

治作は旗江にウインクを送る様な素振りをした。それが傍に来た青年への見せかけとは解っていないながら、旗江は恥らいと共に華やいだ気分浸っていた。男に愛されている女としての自覚を満足気に演技して見せたのである。治作達を送り出してから、御招待と書かれた封筒を開いてみると、土曜の午後三時かりとになっている。暦を繰ってみると四日先になっている。

店を始めてから殆ど遊びという気分で訪ねていない日頃の疎遠が気に懸った。いろいろ治作に世話になって、と手土産をさげて二、三度訪ねはしたが、それも孫を連れていたり、買物の序

に寄ったりで、時間に制約された訪問で終わっている。折角招んでくれたのだから、無沙汰の償いのつもりで、すみ子には気の毒だけれど出掛けようと心づもりが決まった。土曜の午後という時間が旗江の心にひっかかったが、何かしら親もとへでも行く様な甘い期待があった。

その日が来て昼食を早目に済ますと、孫達にひとしきりせがまれて、単独で出掛ける申訳なさにチョコレート等を買って与えた。

会場と記された文化協会に着くと、階下でいけ花の展示会が催されていた。

ゆっくり一巡しても時間はたつぷり余った。二階に上がると、もう大半の席は埋まっていた。おもに中年の人達が多く、中でも日本着で来ている新来らしい人の華やかな姿を囲んで、集まっている処は、終戦直後の地方巡業芸能団を見るようだった。

旗江は足立家の御隠居の姿を目で追い乍ら席についた。数名の挨拶があつてから歌に入った。音感がにぶいのか、旗江は民謡といつても余り親しみが無い。時にあのうたは聞いた事がある。ああ、あれはあの地方のうただったのか、と改めて耳を傾けさせられていた。

プログラムは進んで御隠居の番になった。船中でもうたが好きだと聞いてはいたが、旗江がその声を聞くのはいまが初めてである。細いがよく透る声で何の屈托も無さそうな笑顔を見せて、天竜川と書いてある曲をうたっている。御隠居は訪日する三年

程前に夫を失ったと云って、折角の旅が淋しいわ、と至極明るい表情で話していたものである。性来が楽天的に出来ているのであろう。帰伯の船中でも寄港地では必ず上陸して、若い者達と一緒に見物に歩き、土産物もいろいろ買物して抱えて戻るのだった。夫より先に息子の嫁に先立たれ、相次いで襲った此の不幸の他にも自分の愛児を失っている。女の悲しみはひと通り通ったのであろうけれど、御隠居は明るく老後の生活を立てている。その人の賢さの故か、年寄りにあり勝ちなうす汚なさが感じられない。

舞台では何時しか出演者の大半が済んで居て、旗江が気付いた様にプログラムと舞台の題示板を見較べた時には、終わりも近くなっていた。間もなく五時を少し廻った処で舞台は終了した。帰りの客にまじって廊下に出ると、出演者達の上気した顔がいくつか人の群に取り巻かれていた。その中の一人に足立の御隠居の姿もあった。旗江は取り巻き連中の処迄寄って行く気になれず、少し離れた処でどうしたものかと、とつおいつ逡巡していた。御隠居が旗江を見付けて手招きした時、あたりには人影もまばらになっていた。

「旗江さん、こちらへいらっしやい。よく来て下さったわねえ。どう、下手だったでしょう、わたしの声」

「あら、とつても声が若くて、びっくりしてしまつて。本当にお上手でしたわ」

褒めことばとしては云い足りない気もしたが、旗江としては

思った俣に口をついて出た言葉である。

「今日はね、わたし達のグループで帰りにお寿司屋に寄る事になってるの、お祝いなのよ自分たちでね、いい気なものよね」  
まわりでかん高い笑い声がおこった。結局、旗江もお相伴する事になってみんなのあとに従った。御隠居の友達といって紹介された人達は五人居た。

寿司屋の畳敷きの一室が予約してあって、女ばかりの賑やかな会談が始められると、早速料理が運ばれて来た。人馴れしないでかしまっている旗江に、御隠居は気をつかって話題をあれこれ選択している風だった。

「あのね、この人こんなに若いけど女事業家なのよ、日本でも一人で商売やってきてね、こっちに来てからもまだ四、五年しかならないのに、立派に稼ぎまくってるの。旦那さんが早く亡くなってね、苦労も多かったでしょうけど、あたし達と違ってえらいのよ」

まわりから一斉に視線を向けられると、旗江は身の置き処が無い様な妙に白けた気持ちになった。みんなの間に移民妻の苦労話しやら回顧談がつぎつぎ出てくると、銚子の数が何時の間にかふえていった。アルコール成分を一切うけつけない旗江は、御隠居からさされた盃もそのままに、いよいよきゆうくつな思いに塞がれていった。

いわゆる移民時代の苦労につながる経験を経てきていない旗江は、なまじ踏み込んでほならない垣のようなものを感じされ

られた。苦勞ということばのもつ響きが、ここでは何かしら、ガランとした空洞を思わせるような場違いの感情を与えている。旗江は自分なりに歩いて来た道をふり返ってみた。何も彼もが必然の結果であって、いまとなってみれば、さして数え立てる程の大きな痕跡も残ってはいない。その時その時はあんなに苦痛であり焦燥あるいは失望であつた事も、通り過ぎて仕舞えば、それは結果を安易に招来させるための、一課程にすぎなかつたのだという気がした。

しかし旗江の裡では意外な囁きも起つていた。

（あたしは遭遇したひとつの事も避けて通つたりはしなかつた。尽くし足らなかつた事への悔にたたら踏む想いをした事はあつても、あたしの持つてる限りの力でもつてぶつかつて来たんだわ。平凡な女の座かも知れないけど、あたしにはあたしなりの栄光への道だつたと云いきれる自信があるわ）

「それでね、わたしは治作のお嫁さんにと水を向けてみた事もあつたの。

でもね、女は事業をやつてみると家庭と両立しないジレンマがあるのよ、ね、それであつさり一蹴されたつてところ」

御隠居は言葉尻を強めてこともなげに云い放つた。高い嗔れた笑い声があとに残つた。旗江が一番大切にしまつておいた部分を、汚れた掌でかき廻され、つかみ出された様な痛みが鋭く身内を走つた。瞬間、眩を覚えて旗江は面を伏せざるを得なかつた。

まわりの者の眼には、旗江のそうした動作は女の恥じらい位にしか映っていないであろう。すると向い側の一人が同情顔で、「亡くなった御主人にみさおをたてていらっしやるのよ、きつと、ねえ」

隣席の女に囁く様に云った。

「ごめんなさい。旗江さん気を悪くしないでね、でも、もう良いのよ。あなたとわたしじゃ、嫁と姑母になったらやっぱりむずかしいだろう、とやつとこの頃気がついてきたの。ブラジル式に親子別居なんてことじゃ、折角あたしが今迄旗江さんに抱いてきた好意も、冷いものになっちゃうしね」

女達ばかりで空けた銚子が林立している。御隠居の言葉尻が少し震えている様に聞えた。旗江は遣り場の無い忿懣が、腹中で音を立てて旋回している気がした。

（何云ってますか。あなたはあたしが愛のひとかけらも持ち合わせてない、我利我利の女丈夫だとも云いたいんでしよう。人の気持ちも知らないで、あたしがことばで治作さんをあやつつて、利用した位の処云いたいんでしよう）

胸ふくるる思いとはまさにこの事であろう。横江はいづれも年輩者達の前で取り乱し度くない、と懸命に自分を制していた。

「とに角四〇後家は通せないとか云うのに、この人はその方を事業に向けてるから、てんで浮気なんて型の人じゃないの。義理の親子の間も立派にとりもっている貞女でございます」  
たしなみを忘れた様に、御隠居は横坐りの俣手を胸に当ててし

なを作った。

まわりからまたどっと笑い声があがった。酒の入った女達の好奇の眼が色情を帯びたように光っている。年令を戸惑わせるように結いあげた美しい髪型が、姿態の崩れた女達の頭でゆれている。しばらく彼女らの騒ぎが鎮まるまで、旗江は俯向いて呼吸を整えていた。頃を見計らって、急に気付いた様に窓ガラスを引き開けると、紫煙の立ちこめた夕霧が目の前に迫っていた。夜道にかかるのは嫌だからと挨拶を残して立ち上がると、一同の視線がまつわる様に旗江の体に集中した。ピンク色のブル―ザが、年輩者達の濃い色合いの中で華やかにゆれているようだった。

「あーら、七時になったら治作が迎えに来る事になってるのよ。もう少しじゃないの、ゆつくりしときなさいよ。女の夜の一人歩きは危険危険」

御隠居は旗江の手にしているバッグと上衣を取りあげて自分の膝に置いた。

その眼もとには、いつもの穏やかな微笑が漂っていた。振り切る訳にも行かなかった。旗江は再び腰をおろして胸の鼓動をきいていた。

「二寸、お手洗いに行ってきますから」

旗江は誰彼の視線を全身で感じながら、御隠居からバッグを受取ると、手ふきに包んだ金入れをそっと抜き取って掌にひそませた。

その部屋を出ると、酒の臭いや煙草のけむりの立ちこめる衝立の向う側は、御隠居の処からは見えなかった。店の奥に行き一人分の勘定を計算して貰って、旗江は自分の分を支払った。足音をしのばせて中仕切りを通り抜け店の表に出た。旗江がのれんをくぐろうとした時に、眼の前を治作の車が通り過ぎた。寿司屋の四、五軒先にガラーンと書いた標識燈の灯りが見えた。多分あそこへ車を預けて此処へ戻ってくるに違いない。旗江は反対の方角へ急いで歩き出していた。馳ける様にして曲り角へ来ると、どの車も客があつて空車は仲々現われなかった。うしろから治作が追ってきそうな気がして、旗江はもう一つ通りを渡った処でやっとタクシーを拾った。

暮れゆく街を走り乍ら、クッションに身を沈めると、火照つた顔に冷い風が吹き通った。何となく心の中に吹き溜まる様な冷たさに窓を閉めると、淀んだぬくもりが鉦がってきて、からまりつく様だった。乗った時から鳴っていたらしいラジオの音楽が、急に音となつて旗江の耳に飛び込んできたのは、多分窓を閉めたために起つた作用であろう。次々に最近耳馴れたメロディが流れているのを聞いていると、張りつめていた気がゆるんで行く様な気がした。

窓の向うに白い大きき建物がいくつも並んでいた。カーテンで閉ざされた窓灯りは、数える程しかなくて、みんな土曜の夜をどこかで愉しんでいるらしく、暗らくひっそりと並んだ窓が多かった。急に視界が遮ぎられたようで旗江が窓に額をつける

と、崖を切り落してあって、その地肌に宵のとばりが張りついた様に見えた。ほの白く浮き上って十字架の様に見えた立札には、売地と記してあるのがやつと読めた。ふつとしんどいな、という言葉が口をついて出た。運転手が聞き咎めたのか、一寸ふり返った。

旗江は笑って首をふって見せた。婚約指輪をした若い運転手は上手に着こなした洋服の背を張って、ハンドルに手をかけている。今夜のデートの約束でもあるのか、旗江の笑顔に笑い返しながら、バックミラーの中で、リズムに合わせて首をふっているのが、如何にも楽し気である。旗江はごまかしの様な笑いの下から、欠伸がまじってきて、本当にしんどい感じになっていた。商売の疲れからか、気力の疲れからか、何かに肩代りして貰い度い様なたるみを感じられた。今迄一度だつて弱音を吐いた事の無い旗江だった。貞女という格印をおされて喘いでいる姿が、バックミラーの中にほの白く浮かび上っている。その肌は淡い車内灯に照らされて漆喰の様なかたさを見せている。旗江は片手で頬のあたりを撫でてみた。コンパクトの鏡でのぞいてみようとして、何気なく座席に手を伸ばしバッグを手さぐっている片手があった。空しく動かしていた手を胸に組み合わせると、沸々と脈うっている鼓動を感じた。この時エスタソンの変ったラジオは、賑やかなサンバの曲を流していた。

小説

香  
れ  
バ  
ラ  
(41枚)

高山 東作

小説

香  
れ  
バ  
ラ

(41枚)

高山 東作



芝生を起こすと黒い土が現れた。柔い湿った土からは、かすかに水蒸気がたちのぼった。こころみに芝生を覗くと、枯れ葉の下にはまだ黄色くはあるけれど、小さな芽が確実にあった。すると私は心楽しくなった。そして、何故ともなくここへ来てからの月日を指に折った。

私はサンパウロの下町で、どぶの臭いのする裏町に住んでいた。カフェとヤシと太陽の光りに溢れた国への夢が消え、幾度

も目をこすってはあたりを見直し、そして新に失望する焦躁の日をそこで送っていた。それがどこから来るのか考える力も失せていた。私は旅へ出よう、遠くへ行こうと思った。それは祈りに近いものだった。

そんなとき松本に会った。彼もどこかへ行ってみたいというのだった。

しばらくして私達は旅へ出た。列車はゆっくりと南下した。二日。三日。

進むにつれ、山が深くなり、霧の山峡や澄んだ急流があったり、朝まだきの牧場の下草が露にぬれ、闊葉樹の紅葉と調和した風景が、窓外に現れては消えたりした。それらは故郷の道を辿るように、私の内に忘れたものを思い出させるのだった。

しかし、私達は間もなく列車を降りたのだった。木材産地の小さな駅で、松本は私から預かったキップや金ともども、スリ盗られたといい、

「俺の金の方が多かったぜ」

松本はそういっただけであった。

どこへ、という宛のない旅は、どこに留ることも出来たが、私達は南への旅を続けた。見知らぬ町に立つと、気のいい誰れかが邦人の家を教えてくれた。不思議に忘れられたような町にすら邦人がいた。そこで働き、金が出来ると旅を続けた。

そんな中で、明日の無い私は今日をせいっぱい生きるのだった。食を抜かしたり、木陰に風をよけ夜を明かしたりする

こともあったけれど”今日”に賭けた生活に私は生々としていた。するとサンパウロでの焦燥が今日を生きながら”明日”に賭けた生き方のためだったように思われた。期待さえ芽生えた。それは充実のためではなく、冒険が不安や絶望を忘れさせたのかもしれないが、私にはその手ごたえが嬉しかった。

私はこの旅の終りの地で生きて行こう。そこは吹雪に凍る地かもしれない。たとえそうであっても、炉に火を入れ顔を火照らせて生きて行こうと、真剣に思うのだった。

よく夢を見た。魚が泳ぎ廻るのだった。すると翌日は良い日になった。

そんな日、私は次第に遠ざかる少女を想った。

幾十日か経ったある日、林を抜けると大河があった。制服の青年が焼いトウモロコシを噛り、岸辺の小さな板小屋の壁には機関銃があった。

青年は私達にトウモロコシを差し出し、対岸の密林を示し、アルゼンチンだといった。トウモロコシの味と機関銃の底光りに、私は素朴な人情と非情が背中合わせの国境を見た。

カヌアで流れを下ると、密林の切れ間にアルゼンチンの村があった。カヌアの男と別れ岸に立ち、私達はどちらからともなく握手をした。一つの旅が終わり、新しい旅が始まるということであったろうか。そこを境にして、私の中にも何かが終わわり、何かが始まっていた。漠とはしていたけれど、脱皮して成虫になる昆虫のように、その儀式か何かのように私達は手を握った。

幾日かして、丘の上から大草原を望んだ。黒い牛の群が点在している丘を下り、どこまでも続く一本道を私達はたどった。ある所では乾ききった埃の道を、ある所では馬車の轍にえぐられたぬかるみの道を、犬に吠えられたりしながら歩いた。

また幾十日かして、私達は大河のほとりに立った。パラナ川とウルグワイ川の合流点、ラプラタ川の上流であった。乗り合い舟で、老人に話しかけられた。

― ワシは日本人の農園で働いていた。いい人々だ。そこへ行け。と繰り返しているのだった。

私達は大変困っているか、疲れ果てて見えるのだろうか。あるいはそうするのが人情の自然なのだろうか。どこでも人々は親切だった。

そのとき別の男が、大げさな身振りで鼻をつまんだ。私達はもう長い間体を洗っていないかった。長い旅だったと私は思った。そして老人のいう村へ行こうかと考えた。

川とも海とも知れないラプラタ川の向うに、初秋のブエノス・アイレスがあった。

通りすがりの邦人の店で、その村への道を尋ねたときも、私達は歩くつもりだった。けれども店主は私達を大きな時計台のある駅へ連れて行き、キップを与えたのだった。幾度も礼をいい、私達は列車に乗り込んだ。

動き出すと、街々はまたたく間に平原の向うへ消えた。まるで魔法か何かのようであった。鉄輪の響きに私達はふつと顔を

見合わせた。あの日から、幾月が経ち、どれ程歩いたのか知らなかった。遠い日の出来事のようにであった。

この村の駅に降り立ったとき、平原も空も暗く、寒々としていた。その日から私はそこが緑に覆われる壮観を想っていた。その季節が間もなくやって来るのだった。その上、私は出来の悪い毛布一枚で夜を過し、しばしば寒気に目覚め震えて朝を待つのだった。だから明かるい日射しを思うだけで、胸のうちが軽くなった。

寒さをこらえて夜を明かすのは松本も同じだった。私達は小さな室に寝台を並べていた。私が目を覚めているときは、彼もきまつて覚めているようだった。けれども、ただ寝返りの音を立てるだけで黙っていた。日常でも私達はあまり話をしなくなっていた。

しかし、そのとき私は彼へ春が来るのを告げずにはいられない思いにかられていた。彼は今朝も、瘠せた長い体を前後にゆすり、私のそばをそれとなく通るはずであった。一昨日から始めた彼の奇妙な行為を、私は黙殺していたのだが、今朝は気持にゆとりがあった。

待つ間もなく、住宅と農園を区切る低い生垣の向うを彼が来たとき、私は声をかけた。すると小さな釣り目ととがった口をゆるめ、「おお」と始めて気がついたようにいった。そして、私と彼が抱えているバラの束を見くらべ、

「棘が刺さるのだ。でも慣れると痛くないから不思議だ」といっ

た。

私達はバラ園へやって来、働いているのだった。私は歩み寄り、彼の腕を取って、薄桃色のバラの花へ顔を寄せた。するととらえどころのない花の香りがした。始めの頃、バラは豪華な彩りを見せ、夢の中のように匂った。私は驚きの目を見張ったものだったが、月日が経つにつれ、バラは美しくも匂やかでもなくなっていた。

「これは安物さ、他の半値だからな。その代り花数が多いし、管理が楽だから収入はいいんだ」

「そうか」と私はいった。

松本と私は、同じ作業をし同じ栽培知識を得ていた。彼のいうことは私もすでに知っていることであつた。彼の言葉に反撥を覚えた。露天市の見切り品のようであつた。そのためいまい方私を満たしたばかりのものが、ゆつくりと消え去つた。

私達の作業は除草に限られていた。ところが、松本は一昨日から、毎朝花を切ることになつたのである。彼にはひけらかす資格があるのだった。

「まあしかし、これで給料が上る訳でなし、草取りが気楽でいいさ」

気持の陰りが顔に現れたのか、彼は慰め顔でいった。私はまた「そうか」といった。気のない返事だつた。それを感じ、彼はようやく思いを果したように晴々とした顔になつた。

「おまえ何しているんだ」

「そこを掘っているのだ」

私は掘り返したばかりの、湿った黒い土へ顎をしゃくった。

「何にするのだ」

「俺も知らないぜ。何だろうな、芥捨て場じゃあるまいし」

「違う違う、洗濯物のそばを他人が通っただけで、ここのおカミさんは洗い直すのだ」

彼の容喙癖はいつものことで、私の内へ土足でふみ込むのだった。

「家のそばに芥など捨てるもんか」

そのとき生垣の向うの、ヒマラヤ杉の陰から園主の仁木が松本を呼んだ。

すると彼は急に顔をつくろい、私との立話などまるでなかったかのように、小走りに行った。

そのときになって、私は「春が来る」などと彼に告げようとしたことを自嘲した。そんなことは、いわれなくてもやがて来るものであり、子供じみて恥かしいことのようにだった。「こんなふうにやってくれ」棘の刺し跡が無数にある手を伸ばし、節の見えない太った指で地上の空間に円を画くと仁木は行ってしまったのだった。私は見当をつけ土を掘った。掘り上げた土の山は高くなる。高くなるより、拡がる方が多く、向うへ芝生を埋めていた。私は土を投げる方向を芝生のない家の方へ変えた。すると小鳥が芝生へ舞い降りた。私の計画を小鳥はどこで知るのだろうか。もうそちらへ土は飛ばないのだと安心しきっている

るように見えた。餌を啄むと急に怯えたように、葉の落ちたポプラの小枝へ舞い上がった。深まるにつれ土は固く、鍬の切りあとが光り、足もとへ小さな土の塊りが転げ落ちたりした。

仁木がいつ来たのか知らなかった。彼はよくそんな現れ方をする。気がつくと後に立っていた。驚いて見上げると、短い足がいつそう短かかった。

「この程度でいいのですか」

「うむ」

私が聞いたことでなく、他のことを考え黙った。そこで、鍬を振ろうとする私へ、

「もうすぐ蓋がある」と引き止めるようにいった。

「蓋？」

「そうだ」

「宝箱のですか」

「宝箱」

仁木は笑ったが、すぐ前以上に固くして、投げ上げた土の土を見た。

「そこからこっちへ………」そして、

あの太った指を一本突き出し、穴から家の壁へ向け、空間に線を引いた。

「土管が来ている。掘ってくれ」

仁木はいい捨てて行った。

そこには、たった今積み上げた土の山があった。

さつきの小鳥が、ひとしきり鳴きたてた。一羽が鳴くとそこからじゅうの小鳥が唱和した。

少しある風は冷たかったけれど、灰色の雲間から時折り射す陽光には温もりがあった。土の山を崩しながら、私は毛布を干したものでどうかと思惑った。日に干すと柔かく、干草の匂いがしてほのぼのとすのだった。

どこかで母の想い出につながっていた。そして一晩を安眠出来るのだった。

松本はサンパウロの五倍の給料と、安い物価にいつそう目を細め、

「あつちの五年がここの一年だ」とよろこんでいた。

私達はすでかなりの金を貯めていた。そのくせ、夜具も買わず震えていた。分別があつてのことではなかった。放浪中に経済観念を失ったかのようなであった。それらの店での、言葉の通じない面倒もあった。それより、それをさせない何かが私達のまわりに立ち込めているのだった。

夕暮れになって、この雲がかき消えると、温室のガラスを音をたてて凍らせる霜が来る。すると真夜中には火入れだ。さあ、さあ、私は自分をけしかけスコップを振るった。

そんな私のそばを松本が通った。時計を見ると十二時を過ぎていた。「おおい木下」かつては呼びかけたものであったが、松本は装っていた。

私達はレストランで食事をしていた。

この村にはヨーロッパ移民も多く、独身者や男だけの出稼ぎ家族は、何軒かのレストランで食事をしていた。

ここへ着いた日、

「神様の助けだな。近く島崎君が出るので困っていたところだ」

と仁木は手をもんで喜んだ後、

「食事はレストランでもらう。それが嫌なら、うちじゃいらないよ」

「結構です」

私は他人の家族との食事の窮屈さを知っていた。その上、この農園へやって来たのは駅に近いというだけの理由からだっただけでも、ここへ腰を下そうと考えたときから、他を探す気力が失せていた。

松本は一度だけレストランで食べ次ぎから自炊を始めた。何かに驚き、慌てふためいているかのようにだった。

「自炊が安くつく」と彼はいった。

独りレストランへ出かけ、見知らぬヨーロッパ人にはさまり、私はテーブルを囲んだ。すると彼とのときは感じなかった意識で体を固くした。

まずスープが出る。ブド酒かジュースの飲物、ビーフエとサラダ。マカロニーか肉の燻製。最後にチーズと練り菓子を合わせたもの。いえば卵もあった。上手に食べていく彼等を横目に私は唯口に押し込むだけであった。

それを見てからかう者もいた。それでも自炊など器用なことのできない私は通い続けた。

私が慣れ、とらわれず、物を味わえるようになった頃、松本はレストランへ行くようになった。「自炊は栄養がかた寄るからな」といった。

レストランは時間が決っていて、始めの頃十一時には仕事を止めていた。

いつの間にか正午を過ぎても仁木は合図しなくなっていた。私は大急ぎで服を更え、松本の後を追って生垣の門を出た。

レストランの近くで、隣農園にいる大村に会ったけれど、私は手を上げただけで先を急いだ。

「あんた達のこととは仁木さんへ話しといたからな」

私の背後から大村はいった。

「何のことだ」

「魚住が死んだぞ」と、彼は他のことをいった。

「死んだ？」

意外な言葉に松本も立ち止った。

「今朝な首を吊ったのだ」

大村は身震いしてみせた。

「実習生か」

それには答えず、彼は角を曲った。

レストランでは大方食事は終わっていた。ボーイが嫌がるのはチップで何とかなるのだったが、遅れるとスープの味が薄いのは

だった。

「誰だろうな」

「奴が出かけるのだ、実習生さ」

私達は食事をしながら珍しく話をした。

「実習生さ」という松本のいつにない穏やかさに、私は彼の顔を見た。そして、神経質な彼を思い、いつそう強くそのことを感じているのを知った。

彼等は彼等であり、我々は我々である、断絶を。そのため異境での若い孤独を同朋の死を、正直に悼かないのだった。

松本はテーブルに覆いかぶきりスープを啜っていた。

「自殺って、しかしよほどのことだぜ」

松本は返事をしなかったが、しばらくして、

「自殺したってなあ」ぽつりといった。

食事を終え、農園の小舎へ帰ると、いつものように島崎が待っていた。

ここへ来て四年になるという彼は、私達に歩調を合わせ先輩ぶるところがなかった。その才月の苦悩がそうさせているのを、私は彼の話で知った。

細君と男の子が二人いた。

午後、松本は破損ガラスの取り替えであった。島崎はバラの剪定だといった。

それを覚えると一応バラの栽培ができるのだった。彼は来年独立するという。

構造平野の地形と、雨量の少ないステップ気候のため、自然の灌漑用水は全くないのだった。ために百メートル近くも下の地下水を使用した。ポンプ、エンジン、総べてを輸入品でまかなうこの国では、それだけでも莫大な費用である。その他何棟かの温室、付属設備収入があるまでの生活費等、あれもこれも必要なのだった。

家族持ちの島崎には、ほとんど貯えがないようだった。すると仁木に借りるか、保証で銀行から出すのだろうか、仁木はどおいうつもりか、私達に島崎の悪口をいうのだった。島崎のやり方が自分の意に添わないときなど“君は手品師か”と私達がいってもいったりした。しかし、島崎はそんなことより、それ程の資金を注ぎ込んだ結果の収入を不安がり動揺していた。

まして私には気も遠くなる大事業であった。“気も遠くなる”それは諦めにも似た思いであった。

私はひとりの少女を愛していた。少女は手紙さえままならぬ遠くへいた。

けれども、踵を上げいつも私を待ち望んでいるはずだった。私 が挫けるときその愛もまた挫けるのだった。そのためにも私は何かをやり遂げねばならなかった。たとえ世界を向うに廻しても、少女の愛を裏切ってはならないのだった。

穴へ行くと、先に来て鋤を使っている仁木に、私はレストラ ンへの道でのことを聞いた。

「ああ、あれは駄目だそうだ」

独立資金を貯めるための頼母子講のことであった。

「君達は国籍がないからな」

「……………」

「日本語を話すから日本人とは限らない。朝鮮動乱の捕虜で共産軍へ帰りたくないのがいたな。あれらがブエノスにも来ているが日本語もうまいもんだ。向うでそれをいうまでは区別がつかんな」

「それが僕らのだめを理由ですか。朝鮮人かもしれないというのが」

「実習生だけでやるのだ」

「勧めたのは向うですよ。誰がいうのですか」

「それは知らん。が、そうなったのだ」

言葉がもつれ、穴を出て、

「誰でもいい」

仁木は声を荒らげていると、持っていた鍬を突き出し私に渡した。

「そんな場所に君達はいるのだ」、

「知っていますよ」

「知っている？ 何を。春、日本人クラブのピクニックがある。連れて行きたいが向うは君達の加入を認めないのだ」

“向うは”という仁木はクラブの役員だった。

「そんなことをか」

「まあだいたい」

けれども言葉にしていわれた今、再び私を包み始めた焦躁に似た倦怠の因を、知ったと思った。

私は黙ったが、そのまま鋏を振ることが、うつ向くことが敵に背を見せる不安と卑屈感から出来ず、仁木を見ていた。

五十がらみでよく太ったこの男の皮膚は、ぶつぶつと毛穴が見え、茶色になっていた。その下に感情をかくし伺わせない仁木に、というより、この村の日本人との距離を私は見失った。ひどく孤独なものが私に残った。

アルゼンチンは日本移民を制限していた。肉親以外は四年間の入国を認めているに過ぎなかった。それが実習生だった。

私達は国境警備隊から入国許可を受けていた。彼等同様、いづれ永住が認められるはずであった。この村の日本人達にとって、それとこれとどれ程の差があるのだろうか。

午後の休憩時間になって、私は松本へそのことをいった。

「ありそうなことだ。しかし、おまえあつちを出るときどんなつもりだったのだ。あてにしていたらとんでもないことだ。必要なお膳立は、だから手前でやるのさ」

そんな私を笑うのだった。

「そんなことはわかっている。ここでは俺達は除け者だといっているのだ。考え違いしたな」

「違いはしない。よしんばこの先、俺達がどうにかなったにしろ、奴等は変りっこないぜ。パラグワイさん達を見てわかってるだろう、バカにされ通しじゃ賤しくもなろうってもんだ。同じこ

とだ、だからな、俺達あ少々のごとはやっても、生きる分別はしとかなきゃならんのよ」

「日本人じゃないブラジルさんだ俺達あ。だからおまえは考えている。それでいい」

「よかあないさ。じゃ他にどうしようがある」

そこだけ彼は継るようにいった。

朝のカフェと午後のお茶を、私達は島崎の家族としていた。すでに食堂にいた松本を呼び、私は手を洗いながらいったのだった。

私達の小舎は農園の端で、ミモザアカシヤとセンダンの木の陰にあり、食堂をはさみ二部屋あった。壁の外側は板でペンキが塗られ、内側は部厚いファイバー紙が天井とともに張ってあった。白い壁は、それぞれ一つづつある開き窓の明りを反射して明るかった。私達の室は、前の青年が出た後、入る者がなのまま物置になっていた。床はワックスを塗れば光るのだろうが、まだ二、三の物が残っていて私達は雑布をかけることすらめったになかった。それでも清潔で居心地よかった。

私達の胃袋は底なしであった。ミルク、パン、バター、ジャム、コーヒー、紅茶……毎日私達はいくらでも食べた。費用は仁木から島崎へ渡されるのだが、幾らでもというのではないようだった。不足分はどうなるのか、かまわず食べ続けていた。

「今日は変った仕事ですね」

食堂へ入った私へ島崎がいった。

「ええ、工兵ですよ」

「ほう工兵………工兵隊ですか」

島崎はパンにバターを塗っていた。

「どうかしましたか」

「いや、実は僕も工兵隊なんですよ」

いつにない明快な語調とその意味を私は解しかねた。

「戦争でね、ジャワにいました。バタビヤです」

見ると顔を輝かせていた。これまで私はこれ程明るい顔の島崎を知らなかった。彼の明るさに釣られ、私はバタビヤを想った。バタビヤはいい所のようにであった。

けれども、島崎は想い出の華麗な薄幕をすけて見えるバタビヤを懐しむというより、以前にはなく、そこで充された何かがあり、楽しんでいるようであった。それはまた、充されるでなく、逆に失われたもののある今とくらべ、それを惜み憤っているかのようにもあった。

悲しむ人の微笑に似た明るさはやがて消えた。

私の横では松本が音をたてて紅茶を啜っていた。その昔が私の神経に刺さるようになったのはいつ頃からであったろうか。彼にも同じことがいえるはずであった。

「工兵魂上聞に達すですか」

紅茶にミルクを溶し、昔聞いた古風なことを私はいった。

「いやあ、そんな勇ましいことはなかったですよ。でも」

言葉を切り、島崎は忘れたものを想い出す目をした。

「勇ましくやりたかったですね。敗けたと聞いたとき、我々だけでもう一度やろうとしたのです。何しろ敵を見たこともないのに、敗けたもへチマもないですよ」

「もちろん敗けるなど思ってもいかなかったでしょうからね」

「勝利を信じていました」

私は「今は」といった。

そして、状況がどうであれ、ここにこうしているからには、私が信じている程には、島崎も信じているのだと思った。そのことではなく、いつか、遠い未来、失われたものの回復と、それ以上に充たされるもののあるだろうことを。

「今ですよ」

「じゃ勝組だ」

私達はしばらく冗談を続け、笑った。

「するとあのナイフは売っている物じゃないですね」

笑いが途切れたとき松本がいった。

「だから、そんなものと一緒に特別日本で作らせたのですよ」

私がそこへ行く前からの続きだった。彼等は仁木が工夫したという、ナイフで花を切る方法について話すのだった。それは確かに鋏を使うより能率が上るのだった。右指で切った花を左手に抱え、走るような早さで仁木が採花するのを私は見ていた。「どうにかやれるようになったが、難しいですね」

松本は島崎と話しながら私に聞かせるのだった。すると今朝

彼の話に見たければけばしさなど感じるゆとりもなく取り残され、話に加わる足場を見失った。

黙りながら、開け放された窓越しに私は外を見た。私がそこに掛けたときから、微細な水滴がしきりに降りかかっていた。窓の向うには錢葉のミモザアカシヤが覆い被さり、葉の切れ間から薄曇りの空が見えかくれしていた。

私はパンにバターをその上にジャムを塗った。それをち切り、そうすることが彼等にわざとらしく映るのを承知で、もう一度窓へ顔を向けた。

ミモザアカシヤは幹も枝も葉も黒くくすんでいた。窓の近くの大きな枝のある所が濡れているのを私は見た。するとあちらこちらにそれがあつた。

錢葉の重った小枝の先にもあつた。泡になり垂れていたりした。さつきから私にかかる水滴は小雨ではなく、ミモザアカシヤの樹液なのだった。話をもどし、今日の私の仕事について島崎に語ろうとしたが、機会もなく終わった。やっていることが一体何なのか私は知りたいのだった。

裏庭へもどり、それと知らず、巨大な攻撃兵器の部品を作る工員は、きつと不安に違いない、などと考えていた。

私が掘った穴から土管は家の方へ伸び、壁ぎわで直角に上り地表近くで家の中へ消えていた。湿りが消えた土管は固そうに見えた。仁木が命じた仕事は終わっていた。けれども明らかに途中までしか済んでいないのだった。時間を大事にし、能率を

重んずる仁木が、こんな指図をするのもおかしかった。この仕事について、彼自身よくわかっていず、実験でもするようなどかしさがあった。

仁木を探し、次にどうするか私は聞くべきであった。住宅はすぐそこにある。手を鳴らし、呼んで話をすればよかった。けれど、その白い家には近づき難いものがあった。

島崎というより、女中代りに仁木家の手伝いをしている、彼の細君が築いた言葉の壁のためだった。細君は毎日、仁木や家族のその日の様子を語るのだった。それは噂というより、批評か解説に似ていた。

ある日私は仁木と外へ出た。彼はコカコーラを飲ませてくれた。聞くと細君は「あらっ」と見つめ「飲んだの」といった。そして「まああ」まるで天変地異にでも会ったように驚いて見せるのだった。そこで以前の例を引き合いに出し、飲んだ場合はこう、飲まずに返した場合こう、と分析し「だから」と結論づけ、「飲まずに返すべきだったわね」続けて、度び重なると先々為にならないのだと展望するのだった。

飲まれるのが嫌やなら出さなければいい。前例まで調べて付合う閑はない。というと、しきりに同情するのだった。

そんな調子の毎日に、無邪気にそれを思い込んだのではなかったけれど、次第に呪縛され、手も足も出ないのだった。

ために、私は仁木の家を気軽に訪ねることが出来ずにいた。

仁木は温室にいるかもしれないと私は考え直した。温室のガ

ラス越しに私達の仕事振りを、覗いていることがよくあった。戸を開けただけでは見落す恐れがある。名を呼ばず探すとすれば、長さ四十米の温室をひと巡り、丁寧にしなければならなかった。温室は十数棟もあり、それではかえって遊び廻わっているふうに見えるだろう。

しかし、その必要もなく仁木はウールのジャンパーで丸くなり、やって来た。昼下りになると急に寒くなるのだった。

散らかった土を踏み、仁木と並び、穴に目を落とし私は仁木が いい出すのを待った。けれども彼はそのまま黙り、手に持ったバラの支柱用の棒で、穴のふちを軽く叩いているだけであった。しばらくして、圧えるものを跳ね返すように彼を見たとき、「どうかね」と口もとだけで笑った。

そして、棒でコンクリートの蓋を突つき、  
「取ってみてくれ」といった。

穴へ降り、私は足場を作ると、すき間に両手を入れ、蓋の重みを計ってから、必要な力をこめ、片側を持ち上げた。持ち上げた力を抜かず、手の向きを変え向うへ押し倒そうとしたとき、私は異臭をかぎ、そこが何であるかをやっと思った。便所の浄化槽であった。

浄化槽は二つに区切られ、一方の側にはまたそこからどこかえ流される土管の口が半分程見えていた。

「こつちを掻き廻してくれ」

棒を渡し、仁木は去った。私はぶよぶよとしたものを掻き廻した。すると或る物は沈み別の物が浮き上ったりした。異臭はいつそう烈しくなった。

丹念にそれを繰り返した。そうすることの意味など考えもしなかったし、どろどろに潰れていくものに、ほとんど何も感じなかった。強いていえば、島崎や松本をでなく、私を何故この仕事に当てたのかという、朝からのかすかな思いであった。

けれども、それまでのバラの下にうずくまり草を取る、陰気な作業にくらべ、思い切り体を使った今日の作業は、自分の肉体を取り戻したようで、筋肉の痛みさえ快よかった。私は一面澁刺としていたのだった。

仕事中は滅多にしないのだったが、タバコに火をつけるため、手を休め上げた私の目とやって来る仁木の目が一瞬会った。そして、素早く仁木が私から何かを読み取ったのを感じた。それは私が眉を寄せ、固く口をむすんでいるのを自覚したのと同時であった。

「もういい止めてくれ」

「これを……」

「蓋をしてくれ」

地図から山や谷や島を読むことが好きだという彼が、私から何を読んだか知らない。

「蓋をですか」

「そうだ」

今朝、そこに蓋があると聞いた以上に、私は戸迷った。

私は浄化槽の深さだけ汚物のからまった棒を、処置に困りもて余した末、芝生へ投げた。そこら辺に汚物が散った。すると不意に気弱な表情で身を乗り出し、咳払いとともに、

「砂原さんの青年が」と仁木はいった。私は聞き流し、蓋が終つて仁木を見た。「あれを」と口ごもり、「知っているか」といった。その余音には、かすかなためらいがあった。

「誰ですか」

「日本から来た男だ」

絶えてなかった仁木の世間話は、何かの埋め合わせのようだった。すると誘われ、私は今日の仕事不満でなかったことを知ってもらおうとするのだった。

「知りませんね」

私の思いとは逆に、返事はササクレ立ったものになった。いながら穴を出、スコップを拾った。

「まだどこへも行ったことがないもんですから」

私は大急ぎでいい足した。若し事実ならそれは会話の気まずさを補って余りあるはずだった。島崎の細君は例の調子で、私達の外出を仁木が非常に嫌っているといったのだった。

「そうか、よその花も見た方がいい。良い花も、悪い花も見れば勉強にはなる。……それが死んだそうだ」

「自殺したっていうあれですか」

「何だ知っているのか。どっちが良い悪いというんじゃないが」

私が手にしたスコップを見て、

「もういいんだ」と仁木は強くない家の陰へ消えた。

すると、まるで嘲弄されでもしたかのような、今日の仕事が腹立たしくなった。

前庭で自動車の爆音が起こり、犬が吠えたてた。仁木は、学校へ子供を迎えに行くのだった。私は道具をしまい温室へ行った。屋根ガラスの新しいのは松本が取り替えたものであった。それらは西日を鋭く反射し、あるものは虻の色に輝やいていた。一つの温室から鋏の音がしていた。覗くと島崎がいた。ほとんど刈り込まれ、室内はぼうとして見えた。白い大きな空洞の底の一点で、彼の使う鋏の音だけがしていた。鉄のふれ合う固い音は、か細く訴えるようにカチカチと鳴った。等間隔に積まれ、通路を塞いだバラの切り枝を跨ぎ、私は中へ行った。

「終わったのですか」

と気配で察し、立ち上り背伸びをする彼へ、私は肩をすくめてみせた。

「工兵隊もいいところ、糞溜めの掃除ですよ」

「肥料も高くなったからなあ。ところで実習生の自殺を知っていますか」

「首つりの」

「そう、あんた方も大変ですね」

「僕等が？」

「問題はからまっているだろうが、要は前からのもめごとです

よ。追い出されかけていたのですよ。有りうる事だ。気をつけなきゃ」

「じゃ腹いせですか」

「それねえ……そうすると目的は達したことになるな、オヤジは警察に引張られたそうだし、遺書がないので領事館筋でも動いているらしいからね。しかし本人にすれば目的を捨てたことになるなあ。とにかく、何ですよ、独立を一年のばして五年もこき使い放り出そうとしたんですよ。彼に資金の援助をするのが嫌で。それでもしがみついていたのですがね」

「力尽きたのですね」

淋しくなったのに違いない。死ぬ間際、彼は可愛がってくれた祖母を想い出しはしなかつたろうか。

夜になって、雲は消え風も凧いだ。通りすがりに見ると、穴は宵闇の中で黒々と口を開け仁木の目のように無表情だった。そのとき手伝いを終えて帰る島崎の妻君と会った。妻君は私を確かめると、声を上げて笑った。」

「昨日ね、カルロスがレモンを落としたのよ」

「カリットが？ それで」

カルロスは四才になる仁木の三男だった。

「今日タンケを掘ったでしょう。あれね便器が何故詰ったかわからなかったからよ」

「わかった。それで。カリットの奴」

私も冗談めかして笑った。そして歩き出す背後から、

「お疲れ様」と細君はいった。

農園の周囲の、防風林を兼ねた高い生垣を出て私はレストランへ急いだ。

空はよく晴れ、大小の星々が散らばっていた。遠く糸杉の列が、黒い影を浮き出し、暮れなずむ濃紺の地平を刻んでいた。足もとの草の枯葉はすでに霜をおび、踏むとかすかな音を立てた。透し見るとそれらは星明りにきらめくのだった。

松本と私は少し離れて歩くのだったが、レストランが近づくと、どちらからともなく肩を並べた。

「俺が使っているナイフな、すごく上等なんだ。あれ俺がもらうよ」

「どうかな」

「やるなってことか」

「やるな？」

「そうさ。正義ぶってるのか」

「オヤジ安々と分けてくれるかなって俺はいつているんだ」

「そうか、草ん中にも落とすことにするさ」

ドアを押すと、食べ物と人声がからまった温かい空気が顔を撫でた。

席につき、私はボーイにブドー酒をいった。アルコールに弱い私はジュースかコーラしか飲まなかったが、飲みたくなっていた。

待つ間、近くの駅で汽笛を鳴らし、列車が着き、発車する響

きがした。

食べつつ私は彼にもすすめ、ブドー酒を飲んだ。

「先々どうせ必要なもんだし」

彼はナイフのことを繰り返した。

そこへ「ヘエイ、ハポネース」と顔見知りの若いイタリヤ人が、喚きながらやって来た。

「おまえらの目は細いな」

「おお」

そんな話はいつものことで、私達は相手にならなかった。

「それで、物が見えるのか」

喚き声は、廊に似た大食堂中に響き渡っていた。湧いた爆笑に顔を上げ、見ると男は口をゆがめていた。立ち上り、胸倉を掴むと、男は酒臭い息を吐きかけ、侮蔑の言葉を喚き続けた。外へ引き出したとき、私は「日本」を意識したのでなく、「日本」そのものだった。

男は酔っていた。すると私はかすかな悔を覚えた。それは私も酔っているかもしれないということであった。けれども、もう後へは引けなかった。

私は強いて怒りをかき立てた。私の一撃で男は道路にひっくり返った。何をいわれても笑っている日本人を男はみくびっていたのだった。思いがけない反撃に動転し、男は芝居がかった仕事で負けて見せていた。

もちろん腕に覚えのある私の、快心の一撃ではあったが、男

が力をつくして戦ったら、こういくかどうか自信はなかった。

「イタローめえ……」

松本であった。男を引き立てたのを追ひ、テーブルのナイフを掴み直し、続いたのだった。

私達は顔を見、頷き合った。

「自殺なんて出来そうもないな、俺達あ」

「あつたりまえよ」松本がいった。

一度こんな屈託のない出合いがあつたようだった。国境の川を渡ったときだったかもしれない。何をし、どう考えようと、こうしている限り、私達は何かによつて繋がらされているのだった。

「甘ったれちやいられないな。流れ者は」

「あつちではハポネース、こつちではブラジルさん。畜生！」

私はいった。呻吟でもあり、怒りでもあつた。

街灯の下を蹠踉と去る男を私達は見ていた。

食事を終わり、帰る道、いつになく肩を並べ話しながら歩いた。それは流行歌のことだったり、日本の食べ物の話だったりした。

話しの切れ間に、私はあの少女がこの駅に降り立つ日のことを思った。

その日は春にしよう。

よく咲いた真赤なバラを一輪。

美しく匂やかな花びらに、  
少女の顔がほころぶ。

目が経って花びらは散り、  
笑みが消え憂いが来る。

そんな悲しいバラは捧げぬよう。

今はそうだけれど、

いつか天の一角が開け、その光りの中で、

望みが叶うその日に……………。

足の下に鳴る霜柱の音に合せ、私は一句一句胸に刻むのだっ  
た。(了)

小説

移植

第四回（32枚）

川原 奈美



その夏は、ヘチマの生命力の逞ましさに圧倒され通しでありました。

幾年ぶりの早と申しますのに、酷暑も境界も眼中になく、隣家の庭から越境して来ましたヘチマは、忽ちにして私の家の屋根を占領してしまいました。そして夥しい実を並べ、日夜私を睥睨しているのです。

ぐんと伸びるんだな！ 遠慮無用に生きることだよ！

と、黄色い花をお尻にくっ付けた長い実が軒端から唆かしたりするものですから、私も妙な意地になって、それなら幾つ位もなっているのか数えてやれ、と言う気になったのでありました。

母屋の裏口へのぼる斜面に出て、伸び上がり伸び上がり、三十二まで数えました時、私は母屋の裏口に突き当たる処まで後退しておりました。そこへ、ひよいとお婆さんが出ていらしたので、何かいたずらを見つけられた子供のようを、ばつの悪さでした。

葬式戻りの手を洗いながら、お婆さんは昨日の水難のむごたらしさを、嘆息まじりに話されるのでした。「若い頃には泳いだ事もあるが、四十年も水にはいらぬ自分が、気も転倒して川に飛び込んだ途端に、心臓麻痺でも起こしたら、次には、泳げもしない次男まで、後を追って飛び込むだろう……そしたら親子三人共、溺れてしまうと、思案したら、抱き止められている腕を、振り離すことが出来なかった。だが……それは真実の親心じゃなかった。思案もくそもなく、儂は川に飛び込まねばならなかった。見てください。命惜しさに、両手を差し伸べて救いを求める長男を見殺しにした親でなしです、儂は……。と泣きくるわれるのですね……父親の身にすれば一緒に死んだ方が、なんばよかったかと思うでしょうね。親と言うものは、かなしいもんですよ」

それから、手を洗った水を植木鉢にかけてやったお婆さんは、腰を伸ばすと、私の家の屋根を眺め「見事なへチマですね、フ

エイラに持って行きなさい。良い値で売れますよ。私にも少し分けて貰えませんか」と、おっしゃるのでした。それは最早、親心の哀しさ、などとは全く無縁な声でした。

頭の回転のぶい私は、どうぞ、全部とってください」と、申しましたが、その場で抱いた違和感は夜になっても執拗に私の胸に、こびりついていたのでした。

夜の仕事を終えてから先頃受け取った母の手紙を再読して見ましたのもその違和感に拘泥していた故だったのでしよう。

道夫の父親も私の母も、長男の溺死を目前に看過した老父も、親心の哀しさの中に生きている。母屋めお婆さんも身につまされて親心の哀しさを言った。然し掌をかえすはやさで、実利の方へ心向けかえて見せた。若しかしたら、命も縮む程、案じていると手紙に書いてしまった後は、私の母も案外け（、）ろ（、）っ（、）として手近かな孫でもかわいがっているのではあるまいか：と、すると、私も、ひたすら母を恋しがる子心の足りなさを、責めてばかりいるには当たらないのではあるまいか、などと、母の手紙に反撥をかきたててもみるのでしたが、道夫に殺される私を夢にみる母の心はやっぱりり私の胸を痛くしました。

然し、其の夜もとうとう、母への返信を書きませんでした。私の思念が整理されていなかったものですから……。

其の後一ヶ月ばかりも続いた炎暑に、さすがのへチマも疲れを見せた頃、一夜車軸流しの雨が降り、晴れたら清澄な秋空で

した。

少し乾いたら、ヘチマを取らせてもらいます。と声をかけに来た母屋のお婆さんと入りかわりに、モーニカ夫人が賑やかな声を玄関にふりまきました。

「何と、私を見てちょうだい、減食なんて効果なしよ。涼しくなつたし、これからは容赦なく食べるつもり、……その覚悟で新調するのよ。たっぷりと、そしてスマートに見える様に仕立てて欲しい」

七十六キロの体重を椅子にあずけて、モーニカ夫人は呼吸を荒くしているのです。身長一メートル六十五センチの理想的体重は、五十八キロ五百グラム、という計算を知っているモーニカ夫人にとって、十七キロ五百グラムの重量が悩みの種。でも、そのおかげで、私の方には多くの縫物が頂けるわけでもありません。

一抱えも布地を持参しておりながら、彼女ば一向にデザイン・ブックなど取り上げもしないで、饒舌を楽しむのです。

「人間で、変われば変わるものだって、エンニョ（彼女の夫）が驚いているのだけれどね……あんだ、シルバーノのこと聞いた？ ……聞いてないの……彼氏、あの妾宅売ったのよ。勿論、女は追い出してさ……（リングダ失踪が、其の様に知れ渡っているのかとたまげている私の表情などには、ちつとも気付かないで）今は専ら牧場の拡張に情熱を燃やしているそうよ。余程、応えたのね。ドーナ・スエリーに死なれたことが……だ

けど、憎らしいじゃないの、エンニヨがいうことだったら、"せいぜい長生きして欲しいってさ。妻に死んでしまわれたら、男達は、かりそめの情事も出来なくなるものらしいからって……生きてるうちこそ、夫の誠実は欲しいわね。天国から夫の誠実を見おろしている妻なんて、滑稽じゃない？ そうそう、シルバーノは此の頃種牛の購入に大童なんだって……日系のY氏の持ち牛、ネロレとかいう牛、それに負けない牛を手に入れるつもりらしい。

マトグロッソの牧場には日系の牧夫も養成しているらしいわ。彼は余程日系人好みなのね」

ああ、何としたことでありましょう。"貴女が若い頃、シルバーノを愛した心にも似て今は私も彼を愛し始めました。"などと、スエリー夫人の霊に告白をしたりした私。リンダ失踪の真因を知った時、彼はどの様な反応を見せるだろうと、秘かな期待を抱いて、シルバーノの訪れを待ち侘びていた私。身の程もわきまえず、甘つちよろい感傷に浸っていた愚かさはどうでしょう。

したたか鞭を喰っても跳ねることも出来ない駄馬そのままに、見事に隆起したモーニカ夫人の胸廻りを黙々と私は測っていたのでありました。

モーニカ夫人を送り出した表戸を閉めるやいなや、私は寢室に駆け込みました。荒々しくボタンをはずすと、着ていた物を一枚一枚かなぐり捨てました。く(ゝ)じ(ゝ)く(ゝ)じ(ゝ)

とじている心の皮を引剥いてやりたくて……………

鏡の中の全裸像を、眼が痛くなるまで凝視しておりました。道具立の極めて貧相な頭部を支えるには余りにも力の漲った胴体の哀れさ、おかしさ……………細い眼は涙を堰き止める術も知らず、こぼしほうだいの涙は塩からく唇を濡らし、胸から腹部へ流れ落ちました。私はのろのろと箆笥の中から洗い晒しの下着を取り出して、泣いている胴体をくるんでやりました。いたわってやらねば、あまりにもいたましい自分の胴体を、長くは鏡面に曝らしておけませんでした。

季節の幕開けをモーニカ夫人がしに来て以来、冬物が続々持ち込まれ、私は昼も夜も、ミシンにしがみついている目が続きました。働くこと！！ 働くこと！！ 私の様な女には、それ以外に救いはないのだ。と働きまくりました。夜更けの壁に大きな自分の影をふと見た刹那、心が鳥肌立つ思いがすることもありました。店を持ちたい、資金が欲しい、凄じい執念がその黒い影の中で歯をむいているのを見た思いでした。

スエリー夫人の死をきっかけに、百八十度の方向転換を遂げたシルバーノ。すたすたと歩き去る男の逞しい後姿に、指をくわえてはおれない。と、まるで愛人に置去られた女の心になって、一人で力みかえっている自分を私はいたわらねばなりませんでした。

そうした私のかたわれを、時間は嘲笑うように飛び去って行きました。

四月の中頃、思いがけなくシルバーノが訪ねて参りました。四五日前にも訪れた事のある家に、今日もやって来た人間の様は無造作さで、例の如く彼の農場産の乳製品や肉の腸詰めなどのほかに、三十ばかりの柿の実を、机の上に並べました。戸惑い乱れている私の心など、解する筈もないシルバーノは、柿の贈り物に対する私の感動を、待ち受けている様でした。照りを与える柿の色は、古里の秋の色です。グツと、こみ上げるものがあつて、あと一分でも、母屋の老夫婦が見えるのが後れていたら、私は涙をこぼしてしまったことでしょう。彼を無視しよう、否、仕事の面で仮想ライバルとして張り合うつもりだった私は消え去り、彼の出現に感動している私だけが危げに佇っております。老夫婦の出現は何か私を立ち直らせる厳しさがありました。「あなたの親代わりになって、此の男に談判するつもりですよ」お婆さんは、私をきめつける様に言いました。それは、手ぐすねひいて、男の出現を待ち構えていた人間の声音でありました。

リンダに鋏を投げた私の事を、老夫婦は怖ろしげに物語った後で、「此の女の親から何も依頼されたのではないが、たかが男と女の情事々日本の女が命を落とすかも知れないのを儂等はだまつて見ている訳にはいかない。

あの場合、幸にも軽傷だったからよかったもの（その声の下で、私は殺人未遂罪を思い浮かべ、私が投げた鋏が、万一、リンダに突き刺さっていたら!? …と身の毛のよだつ思いでお

りました）兎に角、こんな粗末な家に住まわせてあるのも、自分等としては心外なことです。以前の妾達と同様に、立派な妾宅でも構えてやったらどうですか」

老夫婦は、私をすっかりシルバーノの妾と見なしておられたのでありました。

弁解しようにも、俄には話しの筋道がたちませんし、心の中にうしろめたいものもありまして、私は頭を垂れているばかりでした。

シルバーノは、彼の肉体障害の事まで告げて、私との関係を弁明しましたが、老夫婦はどう納得されたか、私には憶測出来ませんでした。

負傷以来彼の性的障害は、私の想像どおりでした。リンダは、彼の衰退を、新しく関係の出来た女の為だと、私に訴えておりましたが……。早急に妾宅を解消して、病妻の許に帰らなかつたのは、愚劣な男の見栄でもあつたが、リンダの肉体を試験台にして、あらゆる方法を講じて、男の性を取り戻したい執念からでもあつた）、と行って、あの怪我以来の愚劣極まる生活シルバーノは告白しました。リンダ如き女にまで見切りをつけられた人間だと、今日まで思っていた。とも申しました。

私は再び、リンダに投げつけた鋏の事に心を捕えられていて、シルバーノの言葉は、うわのそらに聞いていました。若しあの時、リンダに傷を負わせていたら……。道夫のように、巧みに遁走する才覚を持たない私は、今頃、どうなっていただろう

……殺意が無かった申し開きも得しない私。

妻の屍を搔き抱いて悶絶せんばかりに悲嘆している泥だらけのシルバーノを見たあの厳粛な感動が、リンダの毒気に責め立てられ、爆発した行為であったことを、誰が証明してくれたらう……。病院のベッドで覚醒した時（鉄を投げてみても、相手に傷一つ負わせ得なかった意気地なし）、と、私は自分の不甲斐なさを罵ったのだったが、あれは何とした浅慮であったことかと、嘲罵の追い打ちをかけておりました。

× × × × ×

今はもう、何としてでも店を持ち、此の家を出て行きたいと思いました。

資金調達の難関が厳然と立ちはだかっている前で、一枚一枚煉瓦を積み重ねていく様な焦躁を、たった一人で耐えていく日々が二ヶ月余り続きましたある日、頼母子講の話しを聞いたのでした。そのグループの中にモーニカ夫人の名を聞きました私は、最早、前後左右を顧る余裕もありませんでした。それこそ猪突をはばからず彼女の門をたたきました。

九月七日の独立記念日を期して新たに始まる講員の一人に加えてもらえる返事をモーニカ夫人から頂きました夜、私はとうとう一睡もすることが出来ませんでした。それはもう嬉し過ぎて不安でさえありました。眠ってしまったら、夢の様に、消えてしまいはしないかと、理由のない不安に駆られるのでした。

一口百コントス。定員二十名、信用第一。そうしたグループ

の人達に個人としての信用など私には皆無でした。私が日本人である事への信頼の上に、モーニカ夫人の保証があり、その後にはシルバーノの好意があったからでしょう。然し、何といいましても、此のグループの中では、私はあくまで異分子でありました。だが、この異分子に対して、グループの人々は揃って寛容でした。愛してさえくれました。異邦人であり、経済的無力である上に、私の容貌が極めてまずい点が、誇り高い婦人連を一層寛大にしたものの様でしたが、私は敢て屈辱を感じることはありませんでした。

それどころか、其の負い目を、ある意味で利用しようとする狡猾な心さえ、襲深い心底にたたみ込んでいる私でした。

まがりなりにも一つの店を手に入れ、それから高級婦人服店へ発展させる手段であれば、芥子粒位の誇や良心などに拘泥するのこそ莫迦げた事だと、私は自分を唆しかけました。私は二口加入を申し込みました。一口は初回に落とし、他の一口は最終回に落とし貰いたい願いも容れられました。第一回目に落ちる二千コントスは小店を開ける主な資金になるでしょう。そのかわり、次の月から一口分に対する二分の利子と合わせて、二百二十コントスの掛金を用意しなければなりません。全く、私にとっては背水の陣。然し、最終回に落ちる金高は二千三百八十コントスになるのですから、初回分の利子は、取り戻せる訳になります。

軍資金の目途がつき、本格的家探しを始めました。良い場所

に手頃な家を見つける事は、資金調達以上に困難なことでありました。頼母子講のグループの夫人達（大半は縫物の客）も我が事のように熱心な助勢をくれました。ある日の午後しらせを得るや、私は嵐の中を飛び出して行きました。

目当ての家に着きました時、私はずぶ濡れになっていました。其の家は、小さな事務所でした。帖簿棚を背に見事に禿げた半黒色の中年男が事務を執っておりまして。十月一ぱいで移転すると、其の男は言い、セントロの二階に新しい事務所を構えろと言つて、私の開店事務を引き受けて上げるなど、商魂逞しいものでした。

土砂降りの街路を家主の家へ急ぎました。雨がやむのを待てど、其の男はしきりに止めましたが、私は一刻の裕余もおけない心持ちでした。以前に二日後れたばかりに、うつつつけの店が手に入りそこねた残念さが身に泌みていたものですから…。

“保証人さえあれば”と家主の返事を得ました時の嬉しさと申しましたら…その家の電話を借りてモーニカ夫人に出て頂きました。"そう、それはよかった、私から話して上げるから"とモーニカ夫人の声が響いて来た受話器を、金ぶちの目鏡を光らせている老人に渡します時、恥かしいくらい私の手が戦っておりまして。老人の表情が忽ち和やかになり幾度も合点をされるのを見て、ふっと、体が軽くなった様に思いました。

宙を歩く心持ちで雨に洗われた街路を急ぎました。いくら走つて帰ったところで、此の喜びをわかつ人もありませんのに

……：帰りに道で母屋のお婆さんに呼びとめられて、手紙を受け取りました。母からの手紙でした。もう蔑通分も返事を出していないので開封するのに多少の抵抗がありました。

母からの手紙は、道夫の父親の死報でした。警察のお尋ね者になり果てた息子のことが、父親の死期を早めたのだろうと、またしても、親心の哀しさを訴えてありました。若し道夫に出会ったらその事を話して、彼がまっとうな人間になるように、由美から説いて上げなさい。

（お母さん、何を言ってるんです。少女小説の文句ではあるまいし……：私は、私は、地球の表面に、たった一人で、道を探し歩いているのに……：こんな手紙はもう結構です！！） 私は母の手紙を机の上に投げ出しました。でも、封筒の字が、雨に濡れてにじんでいるのが見えると、それは、まるで、母の涙ににじんだものででもあるかの様に、私を悲しませました。

（お母さん、漸く道らしい道へ踏み出そうとしているのです。私の後髪を引張らないでください。折角見出した道の前や横で、チラチラ赤旗を振らないでください。）と呟やきながら。

夕飯を炊くことも忘れて、いましたら、くしゃみも三つも四つも続けざまに出て、俄かに肌寒くなりました。

珍しく風邪でもつかんだかと思いましたが、翌日は常より早く起きて、ジャンジャン、ミシンを踏みました。風邪なんかで休んではいられません店がもてるのです。その朝、ミシンの音は特に快適でした。

四月以来、月に一度は殆ど習慣の様に、乳製品や肉の腸詰めなどを届けに、シルバーノが顔を見せました。最近、彼はマトグロッソの牧場に就動している日系青年を称讃するのが楽しくてやって来る様子にさえ見えるのでした。「実に役にたつ男だね、計算は早くて正確だし、第一勤勉なんだ。

牛以外のものにまるきり興味を持たない男だよ。一人前の牧夫になるまでは州境の橋を渡らない、と言って、いくら誘っても町に出て来ようとはしない」どうしたはずみでか、其の朝はシルバーノが話した言葉がいきいきと耳底に蘇ってきました。それは、仕事に燃やす意欲の旺盛さと言う点で、私はシルバーノと張り合っているつもりでいましたし、不足ながら資金の目処もつき、借家の方も契約済みと言う心の弾みが、シルバーノの声を呼び戻したものでありましようか……。

ところが、どうしたきっかけからだったか、マリオ・モリオカと名乗っているその青年と、道夫のイメージが、ぴったりと重なってしまい、その愕きの為ミシンを踏むのも忘れて、意味もなくあたりを見回わしました。

“昨夜、母の手紙を読んだ故だ”と、声に出して呟やいてみましても、イメージが合致した瞬間の驚愕は少しも薄らぎませんでした。

他人にうまく取り入る如才なさや、計算の才能は、正しく日本時代の道夫です。遊びに興味を示さない、州境の橋を渡って町に出て来ようとしなない、ということとは？ ……昔時の彼とは

まるで反対なのだが、それこそ世間を怖れる人間の常道として、事件以後、道夫が身に付けた、作為的な態度と言えないだろうか。今時、青年が遊ぶ事を好まない、牛だけに親しむ、ということ、何か犯罪の臭いさえするではないか………莫迦な！

そんな事があってはたまらない。ブラジルは広い、殺人未遂犯の男が、命をかけて遁走するのに、選りに選って、元妻であった女が身を寄せた男の許に潜伏するなんて………それは怖ろしい事だ。そんな悪魔的なことがある筈はない。ブラジルの日系青年は何十万といるだろうに、其の中のたった一人の道夫と、マリオ・モリオカとが同一人物ではあるまいか、などと愚にもつかぬ事を考えた自分を嗤（わら）ってみるのでしたが、一度立ち騒いだ心の波は執拗に私を揺り動かして静かにしてはくれませんでした。

想いますに、これは、私の自己防衛の本能が敏感に、ある危険を感じていたのでありましょう。

虫の知らせなどと言う語を私は好みませんが、それから数日後、シルバーノに示された一葉の写真を見ました瞬間の驚愕は、ミシンを踏むのも忘却し動揺したあの朝の私と何か直結するものがあつたと思うのであります。

その日シルバーノが訪ねて参りました刻、私はもう夕飯を済ませて夜の仕事にかかっておりました。常でない夜の訪れに私は何かドキッと致しましたが、

「ユミに頼みたいことがあるのだが」と、ポエーラをかぶった髪

を搔き上げるシルバーノを見上げますと、反射的に、私は洗面所へのカーテンを開いて彼に手を洗うように促したのであります。

荒々しく手を洗い、ついでに顔も洗う男の肩の動きを、私は新しいタオルを手に見守っております。妙な心持ちでした。

夜になって彼が立ち寄るのも最初の事なら、頼みがあるなどと、彼から聞こうとは、思いもよらない事でした。私にしてみても手をお洗いになったら、なんて、何故女くさいそぶりをしたものであります。……。

頼み―求愛―再婚話し、と明確な思念が突走ったのではありませんでしたが、彼が言った頼みを、その様を感度で私が受け取ったことは疑えません。常時愛に飢えている凡俗な女の心のさもしさは……：食に飢えてる人間が夢の中に御馳走を並べると言う賤しさではありませんか。

顔を拭いたタオルを私に戻すや、シルバーノはポケットから一葉の写真を取り出しました。

「此の青年だよ……：写真ざらいの男でね、油断してる処を盗み撮りしたんだ」

ああ！やっぱりマリオ・モリオカは道夫だったのです。二目と見る必要もなく、道夫に間違いありません。私は目さきが真暗、否、白濁した様で、二度見直おすことも出来ませんでした。悪魔の手で操られていたことを実証した、そんな恐怖でした。

牧夫然としていて、日本時代の道夫とは別人の様子なのに、

それが道夫であることは、二目でわかりました。その確認は何に依ったものか、私は容赦なく自問しました。“視覚でよりも触覚でおぼえている男”たしかにそうです。此の確認のしかたは私を此の上もなく、みじめにしました。

私は顔を上げることも出来ませんでした。見おろしているシルバーノの視線をヒリヒリと感じながら……聞きましたことには、

「その青年と一度会ってもらいたんだ」

何としたことでありましょう……。ガンガンと鳴り立てる耳に「マリオを、妻の姪になるイベツチの聳に、と、僕は思っているのだが……。兩人に話す前に、ユミにその青年を観てもらいたいんだ。素晴らしい青年だが、何か、未だ解しかねる点もあるのでね……イベツチ（姪の名）は、あんな体だしね。（スエリー夫人の姪、イベツチは幼時小児麻痺で、びっこをひいているので、婚期をおくらせていた。スエリー夫人は、殊のほかイベツチを哀れがっていたので、信頼出来る日系青年の嫁にしてやりたい）其の様な事をシルバーノは語りました。

その人物鑑定を、私に頼みに来たのでありました。

「今度の日曜日はどうだろうか？ ユミだって、一度くらいブラジルー長い橋を渡ってみなさい。日本人の技師もあの橋を架けるのに助力を惜まなかったんだよ。僕の自慢の牛も見てもらいたい」

いつまでも顔を上げない私を、す（、）か（、）す（、）ようにしてマトグロツソの牧場行きを頼むのです。早く平静を顔を扮飾して、彼の頼みを拒否しようと焦っている私の肩を、シルバーノの掌がかかるくたたきました。「ユミ、承知してくれたんだね」大きな掌から、そう伝わってきましても、私には返答の言葉がありませんでした。

曖昧に黙している私には慣れているシルバーノのことです。

「日曜の朝八時頃、迎えにくるから」と言い「まだ夕飯前なんだよ」と、笑顔を振り向けて立ち去るのを、私はちら、と見ただけでした。

（彼を呼びとめたい、彼の大きな胸に、今夜だけでも自分をあずけてしまいたい）。今にも声をかけそうな激しい衝動を抑制するために、私は椅子から立ちあがりませんでした。常の時の様に、戸口まで見送りでもしようものなら、始末におえない結果を招きそうでしたから……。

その夜は、最早、縫物どころではありませんでした。ペンを執ると、パッパッパッと、文字を書き並べました。拳をかためて、母の胸をめった打ちでもするように……。

お母さん、蔑通分かのお返事を認めます。

その都度、お返事を差し上げませんでした理由は、私の心の中が常に未整理であったからです。私の思念、動静を素直に申し上げるには、私の生活（主に心）は、あまりに複雑で、それを手紙に書けるまでに整理する努力を放棄して生き続けて来

ました。

そして、今夜こそ、私の心は複雑混迷の最たるものです。整理し折目正しい手紙を書けない状態の極点に達した今、ものすごく、お母さんに、もの申したくなりました。

お母さん、道夫の居所が判明しました。この日曜には、道夫と私は会うことになりました。知人の姪の婿に選ばれそうなんです、道夫が……私の知人（ブラジル人で大農牧場主）は、道夫の人物調べの役を私に押しつけました。

何故ことわらなかつたかつて？ …お母さん………ああ、ことわらなかつた訳を、誤謬なく母さんに伝えるには、三日三晩くらい書き綴らねばならないでしょう。いや、書けば書く程誤謬を重ね、母さんの納得のいく手紙にはならないでしょう。

兎に角道夫が働いているマトグロッソ州の牧場へ私が出かけて行くことは確実です。

殺人未遂犯といっても、その罪を犯した刹那の厳しい悔と反省を経た人であるならば、未だ、罪を犯したことの無い人間よりも、真実の意味では立派であると言えるかも知れませぬね、お母さん、道夫が若し、その様な人間になつている様子でしたら………私は、彼と初対面のように偽装するかも知れませぬ。勿論、知人の姪婿として合格点を私はつけるでしょう。

何故かと申しますと、それは、道夫と私を、或る作為を以って結びつけ、そして離別させ、而も今、再び彼にまみえさそうと（困難極まる使令さえおびて）謀る悪魔を、私は笑殺してやりた

いのです。それから又、殺人未遂の動機も卑怯、一片の悔もなく、逃げのびる事ばかりに怯々としている道夫で若しあるとするなならば、私は彼の犯罪を指摘し、彼の父親の死亡も告げるでしょう、勿論死を早めた理由も……都合のよいことには私と道夫以外には通じない日本語があります。話しの途中で、道夫は遁走を企てる必要はないのです。知人達は、花婿テストの会話とばかり受取って笑顔を向けておりましょうから……然し道夫は私に依って罪の発覚することを怖れるにちがひありません。

時効を迎えるまで潜伏し逃げようと焦躁している道夫は、お母さん、何をたくらむでしょう？ ……彼は私の存在がブラジル一の恐怖となるかも知れません。勢い、私を消そうと考えないことでもありますまい。彼の事です完全犯罪の手段を見出すにさして苦心をうしますまい。

仮令ば、牧場を去る私達を、親切ぶって、橋のあたりまで送つて来るかも知れません。(牧場は橋から百キロくらいの距離、道夫は、牧場用のジープの運転ぐらい出来る筈ですから)勿論、無免許でしょうけど……。二キロ五百メートルの橋の真中で自動車をとめ、私達はP河の流れをしばし眺めることになるでしょう(道夫に期するものがあれば)橋のてすりに背をもたせ、道夫は彼のかたわらに私を招くでしょう。私の知人は心得顔に私達に近寄っては来ますまい。私達の話しはもつれるでしょう。道夫は私に近い方の腕を何気ない様子で、私の腰をあずけてい

る場所まで（欄を這って来ます。その手が、不意に私の後髪を摘み、彼の足が私の足を僅かに前に払うだけで……お母さん、どうなると思いますか……柔道二段の道夫でしょ。かつては彼に抱き寄せられたことのある私の推理です。彼の体の動きを、知っている私の肉体がそう言うこともあり得ると、私にささやくのです。

犯罪以後の彼に一片の悔もなく、極力裁かれる事を拒否する男である場合、”全く不意でした。ハツとした時は、もんどりうって……と、彼の指にからんだ二筋三筋の私の髪の毛を示して、蒼惶として見せるだけで、完全犯罪は成し終わるのですよ、お母さん。

二度と会わない筈の男と、最もあり得ない情況のもとで再会する事すらあるのですから私の推理は、あながち荒唐無形のものでもありません。

それでも、お母さん、私は行かない訳には参りません。

大体、私はいつか自分の意志に依って動いたことがありますでしょうか。

お母さんが私を産まれたとき、私の意志が参加致しましたでしょうか。

そしてお母さんや妹に或る迷惑をかけたこの分細工な顔型を持つことも……

ユミと名乗ることや、学校へ進学すること、そして結婚してブラジルへ渡ることにも、私の意志は常に起ち後ればかりで、

それ等の事に責任をもつ程の参加はしていないように思いますが、けれども……………。

道夫と会うことも、頼むと言う知人が一方的に、当然、私が行ってやるものだと決めてかかったのです。

そしてお母さん、万一州境の橋の上からP河の濁流に私が転落することになりますならば、……………真実悪魔は存在し、私はその悪魔に完敗させられた事になります。何故かなら、来月は、私は待望の店を開ける運びになっております。これは、厳然と、私の意志一つで運んだものですから、悪魔としては、そうした私を見逃がさなかった結果でありましょうから……………ああ、今夜、私は異常です。

お母さん、大変無茶を申し上げました。悪魔のことなど、全くでたらめです。でも、道夫と会いに行くのは真実であります。

お母さん、異国の土壌は大層気むずかしいものです。その上、赤道直下の国でしょ……………発育不良の苗は、なかなか育ちにくいものです。生れついた苗床にいてさえ困りものの道夫と私を、異国へ移植した責任は、道夫の両親もお母さんあなたも回避なさる訳にはいかないと存じます。道夫の方はいざ知らず、私は氣息えんえんとしながらも、今は僅かな新芽をふこうと致してはおりますが……………。

書き終えた手紙を、たん念にちぎりました。雪を掻き集めた様にふんわりと、机の上に積み上げました。それを摘んでは、ひ

らひらと落としてみました。

心という、やっかいな代物を、此の様にちぎり、大空へ向って吹き飛ばすことが出来るならば……………。

心が真新しくなったら……………。

夜更の机上に紙吹雪を舞わせながら、開店の手続きと同時に、帰化手続きもしたらどうだろうか……………などと考えていましたら、ふと、松の植木をいきなり抜き捨てた朝のことが浮んできました。

耳をすますと、夜更けの風がモンステラの葉っぱに、何かささやいている気配が伝わって参りました。

〔完〕



ブラジルに住む日本人が、祖国の敗戦をどう受けとったか。私たちがだけが知る特殊な心情なのだ。それは書き残しておくに足るものだと思う。

本誌は、この特集を毎号続け、後に一本にまとめたい。会員は、どしどし投稿して頂きたい。

## 特集

### 私の終戦

#### 第三回

##### 執筆者

終戦当時の思い出……織田 糸音  
私と終戦前後……瀬古 義信  
終戦前後……細川 末葉  
私の終戦……田端 月詩  
私の終戦……長谷川清水  
私と敗戦……中村 建男

(順不同)



終戦当時の思い出

一九四五年八月十五日が終戦記念日だが、その年は混乱に暮れ、バストスでは翌四六年に入ってから不祥事が続出し、約一年間動揺を続けたように記憶する。私は今日もバストスに住んでいるが廿年前のその当時もやはりバストスに居て勝敗論の激争の渦に巻きこまれ感情の対立の中でつぶさに精神的十字架を負うたことを後悔して居るものである。

私は産業組合に勤めていた関係上怪文書を手に狂喜して居る人達をたしなめ、必死の思いで「時局の正しい認識」を絶叫したが、今にして見れば何程の効果もなかった事を思い非力な吾々の献身ぐらいではどうにもならなかった当時の異常な空気の重圧を思うと身ぶるいを禁じ得ないのである。

終戦直後バストスも御多聞に洩れず大動揺を起し、流言蜚語が飛ぶので組合幹部諸氏の発意で取り敢えず軽挙妄動を慎しむよう回章を発したり、事務所内で論争を禁じたり、十月五日頃終戦御詔勅と外務省からの伝達文の到着まで不祥事の起きないように全力を注いだ。御承知のように外務省伝達文はスイス国アルゼンチン国など經由して五十余日も遅れてブラジルに到着したが、これを一見すればたかぶっている感情も余程おさまるものと考えていたが我々の考慮は極めて甘いものだということが判った。折角謄写版で印刷し各家庭に行き渡るように用意し、

日を決めて各区長の参集を乞い配布を依頼したが、その場の空気は頗る悪かった。

故畑中仙次郎ブラ拓支配人が終戦詔勅を奉読しますという仕方なしに静肅になったが、すぐ後で野次が飛ぶやら騒ぐやら実に見苦しかった。

十一月に入って畑中、山中弘両氏の誘いで私の外もう一名加わり時局懇談会という看板を掲げ各区を巡回する計画を立てて実行して見たが、どこでも日本敗戦を口にするのを潔しとしない空気が濃厚で中々おとなしく聞いてくれず、何程の効果もなかったように思う。

それでも勇気を奮い起こして時局認識運動をつづけたので終戦の年はどうやら事なく暮れた。しかし臣道連盟とか愛国同志会とか血盟団というような強硬団体が乱立し、次第にシツチオ方面にも手をのばし容易ならぬ計画をしているような情報も入り、まごまごしていると天誅の名のもとに殺傷される恐れも加って来たようである。四六年二月頃からしきりと怪文書が廻り国賊天誅などの脅迫文も舞いこみ、扉にべったり大書してあったりした。吾々負け組がいかにか切齒扼腕しても、じりじり押されて残念ながら立往生の形であったが、そういう嶮しい中で山中弘氏は強硬派中の理智的な大物と個人論争を展開し相当な効果をあげたが、そのために裏切者として復讐される羽目になった犠牲者も出たり山中氏自身も狙撃される騒ぎとなった。

裏切者のレッテルを貼られてH氏は二月の下旬蒞によつたま  
まの繭諸共大養蚕小屋に放火されたが、之れが皮切りとなつて、  
それから一週間目（三月四日夜）にバストス産業組合専務理事  
溝部幾太氏が自宅で狙撃されて絶命した。

溝部氏暗殺が契機となつて聖市やパ線各地でテロ事件が頻発  
したが、バストスでは山中氏が中心となり、有志青年が奮起し  
て自警団を組織し、昼夜旅行者を検問して不審人物を摘発した  
ので一部非難もあつたが幸いに不祥事件は暫く跡を断つた。七  
月十五日夜怪漢に狙われた山中氏は自宅で胸部に一弾を受けた  
が幸いにして生命は助つた。七月末にはC区の梶原という返り  
認識者がやはり報復的に狙撃されたが運よく怪我もしなかつた。  
これによつて自警団は再び活動を起したが何時とはなし解散し  
てしまつたようである。

以上終戦当時の記録としては粗雑ではあるが不祥事の多かつ  
たバストスの大動揺の中で私一人が手柄顔をするような事件も  
記録もない。私は日本敗戦を宣伝する腰抜けとしてうとんぜら  
れ、四五年十一月シツチオに引き籠つて養蚕に専心し鬱勃たる  
気宇もメシの前には一たまりもなく無言居士とならざるを得な  
かつた。悪夢の様な想い出であるが狙撃もされず今日迄生き長  
らえて、今日もえら相な顔をしてバストス週報に粗雑な文章を  
書き続ける事の出来るのも二十年前挺身して奮斗した枚の目こ  
ぼしであるのかも知れない。私はあまり耄碌しない内にと  
思ひ終戦当時の記録をまとめつもりで六六年九月廿三日起稿六七

年四月十五日二十八回で完結した記録をもっているが、今回はざっとした記述に止める。

瀬古 義信

私と終戦前後

終戦といえば、既に二〇年も過ぎてしまっている二昔前のことで、赤茶色に褪せた写真を見るようでハツキリしない。私が、パラナ州の入口近いインガ駅（現在はアンジラ駅）から十六料はなれているタクララ植民地へ入植したのは忘れもしない太平洋戦争が、真珠湾攻撃によって火蓋が切られた年である。

幸先よし、と思わなかった人はいなかったであろう。連合国側に立ったブラジルからみれば、日本は敵国、それでも、幸当地方では官憲からの圧迫もなく、不自由といえば、勝手に出歩くことができないという位のもので、日常の生活には変化はなかった。

だが、無智をカマラーダ連中が、もう今では忘れかけていることば『キンタコルーナ』とか「ブラジルは我々のもの、お前らの命令はきかない。」などと言われて、カーツとしたこともたびたびあった。「お前らは偉そうにいつても、隣の町へも自由に行けないじゃないか」にはグツと詰ってしまった。入植当時の

ことだから、猫の手も借りたい忙しきなのに「賃金が安いから出る」とか何とか、国縁をつけて、馬鹿にされたものだった。

戦争だからといって、無暗に我々をいじめる必要はないじゃないか、国と国との関係で、そんな風にはなったものの、ブラジルが、何も日本に恨みがある訳でもあるまい。

君等は、我々日本人を敵だというが、それなら、何も敵の家で働き、敵と同じ釜の飯を喰う必要はあるまい。私は君等を敵とは思っていない。こうして、毎日一緒に生産に努力しているではないか。君等は、現在日本人は手も足も出ないから、いじめてもよい位に思っているらしいが、法を犯さなければ、旅行も自由だし、正しい事は、戦争の有る無しにかかわらず正しいのだ。

と云つても、一向に受けつけない。

結局は、旅行ができるか、出来ないが、“バム・ポスター”ということに話は落着いた。だが、そうは言ったものの、旅行できるかどうか、自信はないが、実行してみせなければならぬ破目に陥った。

当時、イビポランは、セルタノポリスの管内で、日本人の少ない郡内なので、日本人には理解が浅いと思ったので、私はロンドリーナ市まで出て、あそをおそるデレガード・レジヨナルの扉を叩き、「マリリア在の兄に逢いに行きたい。」という理由で、簡単にサルバ・コンヅツタを手に入れた時は、涙が出る程うれしかったものだ。

これで、一番手に負えないカメラダをギャフンといわせられる。彼の鼻先に、この紙片をひらひらさせてやれる。と思うと、胸が高鳴ったのも、二〇年昔のことである。

入植して日の浅い私は、市に知人はなかった。この附近に永く住んでいるという愛知県人の〇氏は、父と同年輩であり、隣県切人だという親しみから、ちよいちよい、市に出て帰ると、新しいニュースを持ってきてくれた。父は、キング附録の世界地図を拵げて、日本軍の占領地を赤鉛筆で染めていくのが、楽しみの一つだったらしい。〇氏が、シンガポール陥落のニュースを持って来られ、母が、遠い畑にまで知らせに来た。

父は、「今日はめでたい日だから、お休みにするよう」に「といったことも思い出されるのである。

終戦は八月一五日というが、実は、我々には、その頃、何も解っていないかったのである。この日は、当国の祭日で、ポンポン花火が揚っていた。

「戦勝視いの花火だ、しかも、日本の」と、誰かが言い出して老人たちを信じさせてしまった。まさか、敵国の戦勝に花火を揚げるバカもいないと思うので、私は、二三の友人と軽拳を慎まなければならぬ。本当のことは何も、我々には解っていないのだからと言いつたものだった。

市に出かけたという人があると、直ぐ、ニュースをききに行ったものである。終戦の年もおしせまった頃、友人が来て、どうもイカンというが……と問うと、「どの新聞もラジオも、日本

が負けたといっている。これはヒヨットすると本当に負けているかも知れん』という。それに対して、

『ウーン』とうなづいたのは父だった。軍人で、日露戦争に出て弾丸の洗礼を受けた人が、そう簡単に負けたことを肯定してよいものか、と子である私でさえ思ったものだ。

父は、今まで、赤く染めてきた地図を出して、「こんなに広く散らばっている。もし、どこかで、大きな救援が必要になった場合、一方が手薄になることを考えると、いくら人間の多い日本といえども、手の施しようがないかも知れない。戦争も事業と同じことだ。調子に乗って伸ばしたものの、しめくくりがでないとしたら、失敗だ。』事業に失敗した父の戦争勝負の割り出し方だった。

知人の中には、「負けているかも知れん」といった父を、非国民のようにいった人もあった。その人は、金が儲かる、ということだけで養蚕を始めた。連合軍のパラシュートに用いられるから高値であるとしたら、敵性産業だ、といって養蚕を許さなかつた父、おかげで、養蚕家にはどんどん罐で手に入った石油が手に入らず、いつも、長い長い配給の列に立たされたものだった。

熱血児のT君が、養蚕をはじめかけた名士に対し、再三注意したがきき入れられなかつたので、桑苗を抜いたことが問題化し、永くクリチーバの獄につながれた。こんな時期に養蚕に転向していった人々を私は苦々しく見守っていた。

「勝った勝った」といいさえすれば、愛国者で、養蚕でもうけた金で、秘密に古い円札をどんどん買い集め、コルシヨンの下で温めていたM氏、何処で聞いてきたのか、在伯同胞の総引き揚げ、南洋の占領地の売り出し、しかも、「円での売り出しだから「円」の手持ちのない人は後まわし、と身勝手な宣伝に酔っていたM氏も、勝った、負けたの嵐のおさまらないうちに一生の幕を閉じてしまったが、それはM氏にとって幸であったかも知れない。

現在は故人となったM氏も亡父もあの世で、当時のことを語りあった。

村のパトロモニアに買物に行ったら、

「B二九が、宮城に爆弾をおとして いったそうですよ。」  
と、店主の野々村さんが、日本の敗戦を予想するように言った。  
アリアンサへ病気の診察を受けに行って、親友の黒田君のところへ泊ったら、

「アメリカはえらいもんだな、行くと行くと行ってるし、攻めるといって攻めている。日本は次々と占領地を放棄して、今沖縄を攻められているじゃありませんか、日本は危いぜ……。」

今思い出しても、おかしい程、私は戦争ニュースに関心を持っていなかった。日本軍がどこへ行った、どこを占領したとというような記憶は持っていなかった。しかし、日本は無謀な戦争をしているということはおぼろげながら判っていた。

たしか、八月七日だったと思うが、パトロモニアへ行つたところ、野々村さんが、「おい細川さん、広島と長崎へ不思議な爆弾が落とされた、という日本からのニュースですよ。それに、ソ連が越境してきたそうです。」

と緊張した顔をして話された。

私は、瞬間胸がふるえて、聞きたくないような気持ちで返事もできず、すぐ家へ飛んで帰つてきた。家内には何も言わなかったが、戦況はいよいよ不利になったことが判つた。

八月十六日の朝、第三アリアンサに用事があつて出かけ、パトロモニアに立ち寄ると、五、六人の人が集まっている。

「おい細川さん、日本は敗けたよ。」

陛下の重大報送が昨日あつたよ。」

それを聞くなり、私は何も言えず馬にまたがったままで、原始林の中の道を第三アリアンサへ、日本の将来を思い続けながら行つた。

第三アリアンサへ着くと、そこでも、みな仕事を休んで集まっている。

海軍々人の可知君など、

「日本の海軍は、肉を切らせて骨を切るんだ。アメリカ海軍を近海に引き寄せ、一網打尽に打ちとる。」

と、なかなか強気なところをみせている。聞いた私も、敗けた泣きごとより、勝つと言う事の方が耳ざわりがよい。第二アリ

アンサへ行つた。

中村さんという、後に臣道連盟の幹部になった人の家へ立ち寄つたところ、家内中限を泣きはらしている。

そして、日本は戦争に敗けたといつて嘆き悲しんでいる。言わなければよいのに、私は可知君の言葉の受け売りをして慰めて帰つてきた。

#### 四

八月二〇日頃だつたと思う。私は用事があつてパトロモニアの店へ行つた。勿論労働着のまま、後藤さんの家に寄つて、カフェーを飲んでいると、表の方が急に騒々しい。ちよつと覗いてみると、兵隊が来ているじゃないか。「これはいけない。帰つた方がいい」と、組合へ寄つて大急ぎで仕事を済ませ、走るようにして、家の方へ歩き出した。すると、後の方から馬で走つてくる人がある。

振りかえつてみると、それは兵隊であつた。

「エスぺーラ！」

馬よりおりて、劍着鉄砲を向け、あとへ従いて来いという。仕方なく従いていくと、飯塚さんの店の倉庫の中へ放りこまれてしまった。

倉庫の中には、六〇家族の村民中家長の二〇人あまりが、着のみ着のままの姿で、ぶち込まれており、兵隊の見張りがついている。

「これは、どうしたことか」と聞くこともできない。夕方になつ

て、並木さんのカミニヨンで、私達は、ペレーラ・バレットの町に送られた。

町の入口で降ろされ、一番小さい私が先頭で市内を一周し、警察の留置場にぶちこまれた。町内を引きまわされたが、さすがに日本人は誰も戸を開けて見ている人はいなかった。

何でも、日本人と伯人との日本敗戦議論から、市内が大騒ぎになり、びっくりした警察署長が「ペレーラ・バレット市に革命起こる。」

と打電したのだそうだ。そこで、アラサツーバ市の軍隊が急拠やってきたところ、市内は平穩なので、職責上、密告されていた日本人が狩り出され、斯くはぶち込まれたのであった。さあ、村民はびっくり、仕事も手につかない。こつそり町へ集まって相談、何だかんだで、十日あまり放り込まれたままだった。

## 五

戻ってきたら、なお大変だった。

サンパウロ方面から流れこんできた日本大勝利のニュースである。村の中は、勝った勝ったといっているが、誰も確信があるわけではなく、従って仕事を真面目になっしてする者はない。

折柄、養蚕景気の絶頂で、村民一同決議の結果「乾繭所」を村の中央に建てることとなり、農閑期利用の共同作業を行なった。毎晩共同炊事で吞み上げ、揚句は景気のよい勝ちニュースに酔わされたのであった。当時、私は体の調子が悪く、息子を代理として出していた。

十月末、私の恩師であるアラサツバの勝田ドクターが急性心臓病で逝去された。私は取るものも取りあえずかけつけた。

先生は熱烈な愛国者で、部屋の奥に備えつけたラジオで、日本のニュースを聴いていた。日本の敗戦を知り、邦人間にその事を知らせ、軽挙妄動せぬよう勧告して歩いた。これが仇となって、敗戦宣伝屋と侮辱計れ、非難攻撃された。そこへ持病の高血圧が亢進して、心痛と不眠と昂奮の結果斃れてしまったのであった。

「肺尖カタル（敗戦語る）」などとの嘲笑をうけ、その葬式にかけつけたのは、ほんの数名に過ぎなかった。

私は、そこに集まった人達から、詳しく日本の敗戦についての説明をきき、深く認識したのであった。

## 六

私は村へ帰って、さつそく飛行便でもって、日本の弟（かつてはブラジルに居た）に手紙を出し、その返事を待った。おお、その返事の文字は正しく弟の字であり、日本敗戦をはつきりと記してきた。続いて、日本力行会の永田会長より書信が届き、「在伯力行会員に告ぐ」と日本の実状が記されてあった。私は、来訪の村民たちに、この手紙類をみせ、「私は、これによって、日本敗戦を肯定する」と言った。

村の親分だった並木和男氏は、実情を知りたいと思って、アラサツバへ行ったが判らない。リンスへ行っても一向判らない。よし、サンパウロまで行ったら、いよいよ判らなくなった。

と行って帰ってきた。併し私同様、郷里から続々と来た手紙で、みな真相を知ったので、私達の村は、その後割合平静で、争いは起こらなかった。

当時、私は八家族ばかりの日本人養蚕コロノを入れ、歩合で働いて貰っていた。その人々は全部勝ち組であったが、その中で、特にNという爺さんが強硬であった。家の入口に「敗戦語るべからず」の木札をさげておき、私を目の上の瘤としていた。彼は養蚕で大分金をため、錦衣帰郷を唯一の希望としていたのである。

これが隣の人なら、一切知らぬ存ぜぬで、何も話さないこともできようが、コロノとパトロンの関係にある私達たちは、それもできないので、全く嫌な思いを毎日くりかえしていた。

ペレーラ・バレットなど強硬派が多かったので、敗戦派は締め出しをくい、余儀なくサンパウロ方面へ移る人が多かった。

私は病気が快方に向かず、不眠症となって、うつうつとした日が続いていた。

## 七

私は養蚕の方はコロノにまかせ、専ら牧場の方をやり、牛飼いに主力を注いでいた。「兎に角、戦争は終わった。今後は子弟の教育に全力を注ぐべきである」と全村民に呼びかけ、青年会には夜、処女会には日曜日朝から終日、日本語教育に専心した。そして、未来の植民地の中心となるべき青年に望みを持って、勝負問題は眼中におかないことにした。

その頃、私の長男をサンパウロの学校に出していた。長男を訪ねかたがたサンパウロ郊外を視察して帰った。その時、丁度青年男女の雄弁大会が行なわれていた。私はその席上で、

「サンパウロの二世学生の間では、一世は頼むに足りない。我々は我々の力で、今後のコロナを盛りたてて行かねばならぬ、と言っていた。」

と、暗に、日本の敗戦は明らかなのに、何故地方の一世のわからずやは何時まで勝った勝ったと騒いでいるのか、となじったのである。ところが、それを聴いていた副会長のM氏が、酒の勢を駆って、

「細川君、君は非国民である。若い青年を前にして、日本敗戦を語る奴があるか」

と踊りかかってきた。さいわい仲に立つ人があつて抱き止めたので怪我はなかったが、一時会場は騒然となった。やつと青年会長を叱りつけ、型通り雄弁大会を終わったのであった。

この年、即ち乾繭所を建てた年、繭の値段はがた落ちで、村民の中にも動揺する者が多く、次々とムダンサする人が増えていった。

私たちの村及びその周囲の原始林は、その前後よりフォルマ・パストが流行して、二、三年間に殆ど伐りつくされ、カツポエイラが方々にできており、バイヤノ達がさかんに入りこんでいた。従って乾燥期になると、何処とも知れず、火が出ると大変である。この野火が猛威をふるうので牧場を開いている私たち

は大恐慌である。消し止めても、消しとめても野火は押し寄せてくる。その為私も子供たちまでノイローゼ気味になってしまった。

## 八

戦争問題と野火と私の病氣と、この三つ巴の中で、私は一九四七年末とうとう結核になり寝ついてしまった。そして、二年の家庭療養の末、ようやく勝ち負け話が下火になりかけた一九四九年、やむなくカンポスジョルドンの療養所へ入院した。

私が入院して一年半後、私の家族も又、私の後を追うようにカンポスジョルドンに移って来て、人参作りをしつつ再起を計ったわけである。

今静かにあの頃の事を思い返してみると、私にとって、全く悪夢のような数年間であった。

(終り)

田端 月詩

## 私の終戦

カンポスの人参作り地帯、三〇数家族で、日語教育をはじめることについて、教師を誰にするか、となった時、J氏は、嘗て自分の子供達の教師であった私の名を挙げた。そして、村の代表として、当時聖市の北角ピリツバに居た私を迎えに来られた

のである。

七月二六日、出産直前の妻の死、八月六日アメリカ空軍は広島市に原爆投下、その翌々日ソ連が対日宣戦布告、九日には私の故郷長崎に原爆が落とされたのであった。

J氏は小庵に一泊、翌八月一五日フレゲジアドオ墓地にまわり、妻の墓にまいり、都心に出るオニブスを待っていた。そこへ、馬車に人参その他を投げ積みし、馭者はうつむいたままやって来る。J氏は、「ありやIさんだ。泣いているじゃないか」と走り出て馬の鼻づらを捉えた。

「あ……Jさんに先生……」Iさんが声をあげて泣き出した。

「終戦……日本が無条件降伏をしたんですよ。」

と叫ぶIさんに、私は目礼してJさんの後を追った。

私は心の中で、“来るべき時が来た、しかし、無条件云々は信じられない”

と思った。

ピンダ駅でカンポス・ジョルドン行きの電鉄に乗りかえ、人参作りの部落の小駅で下車した時は五時半でうす暗く寒かった。

「まあ！ 先生！」八年前の教え子たちは既にモツサになっていた。しかし童女のように私にすがりついてよろこんだ。

夕食のあと、三〇数人の人々が集まってサーラを囲んでいた。「無条件降伏だ。いや違う、勝っているんだ。負けるもんか、馬鹿！」

喧々ごうごうである。私は部屋で服装をととのえてサーラに出

た。Jさんの紹介のあと着席もせず、「終戦は事実だが、勝敗は判らない。皆さんは日本に宣戦を布告したブラジル国民の親であるから、勝敗を論ずべきではない。お互の子弟のため、今後策を講ずべきだ。」という意味の発言をして着席した。

一同は、なるほどそうだと、一ぺんに和解してくれた。私は教師になることを承諾したわけではなく、一人前になったJさんの子供達に逢いたくて、また、私が顔を出すことでJさんの顔もたつだろうと考え、やって来たのであった。しかし、私が開口一ばん言った言葉は、みんなの胸を打つものがあつたとみて、

「是非お願いします。」と言われ、断わり切れない状態に陥ってしまった。

翌日ピンダまで一緒に来たJさんは、産組から二コント五百の現金を引き出してきて「モダンサ賃です」と、無理に私のポケットに押しこんだのであった。

家に帰った時、既に暗かった。十九才の長女が、「今晚、西方さんの宅で戦勝祝いの打ち合わせがあるとアビーズがございました」という。夕食のあと風呂に入ってから出かけたので私が一番しんがりであった。家長たちは費用の拠出法や会場などについて相談の最中であった。誰かが、

「あんた一番あとから来たんだ。何か一こと言いなさい。それとも不賛成ですか」と長老のKさんがいった。

「不賛成ではありませんが、僕は、お祝いより先にせねばならぬ

「ことがありはしないか、と考えているんです」といった。すると、

「お祝いより先に何をするのか」、と何人かが喰ってかかった。こそで私は、

「戦争中の圧迫はありましたが、僕をはじめとして皆さんも無事に働いてきました。このように弾の下をくぐることなく暮らしただのですから、敵弾や原爆でけしとんだ方々の霊を慰め、且つは終戦により尊い人命が失われなくなったことに感謝を捧げるのが、我々の義務ではないか、お祝いより先に慰霊祭をするべきだと思います。」といった。

「その通りだ。よく解った。」言ったのは憲兵だったKさんで、他の人々も、私の主張に拍手で賛意を表してくれた。

慰霊祭はミツサである。ミツサであれば当局に願い出ても許可が得られる。また、これまで鉄道を隔ててピリツバ在の日本人三〇数家族が二つに割れたままである。「これを一丸とする機会は、この慰霊祭より外にない。」と、私は言葉を続けたのであった。

十八人の家長達は、みんな「その通りだ」と賛成してくれた。そこで日本人会に関係のない若手家長や青年が慰霊祭挙行の一環となり、ピリツバ在住日本人全家族に参加の運動を起こすことになった。その期日を九月二日とし、祭場を西岡家の大納屋に予定した。翌十七日の朝、西岡家を訪れて、納屋使用の許可を得、その足で、昨夜選出された若手家長と青年を召集し、二

班に分けて、ミツサへの参加運動を起こした。

十九日の日曜夜、大江氏宅に両班が集合して、抛金の決算を試してみると、二十コントス前後の資金が集まっていた。そこで、中央警察への交渉と祭壇作りを決め、二十日から、はじめた。私は祭壇作りを受け持ち、能弁でカルタージのある大江君、中野君が警察へ交渉に行った。

すぐに仏式の慰霊祭挙行許可がおりたので、私と外二人がタイパスの奥に住む布教師の免許を持つ河野氏を導師として頼みに行き快諾を得た。

九月二日、祭壇の正面中央に大位牌をかざり、戦没将兵之靈位と大書され、紅白の鏡餅が左右におかれた。

午前八時の開祭までに、老若男女、二百名が参集した。警察からは二名の警兵が派遣され、やってきた。午前十一時慰霊祭が終り、会食となった。夕方近く日本人会創立総会が宣言され、役員選挙が行なわれ、私は学務委員に挙げられた。そして、適当な教師の見当らぬ時は、学務委員が教師を兼任するということに決められたので、翌日、カンポスのJさん宛、教師としての赴任を断わる手紙を出した。

創立総会を終わり、一同が散会したあと、残ったのが、慰霊祭の運動員たちであった。この顔ぶれを残すことにして、「ほがらか倶楽部」と名づけ、月一回集まって村を明朗な方向に導く方法などを考えることにした。

こうしてこの年が終わり、終戦最初の正月を迎えた。聖市近

郊蔬菜連合組合ピリツバ支部の人々は、元日にN君の宅で新年宴会を催した。

会食中ピンガが出廻ると、それに酔ったか、日本で刑事巡査をしていたとかいうH氏が「あの戦争が、もう一年続いてくれたら……」と言った。

私は「馬鹿野郎、口を慎め……」と怒鳴った。「貴様がバタタで儲けたからといって、後一年続いたら、とは言語道断、この恥知らず奴！」と私はかんかん腹を立てた。私の怒りを知った二、三の者が、「この国賊、なぐれ！」といきまき出したので、私は、それを押し止めた。私は年配者に対して、怒りを放つたことをあとで後悔し、深く浅慮のほどを愧じたのであった。

その頃、大勝した日本の軍艦が、大挙リオ・デ・ジャネイロに入港したとの噂が邦人間に伝わった。私はサンパウロ市の中心中矢商店前で、マリリア方面から出て来た旧友U君とばったり出会った。十三年振りの会合なのでなつかしく、万平食堂に食事をさそった。彼は「あんたサンパウロに住んでいるんだから知っているだろう。」と、軍艦来航のことを切り出した。「あんな、それで出て来たんか」と私は啞然とした。とにかく今は市中の雲行きが悪い、足止めにもなれば大変だから、すぐ帰省しなさいと勧めた。「じゃ、日本は敗戦したのか」と訝かしげに言う。「勝敗は時期が来れば判るよ。」といってルス駅までUを見送った。そして、その頃バストスで殺人事件がありこれを見つかけにあちらこちらで殺人があり、当局は臣連狩りに躍起

となった。

わが「ほがらか倶楽部」の大江君が、「八月には佐藤念腹先生の最高弟吉川耕花先生がスザノ入りをされる。

彼に俳句の指導をして貰おう」と、これは、「ほがらか倶楽部」の解散を惜しんで、「ピリツバ俳句会」と名称を替えようという案であった。

そうと決まれば、八月まで待つてはおれぬ、三月半ば、私の家で俳句会を開いた。八月、耕花氏の来入があり、その指導よろしきを得て、今日俳句作家となり得たものに大江圭流、栗原義人堂、西方耕一步、中野抱葉（現在パラナ住）を挙げ得る。

ピリツバ俳句会誕生の翌年、格好な教師が見つかり、サツペ葺き土壁の校舎を後生林中に建で、日語校を開いた。しかし半年経ぬうちに司直の手にあげられた。当局には学務委員が私であることまで判っていたのであるから、余程内情に精通した者の密告であったに違いない。その日は偶々教師が休んで町に出ていたので、学童達に何の憂き目もみせなかつたのは不幸中の幸であった。

私と教師外二名が警察に連行され国事犯の罪に問われた。私は一切の責任をとって服罪を申し出たが、状情酌量の故か投獄をまぬがれた。ところが一年後裁判所から、この件につき呼び出しがあった。私は弁護士と伴に出頭して、「より良きブラジル人を育成する為日本語で修身教育を施した」ということを証言した。その後官報に「日の出の国の言葉でブラジルの修身教育

を施したのであるから、何ら罪過に該当しない」と発表され、何のどがめも蒙らなくて済んだ。

以上が終戦直後に私の体験したことである。今思い出を要約して綴ってみたが、感慨また深いものがある。

○ ○ ○

長谷川 清水

## 私の終戦

八月十五日・水曜日・◎・二、三、四番の苗代に籾種蒔き付け、七分蒔（一メートルカドロードに、○・七リットルの割合で籾を蒔く）にする。

籾種は白根を長く出し過ぎていると思う程に伸びている。◎・田より田へ通す水の管を板で作らす。◎・灌水用通路の堀製作業。

これは私の農業日誌。昭和二十年八月十五日の覚え書である。終戦当日の私の心境を書いたものが残っていないかと調べて見たが見当らない。

僅に農業日誌のこの三項目がメモ形式で記されているのみである。続けてその前の目と次の日の分を記して見ると当日前後の私の行動が明かになる。

八月十四日・曇・◎・午前九時、無風。空模様が悪くなってきたので気忙しくなった。一人では苗床の仕事もなかなか捗らない。朝の中に苗床の表土をならす道具と灌漑吸入管開閉蓋を作る。その後苗床の土ならしに掛かり午後三時頃より種をおろし初める。種は二分以上白根を出して居た。最初で分量が解らない為、三通りに別け種子の分量を分けて見た。一米四方に一立（リットル）弱と七分リットルと半リットルに別ける。灰を掛けるとよいとのこと、これを実行した。今日種下ろししたのを一番苗代とす。◎・E区、根おこし（ラミー）午後二時迄にて終る。

大トンバドル。◎・C区の一部の大草をトンバさせる。◎・薪割。運搬中カロツサ。◎・ハツカ小屋のケタ外し。鶏小屋の閉じ込み作り。夜は鶏を捕える。

八月十六日・◎・初めに蒔いた粃種が白く芽を出し始めた。

◎・A区、水田予定地にアラドを通す。◎・灌水本道の作業。◎・排水管作り。。

この日誌を読んで見ると私はこの「運命の目」とも言うべき悲しみの日に、ものに憑れたように働いていて外部と接触の無ったことが解る。なぜそうであったかと云うと、私のこの耕作地はM市から十三キロメートルの地点に拡がるS耕地内にある三百アルケール余りの大盆地の一角六十アルケールであって、地形の上からも一つの低位僻地であるが、それよりも大きな原因はその頃の私の精神状態にあったと思う。私は長い間、M市

で商売をしていたのであったが、太平洋戦が激しくなった頃から農家相手の営業面も相次ぐ農村不況の嵐に巻添えをくって全く手も足も出せなくなり遂に失意状態で隠遁に似た、そんな心境で穀の中に閉じ籠り、M市での社交圏からも外れた生活をしてきたことである。市生活から離れ盆地の百姓生活に入っただけの私の視野が狭ばまるのは当然のことであるが、それ以上に私は意識して交友をも断っていたのである。

それが敵国人扱いを受けていた日本人同志間の諜報的状況にまで耳を塞いでいたことになったのである。と云っても全々日本人と会っていなかったと云うのではない。六十アルケールスの雑作農経営には日本人の歩合作者も六家族居ったし、又、この盆地全体には相当の数の日本人がいて日会のような会も組織されていいた。

俄か百姓で耕作知識の無かった私は蒔き付けから収穫までの事を近隣の農家へ教そわりに出掛けたので時々同胞とは会っていた。ところが此処の日本人の殆どが、のちに認識派と云われた人達からは離れた存在であり縁遠い集団であったことも、この終戦日のあとさきの戦況を知らずにつんぼ棧敷で過ごした私の生活につながりがあったのだと云えないこともないのである。そうであるから勝組に属していたか負け組（認識派）に属していたかと問われれば、勝組部落の一人と云えるのである。

八月二十日・◎・テルトリアーノ氏の特別依頼により棉花出荷の為半日過ぎまでカミニョンを待つ。◎・A区のアラド掛け

を済ます。堆肥運搬。◎・C区、グラード。トマテ本立用添木取り。この日の日誌で記憶をたどると私は廿日にM市に出て処用の都合でMホテルに宿ったことを思い出す。市宿りはしない方針でいた私も余りに多い混乱ニュースに驚いて彼方此方と引廻され時間が過ぎて帰れなかったのではなく悲しさと腹立しさで何かその真相を掴みたい気持一っぱいで泊ったのである。

私はこの国家の喪と陛下の御心痛と全国民の恨悩を五日目まで知らずにいたことに日本人としてのひげ目を感じ肩身のせまい思いでみんなの話をむさぼるように聞き、二、三の知人の家を訪ねて話を聞いたが聴けばきく程何一つ納得いく話はなかった。誰も疑心暗鬼でものを云っていたのである。Aは云った。「ポツダム宣言を受諾された陛下の御詔勅をPシャーカラのYの家に聴きに行ったがよくききとれなかった。どう考えたって無条件降伏が信じられるか戦争は海軍ばかりじゃない末だ陸軍は健在だ。本土誘導作戦と云う手も残っているんだ。」Bは話す「広島に相当大きな新型爆弾を落されたことは否定しないが無条件降伏をする筈がない。」

金切り声で怒鳴られながら。そう云えないこともないがと同意することによって体内の怒りを押えようとした私の頭も初めて終戦の虚脱感に襲われだし、Bの焦燥を隠せない歪んだ顔をしばらく見返していた。Sバールの片隅での状景が浮んでくる。

農日誌八月十四日の中にある「ハッカ小屋のケタ外し」というのは、二年前からオルテロンを植え収穫した、ボイラーや、蒸

溜用槽など据えてあった小屋を取り壊し新しく作る水田の灌水用作業のことである。

精神的には隠遁生活を続けていた私の耳にも、主力艦激突戦以後戦線が後退し始めた頃から敵性産業と云う名で呼ばれだした養蚕とオルテロン作りは、白い眼で見られ強迫されているという噂が入っていないでもなかったが、その迫害行為が現実として私の耕作地から約二キロメートル離れたB植民地のF氏の蚕屋が某日早朝に焼けたことを報らされ次いでA市街地へ通ずる州道添いにある蚕屋十ヶ所程次ぎつぎと灰になって終ったことを雇人達から聞かされた時は何んとも云えない気持になった。そしてこの次はオルテロン作りが襲われると注告を受けたが、ハツカ油と蚕糸が敵性産物で、綿花はどうかのと真剣に考えた時もあった。次の年からオルテロン作りを廢めたのであるが、それはこのようなもやもやの気持の他に未経験者の不手際と長い旱魃に加えて資金の上の赤字決算が因であったのである。その頃奥地コロニアの一部では敵性産業と呼ばれたハツカや養蚕ばかりでなく棉作の人も、伯人から敵国人視された。こうした時、私はラミー畑を掘り起こし棉の蒔付面積を増し水田を作って働くことに専念していた。その忙しい雑農の私の家にもその頃から時々、此の盆地を通っている裏路を抜けて隣接植民地へ戦況や特殊情報を携えて往復した人達が立寄ってお茶を呑み飯を食べていった。

ミゾリー艦上遙かに日本軍艦旗翻めく(九月十六日サントス

トリブナツト紙掲載）と日本字の註の入った艦上調印の写真を買ったCは「おいこのミズリー号の写真をどう見る砲身は布を被っているではないか米国が本当に勝って見るこんなふうにおとなしく出るもんか」と説明した。

その年も押迫る頃になると敗戦ニュースが多くなった一方では勝組の団結も強まった。明けて二十一年二月十一日の紀元節の日M市の某所で戦勝視が行われた。（これは後に先輩から聞いた）此の頃より認識運動と云う運動がM市にも組織化され官憲と協力してこれに努めたのがかえって反感を抱かせ、両者の対立は益々激しくなり臣道連盟が出来、特攻隊が組まれて認識者の指導者と見られた者がねらわれだしたのである。

三月四日にB市で行動派の初弾が人命を奪ったのをきっかけに各地で天誅の名で、大事件が拡り三月中頃、M市のブラコンと呼ばれていた街の下水の集る疎林に囲まれた低地で位牌事件があった。勝組から見たM市の敗組の俗名が白木の位牌に書かれ葬式されたとのことで、その写真を私は元在郷軍人会の事務所で見たことがある。四月十七日にはM市の三ヶ所で某氏ら三人がピストルの弾に見舞れ負傷した。ところが六月に入って日本人街と呼ばれているS街の某時計店の主人が襲われた。皇室に対する不遜の言葉を使ったのが因であるとのこと。首班をM市にもつ前衛隊が生まれたのはその事件よりずっと後のことである。

私もM市に住んで居ったなこらばどちらにも友人をもってい

たので、どちらかの指導部に加わっていたかも知れないが、そのどちらからも外されていたことは、両極端の感情の谷間に閉息状態を続け、S僻村で鋏をひき馬の尻を迫っていたからであろう。

(六・二九)

中村 建男

## 私と敗戦

八月に入ってから開戦以来口に出すこともできなかつた敗北の不安は沖縄の陥落、ロシアの参戦、広島、長崎の原爆と、次から次へ、悲しいニュースに、いよいよ大詰に來た感じが強く、唯、神風の奇蹟を祈るばかりであつた。

しかし、それも束の間、十五日遂に終戦、連合国勝利のサイレンは長々と夜空に響いて、いつまでも耳から離れなかつた。私は来るものが來たと思ひながらも、唯呆然として、これからの日本はどうなっていくのか、私達は……、と暗い予想に眠ることも出来ず転々として朝を迎えた。

二三日過ぎてからだつたと思う、四五人の友人が緊張した暗い顔をして、私の家へやつてきた。長い沈黙の後、「中村さん、貴方は、この終戦をどう思いますか」と話を切り出した。私は、私の知っている範囲の話をした。丁度その頃、日本は高周波爆

弾とか、誘導作戦とかで、勝利を得ているということがまことしやかに流布されていて、私も初めは迷わされた。だが、既にこの国の公式発表や新聞報道により素人目にも日本敗戦は動かし難い事実であった。

そのことを卒直に述べ、これから我々は、どんな境遇におかれるか、どんな扱いをこの国から受けるか、わからない。お互いに、日本人として恥しくない行動だけは取りたいものと話した。

再び沈黙にもどった。私は、この沈黙は、敗戦の悲しみによるものと解していた。と、突然一人が侮蔑的な口調で「おれは負けたとは思わぬ」と言い、目くぼせして、みんなと引きあげてしまった。

これが、その後繰りひろげられた狂信的な悲劇の前奏曲とはつゆしらなかつた。その頃、私は、日本の敗戦を口にするのが、非国民呼ばわりされる原因になるとは知らなかつたので、なぜ侮蔑されたのか理解できなかつた。しかし、その後、いやという程、それを知らされた。

昼のひととき、二世のネルソン君と終戦の話をしていて。そこへ奥地より来た五、六人の組合員に「日本はどうなっているのでしょうか」とたずねられ、終戦当時の模様を話したところ、ここでも、彼らは挨拶もせず席をたつていった。

奥地に帰ったその組合員たちは、何かの集会席で、「ネルソンは二世だから仕方ないとしても、中村の奴は一世のくせにけしからぬ」と非難された、ということの後で聞かされた。

そして奥地には戦勝論が拡がり、ついに秘密結社、臣道連盟が誕生した。彼ら連盟員は、戦勝を唱え、愛国者を気取って、敗戦の事実を知る者を非国民とか国賊とか呼びすてていた。

この言葉は、日本人として身にこたえた。そして、彼らの言動に対して対抗的になっていく自分をどうすることもできなかった。

ある時、当時敗戦新聞として悪名高きパウリスタ新聞を読んでいると、そこへ愛国者気取りの一組合員が来て、「そんな新聞を読むのを止めろ」といった。私は前後を忘れ、机を叩いて議論したことを憶い出す。

臣道連盟のことは、ブラジル人社会でも問題となり、日本人は異様な目で見られるようになった。私は、それが排日の空気をかますのではないかということを恐れた。

知りあいのドイツ人は「敗けたのを勝ったとって、なぜ日本人は殺しあいをやっているのか」と不思議そうに尋ねた。私は「自分にもわからない」と答えたが、非常に恥かしかつたことを思い出す。

私は、それまで、日本・日本人を外から観て批判するということをしらなかったが、この敗戦を契機として、日本及び日本人を客観的に見るようになった。

それは、まるで悪夢に似た思い出であるが、あれから二〇年、流れていく時が、すべてを解決してくれた。

（「私の終戦」おわり）

# 詩

## 訪問

狩海 亘

“ラ（・）リ（・）ラ（・）君はいませんか

ラ（・）リ（・）ラ（・）君は・・・”

戸の向うでうごめく気配

“いないよ 誰もいませんよ”

“あなたは誰 あなたは

ラ（・）リ（・）ラ（・）君のおかあさん？”

戸の向うで押殺した笑い声

やがてそれは隙間風の泣き声にかわり

“ラ（・）リ（・）ラ（・）は死んだ

ラ（・）リ（・）ラ（・）はいま海の底

脂ののった刺身を食べてはいけないよ”

“おかあさん あなたは何が言いたいのだ

汚されたあの船のことか？”

“わたしは知らない なあんにも知らないよ

行っておくれ もう息子のことを友達などと言わないでおくれ

”

“ こんばんわ こんばんわ

こちらい（・）さ（・）さ（・）さ（・）君のお宅？

どうかここを開けて下さい”

戸の向う側で目が光る

ぎらぎら光るその光で

ぼくは不意におもいだす

そうだ戸を開けられたらたいへん

おれは殺られてしまう

” おゝ い（・）さ（・）さ（・）さ（・）よ

開けないでくれ

ぼくはただ

美しかったあの頃の記念に

君の写真をもらいにきただけだから”

毛むくじやらの手に握られて

戸の隙間から差しだされた紙片に映っているのは

おゝ なんと

まっ赤な蛇の舌・・・

ゆみみを訪れるのに

ノックはいらない

戸を押しあけて首をつつ込むと

そこはうす暗い洞穴

はるか向うを

なにやら白い

優雅なものがよこぎる

あ、あれは美貌の豚であったか

突当たりと思われるあたりには

赤子の頭のようなものが見える

目をそむけ上を仰ぐと

天井にはしみで描かれた

無数の姿態

生れてはじめて

星空を見る子供のように

ぼくは立ちつくす

## 断層

藤 田 勇

標識は

何処にもない

脆弱の領土

良識深く根をおろした

硝子の中の組織

投影する 不気味

の巢食った象形文字

思考はすでに失せ

眼窩の暗に

地球の孤の定着

## 諧謔

箸と楊子

の占める

空間に

こだわる教祖

## クアレズマの花

可児 三平

クアレズマの花は

楼に似た色と形を持ち

雨にもめげず 夏の日にも負けず

三ヶ月も咲き続ける

時が来れば美しく散る

桜は何故散り急ぐのか

勲章が欲しいのか

生きのびて世の尊が怖いのか

生きることも誇り

クアレズマの花を

国花に すいせんしよう

ペスターナ街

横田 恭平

騒音と轟音

轟めき、澱み、なお揉み合う

満員の電卓、満員の乗合

それらを押しつけて先を急ぐ貨物自動車

わづかな間隙をぬうて

敏捷に乗用車が駆けぬける

ペスターナ街

白日を昏くしている

おもい空、その下に

整然と、汪然と

盈ち、溢れ、流動するもの

思いつめた顔が歩道を歩く

虚ろな顔が、つかれた顔が

不敵な顔が―、

どんよりと光る

この大都会の重圧する現実の中に

かくも渴望にかがやいて生き

ながるゝごとく生きるのか

友よ、頭をあげよう

生きることは

そして飢渴をかんずることは

決して罪ではない

さらに セー寺院のある方角をながめると

そのはるか高まるあたりから

自動車の系列は花やかにまた静謐に

「時」の疾い浸蝕を示しつゝ

湧きでるようにこなたへ

目前の動擾へながれ落ちてくる

そしてそのあたりに  
浮彫のように  
夢幻のように  
白々とセントロ地区の高層建築が重り合う  
その一つ一つの孤絶の気品  
おゝあの高く抜き出た潔癖と沈静こそ  
現代知性の寂寥の精神を表象するか

註、ランジエル・ペスターナ街の電車は先日外されて了った。ペ  
スターナ街はもともともっと変わるだろう、この詩は一九六六年頃  
の風景と思えばよい。

## パイネイラ

吉原 エミリオ

モヂアナ支線のM町  
すでに廃線となったこの駅は  
幾年月の風雨にたえて古くさびれて  
いる  
駅前大きくそびえるパイネイラの  
並木は  
移民史を深く秘めて育ってきた。

その昔・・・

わが同胞は老も若きも共に

大きな希望に胸をふくらませて

この木の下でいこい

その花の色にひかれ

なつかしい母国をしのんだであろう

よろこびも悲しみもふみこえて

開拓の汗を流し血涙をしぼり

明日の夢をつないでたえしのんだ

花は過去を物語るように

五月の夕陽をあびて咲きほこり

私の心に深くせまってくる

あたゝかいこの国に生きる喜び

パイネイラはブラジルの花

永遠に・・・

## 愚の座

芳賀芳郎

ほどよい汗を着て

土にいそしんでいるその時

生も死も迷いも悟りなどの

世臭も無い無色な

人間忘却の座

しあわせの園

小野 政子

しようしやな柵

みはるかす 広い庭

池を廻り

色とりどりの 草花のみだれ

中を逍遥する男女たち

「ここは幸福な人の入る処です」

とつげる受付の少女

終夜 転々として

ねむれぬ 暁け方の

鮮やかな幻覚。

野良犬の独白

永田 泰三

残忍なあいつに俺は捨てられた

俺は毎日うろつきやっと空屋を見つけて泊ったが

あの埃だらけのすみっこではもう休めない

隣の男が棒で俺を追い出して戸の隙間をふさげて

しまった

又 冷たいくさむらで夜露にぬれ

ふるえながら休まなければならぬのか

泥のへばりついた俺の毛皮にはまだ温みはあるが

俺はげっそり痩せ衰えてしまった

それなのに 蚤のやつが残り少ない俺の命を吸お

うとして

情容赦なくなかまをぞろぞろふやしている

俺は最早 きやつらを噛み殺す力もないのだ

俺が死んだら蚤も死ぬのだが

俺は自殺の方法も知らない

やっぱり食物をさがして生きるより他はな

だからと云って 道に落ちているミカンやバナナの

皮だけでは

いくら俺の胃袋でも承知できない

俺は大胆に肉屋の前をうろつき ごみ箱をあさる

きつとどう猛な犬がやってきて強奪してしまう

俺はとても歯向かうことはできない

唯 くやし泣きに鳴いてよろよろ逃げるだけだ

俺は空腹でたまらず とうとう先達て 命がけで  
垣根の外にいたひよこを盗み 藪の中へかけこん  
で食べた

罰が当たったのか どうも頭の中ほどがへんだ  
頭を腐らせるビシエーラ（千匹蛆）がわいてきた  
のかも知れない  
ああ これでいいんだ 死がひとりで近づいて  
きたから

（六七・七・二八）

旭 日

水野 林

おれんぢ色に はるかな山なみを蝕んで  
豊饒の広き土に 日はまたのぼる

たわわな果実は 風吹く闇にあつて  
何時もかわらぬ 日ざしのあらわれを  
わななきつつ 今朝もうたがわず

草木も禽獣も村人も 等しく待った  
村人は 今日木曜日 と言った  
斯く 遙な昔から名付けられていた名を  
初めて口にしながら

未来に在った木曜日を溶かしながら  
歓喜にあかあかとわらう大地を見ながら  
木曜日の騒音の始まりを聞きながら  
惜し気もなく快い陽は  
それら巨大な感激の中で 万物の  
崇拜のまなざしに応える事もなく  
何と手慣れた風に輝きすすむのだ

## 夜 広野

故しれず さげすまれ  
ふみつけられていたのだが  
やがてそれは むっくりと起きた

蒼穹にかわって

もうすべては 星星に占められていた  
天空の明るみに  
地平線がくろく浮きあがり  
風が絡み合いながら野を渡って行く

「なんと気持のよいことだ」

故しれずさげすまれ

ふみつけられていたそれは だれ知らぬ  
広野の夜中 ひとり起っていた

「なんと気持のよいことだ」

次の日もその次の日も

広野にひとり むつくりと起きあがった

## ロマン派

こんなことは

そんなに長く続くものではない

やさしく意地悪なくちびるから

咲きこぼれる声と

さんざめく友と 酒杯と

翳らぬ僕と

こんなことはもうすぐ  
終るにちがいない  
はやく静かな悲しみが  
僕をつつまぬものか  
僕の故郷はそこなのだ

## スザノ詩話会 座談と作品批判

### スザノ 詩話会

日時 一九六七年七月二〇日  
場所 スザノ市、藤田勇(居)  
出席者 大日方寛弼、松平和也  
武本由夫、松山政永、梅崎嘉  
明、横田恭平、芳賀芳郎、可  
児三平、米沢亨、藤田勇

数年以前から、スザノでは、横田  
恭平、大浦文雄などが中心となって  
定期的に「詩話会」を催し、各自  
持ち寄りの作品批評を通して詩の研  
究を続けてきた。今度「コロナ文  
学」第五号投稿の詩稿も、一応会員



### 座 談 と

写真右より松山  
武本、梅崎、大  
日方、松平、横  
田、藤田、芳賀

### 作品批評

同地日系社会  
の行事が重な  
り、大浦、上  
村、八巻、酒  
井などの  
主要メン  
バーが欠  
席した。

しかし聖

市、モ

ジ、イ

タケー

ラ方面

からの参加者も

あって、かなり活気ある会合

写真右より松山、武本、梅崎、大日方、松平、横田、藤田、芳賀

日時 一九六七年七月二〇日

場所 スザノ市、藤田勇（居）

出席者 大日方荒彌、松平和也 武本由夫、松山政永、梅崎嘉明、横田恭平、芳賀芳郎、可児三平、米沢亨、藤田勇

数年以前から、スザノでは、横田恭平、大浦文雄などが中心となって定期的に「詩話会」を催し、各自持ち寄りの作品批評を通して詩の研究を続けてきた。今度「コロニア文学」第五号投稿の詩稿も、一応会員間で検討し、批判の網の目をくぐらせた後に持ち込もうというので、久しぶりに会合を催した。

丁度この日、日本人会役員会など、同地日系社会の行事が重なり、大浦、上村、八巻、酒井などの主要メンバーが欠席した。しかし聖市、モジ、イタケーラ方面からの参加者もあって、かなり活気ある会合になった。

詩作者には理論好きが多いので、顔が揃うと、いきなり、議論がはじまった。横田恭平一流の詩論が、一座を活気づけた。

曰く「詩の思想性に就いて……思想の抒情化」、「リズムへの配慮無用論」「無に立脚する現実把握論」など、どれ一つ取ってみても、悠に、終日終夜の論議に耐える命題が、次々と持ち出され、さかんな応酬が展開された。

次いで、各自持参の作品批評に移り、辛辣ではあるが懇切な批判が交換され、次々と、「コロニア文学」誌上への掲載作品が

決定されていた。こうした方法による、掲載詩作品の選考は、他の韻文分野の選考に対しても、参者となるものと思われた。

当日の主要発言を次に少しく抄録して、その雰囲気を……………。

○

司「では、まず、藤田さんの作品（断層、諧謔）から……………」

横田「“諧謔”はおもしろいな。“断層”これは、むずかしい。

大体、藤田さんの詩は難解の部に属するよ。

抽象的な手法による社会心理を表現したもんだね。

藤田「それだけ解つて貰えれば、作者として文句ないんです。意味でなく、感覚的に把握して貰えれば充分です。

大日方「瞬間の掴み方がおもしろいですね」

横田「精神の断層ね」

“如何にも藤田氏らしい作品ということで、出席者みんなの賛同を得た。

司「では、今度は可児さんのは、どう。（クワレズマの花）」

芳賀「変化のある作品だね」

可児「少し理屈が目立ち過ぎますか」

梅崎「“国花にすいせん”がよく効いていますね」

松平「僕は反対だ。それに引っかけた」

大日方「作者の精神が、よくブラジルに定着してますよ」

松山「そうかなあ、僕は感じないけど……………」

司「意見が対立しましたが、藤田さん、どう思いますか」

藤田「大日方君は、こちらに、まだ新しい方だから、そんな風

に感じるのじゃないかな」

大日方「なるほど、日本では、おもしろく感じるという……、わかりますね」

“はじめの方が少し弱いが、「日本の国花に推薦する」というのはおもしろい、日本人の生き方に対する反撥もあってよい、という批評が出た”

司「次は、横田さんの作品（ペスターナ街）

武本「ランゼルペスターナ街のことを、ペスターナ街と略してもいいですか」

“この質問に対して可否両論が出たが、結局省略してよいということに落ち着いた。作品内容については、誰も文句をつけなかった”

司「では、芳賀氏の（今日への供養霜の朝、愚の座、独り旅）作品に行きましょう”

梅崎「今日への供養”は、どうも短歌的な感じですね」

藤田「この傾向としては、詞が目立ち過ぎるんじゃないかな」

大日方「形にも新しさが少ないね」

横田「愚の座”はいいね」

大日方「ほどよい汗を着て”はいい詞だ」

結局「愚の座」が通過した”

司「吉原エミリオ（作品。パイネーラ）って誰です、新人ですか」

横田「グワイラの鹿毛氏の作品なんだが、僕のところによこしたので、持ってきてみた。」

松山「もつと凝縮が欲しいね」

横田「そう、それで少々弱くなっている。だが、素直さは認められるね」

芳賀「ひろげ過ぎているね」

可児「最後の一節は、蛇足じゃないかな」

横田「そうですね。それで、まだ不足するところもある」

可児「これは、ブラジルの詩から、はいつているのじゃないかな」

松山「僕、モジアナの、この詩のような情景の見られる所にしたことがある。抒情的でいいね」

横田「連想性に乏しいが、これは、作り方によって、もつとい詩になるんだが……」

松山「モジアナに、こんな純情な詩人がいるとは、たのもしいな。楽しくなるよ」

“ 大分ダメが出たが、通過をみた ”

その他梅崎氏の作品が持ち出されたが、作者が投稿を撤回したので批評はみあわされた。

○終了後、藤田氏家人心づくしの珍らしいマンジオカ餅などの饗応があり、雑談に花を咲かせて、散会した。

(武本記)

くくくくくくくくくくくく

お 願 い

各地方の文学グループで、このような文芸懇談会など催された時は、その記事と写真を、本会へ送って頂きたい。

## 評論

美術

### コロニア人の日本美術巡礼

半田 知雄(1)

一九五六年、私は日本美術観賞の旅にでた。ここに当時の日記を再録して、四十年ぶりで接した日本の印象とともに、コロニア人の日本美術観を書きとどめる。

八月一二日(日)

今日はゆつくり休むことにした。妻に第二信を書く。客が二人あつて話に時をすごした。ちよつとひるね。夕方だ。蟬がしきりにないている。油ぜみだろう。いかにも日本の夏だ。むし暑い。

夜、子供たちと、ゆかたがけで駅の近くの商店街を散歩した。夜の店は、店だけの美しさとなつて、みるもたのしい。八百屋には、一メートル近くもあるゴボウが竹でもそろえたようにきちんとならんでいるのがめずらしい。漬物屋の色とりどりの漬物もきれいだつた。

八月一四日(火)

白木屋へロシア美術展をみに行ったところこれはもうすんでしまつて、そのあとは、「ほんもの、にせもの展」であつた。印象にのこつている「ほんもの」は、池の大雅の小品六、七点。ゆつたりとして品のあるもので心があたたまる。

岸田リウ生の若い時の自像、室にガツシリしていて、生一本という感。そのまじめさに頭がさがる。近くにあつたドラムよりもいいと思つた。

古い能面、作者をノートしてこなかつたが、私の想像を少しもうら切らないものだつた。そのわきに近代の福製があつたが、コピーではとてもまねの出来ない気品とシマリがあつた。

午後五時ころ、従弟に案内されて富士見台の彼の家へ行く。日本へきてはじめて田園風景をみた。

でも、この辺の道のせまいこと、やつと自動車一台とおれるだけの幅しかない。稲はもう穂がでたところもある。トウモロコシ、ナスなど道ばたにうわっているが、ぬすまれる心配もないらしい。

ぬすむには、あまりにせまいところかもしれない。

どの家も、まるで同じ敷内のもののように感じられる。土地は一坪千五百円くらいで売りだしたのだという、最近住宅地になつたところ。よくはれた日には富士がみえるので富士見台という名称があるのだそうだ。まだ古い武蔵野のおもかげも残つていて、所々に大きなケヤキがあり、カナカナがないていた。

いとこの家は、外からみると、極く小さく感じるが、(日本の

家はたいがいそうである）間どりがなかなかよくできている。身動きもできないようをとこでも、実にこまかに細工してある。家全体が一つの工芸品だ。隅々まで心づかいが行きとどいているが、おおざっぱなところがないので、どこかたくるしい。前かがみに遠慮して歩いているような日本の生活のつつましさ、きょうくつさを思った。

久しぶりに静かな夜だ。あけはなした部屋のあかりが庭先きの樹木をてらして、一そう落ちついた感。遠雷があつて、ちよつと雨がふつた。

八月一五日（水）

終戦記念日だが、何事もない。

上野の博物館へ行って野間清六さんに会う。野間さんは奈良や京都へ紹介状を書いてくれ、また何をみたらいいか、プログラムをつくつてくれるという。博物館の「優待券」をもらった。これさえあれば、いつでも自由にはいれる。今日は館内を一めぐりして、来ず、どんなものがあるか、下しらべを試してみた。ハニワだけはゆつくりみた。

子供のねんど細工のような幼稚さの中に、古代人のほがらかな心持が感じられる。なにげなくくりぬいた目や口に、なんとも云えないすなおな気持がでている。二メートルもある大きなもの、三〇〜四〇センチくらいな小さなものもある。それから、ごく単純なもの、あるいは武具や衣服をかなりはつきりだしたものなど、いろいろある。

有名な猿もみた。角度をかえてみると、いかにも、ものがなしい動物の表情がせまってくる。また古代の生活をジックリ想像できるまでは行かないが、最初の印象としては上々だ。

つぎに、鎌倉時代の仏像をみる。形式化された実感のともなわないものもあるが、私はここではじめて、仏像が信仰の対象としてきざまれたものであることをさとったようだ。実にいいがある。

あのリアルな学僧の像も（複製だが）なかなかいい。

奈良・平安の各室も、うんといいいものと、あまり感心できないものとある。ここでは、大陸的受感のするものや、平安朝的なおだやかな感のものを見た。

アスカの室では、インドのものがあつて、いろいろ考えさせられた。百済観音の複製があつた。

実にすらつとして丈が高い。九頭身くらいあるだろう。スツキリとした感はわかるが、仏像の本当の味はまだわからない。

ずいぶん色々なものをみたが、近代のところでは高村光太郎の彫刻「手」がいいと思った。

公園は手入れが行きとどかず、ルンペンみたいなものが、たくさんねころんでいた。子供たちがセミとりにあるいている。写生している少年少女の姿も二、三カ所でみた。

八月一七日

今日は松尾啓一さんの案内でブリヂストン美術館と明治神宮外苑の聖徳絵画館へ絵をみに行った。

ブリヂストンでは、安井曾太郎の「バラ」がすばらしかった。すつきりとした中に気品があり、匂うような美しさ、背景の黒がきいているのだろう、どこか少しぎくしゃくした感もあったが。

岸田リウ生の水彩ははじめてだが、子供の像で、クラツシツクな仏像をおもわせる。

クールベーの光のある風景や海景は実売しぶい。

ながくみていたのしめる絵だ。ロダンの彫刻はやや等身大の肖像（シヤバンヌ）がよかてた。面と面のさかいのもり上りによつて内面的な感を出している。作者の名をわすれたが、小品のモノタイプが数十点特別陳列してあった。中世の版画からヒントをえたような、物語り的なテーマのものだったが、色々な線をつかつて、こつた味をだしていた。

聖徳絵画館は、建物はすごく立派で、ピラミッドか、お墓のような感。洋画と日本画とがあつたが、日本画の方にいくらかみるべきものがあつただけで、全体の印象はごく平凡なものであつた。

公園は広々として、このせまい東京によくもこんなに広い場所をとつてくれたものだと感じするが、荒れ放題だ。紙くずがちらかつていること、お金がなくて手入れができないのですね、と連れの人に云つてみたが、なんだか残念でたまらなかつた。

八月二一日（火）

上野へ行つて仏像と能面をみた。

仏像をみた感はこの前とあまり変らないが国宝的なものは、みればみるほどいい。鎌倉時代のものは、どこかギクシヤクシヤしていて、みていて息ぐるしくなることがある。鎌倉にも平安にも、ずいぶん稚拙なものがある。そして必ずしもよくない。

中国唐代の石像の首はすばらしい。中国人のねばり強さによってほりさげられた深さがある。クダラ観音はまだわからない。

能面は人間表情の典型みたいなものだ。どれもこれもすごい。伎楽面の大きさは、どうも日本人のものとは思われない。能面がひきしまったすご味を持っているとすれば、伎楽面は、実におおらかな空想の世界だ。これを見てみると、このせちがらい日本の中でも、のうのうと心が休まる。このすつとんきような顔つきは、ブラジルなら田舎のシリア人のヴェンダのおやじだ。

三時ころから渋谷の東横にでかけて「日本南画展をみた。やはり松尾さんの案内だ。玉石混淆だったが、橋本関雪、谷文晁、富岡鉄斎、その他いいものがあつた。皆一点ずつだった。

鉄斎は洋画のような奥ゆきと量感があるがいわゆる近代的に四角四面な構図ではなく、円味があつて、ゆったりしたものだ。少しかたい感のものであるが、みていると段々いいところかわかってくるといった味わいの深さがある。関雪は気品があり、いい写真だ。ちよつと見た目には鉄斎よりもきれいであるが感が鉄斎より平面的である。蕪村はどこかマンネリズムの感があつて傑作ではなかつた。

八月二八日（火）

午後、白木屋の「明治・大正・昭和名作絵画展」をみた。これは、戦前までが日本洋画の創成期だったということを示したもののようにうけとれた。日本画は別で、いいものもあったが、油絵はうんとおとる。ジャーナリズムの上で有名だった人も、ずいぶんみすばらしいものを残している。

三越へ行って秋の青龍展をみた。

大作ばかりだが、どうも粗雑な感のものが多い。第一絵具の感が悪い。いつもながら、龍子のスケッチに感心した。みていとほしくなってくる。

八月二十九日（水）

今日も終日雨。きのうから本ぶりになってシトシトとふりつづいている。外をあるいているものの九割はプラスチックの長靴だ。短い足に長靴は、いかにもチンミョウだが子供なんか案外かわいい。

午後上野博物館へ行く。傘をあづけるところは、自分でおさめて鍵の役目をもった札をぬきとって、もってはいる。銭湯の下駄箱と同じリクツだ。

いつみても無条件に感心できるものは、薬師如来像（木造彩色、長尾美術館蔵）で一尺五、六寸の座像だ。彩色とはいつでも、色などほとんどみえない。全体が黒ずんで彩色のあとがわずかに残っているだけだ。

目蓋が大きくゆたかで、鼻がうすくて高くあごは小さいが全体の感が大きい。インド的な顔だとおもう。理想化したものに

ちがないが、写実的なしつかりしたところがわかる。あまり様式化されない衣のひだなどに、こまかいニュアンスが感じられる。小さな像ながら実に大きな感だ。大陸的だといえる。

十一面観音（木造彩色、奈良薬師寺蔵、平安時代後期）は木の肌に白っぽい絵具の下ぬりがわずかに残っているだけ。もとの彩色は想像もつかない。形式化のあととはありありとわかるが、体の動きが実にいい。そして重心がよくとれている。（重心のとれていない仏像がずいぶんある。）手が可愛い。ことに胸近くにとどめた左手がなんともいえない美しさだ。この像は正面からだけ見るもので、手も背後からみると甲のところの肉づきが足りない。これは仏像本来の性質によるもので、ヨーロッパ的彫刻とちがった点であって、欠点でもなんでもない。そもそも仏像をうしろへまわってみるなんて、昔の人には想像もつかないことだったろう。

鎌倉時代のものは、力はあるがやはり感がかたく、ちよつときゆうくつだ。

また能面をみた。

あの「小面（こおもて）」の美しさはますますよくなる。甘さはない。しかし、こちらからホレていくと今までわからなかった美しさが段々あらわれてくるという顔。ハンニャもよかった。この前より、もつとすご味が感じられた。

縄文土器の原始性をマッタ・ヴェルジエン（原始林）のツタのからまった大木を想像したら、生きいきとした幻想がえられ

た。おどるハニワの無邪気さも、子供のような原始人を想像してみたら愉快だった。原始人のよろこびとおどり、能面とは全く別なものだ。文化と自然の対照だろうか、文化の尊さ、しかし自然の中には、なにかわれわれの「根元」にふれるものがある。文明人の郷愁といえるかもしれない。

八月三十一日（金）

ちよつと日がさしてきたかと思ったら、一せいに、ジーツと蝉がなきだし、また子供たちが、どこからかわいて出たように、そこにもここにも姿をあらわす。蝉をとって歩くものスケッチをするもの、マメ画家の多いのにはおどろく。しかも誰一人たつてのぞきこんでいるものがない。公国は子供の天国だともう。しかし、立入り禁止の芝生はみじめである。禁札なんかとってしまった方が天国として徹底するだろう。

子供たちがよく遊び、よく学んでいることは、博物館内でも同じことだ。学校の先生につれられて見物にくる生徒たちの外、二人、三人とノートをもって陳列物をながめては何か書きつけている。

今日は日本画をながめた。しかし、今陳列してあるものは、総じて、あまり感心できない。

高山四皓、竹林七賢屏風。狩野元信筆（室町時代）六曲ソウというのだろう。シナ式人物の構図である。まとまっているが筆勢がどこまでいっても同じよう型にはまった感だ。何回もみれば、そのうちいいところを発見するのかもしれないが、どう

もかたくるしい。

松林図屏風、伝土佐光信筆、室町時代。金地に極彩色であるが、木の枝が、クネクネと蛇のように曲っていて、なにか統一のない感。構図もよくないと思う。

山水図屏風、海北友松筆、桃山時代。構図はいい。あっさりした感だが、筆勢に、どこか気ぬけしたようなマンネリズムの感がつきまといっている。

龍虎図屏風、宗雪筆、江戸時代、六曲二ソウ。  
型にはまったもの。

九月一日（土）

昨夜夢をみた、自分はブラジルへ帰っている。

あまり急だったので考えてみると奈良も京都もみていなかったことに気がついた。これではいけない、すぐまた日本へひきかえそうと思う。船ではひまどるから飛行機で行こう。ところがお金がない、シマッタ！ もうだめだとおもう。あんまりはつきりおぼえているので驚いた。自分の個展のために東京にくぎつけにされているので、いらいらしていたからかもしれない。

（続く）

## 映画

### 映画に於ける 倫理の追求

小瀬 毅

#### 映画に於ける 倫理の追求



小 瀬 毅

ある映画批評家がいったように、映画は近代世界において、もつとも普及された民衆芸術であり、それは映画館という一つの場所にもろもろの階層の、しかも、各々異った個性や思想や傾向をもった多くの観賞者を集め、更に一本の映画がもたらす伝達の内容を、各々がった立場でうけとめるといふしかたで浸透する。あるものは、ただ漫然と、何の期待もなく、時間を過ごすだけであるが、あるものはきびしい批判を加え、前向きな結論を出そうとする。映画は単なる娯楽であつて、まとまりのないものであるという説だけは真実でない。

ぼくなども、前向きの姿勢で見ることを心がけていの方だが、

映画はいろいろな意味でよき伴侶である。そんなに映画を見て、どこがそんなにおもしろいかと問われると、すぐには返事もできかねる。映画には、いろいろとおもしろいことがあって、なにか大きき磁力であるかは即座にはわからない。

しかし、それらしい、それらしいものを一応分類してみると、ぼくの場合は、映画に見られる新しい倫理の発見というように、ことも大きな比重をもっている。もともと、これは何も映画に限ったことはない、文学のおもしろさにおいても、ある時代における新しい倫理、それを、意識、無意識のうちに行動に出す人間と、それが如何にうけとられるかという社会や集団の反応などの観察が、大きな魅力になることは否めない。

映画には、映像という映画固有の表現手段があり、文学にはことばという表現方法がある。文学には物語りという方法があり、映画にも物語りが無いわけではないが、文学の物語りとはちがう。

映画は視覚に訴える直接観賞者の感動をよびおこすが、小説などの場合は、まず文字という手段を通じて意味を強要し、そこから感動を挑発するものである、というちがいはあるが、どちらも人間、このわかったようでわからない人間の解明を追求するものであることはまちがいない。

人間は行動する。しかも、人間は倫理に規制されて行動する。人間を描く芸術としての映画、そこには、どうしても倫理のうらづけがある。それを解明するおもしろさともいおうが。

しかし、新しい倫理の追求とは、どうということか、という前に、倫理とはなにか、ということを考えてみよう。これは普通いふところの道德のことであり、人間の行為に対する規範である。人間の行為にかかわるさだめということは、対象が人間であるだけに、きわめて不安定であり、しかも、価値法則に従うところが多い。人間の行為にかかわるとはいうものの、人間行為に関係あるあらゆる事実に一樣にかかわるというのではなく、単なる経験的所与的な事実を、その直接の対象とする。

価値とか規範とかいうものが永遠不変でなく、時と処を越えた普遍性をもったものでもない。人間の道德意識というものは、超歴史的、絶対的なものでなく、時代と民族、社会的、経済的環境の変化につれて、不断に変化していくものである。昨日の道德は、もはや今日の道德ではなく、家族主義時代には、その時代の、封建主義時代には、それぞれの道德があつたことを見てもわかる。

自由平等の市民社会のモラルは、デモクラシー時代のモラルとはまたちがう。また階級によって実践の倫理もちがってくる。戦後における禁欲倫理への不信とか、解放感、民主々義による個の意義、高度消費経済、いつ終わるがわからない戦争に対する不安感、こういったもののすべてに現代の倫理を律する基礎となる、また遊びの哲学という余暇の倫理が必要ともなる。

こういったことを一応あたまにおいての倫理の解明ということになる。

ヴァルダの「幸福」という映画がおもしろかったのは、幸福という概念を平板に見せた上で、幸福の白々しさやもろさをアイロニカルな意味を含ませた倫理の在り方によって示したことであったし、アーサー・ペンの「逃亡地帯」が、あのケネディ大統領暗殺事件のテキサスを背景に、黒人に対する白人の圧迫や、被圧迫者を庇うシエリフ・カルダーが、同地方の野蕃に近い群衆を相手に、独自の倫理を勇敢に護り抜くところに、大きなおもしろさがあった。その倫理は、新しいものではないが、きわめて人道的であることに見るものの共感をよぶのである。そして、松山善三の「六条ゆきやま紬」が、美しいプラスチックとギリシヤ劇をおもわせるシルエットのたくみな構成にもかかわらず、少しも心の琴線にふれえないのは、そこに描き出された人間関係が旧くさい部落共同体と同じく、古い観念から抜け出ないためである。

温泉芸者高峰が、恩のある主家の紬を守って闘うという道程に少しも新しい倫理がのぞかれないというところにある。また、多くの異論を生んだ、「ヴァジニア・ウルフなんかこわくない」という映画は、一般にいうほど難解な映画ではない。リズの名演技などというまえに、アメリカのインテリ社会に見られる一組の大学教授夫婦の変形的な生活様式、その寄異な行動を支える倫理を探るべきであろう。この赤裸々な行動の倫理は、アメリカでなくては見られないものであり、高度な資本主義下にある社会がもたらした錯倒した夫婦生活にある、どろっとした生

臭さを放ちながら、想像妊娠による不毛な情愛の中に生きつづけるかすかな愛情、架空の息子に夫婦の紐帯を繋ぐとの裏の倫理を汲みとるところに、この映画のおもしろさがある。また、ルネ・アリオの「老婆らしからぬ老婆」のよさは、前述の映画と同様に、原作のよさにあることは否定できないが、この映画の主役である老婆の行動には、人を魅する行動の哲学がある。劇作家ベルトルド・ブレヒトの原作といえ、うなずく人もあるうが、これは、作者の祖母をモデルにしたともいわれる。

一生の九分通りを一介の印刷業者の妻として送った女性が、七十才になって夫と死別し一緒に住もうという息子の申し出を断わっていくらかの生活費をもらって一人暮らしを始める。ここではじめて自分の思い通りの生き方をする。それも、ごくこじんまりとした自由さで、食事に赤ブドウ酒を飲んだり、外で食事をとったり、がらの悪い映画館にはいたりする。自分の好きな交友関係をつくり、アカ（社会党员）の靴屋の政談をきいたり、若い給仕女と仲良くなったりする。しかし、偏狭な小市民階級によってとりまかれた周囲は、この老婆の行動を批難し、息子はそのうわさをきいて、生活費の支給を打ち切るとまで騒ぐが、老婆は悠然と自分の行動に終始する。

そして、ある日眠るように死んでしまう。それは、自由になって一年半位のことである。元気はいいが、みなりも風采もあがらない一人の老婆、その細い眼で、何でも見てやろうという好奇心、七十になってやっと起こったこの向求欲、新しい人生の

発見に嬉々として生を送る老婆には老醜の片鱗は見えない。現代の日常性に反するこの老婆の行動を支えるものは、新しい倫理である。健康な思考を踏み台にした倫理である。老婆という古い観念に対置するアンチである。もちろん映画でなくとも演出できることではあるが、カメラを自在に動かしたところに、記録的なおもしろさを加え、老婆の行状が、その背景と共に、生々とした生彩をおびることになる。

性の問題にしても、図式的な画一的な人間や社会からは、新しい性の倫理は生まれえない。現在の宗教や道徳をふみこえた地点においてヒューマンな、しかも新しい哲学をもった性の追求がある。

現代の男女間の性的関係の調整には、家族の形態が密着している。それは社会の習俗によって規制される。この規制は社会の幸福にとって不可欠なものとされているが、社会的慣習が進化していけば、当然新しい習俗の反抗も生ずることになる。

これらの関係は、社会的な現実の推移によって決定されるものである。従って、新しい性の追求は、ときには美しく見えることもあるし、醜く映ることもある。問題は、その追求を支える倫理の在り方にある。それを支えるものは何か、どこから、そういうった要求が起こるかという思索的な追求がある。性という、すぐかおをしめる人がある。愛の確認としての性、本能としての性、個人的性と非個人的性、性は生と同じく探求に価値する命題である。

しかし、かんたんに追えるものではない。ルルーシュの「男と女」では、フランスの一地方都市の、同じ託児所へ各々子供を預けている一人の未亡人と、妻を失った一人の男がふと話し合う機会をもったために、次第に愛しあうようになるという、ありふれたストーリーだが、始めて熱情的に抱きあった女の意識のなかに性的官能を通じて死んだ夫の幻想がうかぶために、女は性不能となる。

二人はそのまま別れることになるが、男は女のあとを追い、愛情とは必ずしも性ばかりでないという暗示によって、物語りはおわるわけであるが、これなど、古い倫理と新しい倫理が重なりあつて、また一つの発展をしているところがおもしろい。

映画演出家が、常に新しい倫理観にたつて、性を追求すること自体には大きな意義がある。

新しい時代は、新たな倫理を要求するということは、一応うなずけるであろうが、ではそういった倫理は、いかなる立場から、どんな問題を自己の対象として、もつものでなければならぬか、というようなことについては、映画はどうかすると、表面的に流れるきらいはある。しかし、より端的にいくつかの規範を示すものであり、それを見ながら、明日の世代の在り方を考えることは、一面たのしいことである。

もちろん行動と一口にいうものの、行動には心理学的、即ち心や意識の動きがあり、また社会学的な集団や、社会関係が、微

視的にあるいは巨視的に繋がるものであるし、これら専門的な問題に口をはさむ立場ではないが、映画作品の中の倫理を追うものにとって、これらのことは、心にとめるべきであろう。現代社会ではさけることのできない、人間の人間性の自己疎外という現象が生ずるが、われわれが持つ人間としての自覚、人格は単なる物質化として扱われるべきでないということの自覚、人間が物に従属するのではなく、すべての人間が、物質、経済、生産力の主体として行動するような社会の構成という契機に、映像を通じて、映画が参画するならば、映画は大きな使命を担うものである。

(一九六七年七月)

## 文学

### 第11回 パウリスタ文学賞

佳作々品読後感

妹尾 三郎

「パウリスタ文学賞」応募作品に限らず、コロニアで書かれる作品の多くは、五十枚前後の短篇である。

「パウリスタ文学賞」応募規定は、短篇小説、四百字詰原稿用紙三十枚以内 ― となっている。

短篇小説とはこういったものだとは規定することは、文学の本質から云って不可ないことだと思うし、いろいろの形式や質の作品が書かれ得る筈だが、無配慮の冗慢さは、何れの場合も、短篇小説として致命的な欠陥であることは言うまでもない。

いま、選ばれたこれ等三篇の作品を読んで、まず感じることは、長篇の素材を無理矢理短篇の形式の中に押し込もうとし、或いは、短い作品の中にやたらに多くのものを書き込もうとしていることである。

短篇小説は、人生のある断面しか捉えることは出来ないと言えば極言になるが、短い枚数の作品のなかに、多くの面を語ろうとすれば、反って、訴えたいと思う、一つの断面すら描くことが出来なくなってしまうのではないだろうか。

これは、コロニアで書かれる小説の一般的な一つの傾向のようである。

五十枚足らずの作品の中に、生い立ちから始まって数十年の年代記、酷いになると、日常生活の何の意味もない会話迄、刻明に書きこまれる。

作者自身は、その一つ一つに、捨て難い愛著と感動を持っているのだろうけれども、作品として見るとき、読者にとっては極めて退屈な、作者の自己陶醉を覚えさせられるのだ。

これ等、選ばれた作品にしても、部分的には、相当な描写力

をみせながら、描写が単なる描写に止まっていて、分離した状態のままに次につながるものがない。同じ位置であって展開がない。人物像の描写と叙述が積み重ねられているばかりで、その人物が、当面した事態に、どのように反応し、働きをするかという試みがない。

「ジエジンニヨ」は、そんな欠陥をもった平枚な作品と思われる。そこには、ひとりよがりな感傷、叙情しかないのである。

詳細な叙述や描写が、必ずしも、作者の描こうとする人間像を適確に捉え、表現する有効な方法とは限らない。

まして、選択と省略は、短篇小説の必須の要素である筈である。そのうえに、配慮のいきとどいた構成が必要である。

テーマを構成する人間像の選び方、描き方、動かし方によって、訴えようとするものを表現するのだが、それが一般的、画一的であって、作者の独自の眼を通して書かれた言葉や文章がない。所謂、個性が無いと言うことである。

「草のいのち」の主人公の信悦は、十四、五才の少年ではあるが、それにしても、あまりにも通念的な働きしかないのではないだろうか。

この作品は、信悦の入った植民地の悲惨な状態が背景になっているのであるが、単なる設定に終わっていて、子供を熱病でなくした女が首を吊って死ぬと云うことにつながる切実な悲惨さが描ききれない。

移民生活という、共通した過程の中で、万遍なく、並大底で

ない苦勞を味って来た人達には、例えば、――植民地に熱病が蔓延した――と言うだけで、その悲惨さ、焦躁、苦惱……が、それ以上の言葉を必要とせずして理解出来るのかもしれない。

しかし、それを文学作品として評価するとき、自慰的な、愚痴的な、ひと握りの仲間うちの文学に終る危険性を感じるのである。

作品の評価というものは、実に困難で、曖昧なものであるかということをも痛感させられる。時として、或いは、多くの場合、”好み”によって差配されることがあるのではないだろうか。

今回の文学賞選考会でも、その選者の選後感を読んで見ても、殆んど同じ作品を推されていないし、私が、研究会の席上で、「濁った河」を、その描写力、構成のうまさで、優れた作品としてとりあげたときにも、私の意見に賛同する人はあまり見当らなかつたようである。

選者のうちにも、この作品を非常な感動を以て激賞している方もあつたが、その観点は私のものとは全く相異なるものであつた。

書き出しの、簡潔な描写に感心し、其の後の、もてあましたような、しどろもどろの文体に、私自身同じように困惑し、この作品に相応しくない結末に不満を感じながらも、尚、作者の技倆によつて、この作品は生きていると思つた。

この作品の人物には、間違いなく作者の血が流れているのを感じた。

(終り)

## 詩

### 第四号

#### 詩と展望欄に就いて

横田 恭平

#### 「コロニア文学」

コロニア文学は、とうに約束の月を越して、一体いつ出るのかと思つてしているとひよっこり出てくる。五月号が七月の末に出て来た。やはり難産である。しかし生れてきたものは仲々の大冊で内容も豊富、追々体裁が整つてきたのでまず安心する同人六百名近い同人誌は日本でもほとんどない筈だ。これを千名にするのはすでに不可能でない。

内容とする文学もまた日本で見られない大文学が花咲くことも考えられる。いや、小説を書く一人一人、詩を書く一人一人がそのことを考えて自重してもらわねばならぬ。

さて、詩から先きに目を通す。

かねて藪崎氏から、いい詩が提出されたから期待してくれと言われて心待ちにしていたが、狩海亘氏の「少女よ、模様を綴れ」はいい収穫であった。

ブラジルへ新しく来た人だけが持つ新鮮な感覚で、混血の少女をうたっている。手法は男らしく、大胆である。読後快感を

覚えた。

先づ冒頭

ゆきずりの者だけが美しい  
の語句。なくなつた三好達治に

花だけがこの世で美しい

の詩句があるが、似ているようで似もつかぬ。この句は、作者が精神的に放逸であること、すなわち自己を過ぎるすべての美をとらえようとする貪婪な魂の所有者（それこそ詩人というものの魂というべきであるが）であることをはっきり表示して全部の詩句への踏台にする。

ぼくの背中の目は

すこしの憎しみさえこめて

これは心憎いまで気の利いた表現である。しかし次の夢の中まで追って行くは、つまづくような思いのするのは私だけだろうか。それからだがその脹は鶴の首のようにこの直喩の作用する感じは、あまりに日本的である。ブラジルでの作品としては的外れのような気がする。

とにかくさつそうとしている。この作者がやがてこの途方もない邦ブラジルの風土の洗礼を受け骨の髄まで風化したとき、そのとき果していかなる変貌の詩を書くかということに期待をよせる。

次に同じ人の「女たちの大笑い」

日本のモダニズムの詩の中にさらに見出される詩、この詩その

ものも日本のものである。想念のながれるままに、なんの制肘もなしにイメージはイメージをよんで予期せぬ方向に展開する。読者は了解も出来ないが、なにか面白そうだと思う。それだけである。作者にとっても読者の了解は必要でない。こういう私たちのものは、勿論非常にすぐれたものに遭遇する場合もあるが、リアリズムからはあそびと見られる。それにしても、ブラジルではもつとちがったかたちで出て来ねばなるまい。ここでは、すべての手法を消化した上で、ブラジルに即した、そしてオリジナルのものが生れて来ねばならない。

永田泰三氏の作品 「曇り日」

この作者は詩集も数冊発表し、すでに自己の手法をものにして一つの詩風の上に安座している。それだけ、型にはまっているもの足りなさもある。

しかしこういう詩もなければならぬし、この詩に共感する読者も多いことと思う。

可児三平氏は、すでに相当の作品をパウリスタ新聞に発表している。生活の中に、いやもつとも普遍的なものの中に詩を見出すという態度である。

吾々年輩の者は、そのそこはかただよう恬淡な詩感に共感するが、若い人にはものたらぬものがあるだろう。詩はそれでいいのだ。今度の詩は、氏の作品のうちではいい方とほ言いたい。

「花の中に」長谷春子氏

この人の作品は初号にも載った。年若い女性らしくおさない詩であるが、懐疑と、そして思想を持ちかけている。

小石氏の詩も、由井氏の詩も、みな吾々のほしい詩である。すくなくとも借物ではない。どうぞ自分の持っているものをしつかりたしかめて、それを自由な方法で表現してもらいたい。

最後に、私の詩、スザノ風物詩「宇宙の中心」この詩は次号の分として武本氏に送ったのだが、本号に載せたのは編集の都合からであろうか。

私は精神的放浪者である。こんな男は、世界中のどこに住まいしてもその住むところを渾限り愛する。私は世界人の一人としての自我の発展を希う。にも拘わらず、日本移民のつくりあげた町としてのスザノの風物に無限の愛着をかんずるのだ。

この詩の底になされるものは、前号所載二篇につながっている。

## 短歌

短歌は、どの作者もみな同じような姿勢で気負っている。

好きな歌をさがして一つあった。

川原比露思氏

鬱屈の心を空に爆ぜさせて

花火は星の位置よりひくし

これは抵抗から出発している。一瞬の感覚を空間にみごとに

象っている。下句は瞬間の燃焼を永遠というものに対比せしめて暗示的である。

この歌は、語律をとり払っても立派に生存する詩である。

## 展望

先づ、酒井繁一氏の「コロニア短歌の郷愁性と郷土性」は、短歌人諸氏の無意識に陥ちこんでいる精神的弱点を指摘、警告を発したものだ。詩壇の人たちにも多くの示唆を与えるだろう。

米沢幹夫氏の「コロニア詩壇の行方」は、吾々所謂詩壇のどん底のあたりでうごめいている者への鞭として、ありがたくいただく。

じつは吾々もただ慢然と詩をつくっているわけでない。私自身は詩作の行為を、文学的表現行為であると同時に一つの社会的行為とも見る。

たとえば、私のようなもの持ち得る些細な思念でも、それが情緒のようなものに溶け一篇の詩となって放たれたとき、それが他の感性にいかなる衝撃を与えるかは知る由もないが、その他の感性との触れあい。がさらに其処に、くさぐさの花を咲かせるよすがともなれば幸いと思っている。

私にあつては、詩をつくることがすでに一つの文学運動であり、社会的実践でもある。由来、詩の世界では、先行のものはたちまち次の世代の人たちに踏みにじられて埋もれて了う。暮鳥しかり、白秋しかり、朔太郎しかり。それはみづからの放った矢の衝撃のエフエイトである。そのエフエイトによって、み

づからを越えるものが出来、またみづからを倒す異質のものも育くまれたのである。

吾々もまた新しく到達する人たちの踏み台となって、埋もれたいと思っている。

それにしても一般に現代詩がとりつきにくくなったのは、詩の方法、技術が非常に錯雑を極めて来たことと、安村玉泉氏が説くごとく現代の詩は、作詩の基盤として思想性が必須であるとの二つの理由からであろう。とまれ、詩の推進機関は最も必要で、吾々が武本氏と協力して、このコロニア独自の文学を標榜した「コロニア文学」を発刊した所以である。吾々としては、これをまもり立ててゆくことによつて、停滞から脱し得ることと信ずる。

次に、安村玉泉氏の「コロニア川柳の現状と批判」は大文字である。

所謂一行詩の提唱する批評精神は、吾々どん底の詩をつくるものの精神と通ずるものであるが、そういう点からも、氏の解説を興味深く読んだ。

ただ氏が引用解説された堀田栄光花氏作品

あなどつた後輩砂をかけて去り

に就ては、あなどつた後輩は、氏の言うが如く、

「おれがあなどつた後輩」ではなく、「おれをあなどつた後輩」という意味と私はとる。この句の裏に、大平凡人且つ大善人の栄光花氏が、「やられた」と苦笑している姿を見るのです。

最後に、水野林氏の三島由紀夫紹介は、単なる紹介の域を超えて、圧巻の読物であった。こういうもののおちいり易い嫌味がないのは、縦横潤達な筆のはこびによるのだろう。少しのケレンもなく、その簡明さはブラジル式でさえある。この人が年少にも拘わらず、視野が広いということも期待をいだかせる理由である。

コロニア文学新刊書評(1)

大場時夫著

歌集『岩霧草』

この歌集は、本会々員大場時夫氏の第一歌集である。発行は、一九六六年十一月、東京、文京社四六版、本文二二二ページ、短歌社「林間」叢書第八四篇となっている。

大場氏は、「椰子樹」の中堅、ロンドリーナ歌会の中心作歌者として知られている。特に、「林間」主宰の木村捨録氏の知遇を得、日本の歌壇にも進出して、精進を重ねつつある。

大場氏の歌風はおおむね、写実に則り、穏健であり、着実に修練を積んで今日に至っている。木村氏は、その序の中で「一首一首に自己という真面目な人間を描き、そうした人間像がいよいよ作品を高め……、就中、実業人としての社会詠、……風物詠にはすぐれた観察がうかがわれる。」と語っている。

取材面の広いこと、技術的に秀れていることはこれまで、本書に対する評者の多くが取りあげ賛嘆を捧げている。

梨若葉やなぎわかばに照るひかり

白く波だち昼たけにけり

支払いの額にとどかぬままにある

銭をときおり思えり淋し

棉芽ぶき麦熟れそめしこの起伏す

すたすたと歩み来たれる裸足

このような写実的な技法を踏襲して、巧みを言葉づかいで、感動を伝達しようとした作品が大部分を占めているところから見て、この作者は大体に技巧派とみてよい。

だが、中には、技巧を超えて、作者自身の本質を以て、体当たりを試みようとした作品もみられる。

採石の跡白々と乾きつつ山は血を

噴くことさえ知らぬ

課せられるだけ働きてやまかげの

草喰む馬の深き目の色

人の世に何を洗われいしわれか峠

の風にこころゆれつつ

山に行き山に溶け入ることもなく

帰り来たりて杳し街の灯

このような作品は、技術一つに寄りかかったものではない。作者の人生的な体験の深みから発した声であろう。そして、こ

うした作品の展開にこそ多くを期待したい。

文学は、韻文は特に、言葉ではない。言葉を超えたところからはじまる。詩人は、言葉の呪縛から解放されなければならぬ。そこに真の意味での創造がある。

この歌集を踏台として、大場氏の飛躍を祈ること切である。

(春)

## 短歌

朝夕に

瀬崎 涛声

朝夕に来て歩む道あめふりて幾つも小さき湖生れている

憂いなく明日もこの道ゆかしめと濡れ砂利道の夕べを帰る

つづまりは一人の孤独追いつめて果てゆく運命さびしかれども

ゆうかげとなりたる命つつがなく白みし部屋に今朝も目を開く

現われし雨間の月に対いおり思いかげざる邂逅のごと

目覚むれば俱にめざめて脅す胸の悪鬼よ開経●誦す

昨日咲きて今日は移ろいゆくばらよ美しきものは常にはかなく

皮脱ぎし節間節間は白粉ふき若竹は伸ぶいつとしもなく

後ろ向きのもののさびしさ竹群は折れ曲るがに向うに靡く

いくたびも出で来りては庭草に親しむ無為の吾の一日

平安に昏れゆく今日のなごりとも夕映のくも北に峙つ

重々と●ぐがごとき音立てて雨ふりて来ぬ不眠の夜を

## 夏季逝く

陣内 しのぶ

吸い込まるる如き眠りに吊られたる折鶴の数無限に増えて

とゞまりてあれば危うき芋の葉の露に触れたき指先熱く

十指にも余る子等持つ夢醒めてどれも優しき身近のこけし  
カラジウムの朱色が褪せる眩きを耳に掠めき不在の部屋に  
恐れ持つ希い一つは汚さねば夢に被ぎて白し喪の服

声立てぬ独りの夜の更け速く打身に帖りしハツカが匂う

紫陽花が咲かざるまゝに夏季逝くを予感の如く淋しみていつ

帖り紙の後ろに嘲笑う顔ありて不定期に来る軽飛蚊症

笑うまで暇取りし貌思いつゝ歩める足の少し縛るる

噴き上ぐる想抑うる難聴の耳奥に響きつづくる貨車は

## 短歌

### 燃ゆる鬼火

川原 比露思

倅せの如くまたたく灯見えその距離埋めて暗き断絶

幻想の中に浮揚する海の藻の流れ生々としてわれの変身

椰子の葉の半円描く孤の中に軌みて寒の星落ちゆけり

強いられし贖罪のごと晴れし日に音高く冬枝切断さるる

裸木のぬくとき幹に触れいつつ刻ながくいて吾も裸木

ナイル河のそこいに沈む神殿を眠らむ際に想っていたり

交錯する光と闇のきわみにて人智が挑む天体くらし

淡々と日も夜も燃ゆるわが鬼火透明なれば音もなくして

## 鎖

福田 弘 元

手に何の枷叫ばんとする若者らスクラムを組む鎖を断ちて

マニフェスト・追放リスト・口々に自由を叫ぶ声ガロア深き街

短歌

片明り

南条 由喜夫

この国にわが後半生はすぎにきと思いはゆらぐ青き夜の闇

透明の神決め給う順序ある道の行方に虻が炎え立つ

悲しみはのこりて独り肱をつく窓にみる芝生雨ふり沈む

ジャカラランダの葉は著く散り尼僧ゆくあわれ女臭は黒衣より洩る

背景に破家あればこの街を中心として興奮のあり

片明りする遠景のビルみえて軒低きこの家並はくらし

放縦の果のついの日浄くあれ秋芽吹き居る木葡萄のそば

野を行きて

貞野 雅子

秋の野を恋うる心のみたされてビラの広野に今日を花摘む

一日の著りといわん野を行きて秋の光を恣に浴ぶ

短歌

喪うもの

西田 季子

夜の雨の音重なりてゆく時も不惻の想いに心沈みつ

深更の机にひとり書き終わる還ることなき記憶の会話

光度変える蛍光灯の下にして聞ゆるはかすかな葬の鐘

假話一つ成らんとしたるたまゆらに暗示の如く蝶翳りゆく

刺す如き夕風となりし冬空に残照いつまでもいつまでも映ゆる

時刻む時計と低き脈博とつながるものをしばらく想う

おもむろにきびす返せど同じ地形にて帰るより外なき一日の憂愁

定着は常あり時の層厚く凝りたる裡に星は光れり

放置さるる赤き空車に雨流れいて思索は昨日の周辺めぐる

あざやかに喪うものの見え透きて面あげて

そをもうけ止めんとす

短歌

紫を恋う

佐藤 博三

盲いたる我がたましいを貫きてゴムの葉はかざす赤き尖頭

えぐられしマモンの深傷さしのぞく青き乳房を両手にいだき

さみどりのセーターを脱ぐ髪にふれ汗ばめば林檎の匂いをはなつ

円錐花ひらきつつあり君といて季のさかりの紫を恋う

君が眼のとどかぬ視野の果てに居てひたすらに松は花粉をこぼす

つけ入る声

大場 時夫

荒々と吹きすさびいるよるの風こもりて家の内にも鳴りつ

忽ちにつけ入る声にあるふくみ笑いに汝を蔑みやすし

友の死につながる意識さえざえと酔えば深まりゆく敗北か

とぎれたる話のもてるいたみには触れためらいて別るるものか

年毎に無口となりゆく子の未来案じて酒の話頭とするや

さわやかな背信 木村 正和

榕樹の森越えゆけば翳る海ありて吾が候鳥はかえりゆくべき

マコニアの煙草・酒・詩(うた)・倒錯の愛に飼われて盲いゆく蛇

ピューマの目ネオンに遠き木蔭より誘う冥き愛頒つべく

澄み透る湖に濁れるいくすじの河注ぎ吾がルネッサンスは

さわやかに叛きゆきたる若者の背のおのずから神を肯う

“音なき口笛”

小笠原 正好

粗塗りの壁より埃吹き落としゴーホ死にたりきかなしき黄色  
薄暗き緑を泥のごとく塗り塗りおおせたり象なき淵

いざなわれつつ深々と堕ちていくめぐりて厚き透明暗緑

あるところかすかに黄色光顕ちて肩より重き息吐き出だす

磨り減りしエスパーツラの鈍光を撫でて愛しき音なき口笛

## 俳句

木の椅子

殿岡 萩花

名曲では晴れぬ寒雲身重妻

正者勝つ木椅子ばかりの寒い拍手

青い傘からしかばねいくさはじまりて

齢を磨いて枯葉・あたゝかき毘売り

熟れ無花果嘘が多くて空青し

晩夏横切る柩車多弁を警しめて

サングラスかけて盛粧掃かれる聖書

夜雲蒼々乳房をさがす蛙啼く

河で終るドラマ・あとからあとから風船

揺れる満月贈られて来る乳母車

## 茶の花

間島稻花水

晩学のはるか虫啼き代るなり

墾の子の伝言短かクワレズマ

高々と残るアバカテ湖光る

鶏頭に日矢移住地に善意満つ

梅擬情のもつるる老移民

寡婦葛夜は昂ぶれる浪の音

溪谷の日照雨はなやぐ釣舟草

実樗に住み古る永久の波濤音

寒き一語大河は音もなく流る

茶の花や谿の水引き日々寧し

パラナ・マウア高原

風 早 南 瓜

鳥渡る羽音でありぬ見送りぬ

鳥渡るおのづから道ある如く

又或る日鷹の大群渡るなり

帰去来は我が心にも鳥渡る

ピニヨン買佇つ道の辺の草もみぢ

我が山の松の実も飛びはじめたる

松の実を拾わんと来て鹿に合う

張り干の牛の皮吊り枯木宿

寄り来よと少しほどけぬ焚火の輪

移住祭移民は棄民ならざりき

シクラメン

小笠原 夕虹

シクラメン白は全くの白の翳

シクラメンピアノの間かぬ日に咲ける

頬ずりの出来ぬ隔りシクラメン

てのひらを寄せれば動くシクラメン

語ることなくなりしときシクラメン

父の訃

佐藤 閑人

夏菊や永遠にかえらぬ父送る

父の居ぬ部屋ほの暗く蚊のなけり

川柳

近作

坪井 柳念坊

齒車の合わぬを知って差す油

ぬかるみの轍苦斗の俺が居る

素晴らしい玩具のカーに気圧される

鼓動止んで遺体と呼ぶ掟

げんこつをほぐせと円らな眼に出合う

柏手で神を起して頼んでる

受け継いだ空の金庫も鍵をかけ

木石にあらず美人の眼に射られ



夏 N a t s u y o 代 (16枚)

片山 耀子

夏代は私共に十年もおりました女中で御座いまして、私共ではただ、なつ、なつと申しておりましたが、本当に気だての良い賢い女で御座いました。私共は未だあんなよい女中を見た事がありません。おそらく、もうあんな女中は二度と見つかるまいと思います。いいえ、女中などと申しますのは間違っているの  
で御座いまして、なつはもうどんな家庭へ入りましても立派にやっ  
て行ける主婦であり、母であったので御座います。私がこ  
う申上げる位で御座いますから、御近所なぞの評判も大変よう

御座いまして、あちこちから縁談なども大分あったのですが、肝腎のなつがいつも行こうとは致しませんので、とうとう十年もいてしまうようになってしまったので御座いますが、でも終いには、国元の方からやかましく言っ参りますので、致し方なく帰ったような訳なので御座います。

なつは北海道の者で御座いまして、私共へ参りましたのはまだほんの子供の十五の時で御座いましたが、主人が商用で度々あちらへ旅行致しますものですから、その旅館の世話で始めてこちらへ連れて来られたので御座います。貧しい上に、弟妹が多う御座いました由で、早くから奉公に出されたのだそう御座いますが、でもその割合に人ずれしていず、何事も几帳面で、影日向なく働きますので、なつは忽ちのうちに主人夫婦からまたとないものに信頼されてしまったので御座います。

けれども、なつが本当にこの家にとって、なくてはならないものにされてしまったのは、あれはもう余程前のことになりましたが、いづぞや流行性感冒が大変流行りました時、日頃は丈夫な人でありましたそうで御座いますに、先妻が、感冒から肺炎をおこし、まだ二十五才の若さに、二つと三つになったばかりの子供を残し、突然に逝ってしまったからなので御座います。殊に先妻との間は、長い間の恋愛が実を結んでまだやつと三四年にしかかっておりませんでしたそうで御座いますから、その悲歎は定めて深かっただろうと察しますので御座います。

けれどもそれにも増してなつの驚きと困惑は察するにも余り

あるもので御座います。でも、なつは雄々しくも立ち上り、悲歎の余り、傷つき病んでしまった主人と母のない二人の子供を擁し、よく二年の年月をこの重任に堪えたので御座います。私が主人を知りましたのは丁度その頃なので御座いました。

或る偶然のことから主人の郷里の家と、私の嫂の実家とが同じ村の極く近くであるということが分りまして、それからというものは、主人はよく私共を訪ねて来たので御座います。

私の実家と申しますのは、軍人で御座いまして、亡くなりました父も、叔父も、また健在の二人の兄も皆軍籍にあるもので御座います。したがって、御交際下さる方々もみんなそうした方面の方達ばかりで御座いますのに、そうした所へ、この主人の度々の訪問は、いつか私達の心を好奇から親愛へと移して行ってしまったので御座いました。第一に、母がその若さに似合わぬ如才のない、そうして身だしなみのいい事に気を取られてしまいました、兄は兄で、その軍隊の事のみしか知らないような自分に比べて、これはまたあまりにも多方面へ渡つてのその知識と経験の前に少からぬ敬意を表していたようで御座います。そうした空気がいつか私と主人を結びつけるに役立ってしまったので御座います。申し遅れましたが、主人はもうその頃から横浜に小さいながらも毛織物商を営んでいたので御座いました。

なつの話が十分横道にそれてしまいましたが、でもそうしたうちにも、なつの噂はいつもされておりましたので御座いま

て、主人はなつにどの位感謝致していたか知れません。

『なつは僕にとって再生の恩人です。僕がどうにかなったら、どんなにしても、なつに恩返しをしなければなりません……』

私達一家の者は、何度こうした主人の言葉を聞いたか知れません。いよいよ婚礼も迫って来た或る日、主人は改めて私に申すのでした。

「景子さん、お蔭で私はいま貴女によって幸福になろうとしています。」

今度はどうぞなつの事を考えてやって下さい。貴女が来て下さって少しでも家の中が落ち着いたら、僕は何をおいても、なつに休養を与えたいと思うんです。景子さん、どうぞ僕のこの気持を分して下さい。」

私にだつてなんの異存が御座いましたでしょう。喜んでそうする事を誓ったので御座いました。

とうとう私はなつと一つ家に住む事になってしまいました。朝っからの目まぐるしい時がやっとたつて、牛込の家へ落ち着きました時、なつはどんなに私を喜んで迎えてくれましたことでしょう。

「奥様、ようこそ御出で下さいました。旦那様はもうこの間中からどんなにお喜びになつていらつしやいますか、私もまたこんな嬉しいことは御座いません。」

なつはそう申しますと、ぼたぼたと涙を流すので御座いまし

た。きつと、私を見て急に長い間の感情が一時に込みあげて来たので御座いましょう。

私もまたなんだか胸がいっぱいになってなんとも申す事が出来なくなってしまうたので御座います。

日が経つにしたがって、私となつとは本当に親密になつてしまいました。

ですから、行ったらすぐにゆつくりとなつを休ませようと思つておりました事も、いつこうに実行されず、なつもまたちつともそれを望んではおりませんでしたので、とうとうその俣になつてしまいました。尤も私は、なつのためにかんりのものを分けて与えてやりましたけれども、そんな訳で御座いましたので、家を出ます時母が、いくらい女中であるといつても、自分より先きに来ているというものは本当に使いにくいものだからと、幾度も心配してくれました事を、ちつとも懸念なく、私となつはまるで姉妹か友達のように睦み合っていたので御座いました。年も同じよう御座いました。でも、なつは私のようにぼんやりと育つた者と違ひまして、年こそ私より一つ下の廿才で御座いましたが、話します事はまるであべこべでいつも私の方が教えられるようなので御座います。勉強といえは私の方がどれだけ多く致しましたか知れませんが、なんの役にもたないの御座いました。例えば、子供がなにか興に乗つて悪戯をして居りますような場合、私にはそれをどうしても強く叱る事ができないので御座いますが、なつはそんな時きつと、「坊

ちやま、そんなことをなすつてはいけません」とはつきりと止めさせてしまうので御座います。と行って、なつはけっして子供に冷たいのではありません。男の子ですから、ずいぶん乱暴もし、困らせるような事も致しますが、まだ一度もいやな顔を致した事ありません。その態度は丁度、慈母の愛児に対すると云ったようなので御座います。

それから、これは後で考えた事なんですけれども、なつはもしかすると、主人を愛していたのではないかと思えるので御座います。別にこれということも御座いませんが、なつはいつも、「旦那様が、旦那様が……」と申しまして、私がまだ来なかつた時分の主人の話を致すのが好きで御座いましたし、それに主人の用ですと、何事も念を入れてやりますあたり、そうではないかと思われるので御座います。それに、いつでしたか、子供を連れて、早く遊びに出たきりなかなか戻りませんので、どうしたのかと心配しておりますと、夕方になりました表の方から主人の足音に交って子供の声も致しますので走って表へ出て見ますと、子供達は主人の両手にぶら下つてにこにこ致しておりますし、なつはその後から、いそいそとついて来るので御座いました。でも、流石に私に悪いとも思いましたか、

「坊ちやまが、お父様をお迎えに行こうとおっしゃって、お聞きにならないものですから。」

と、赫い顔をして申すので御座いましたが、私はその場の様子に、何だか暗い思いに閉ざされてしまったので御座います。

私さえ来なかつたら、なつはいつもこうして楽しんでいられたのではないだろうか、と、ふとそんな風に思われまして。

それに、あんなによく致してやりましても、なつはやっぱり私より主人の方がいいと見えまして、私には打不开けなような事でも主人にはみんな話してあるので御座います。いつぞや主人が風呂に入っております時、何の気もなくそこを通り掛かりますと、いつも風呂の加減を見に行きますなつと主人の話声があるので御座います。閉め切つてあるのと、水の音とでなつの声はよく聞こえませんでしたが、「心配するな、万事は僕に任せ置いて置け」という主人の声ははつきりと耳に入ったので御座います。何事だろうと暫くは不安に戦きましたが、しかしそれはこの間中からなつの所へ度々国元から言ってくるらしいお金の事だろうと思ひ当りましたので、ほつと安心致しましたが、でもなつのそうした態度は、何となく裏切られたようないやなもので御座いました。

けれども、そんな事がなんでなつを傷つけることになりましょう。主人を密かに愛していたからといって、それを私がなつでとがめる事ができましよう。いいえ、愛していたからこそ、あれだけのことができたので御座いましよう、と思ひますと、私はなんだかなつがいじらしくさえなつてくるので御座います。何時迄も何時迄もいたかつたなつでは御座いましたが、やっぱりそうはいきませんでして、あれは桜の花のやつと少しふくらみ掛けた三月の末で御座いました。十年も住み馴れた家、自分

が育て大きくしたこの子供とに別れを告げて、泣く泣く帰って行ったので御座いました。

私達も、みんな親身の者に別れるように泣いて送ったので御座います。

みんなの者に停車場迄送られて、泣き腫した真赤な顔を幾度も幾度も下げながら、やがて見えなくなってしまうたなつを、私は何時迄も忘れることができません。

それからもう柱暦は三度も取り替えられました。なつはどうしたのか、それからちつとも便りをよこしません。変りがなければいいがと思っております。私の方には、大変変わったことが御座いました。第一にあの震災です。店も住居の方もすっかり駄目になってしまいましたので、もう市内はこりごり致しまして、それに私も二度も流産を致しまして、すっかり健康を損ねてしまったので、あれからずっと、此方に住んで居ります。此処からはもう直きに鎌倉で御座いまして、東京へも二時間で行かれますので、主人は毎日此処から通っております。けれども私はすっかり田舎者になってしまいました、この頃ではめったに東京へも顔を出すような事もなく、日用品は大抵主人が調べて来てくれますので、本当になにか特別の用事でもない限り、でもそんな時にはいつも主人が東京駅まで来ていてくれますので、震災後もう三年になりますが、私はまだ一度も東京の街を

歩いたことがないので御座います。それに、その後まだすっかり健康を取り戻していない私を一人で出すのを主人はいつも心許なく思っているらしい御座いますので。

けれども一昨日久し振りで従妹が訪ねて参りましたので、勧められてとうとう一緒に東京まで行く事になってしまったので御座います。なんだかあまり気が進みませんでしたけれども、それに主人に黙って出た事もないしと思ひまして幾度も考えたので御座いますけれども、兄達はみんな地方へ転勤してしまひまして、暫く振りで会った従妹が妙に懐しく、別れが惜しまれますので、遂に一緒に行く気になってしまったので御座いました。

暫く振りであの雑踏にもまれますと、もう人中を泳ぐだけですっかり疲れが出てしまうので御座いました。Mデパートへ入ってようやく従妹の買物をすませ、三階の玩具部へ出た時で御座いました。流石に此処は時節柄子供を連れた人がいっぱい御座いました。「私もその中へ入って子供達のためになにかクリスマスプレゼントでも見付けようと致しますと、つい目の前に四、五人の人の頭にさえぎられた所に見覚えのある横顔を発見致したので御座います。しかし、もしやと思つてよく見守りますと、それはまざれもなく今朝家を出た主人に違ひないの御座います。そして主人が下を向いて何か申しておりますのは、連れている三つ四つ位の男の子になにか話しかけているの御座います。男の子は、人波にもまれ、踏まれそうになり、あ

わてて主人に取りすがりました。主人は急いで抱き上げると、とれて落ちそうになっている帽子をかぶり直させてやるので御座いました。

ああ、けれどもどうしたという事なのでしょう。その男の子の顔は、主人がまだ幼い折乳母に抱かれて撮ったというその写真とそっくりなので御座います。いいえ、そればかりではありません。近づいてみると、主人にはもう一人若い婦人の連れがあるので御座いました。二人は肩を並べて行き過ぎようとしています。はつと思いましたが瞬間、二人は何事か此方を振り向きました。六つの瞳は期せずして合わされました。私は思わず、「あつ、なつ。」と叫んでしまいました。「まあ、奥様……」私はそれからなつがなにを申しましたか、少しも知りません。何処をどうして帰って来たかも知りません。ただ従妹が、真青な顔をして、「お姉さん、確りしてよ、確りしてよ。」と幾度も申しましたのを覚えているだけで御座います。

今朝も又主人は何か言いたげに私の病床を見舞うのですが、私はもう顔を合わせるのも苦痛なので御座います。此の俤いつそ、どうにかなつてしまえばいいと念じております。

それももう、また昔語りになろうとしています。私はいま此の植民地で、可愛い生徒を相手にさわやかな生活を営んでおります。

静かな、しかし単調な生活は、私として、時にたまらない望郷の念を起させます。兄は何時でも帰って来るようにと申して

くれます。しかし、半世の過去は私として、人生のあらゆるものを棄てさせてしまいました。私はいま新しく、更に見直すことによって、真の何物かの姿を見出そうと致しているので御座います。

私はそれが何時になろうと、それ迄、此処にこうしてこのさわやかな生活を守ろうと思っているので御座います。

片山耀子 『夏代』について、

この作品は、一九三三年に『伯刺西爾時報』社によって行われた、「同胞発展廿五周年記念懸賞短篇小説募集」における、一等入選作である。作者は、当時サンパウロ市オリヴェイラ・モンテイロ街に居住していた。本作品は、一九三三年六月二十九日より、七月一三日まで、三回に亘って『伯刺西爾時報』紙に連載された。

因みに、同懸賞募集の結果を左に記載しておく。

一等、 片山耀子 『夏代』

二等、 笹島麗子 『霧』

三等、 杉 武夫 『珈琲園を売る』

選外佳作 野 生夫 『勝利者の手記』

〃 西山 悟 『開拓悲壮曲』

〃 駒井不二夫 『次に来るもの』

「感想」をどうぞ

◇「コロニア文学会」が生まれてから満一カ年、「コロニア文学」誌発行以来一カ年と半年、まだヨチヨチ歩きで、理想とする、年間四回発行に漕ぎつけられないでいます。しかし、会員六〇〇（実は三分の一は会費未納です）に達しているのですから、来年からは、是非年間四回発行といきたいものです。

◇それには、会員の投稿意欲の高まりが必要です。本会の行き方に対する批判、本誌の内容に就いての感想など、どしどし編集部へお寄せください。誌上に発表して、みんなで考えていきたいと思えます。

◇コロニア文学の高揚、といってもそれは、中央のみの問題ではありません。本当は、地方での文学活動の高潮にこそ、期待されるのです。地方在住文学愛好者の奮起を要望いたします。

(Y)

# 随筆

## 野鳥記

務台 一郎

この春はサツシーは来たが、サビアはとうとう来なかった。

僕はイタケーラ駅近くで養鶏場を営んで居るが、このあたりは古い分譲地で一区が五百米平方ずつあり、それをいくつか持って居る人が相当居るので、木立や竹藪が多く、いたずら者の雀も沢山集まるが、美しい声をきかして呉れる小鳥も多い。わずか五十米角の僕の土地の中にも色々な小鳥がやってくる。

クルイーラ（みそさざい）は泥壁の家によくやって来ると言われるが、うちの育雛舎の壁がそれなので、そこで大工仕事などをして居ると、軒下までやって来てその華麗な声を惜し気もなく聞かしてくれる。チャイコフスキーはある春の日に自分の家の窓をぬって居る職人の歌声に感興をおぼえて、万人に愛好される小曲マンダンテ・カンタヴィーレを作曲したそうだが、僕の方はただ仕事の手を休めてボンヤリ聞きほれて居る位のことだ。

クルイーラは季節なしに一年中来て居る様だが、サツシーとサビアは十一月頃になるとやって来て遠くの木立ちで鳴いて居

る。

今年はどうしたのかサツシーの鳴声が非常に近く聞えたから家の地所内に来て居たのかも知れない。多分毎年とまって居た木立ちが切り払われたからだろう。

サツシーは郭公科の小鳥で鳴声もよく似て居るが、カツコーの方がカツコーと調子が下るに反し、サツシーの方は逆に「ラシ」と、一音階上って居る。

春の山野を旅行く人はカツコーの声を遠く近く聞く時にのどかなる季節の旅の幸せをしみじみと感ずるが、サツシーの声はどことなく哀感をおび神秘的ですらある。

一九三六、七年頃僕はビラ・マリヤナの車庫の裏のドナ・カロリーナと言う通りに住んで居た事がある。

その頃のビラ・マリヤナは閑散たるもので、人家はその街が最後に家の背後は無住の原で浅い谷をへだてて向側にアクリマンの森が見えた。

僕がそこに移って行った頃その谷の森やあちこちの茂みから何か物かなしい小鳥の鳴き声がきこえた。無住の原と言ったが実はその谷底に一家族だけ住人があった。

綺麗な水をたたえた小流れのほとりの斜面を利用して半分穴居の様な住居をもうけて住みついている黒人の一家があった。

そんな家にも日曜など、どこからか来客があつて、誰かがピッコロを吹くそれに合せて一組二組の男女が踊り初める。

サンサンたる春の陽光を浴びた広い谷間には、ただそれ丈の

人間の営みが見られるだけであつた。

はるかな谷そこからは僅にピツコロの音が聞えて来る丈で彼等の話し声や立てる物音は僕らの所まではとどかない。その外には谷のあちこちから遠く近く聞えてくる哀調切々たるかの小鳥の鳴き声。

あたりの気配はとても一步表通りに出れば電車のはしって居る町の中とは思えない妖しい白昼夢の一齣であつた。

後年僕は戦中戦後の苦境の終止符を打つためにマウア在のロードさんと言うインド人の別荘の様にして居たシチオに入つて養鯉を初めた事がある。

その美しい自然と地主夫妻の温情にはぐまれて安穩な年月を送つたが、そこは街道を遠くはなれ、四アルケール程の三方を雑木林に囲れた峡間の土地で真中を清例な小川が貫流し、それを利用して大小六ヶの池が出来ていた。

峡間の奥は西になりフンドン―奥山―と言う可成りな岩山があり朝夕の眺めはすばらしかつた。

そこへ入つたのは一九四六年の十月の終り頃だったが、一人の土地のカマラーダを相手に池の掃除をして居ると、以前アクリマソンの谷でおなじみの小鳥の声がきこえる。

「おい、セバスチオンあの鳥は？」

「ええ、あれはサッシーと言ってね、あの鳴き声をつきとめ様と森の中に入つて行くと、迷つて出て来られなくなると言うんですよ」

この青年の一家はタツ―狩りが好きで、土曜の晩などは一晚中近くの森の中でガサガサやって居たが時々その美味な肉を持って来て呉れた。それで森の住人の名前をよく知って居て、その頃そんな事に興味を持ち出した僕に色々教えてくれた。

幾日かは、おだやかな春の日を、もの静かな山峡の小天地に彼を相手に仕事をつづけたが、ある日、毎日午後になるとフンドンフンの山から、下りてくる霧が夕方になっても晴れずに雨になった。

それから毎日よくつづいて降った。

あの辺は海岸山脈に近く雨の多い土地ではあるが、その時の雨の長かった事は、初めての経験でもあるし、未だに強い印象と なって残っている。

空一面真黒くなってドシャドシャ降るかと思うと、明るく なってもシトシトしっこい雨は仲々止まない。

燃し木はぬれる用水はにぐる、小川の水は道にあふれ出す、池の水は満々とみなぎって土手が決壊しそうになる。エンシャエンーダをかついで水門を見まわる、小止みを見計って、ユーカーユカ林から枯枝を集めてきて台所で乾かす。そんな日を一日一日と送って行ったが、ある日の午後谷一面を被って居た一色の雲の色に濃淡を生じ初め、少しづつ切れてどんどん下手の方に流れて行った。

その夜は流石の雨の音もやんで、名残りの雨だれが静かに耳をうち、柄にない谷川のような水音を立てて居た小川も大分静か

になって来た。つぎの朝はこの霧雨の辛苦にむくいる様にすばらしい小鳥の鳴き声で明けた。

ピーピーパイパイピーパイ相当長い音節で声高らかに、誇らしげに谷一面にひびきわたる。

外に出て見ると名残りの雲はあちこちの山のはにかかっているが、まだ上って来ない朝の太陽は東の空をあかね色に染めて、それは全く黄金の朝であった。

雨が久しぶりで上ったので、セバスチオンが働きにやって来て、それがブラジルの名鳥サビアだと解った。

サビアはつぐみの一種で何種類かある様だがこの朝聞いた様なすばらしい声はそれ以後きいた事がない。

僕の住居の近くで鳴いていたサビアもこのマウアのものとはくらべものにならない幼稚な鳴きかたであったが、それでも毎年季節がくるとサツシーと共に僕の山野への郷愁をいやしてくれたが、そのサビアがとうとう今年は来なかった。サツシーも何時までここで聴かれることか？

一九六六年一二月

## ブンジオケイ

清水 卜齋

“書齋に只一人、顔を頬杖で支えて居ると、三重吉が来て、小鳥をお飼いなさいという。——飼ってもよいと答えた。然し念の為だから、何を飼うのかねと聞いたら、——文鳥ですと云う。

”

こんな書出しであったと記憶する、間違っておるかも知れぬ。夏目漱石の、文鳥と云う小文を読んだことがあった。

私は今離れのベランダに、体を投込んでソファアに横たわっている。

晴渡る空、庭の樹々にも訪れる秋。

軒の梨がうろたえて花を見せておる。垣添いの大竹藪よりこぼれる風。軒に吊るした、十箇ばかりの小鳥の鳴く音に、それぞれの調子を聞き入って居る。それには、ビツカード、アヅロン、アビニアード、と云うように皆ブラジルの名称を享受しており、その特長をたがい張合う啼声に、食後一時間私の昼寝を、安らかにおくりこんで呉れる、伴奏とでも云える。ところが、丁度目の前に吊り下がる籠、文鳥だけは、日本移民と同じように、その名称はやはり日本語だけであるようだ。カナリヤ（金系雀）のスペイン語と同調で、世界的文鳥で罷り通るのであろう。

“文鳥は三重吉の小説に出て来る位だから、奇麗な鳥に違いなからうと思って、じゃ買って呉れ給えと頼んだ。三重吉の小説によると、文鳥は千代千代と鳴くそうである。その鳴声が大分気に入ったと見えて、三重吉は千代千代を何度となく使つて居る。或は千代と云う女に惚れて居たことが、あるのかも知れない。”

漱石は学者ではあるが、その説でゆくと彼は小鳥のことには疎いらしい。したがつて、文鳥がどんな鳥であるかを知らぬことになる。日本に於てすらこの状態であれば、況やブラジルにおいて推して知るべしである。このベランダに訪う者は、一度は奇妙にその名を尋ねる。近頃そうした場合に、幼孫等が、「オヂチャン、コレ、ブンジオケイ、ヨ……」と、なかなか以て軽妙洒脱な代弁をして呉れる。聞く方に後学とか研究の為などの、意慾的必然性がある訳でなく、只漫然とことのはずみに尋ねるのであれば、ときによつてはいささかの抵抗も感ずる場合がある。

そんな時には、答える方も漫然とした、孫の答えるブンジオケイにしておくのである。然し、この“ブンジオケイ”なる言葉の根拠のないわけではない。

文鳥は、漱石の云う、三重吉の小説に出て来ようが、出てこまいが、清麗な鳥である。他の小鳥のように耳で楽のしむので

はなく、目でたのしめる。その色彩と動作の鳥である。

頭、顎、尾に、天鷲絨の漆黒。頬に純白の楕円形、背と胸元より、灰色が徐々にぼかしとなり、うすれさがり、山高帽に燕尾服と云う感じ。嘴大きく瑪瑙のごと、瞼の周囲に紅の円形をおき、眼鏡を掛けたり、足はまことに華奢にして珊瑚のごとし。

漱石は只一羽を飼ったのだが、文鳥だけは他の小鳥と違い、一龍に一つがい飼うことに依って、その動作のおもしろさ趣があるとも云える。至って奇麗好きな鳥で、日に何回となく水浴をして、清潔に化粧を施し、夫婦の愛情に至ってはことさら蜜のごと、亦反撃の辛辣なることも変転激しきものである。止り木に相對して、珊瑚の華奢な脚がバネ仕掛けの如く、バイブレーションはうまいものである。体を、伸縮、抑揚、●る、捻る、曲る、歪る、日本映画などに観る、ツイストダンスなどは、文鳥の色彩とこの動作を真似たものであろう。あんな踊など好むものは文鳥でも飼うべしだ、元來人間の動作も言葉も、その発祥は偶然性なものであろう。蟋蟀の“ツヅレサセヤレサセアキガキタ：”と啼くようなもので、漱石が文鳥は千代千代と啼くと発表して、今日迄何十年それが維持されておるのである。従って、余り文法などにこだわると、文法に喰い殺されて手も足も出なくなる。文字も言葉も伝達性あればそれで可なりと云えよう。

十六才を頭に四人の子の母になった、長女がまだ五才位の時

であった。

勿論故郷のことである。町内の悪童等に喧嘩の武器と蔓延した言葉。銭湯に、湯をかけ合って兄弟喧嘩をする、母親は糠袋で顔を磨きつつ、

「何んですね……湯の中にまで喧嘩して……」

「兄チャンが僕を、ブンヂオケイと云った……兄チャンのバカ……」兄貴は弟が先僕に、ブンヂオケイと云ったと云う。

「どちらがブンヂオケイでも好いではないですか、早く来なさい洗ってあげます……」と母親は引寄せて兄貴の尻に、「ピシヤ！」とひと打ち。この母親がそのブンヂオケイなるものの、何ものなるかを知る由もない。

渡伯して、長男七才次女五才位であった。移住地の其処でも子供等の争いの言葉が、ブンヂオケイであった。親達はそれはブラジル語であると思っていた。

現住所に移った当時、次男が七才三男三才位であった。ここでもブンヂオケイが適用されたのであるが、ここでは亦、幼子のむずかるような場合、母親がブンヂオケイが来ると云えば、忽ちに泣きやむのであった。

誠に便利調法なこの言葉、一体何処の国の言葉で、何ものなるか。

郷里に遠縁の老人が居た。生涯を酒で身代を飲み尽したが、まだ足らわぬと云う類のものであった。住居が近くであったの

で、呑むと酒の力で訪れて来る。そして口の荒いこの老人は、私  
の名、"文三"に公を敬称にして "ブンヅウコウ"と呼ぶ。  
顔じゅうの小道具を背酷使して吼るが如く。"オサケノミノ、  
イヤーナ爺チャン" 幼の長女が、そのブンゾウコウを如何に取  
入れたるものか、臆ての、ブンヂオケイの発端はそもそもここ  
にあったのである。

そんなことが、未だ此の間の事のような感じでもあるのに、  
過ぐる三十年はまたたく間に去って逝ってしまった。

ここに長男の子、即ち内孫等に依って、今は、小鳥の名称に  
転誰されたのである。

馬上過青年。

時平多白髪。

殊軀許天処。

亦如何。

一九六七・三・三〇

## 短歌と生活

大場 時夫

或日、林間から来た手紙の中に「ブラジルも不景気で困りま

すね、日本は神武以来……」と言うような事が書かれてあった。これを読んだ折に、一体誰がブラジルの不景気を報告したのか、つまりない事を言う者も居るものだと、呟いたものだ。

そうした事を忘れかけていた或日、林間に出ている自分の作品を読返していて驚いてしまった。全くつまらなげ事を歌にしていたものだと呆れもし、その迂闊さに自ら笑ってしまった。

重なる負債にひとりこだわりて

レジスターの数字幾度も読めり

雨水の光れる朝の歩道ゆく自意識

と言うも他動的なり

ここに重くかかる言葉にふれざれば耐ゆるに易し一日無口  
今月も半ば近しと思うさえ不況を

耐えむあらわれにして

支払いの額にとどかぬままにある

銭を時折思えり淋し

この不況どこも同じと言いあえど

自慰には遠し直接なれば

こうした不景気な作品を送っていた事は全く忘れていたのである。どんなに大袈裟に言っても三十一文字ではと高を括っていた私なのだが、こんな歌の連続では見舞状が来るのも当然である。以来は余り貧乏臭い歌をやめるように心がけている。

所詮あそびの世界を出ない私ごとき者の歌で人さまにまで心配

をかけては申し訳ないと思いついたからである。

だが短歌の一面にはこうした自分を喰いつめてゆくものがつき纏っているのではないだろうか。先輩の吉本青夢が作歌から遠ざかっているのも、こうした一面への嫌悪があるように思えてならない。

磯島の高处にひそむ海鴨の声きき

おれば高みくる汐

携帯ラジオ止めし虚女はたちあが

り抱かるる如く海に入りゆく

海鴨は磯ゆ飛び来て朝光の浜の立

木にしばし鳴きいつ

微笑して匂う夫人もサンダルに幾

つか海丹を踏みくだきゆく

大潮のさ霧は昼の日にきらい流る

る園に咲けるあじさい

離り病む妻を彼の日の媾曳になぞ

らう如く訪い来つるかな

幾度読み返しても飽きない美しい作品群を発表しつつげ、歌壇の寵児とうたわれ、故岩波先生からは「海の青夢」と愛され、彼自身も「僕には短歌があるから生きているのだ」言っていたことも忘れがたい。

或友人もこれに似たような事を言っていた。「短歌のもつじめじめしたものが、たまらなく嫌になったから短歌をやめようと

思っている。」と、短歌は写生から入って写生に終ると言った人がある。その通りに行ける人は倖せである。

アララギの写生を守り通した筈の岩波先生の歌碑が  
ふる里の信濃の国の山川は  
心にしみてとわにおもわむ

菊治

と言う詠嘆になって、州立公園のイビラプエーラに残っているのも短歌のもつ宿命的なものを示しているようである。

私自身の作品も屋根下の暗さをそのまま反映させているのではないかと思う。この業のような暗さから抜け出そうとして太々しく構えても今の私には歌にならない。それは力が足りないためではあるけれどもそれを承知の上で捨鉢に居直り。

心足る夕べと言わんわが吐きし

言葉やさしと喋れていん

それ程に偉きかと問う偉くなどなしと

言うとも満されざるべし

こうした野放図な構えの作品は忽ち忘れ去られてしまう、単なる自己満足に過ぎないものであるから。

短歌にも絵画で言う外光派のような作家が育たないものであろうか、前掲の青夢作品には光線の強さと明さが読み取れるのである。こうした作品を生むためには作者自身が外光の中に曝され慣れ親しむべきであろう。外光の中で実作をはじめたなら、

或は青夢の如く明るい作品が生れて来そうに思える。この明さの中からブラジルの、又は大陸的な作品が生れて来そうに思えて楽しい旅をして見たいものだと思っている。

その結果が、かりそめの夢のようににはかない作品であったとしても、少しは人々の心に潤いを与えるものがあるのではないだろうか。作品の底辺をなしているものから今一度老えなおして見たいと思っている。

(終り)

ミツサ

風早 南瓜

ルアを歩いておると、突然

「セニョールは、ジャボネースでしょう。それだったら、この日曜日、私のシチオまで来て頂けないものでしょうか」

そう、僕を呼びとめた、中年のブラジル人の態度は至ってつましい

「ポルケ」

「それがネー」

彼は何やら言い澁み、舗道の人々を憚るように声を落とし

「貴方はとても信じないでしょうが、実は私の今度新しく買ったシチオに、ソンブラソン（幽霊）が現れるのです」

「オ・ケ・ソンブラソン、ノン・ミ・ブリンカ」

「エ・ベルダーデ」

その男は真顔になって、

「それでネ……。そのソンブラソンは、どうも、貴方達日本人の姿なのです。」

「？ ……。」

「でもその幽霊は人にどうすると言うのではなく、家から少し離れた所にある、マンガの木の下に、時たまの夜、静かに浮いているだけなのです。場合によっては複数のこともあります。気味が悪いと言えば、それは確かにそうですが、でも私は幽霊を恐れません。家族の者もそうです。私の一家は熱心なカトリコです。私共の宗教では、死者がもしこの世に迷った時、ミッサをしてその靈魂を、天国に送らねばならぬことを教えられて居ります。これを行うことは大きな功德で、デウスに人種の差別はありません。それでそんな訳ですから、この日曜日、パードレを招いて、その靈魂の供養をしたいと思えます。」

日本人の姿らしく現れるからには、なるべく沢山の日本人の方に来て頂くことは、少しでも多く、その霊への慰めになろうかと、こうしてジャポネースを見掛ければ、誰彼となくこんをお願いをしています。本当です。絶対に冗談ではありません」

「それで、その貴方のシチオは何処に」

「セツソン・サント・アントニオ、ロツテ・ヌーメロ・ドーゼ」

この一語を聞いた一瞬、僕は、あつ、あそこか、あそこなら

……。

それは今から三昔以上も前、そこには或る若い日本人の夫婦が、そこを土地会社から買い、椰子小屋を建てて、その原始林を珈琲園にと、努力をして居った。

そこへ、この一家の親兄弟なる人々が大勢、日本から渡来した。そうしてそれから、一年も過ぎたかどうか、その若い夫婦は幼な児を残して、ぱったりとその姿を見せなくなってしまったので、何かのついでに、あの夫婦はどうされたのかと、その家族に尋ねると、それはミーンナスか、マツト・グロツソへ、ダイヤでも拾いに行ったのだろう、と言うことであつたが……果して……。

そんな事のある後、どう言う訳かこの一家には、なんとも不可解な死人が続きつぎと……。残り少なくなったその家族は、その土地を遂に売り払って、どことも知れず転住し、それからその土地の持主は変りに変わったのだつた。

その頃の我々入植者は、各々二軒三軒を距て住んでいて、あたりを囲む原始林の屏風は高く厚く暗かつた。

この事件に限らずどこで何がどう取り行われようともい それを詳しく知る術はなかつたのだ。たとえばこう言う不幸な場合でも、只少数の入植者が集つて、その葬いを物悲しく済ますばかりで……。

今ルアでだし抜けに、この大男の言う事と、こんな過去とは係りないものかも知れぬ。又たとえその土地柄につながりある

としても、そんな昔事が今に尾を引くとも思えぬが…。

荒唐無稽と笑い捨てるべき性質のものであろうが、

それはともあれ、かつての草分けの、同志の夢の跡なつかしく「そうですか、それは奇特のこと、その日曜日のミッサには、必ずお詣りしましょう」

僕はさりげなく、その男に答えたのであった。

(以上)

ご尤も

### 三 浪

或るクリスチャンの牧師さんが、アマゾン大江で、信者と集会を行つての帰り、上潮のポロロカに遭遇した、カノアの転覆は、まぬがれないことになった。

牧師さんは冷静沈着に、「信仰あつき者よ」と一同を見まわして、一人一人に、「泳ぎはできますか」ときいて曰く、「泳ぎのできるものは救われる、泳ぎのできないものは天国で救われるであらう」アーメン。

ご尤もなありがたいお言葉、ほんとにあった話。

## 短歌

第一九回、全伯短歌大会が開催された。椰子樹社後援であつて、コロナア年中行事の一つである。

日時一九六七年九月三日

場所 日本文化センター大会議室

出席者 九五名

投稿歌数

雑詠

五〇五首

課題詠（皇太子） 一二五〇首

投稿者数、雑詠 一二五五名

課題詠 二五〇名

互選高点歌

高橋よしみ

落ちるべきもの落ちつくし裸木の裡ひそやかに充たす営み

代表選高点歌

佐藤博三

かぎりなくわが失いてきしものがこの草原に青くつらなる

席題高点歌

水本すみ子

透しくる朝の彩に覚めながらなお整りくる悔恨一つ

大会投稿歌数、出席者共に年々増加して、毎年レコードを破り続けで来ているという。

椰子樹関係者に言わせると、同語会員は、現在幾分減少気味で三〇〇名を欠くとのこと。短歌が文学として追究され、作品

質が高度化することは歓迎されてよい。だが、もともと日本伝統の短詩型文学は、大衆性のあるもの、その趣味性が広く楽しまれることも、一方に助長されなければなるまい。

各地方に興味豊かな短歌会を作るとか、サンパウロ市内の各バイロに小短歌会を興すとかして、趣味人の参加をすすめる努力の欲しいところである。

「椰子樹」は、本年一〇月、第九五号を発行した。安良田編集人の熱意がこめられて居り、なかなか立派なできばえである。

コロナ歌壇で、一昨年頃から表面化し、誌上にちらほらしていた前衛傾向短歌に関する論議が、昨年から今年にかけての武本、大場の登場で頂点に達した感があった。これもコロナ短歌土壌の地固めには、必要なものであつたろう。

どの文学分野でも、無風状態の続くことは、その進歩ということから考えて、歓迎すべきではあるまい。

来年、「椰子樹」は第一〇〇号に達するが、その記念として別冊特集号を発行するという。そして、これを最後として、発行を停止するという提案があり、現在前後策が建られているとのこと。当局者は慎重に事を運んで頂きたいと思う。(青)

第二一回、全伯ハイク大会が催された。これはパ紙社主催の大会で、主として、ホトトギス系、佐藤念腹主宰「木蔭」誌に拠るコロナ俳句作者の行事である。

日時 一九六七年一〇月一五日

場所 日本文化センター大サロン

出席者 二四二名

投稿句数

兼題（パイナ、山眠る、移住祭）

一八〇八句

席題（サングラス、サビア）

約五〇〇句

投句者数 兼題

六〇三名

席題 約二四〇名

兼題高点句 宮崎怪城

パイナ飛ぶ牛追うて来し馬も売る

この大会では、兼題高点句は、代表選者八六氏の選出によるものであり、席題高点句も、出席代表選者四八氏によって選出されたものである。

また、その他に、兼題、席題ともに念腹選というものがあつて、兼題五〇句、席題三五句の発表があつた。

そして、作品価は、互選入選句よりも、むしろ、念腹選入選句の方が高いとみられている。

大会投稿句数、出席者共に、昨年の大会を上回り、記録を更新している。俳句大会もまた、年々盛大しており、ヨロニア短詩型は花盛りの観がある。

コロニア俳句界には、この「木蔭」中心の大会の外に、近代俳句系を名乗る「火焰樹」社とサ紙社共催の、火焰樹全伯俳句大会、マリリア、ガルサ方面の「スバル」に拠る俳句作者を中心とする全伯俳句大会とがある。

これら近代俳句系の大会も年中行事であって、火焰樹大会は、第五回を来年一月七日に開催の筈である。

コロニア俳句界でも、ホトトギス系と、近代俳句系とは、共に相容れないところがあり、対立の形を示している。しかし、現在のところ、ホトトギス系「木蔭」派が圧倒的な多数を占めている。この両派が均衡を保つようになれば、コロニア俳句は量質共に、一層の向上を示すものと思われる。

一昨年頃、両派の論争じみたものが現われたが、現在は至極平穏であり、接触が一向に無いように見られる。俳句作者には大人の風があると言われるが、若手の中からは、この無風状態を打破しようとする気鋭の人が現われても悪くはない。(赤)

# コロノ時代の思い出

加藤 梅晨

長島 完一

## 特集・第1回

### 健康を第一として

加藤 梅晨

私のコロノ時代の思い出と言っても、別にこれと云う事もなく実に平々凡々たるものであった様に思う、而しそれを聞かれて見ると、日本に居た時と全く異った生活に飛び込んだための驚きのために、今に至っても忘れきれない事もあった。

それも今思うと些細な事で有るが、書きたてて見るのも恥しい様ななつかしい様な事ばかりで有る。その尻こそばゆい様な事を少し書いて見る事とする。

私共の乗って来た船はリオ・デ・ジャネイロ丸でサントス港へ着いたのは一九三四年八月一日であった、その時の事は「コロニア」五十二号に随筆として書いたので本稿はその続きの様なものである。

私の家族は他の三家族と共にモジアナ線のセーラアジュール駅のパライズという耕地へ配耕せられた。そこが良い耕地か又悪いファゼンダかなにも知らない。通訳であるというK氏という人が迎えに来て居られた。まるで土人を思わす様な半黒のみすぼらしい風采の人であったのでこれはどうせよい所ではないであろうと思われたのであった。

それでも仕方がない西も東も知らない事であるからして、その人の指図通りに移民列車の人となった、何がさてあの頃の移民列車は実にのろのろとしたものであった。約一昼夜ゆられ揺られて降ろされたのはモジアナ線のペントキリーノという駅であった。

#### うどんの中の鶏の足

汽車から降りたのが午前三時であった、ブラジルは熱帯国という事を考えて来たのに、これは又寒い事、がたがた震いながら露天のプラットホームに降り立って見ると駅舎の中に一燈あるのみである、大荷物は十日程後れるという事で当座の必需品を手荷物として持って来たのでその中から毛布を引っ張り出して幼い子供達を包み夜の明けるまで駅舎の軒に一固りとなり夜の明けるのを待つ事になった。案内役のK氏はファゼンダから自動車を迎えに来て居る筈であるから見て来ると出て行つてから中々に帰って来ない。子供達は睡いけれども寒くて寝られぬ故か機嫌が悪い。その内に口の悪いのが「そろそろ地獄の一下目かな」等というし、女達は愚痴をいい出すやら全く遣り切

れない数時間であった、その内に夜も漸く明けて来て人心つく頃K氏が帰って来た、今思うと彼は何処かでピングでも呑んで居たのであろうと思う。その直ぐ後に実にガタガタの小型カミニオンが来てこれに乗れと云う。一寸その辺迄と思つて荷物をまず積みその上に一行三十余名毛布に包んだ子供を抱いた四人の女房達を始め怖しがる子供達を諭しながら一同乗り終つたのは目射し廻る頃で有つた。

ゴトゴトガタともの三十分を来たと思う頃とある底地に車が止まつた。運転手が空缶を持って谷に行き水を汲んで来て自動車の中へ注げば白い湯気がたち上るのであつた。案内者曰く「この様にしてこの自動車は昨夜十時に耕地を出て今朝やつと着いたのであるから耕地に着くのは少し後れるであらう」と全くこれはあきれたものである。

而して車は又ゴトゴト狭い道を揺れ揺れて行くのであつたが、その中に、今やファルマシヤの主人公として押しも押されもせず営業している長男もその時は尋常三年の九才の子供で有つた「あてもうかなわん」と云い出し声をたてて泣き出した、貧乏はして居ても京都という都会生活、自動車といえはハイヤーかタクシーより乗つたこともなくこの悪道をぼろカミニオンに揺られ通しでは大人の自分達でもとても心棒出来兼ねる処で有つたが、案内者はブラジルではこれは上等であるしっかりしなければ駄目だとたしなめるのであつた。そんなことをくり返す中に二時間余りしてやつと目的地ファゼンダパライズのコロニアに到

着する事が出来た。

一とまず吾々四家族の者達は二三軒の先着移民の人達の所に別れて少憩する事になった私の家族は通訳K氏の家にお邪魔したのであった。はいって見ると家の中は妙に薄暗く、窓には布切れが下げてあり、古い長卓とパーリヤで張つてある椅子が四脚あるのみ、早速十二三才の娘がカフェーを出して呉れたのであったが何とそのシーカラの汚ない事、あの頃移民は神戸出発時にブラジル用として炊事道具を求めて来たのである、私達も皿もシーカラも茶碗も皆瀬戸引の物を買つて来たのであったが、そのシーカラの瀬戸が剥げてペコペコに曲つたのもあるシーカラにカフェーを出して貰つたのであるが、一目見て家族の誰も手を出さず折角出して下さつたのであるから、まず私は目をつぶつて一口呑んで見たのであったが何とそのカフェーの香りのよい事又実に濃厚に出て居る。故郷の京都の何処で呑んだカフェーにもこんなおいしいのはなかった。早速妻や娘達にも呑む様に進めたのであったが果たして皆シーカラの事は忘れたらしくおいしい美味いと呑むのであった。流石はブラジルだと思つた。その内にK氏夫人が出て来られてこれは又たどたどしい日本語で遠来の労を慰めて下さつたが、聞けばこの方は二世の由、随分幼い時から苦労があつたとの事、ノロエステ線方面でK氏がマレッタに罹りこの耕地へ来てより健康になる事が出来た等話されるのを聞き、何にしても健康地に来た事を幸と思うのであった、それからうどんを作つたからと出されたのを見

るとやはり瀬戸引皿が夥しく剥げて居りその中に四本指を開いた鶏の足がはいって居るのを見て誰も手を出す者もなく、詮方なく私だけが少しばかり御馳走になった。この時に食べなかつたばかりにその夜に子供達に腹が減つたと泣かれて困つた。

今から思うと実につまらぬ様であるがあゝの頃日本から来て見るとブラジルの時代に後れて居るのに驚きもし、なげきもしたのであつたが、最近の渡伯者の目から見ると矢張り同じ様に吾々は定めてのろのろとして明治時代の人間に見えるのも当然の事であろう。

#### マカコベリーヨ

私等四家族はコロニアグランデに入れられた、これは三軒長屋が二十棟程建つて居る。珈琲園に向つて一列に並んで居るコロニアで各住居の裏には十株程のバナナが植えてあり、その下が二十米突程の余作地があるので在るが、各戸に鶏を飼うので作付けは不能であつた、私はその長屋の中程の一棟の中の真ん中に住む事になり、右隣りは高田氏という同航者であり、左隣は黒人家族で有つた。建物は煉瓦作りで有るが上塗りはしてなく床も煉瓦敷で、丁度乃木大将の愛馬の厩の様であり、寝室とサーラと廚があり、サーラに五燭燈が一つぶら下つて居るのみにて夜は読書なんかは出来るものではなかつた。寝室には寝台もなくサーラには食卓もなく、椅子もなく始の間は荷ゴザを敷き、その上に夜具を拵げ家内中が雑魚寝をするのであつた。大

荷物が着いてからは荷箱が卓代りになり、椅子代りに用いた。食料はすべて耕地の売店で買い、配給生活で、実にみじめといえはみじめ哀れな生活であった、が、私の家族は逆も朗かであった、と云うのは、私の渡伯目的というのは他の人の様に一旗揚げ様の、金を儲け様の、という目的ではなかった。それは数年以前から長女が結核性骨膜炎という業病に罹り、全治不能と言われて居ったのであったが、主治医から紫外線の強い処で住むならば治療の甲斐があるであろうと云われたので、歩行困難の長女のための移民で有った。

親戚知人の止めるのも聞き入れず義絶までしての渡伯であった。航海中も船医の世話になったのであったが、ブラジルに上陸してからめきめきと快方に向い、一ヶ月程過ぎる頃には長年の歩行困難も殆ど全治して毎日珈琲園に就働する事が出来る様になった。これで吾が家の渡伯目的は殆ど達せられたのであり、長年の病人が無くなったので毎日の労働は快適であり朗らかな明け暮を迎える事が出来、何よりも健康を喜ぶのであった。而し生来の都会生活の私の家族は何時も草に追われ、又収穫時季にも他家の半分程の仕事の嵩であった、貧乏は何時迄つきまるとして居ても家の中は何時も朗かであった。それは金よりは健康を第一にして居ったからであろう。

斯くする程にコロノ契約の一年も余す所四ヶ月程になった頃になると、そちこちで来農年の事について話がもち上るのであった。やれ何処そこのファゼンダはメザダをいくら払うとか、

借地農に出て米作りをするとか、新山を買う人があるとか棉作りの歩合作をするとか又は知人を頼って出聖するとか、千差万別、而し私の様に知人もなければ資本もなく又人並の労働力もないものは誰も誘っては呉れない。只長女が健康体になったのが只々嬉しくて暇があれば文学書を引張出して晴耕雨読を楽しむので有った。

そんな折のある日、珍らしくパウリスタ線の方の旧移民の人が二人来訪せられて今宵浜田氏の処で座談会をするから集まらないかと通知をうけた。それまで旧移民と云えば隣耕地のマレッタ家族、借金が嵩んで動けなくなつて七八年もコロノを続けて居る人とか、茲の通訳のK氏位より接触がなく、下手に出あるいてもろもろの人達と關係を結ぶのが何となくうとましく思つて居たのであつたが、何だか今度は其の座談会に出て旧い人達の話聞いて見る氣になつた。

来訪者というのは、五十才あまりの年輩の南という人とまだ二十台に見える体格のよい葛山という青年であつた。南氏は三重県の出身とかであり至つて小柄の丁度絵にある豊臣秀吉の様な人であつた。葛山氏は中々の大家族の長男であり渡伯七年目とかにで珈琲仕立の六年契約を今年終つて原始林を購入して新山を開き、棉作を始めるのだとの事であつた、両氏が渡伯したのは三十年近くなる由初めはモジアナ線ドラデンセやアララクワラ線パウリスタ線ノロエステ線等を渡りあるき各地でコロノ

を手始めに通訳や珈琲仕立の請負やらを体験したとかで全くのマカコベリーヨである、秀吉に容貌が似ているから一入と年を重ねた猿の様に思われても仕方あるまい。而し物言いから態度も心得たもので其の身だしなみのよさにも感心するのであった、先ずブラジルの事について何も知らない吾々に日常生活のことから仕事の上でも契約の仕方カフエー六年契約はこれこれ四年契約はこの様にと事細かに自分の過ぎ来し事を基本にして明細に話された。又初期移民の人達のマレッタその他の風土病で難儀せられた事、果ては嫁取りの話から耕地とコロノの紛争事件で海興の明穂氏に談じ込んだ話等、次から次へとサーラの焚火を囲んで夜の明けるまで話しは尽る事はなかった。

今に至りてもこの時のこのマカコベリーヨの話は忘れる事が出来ない。

扱て以上の様な事があって私のコロノ生活は一年で終って仕舞ったのであるが、何といつても着伯最初の考え通りお金の儲かる所よりも健康を信条として来たお蔭か三十余年を経た今日迄、渡伯時の七人は健在である。

(終り)

## 幸運

長島 完一

一九三〇年二月二日 月曜

午前八時頃

私は昨日大雨の中を、原始林の中をかけずり歩いて切つて来て、同宿の日本人大工さんにすげて貰った真白いエンシヤドンの柄を抱え、切株に腰を降ろし、ロンドンから買って来た絹の洋傘をさして通り雨をやり過ぎしていた。雨は十分もするとはれ上る。相棒のブラジル人カマラーダが立ち上るから渋々と立ち上がる。蜜柑の苗を植える穴を掘っていた、40×40×40糎で底つぼまりではいけない。

日の出時刻から働いてまだ三つ目の穴。私のエンシヤドンは二封度だが、町で一昨日買った許りで、今日がカマラーダ初日、全然といでないし、無格好に長い。

相棒は背丈一米八〇位はあるというのにエンシヤドンはすりへっっていて、大きさは私の半分位、厚さもへっっているから軽いに違いないと横目で睨む。サツト打ち下ろすとスポツとめり込む。私はドスンと落す、半分も入らない、土がついて了うんだ。一打毎に土をおとしているわけにも行かない。こんなエンシヤドンでは四十糎の穴の底を平らに出来る筈はないとボヤき乍ら、穴の周りを廻り乍ら掘ってどうやら格好づける。それを、廻つて来た監督の河田さんは「こんな下が狭くちやいけない」と言

う。小さいエンシャドンをジョゼーというカマラーダから取って来て下を削って見せる。学生時代なら「それちあ、このエンシャドンで掘って見て下さい」と言いたい所だが、待て待て「上官の命令は朕が命令と心得よ」か、と思って叩頭く。この間迄行って居た兵隊の心得が役に立つのかい、と心で笑う。

掌がヒリツとしたと思ったらマメが破れてしまった。マメが破れたからって普通は一日四ミル五百のところを特別に五ミルを貰うことになっている新カマラーダ私は怠けるわけにはいかないんだ。

上げるにはマメの所に力がかからないと、大上段に振りかぶると皮肉なもので、ペットリついた土がソフト帽の上へドサリ落ちた。ジョゼーともう一人がクツタクなく笑う、私も苦微笑して見せる、他にはどうも仕様がなない。

三つ目の穴を掘り終える頃には又通り雨様だ。

ヤレヤレ。四つ目が終る頃には柄が赤土色の上に、近くで見ると血で染まっている。血染の柄、なんて凄えな。

九時になったらペンソンの小母さんが五階建てのマルミッタを持って来て呉れた。シヨゼーが、ヴァモ・アルモサーと言う。五階建にはアロス、フエジョン、卵、肉とアルファセ二枚。ジョゼー達のは小さい鍋である。小恥しい豪華さである、月七〇ミルの飯って上等だな、と思う。兵隊を出てから久し振りの空腹だ、大分食べた。一時間の休みだ。

話すこともないし出来ないし坐っていると親爺の怒った顔が

心に浮ぶ。

「ブラジルなんて知り人一人もないところへ行つてどうやって食うのか」

「どうしても食えなければ乞食をしたって食えます」

「そんなこつたから承知出来ないというのだ。末は野垂死にきまつてる」。

ロンドン留学と言つたのはぜます為ではなかったが、金も旅券も持っていたのでロンドンからブラジルくんだりまで来てしまつた。洋行、と喜んでいた親爺を結局だましたことになつちやあつて、彼、怒つてるだらうな。

十時

ヴァモ・コメサーである。掌が痛い。痛いぢあ済まされない。「血が少し位出たつて死にもすまい。エイ、糞！ だ」。でも百姓つて辛いもんですな、と独り言。

突然畑が凍つたような感じがした。鼻唄交りの相棒がピタリと黙つた。ハテナと思つて見ると、半黒のデカイのが上つて来る、ツバの広いフェルトの帽子、厚い唇、つき出た下っ腹が近づいて来る。「総監督か？ 冷酷無残？ 怒つたちこわ相だな。お前は役に立たない、と言ひ相だな」と思つたつて穴を急にうまく掘るわけにやいかない。彼はジョゼーなどと暫く話していた、ジョゼーは連隊長の下間に会う上等兵つてところ。連隊夜は新兵の所には来なかつた、相手にしないつてわけか。

「十時から三時迄とは長いな。マメ君、君はどうする気だね。雨

君、やって来て呉れ給え」

雨は招きに応じて一時間に二回位来て、十分間ぐらいづつ小休止を与えて呉れた。雨が行ってうと、コン畜生！　コン畜生！　歩兵一連隊だぞ、台湾の学校の代表だぞ！　瘠我慢がモットーだぞ、エイエイエイだ。

一日一円五十銭を貰うのは辛えもんだなあ。

底の方は棒で削って、手で搦り上げる。マメも休まる。力も助かる。ああ、いくつ位掘ったのかなあ、もう駄目だ！　両君、両君……。

私の願いを聞いて雨は頻繁にやって来て長くつき合って呉れる様になった。

何時だろうな？　忠勇なるカメラダは時間なんか問題にやしないんだが、何時だろうな？

二時頃かな、河田さんが雨の中をやって来た。

私の掘った穴は見ない、見るに耐えないのかな？　ジヨゼーとペラペラ喋ってたがやがて私の所へもし来て「今日はこれで御終いにしましょう」、「エエツ？　帰っていいんですか？」

私は柄の赤く黒くよごれたエンシャドンと真白な柄のエンシャードと、消毒薬入り水五立入コロツテを持って、絹張り洋傘をさして揚々と引上げる。負けて帰るんぢあないもんな。何故そんなに荷物があつたかつて？　カメラダは何をさせられるか判らないから道具は皆んな持って来いって言われたんだ。それでもフオイセだけは置いて来たんだ、大工さんが「フオイ

セは始めての人には使わせないよ、使うって言ったなら取りに來ればいいさ」と言つて呉れたから。

午後七時頃

石油缶に雨水をためて身体を拭き手足を洗つてジャンタ。ウトウトしてしまい相だが熱帯衛生の本に「疲れ過ぎたときはアルコール飲料を少しの組んでぬると疲れがぬける」、とあつたのを思い出し、まさに今日なりと觀じ

「葡萄酒を売つてる所はありませんか」と聞と

「ナベンダにあるよ」「ナベンダつ、て何処ですか」

まつくらの中をナベンダへ行く。「ヴィニョ」というとゴチャゴチャと返事する。金を払うかと聞いているのかな、と金を差し出す、ゴニョゴニョ。黙つてたち一本出して御釣を呉れた（壇は返すのかつて聞いたと後で判る）。帰つて一杯のんで横になつてウトウトしていると、ポルタが開いて河田さん。「大将、どうしてるかね」と覗き込む。「ヤア日に焼けて真赤だ」と引つ込む。雨が降つて日に焼けるかいと思つてる内に眠つてしまふ。

二月三日 日の出頃 晴

昨日の続きだという。掌がキャッチボールの後の様にはれぼつたい。

今日はエンシャドンの先にヤスリを少しかけて貰つて來た。

ジョゼーを先頭に上って行く。

昨日掘った穴を見る、確に下手糞だ、手直しをしておく。

・八時頃

有田さんが上って来る。嬉しいような恥かしい様でもあり、ドキマギしていると

「別のところの仕事です」

私は試験苗圃へまわされた。苗は苗同志ってわけか。有田さんが先生だ。

今度はエンシヤーダだが、エンシヤドンよりずっと楽だ、楽だと言ったって横っ腹が痛かったり、掌が痛かったり、汗が目に流れ込んだり……。

ずっと後で知ったのだが、私の移転は総監督が場長に進言して呉れたのだとのこと。

「あのジャポネース・ノーボはあそこで仕事をさせたら死んでしまふ、楽をとこころへ廻してやって下さい」。

夏の最中カンカン照らされて「歩兵一連隊だぞ、台湾の代表だぞ、瘠我慢がモットーだぞ！ エイエイエイ」と頑張っていたら、日射病疑いなしだったろう。

一ヶ月経つと二十二才の若さは鬼針金で垣作りでも、エンシヤドンでも、フオイセで池掃除でもバリバリ。

私は総監督の好意と雨様の御蔭で落伍せず、いついて三十五年を越す。

グラッサス・ア・デウス。

## 川柳

第六回全伯川柳大会が日毎社主催、ブラジル川柳社後援で開催された。

日時 一九六七年九月一日

場所 日伯毎日新聞社サロン

出席者 約六〇名

投稿句数

兼題（自由吟） 八六八句

席題（歓迎） 約一二〇句

投稿者数

兼題 二九〇名

席題 約六〇名

自由吟高点句（米） 原見春兆

芸のない石漬物の味を生み

席題 佐藤碧村

歓迎の数に己の位置を知る

この川柳大会の特色は、各国からの投稿がある点にある。日本、アメリカ、アルゼンチン、ペルー、メキシコなどの川柳作者が作品を寄せている。

この川柳大会も、年々盛大していて、活気に満ちている。し

かし、コロニアの川柳人が扱る「ブラジル川柳」誌は、ここしばらく休刊しており、一沫の淋しさが感じられる。コロニア川柳人口は約三〇〇とのこと、専門誌が発行されてもよいと思う。

コロニアの川柳は、長い間、井上剣花坊系の新興川柳を奉ずる堀田栄光花によって統率されて来た。以前には、古川柳派も少数はあったが、近年は完全に逼塞したものか、その活動は見られない。高野五迷亭が健在の頃は、折々作品を見せていて、読者を楽しませたものであった。

新興川柳一色というのも、川柳界の色彩に欠ける憾みがなくもない。

ところが、新興川柳派も、最近はあまり平穩無事を謳歌してばかりは居られない、その中に、前衛傾向の思想派とも見られるものが擡頭しつつあるのが見られる。

コロニア文学第四号に掲載された「コロニア川柳の現状と批判(安村玉泉)」は、波静かな川柳界に一石を投ずるものとして、川柳作者の関心を集めたようである。

この安村論文に対して、日毎紙上に池田無哲坊が感想を書き、それに答えて、安村玉泉がパ紙に書き、次いで、同じくパ紙に池田無哲坊が応酬する、といった一種の論争が続けられている。

まだ継続中で、どういう結論が出るのかわからない。しかし、川柳界に刺戟を与えたことは事実であり、向上への足がかりが提供されたことは認てよいようである。

(黄)

文学研究会（16・17回）

〃コロナア文学〃第三号 合評会

日時、一九六七年三月一七日

場所、聖美会教室

出席者、藪崎正寿、松平和也、遠藤貴久男、菅野興子、妹尾三郎、木村正和、陣内しのぶ、前山隆、武本由夫、増田恒河、野尻アントニオ、梅崎嘉明、水野林、星野良江、小清水礼子、島木史生、宮尾進、田畑三郎、大日方荒弼、（司会）清谷益次、

○

コロナア文学、第三号の合評は、一回で終了せず、第一七回、四月二〇日の文学研究会でも行なわれた。

第一回は小説を中心に、第二回は評論と詩歌の合評に主力が注がれた。

次に合評会の大略を座談形式で発表しておく。

司「これから、第三号の合評に入ります。まず、その出来栄えから、表紙の感じなど、  
増田「色がいいですね。」

島木「表紙の画について、解説があるといいんだが……、次号から……」

前山「どこかに〃表紙のことば〃を入れるといいね。」

宮尾「少しきゆうくつだね。ぎっしりという感じ。

前山「もう、そろそろ文学誌らしく余裕ある編集にしてもいいよ。もつと余白を取ってね

司「小説、論文などの配置はどうでしょう。

宮尾「最初と最後に重みのある小説が載せてあって、よくできていると思う。選后感はもつと活字を小さくしたらどうだろう。

前山「そう、そして、載らない作品の批評をもつと詳しくしたいね。

増田「組み方に変化があつていいね

大日方「体裁はいい。表紙の色が気に入ったね。今度は目次のカットを取りかえたら、

前山「次号のは沖中さんに頼んであります。毎号変えるのは大変だから二、三号で変えていきたいですね。

司「では、そろそろ内容に移りますか、まず小説「仮小屋の来歴」から……

前山「私小説というのは、私を掘り下げるのだが、その私が余り出てないね

野尻「私」のところに材料を引き寄せている。

島木「私小説になり切れていない。

作者が演技し、作者が書いている。

作者は眺めているということね。

大日方「私」が作中の人物とからまり合っている。

島木「はじめに男と女が出、さいごに、その男女によって生活

の芽ばえが書いてあるが盛りあがりがない。それに、もつと作者は作品の中で踊ってよいと思う。

前山「僕は、作品が作者に密着し過ぎていると思うんだが……。」「  
宮尾「これは、移民の生態アラモードで、細かいところが出てないよ。」

最後に、乞食には生活があり、日本人の方には生活がなく夢想的だという、そこに問題意識が動いていたとしてもはつきり出ていないね。

大日方「いろいろ問題もあるが、日本人の出し方には手ごたえがあつたね。」

妹尾「力量は充分買えるが、藪崎さんの作としては余り高く評価できないと思う。」

松平「それは構成の敗失ですか」

司「いや、構成はうまいと思います。」

この小説の主人公は浮浪者で、移民の執念深い生き方を描くために出したんでしょね。サンプルとして、

大日方「石けん箱に名を書いた人物、人間の所有の形式を書きたかつたんじゃないかな浮浪者だけに問題をしぼりたくなかつた。もつと、いろいろな問題を書きたかつたんじゃないかな、妹尾「もつと掘り下げたら効果があつたと思う。何か淡い感じがある。」

前山「古本屋があいまいだね、

田畑「作者は古本屋だと思うが、冷静だね、

島木「読者へのサービスが感じられるね。片ちゃんばな人間が出るが、古本屋は分別があり、ばらばらのものを繋ぐのに必要な存在だよ。

藪崎「意図はあるんですか、意図どおりに書けたかどうか。作者の参加が浅いということは考えていました。＂なりふりかまわず＂という点から、入り方が浅いわけで、作者がエッセイなどで自作品を語る時は、＂なりふりかまわず＂なのですが、僕は、まだそうなり切れないところに弱味があるわけです。このことは大切なことなんです。コロナは狭いので、＂なりふりかまわず＂で行くと、一人になってしまいます。だがはばかりが多いからといって、それを避けているなら、文学など止めた方がいいということになる。僕が書きたかったのは、もう一枚ひんめくった不運な、それでいてホンワカとした人物。これを出したいのだが＂なりふりかまわず＂になり切れないところが原因で失敗している。しかし、僕がコロナ的規模で人間を愛している、それが読者に理解して貰えるだけでも、よいという位に思っています。

妹尾「文体は立派ですね。作者の目もよく行き届いていると思います。……

野尻「実生活の上のハダカということと、文学の上でのハダカということとは多少違うでしょう。

小清水「小説を書くには、自分を捨てなければ、だめですね。

司「では、次に“遺書”に行きましょう。

梅崎「藪崎さんののは、純文学ですが、これは又違った意味でいいと思います。この書き方は書き易いので、コロナでも、この程の良さを出すことができるんですね。

野尻「僕は、この小説は好きですね。移民の問題だけでなく、巾が広く、文章がやわらかくていいですね。

司「娘を売る場面、気にならないですか

島木「僕には、この小説、おもしろくなかったね。医者と患者は鼻もちならない。

野尻「イメージを浮き彫りにしているところはうまいよ。何で自分が墮落していくということが作者の書きたいところだよ。

宮尾「藪崎さんのことば、“なりふりかまわぬ”ところがあつて読めるよ。この小説には、何か実感があるね。

藪崎「この作品の骨は、病理、精神分析にあるんだが、作者は、それをよく知って書いたのがどうか。少々疑わしい。

前山「サイエンスの興味で読んだわけではないが、真実感が薄いね。

星野「どうして自殺したのか、その理由がよくわからないんですけど…

野尻「いや、それは、わかるね。

司「遺書はこの位にして、“決別”をやりましょう。

島木「読んで面白いのだが、最後が蛇足だね。あのオチを書

きたい為に書いた小説といった感じだ。 サナトリウムの少女と初恋、どうも陳腐だよ。

前山「サナトリウム、義父 あれは、小説のカナメではないよ。僕は力作だと思うね。彼が問題にしたいのは、“移民”というものが拒否されているか、どうか、ということなんだな。

島木「ところが拒否が感じられない」

前山「如何に拒否されているかの掘り下げは足りないが……」

大日方「経験への批判がなく、只伝達だけに力が注がれている。それだから、水っぽい。もっと濃厚さが欲しいね。

野尻「技術不足だよ。」

島木「短篇を書くには、高度な技術が必要だね。テーマはつかんでいても、しまいのところでごまかす。

藪崎「達者に書く人だが、もっと勉強する必要がある。

司「時間が不足なので、少し急ぐようですがこんどは “再会”について、どうも通俗的に過ぎるようなんですが……

島木「松竹映画だよ。」

星野「大衆小諸によくあるテーマですね。」

前山「話の筋を迫っているだけで、ポイントを掘っていない。

島木「風俗小説なら、それはそれで風俗が出ればいいが、そうでもないね。」

梅崎「しかし、心理の動きは描けていますね。筋にまとまりはあるんですが、どうも弱いという感じですよ。」

司「取りたてて言うことがなければ、”移植”に行きましよう。  
田畑「第二回に比べて、間伸びがしてきたようですね。」

星野「第二号で打ち切った方がよかつたんじゃないですか。  
増田「しかし、筋は転回しているね。」

妹尾「この小説は、第一人称で行ったのがよかつたんだね。  
藪崎「文章に神経が余り使われていないね。言葉を軽い意味で使っている。三人の私が登場しているが心理描写に図式的なところがあつた。シルバーノが描けていない。それでも、読ませるのは作者の力量だね。」

前山「僕が未完作品のこれに批評を書いたのは、作者の努力に声援を送るという意味なんだ。」

藪崎「これまで心理描写が余り出て来なかつたが、今度出てきたのが光っている。女主人公が、何か言う、うらはらのことをいつている。それをひっくりかえし、またひっくりかえして、辛いところを我慢して掘っているのには感心した。」

前山「これで、シルバーノがうまく描けたら立派なものだよ。」

島木「シルバーノが也てきたので安心した。シルバーノを引きつけて書くので、読めるものになつた。」

前山「シルバーノは、俗物がかつてきたね」

松平「むしろ大俗物の方がいいんだよ。」

島木「次に何が来るか、期待させるものがあるね。」

司「どう、作者がしめくくるか、みんな興味を持って読んでい

るようです。では、旧作再録の「死灰」はどうです。

前山「僕は死灰をほめたので、早く出したかった。

島木「土のにおいがする。文章のセンテンスが長いんで、息を  
つかせない。

大日方「文体に特色があるね。武本さんは、三五、六才でこれ  
を書いたのだそうですが今読んでも、やはりいいですね。

島木「短篇の勉強になるよ。会話がどろどろしていて読者の負  
担になる。これで、もっと負担をかけると効果があると思う。短  
篇の場合、考え方、思想などが問題になる。その所に気を  
つかわなければならぬのでむづかしい。

藪崎「コロニア小説は昔も今も余り変っていない。日本などで  
は、三一〇年も開きがあると、うんと違っている。その点、コ  
ロニアでは小説が余り進歩していよいよだね」

前山「読んで旧くさくないでしょう。

司「当時としては洗練されたものですね。

増田「文章に無駄がないね

前山「構成家族というコロニアの底にある問題を取りあげてい  
る。僕、この問題で論文を書きたいと思っっているんです。」

司「『賭博農時代』はどうですか、

前山「当時としては、いい作品ですね、だが今読むと、やはり  
時代がかっている。

島木「古典ということを考えざるを得ないね」

司「大分おそくなりましたから、今回は小説だけにして、次回

に論文や詩歌を合評したいと思います。  
ごくろうさまでした。

## 合 評 会 (二)

日時、一九六七年四月二〇日

場所、 聖美会教室

出席者 増田恒河、宮尾進、清谷益次、小清水礼子、菅野興子、  
藤田勇、田尻鉄也、武本由夫、山添良一、島木史生、玉井礼一  
郎、前山隆、野尻アントニオ、鈴木悌一、水野林

○

今回は、前回到引き続き、コロニア文学、第三号所載、論文  
と詩歌の合評を行なった。最初に、宮尾会員より、「農業と協同」  
文学賞入賞作品決定（入賞）牛の男（春日健次郎作）について  
の報告があつた。そして同賞作品に対する石川、松村、浜野、三  
在日選者の選後感の発表があつた。

三選者とも、コロニアの文学に対して、非常に好意的な感想  
を述べ、激励するところが認められた。

次いで、清谷委員の司会で、合評会に移り出席者より、さま  
ざまな発言があり、賑やかに、終始和やかに会を終了した。

次に、その要点を略記しておく。

評論 『不信の世代（金子謙一）』

『コロニア文学への期待（斎藤 広志）』、『ブラジル川柳を語る（堀田栄光花）』、『不信の世代』については、筆者は、一体何を言おうとしているのか、はつきり解らないという発言が多かった。結局、精神薄弱の不幸を言いたかったのだろう、という説と、暗中模索を言いたいのだろう、という説、とが、この論文の結論となった。

『コロニア文学への期待』“百の調査よりも文学”といているようにも受け取れる。何かくすぐったい感じ。これは斎藤さんの昔からの持論、といった発言が続き、こういう祝詞でなく、期待するなら、もつと辛辣をことばが欲しいとの希望があった。『ブラジル川柳を語る』。これは評論というよりは、“概要を語る”で、川柳の宣伝か、という声ありどうあるべきかを語って欲しかったとのことばが出た。

#### 特集 『私の終戦（清谷益次）』

「昭和二十年冬八月（水野浩志）』、『私の終戦（服坂勝則）』「私の終戦（生島かおる）』『終戦の憶い出（廷満三五郎）』

この企画はよい。できるだけ多くの人に書いて貰い、毎号特集し、後に一本にまとめようという話になった。

負け組だった人は書き易いかも知れないが、勝ち組だった人も、どしどし書いて貰いたい。ブラジルの勝ち負け斗争は、日本のジャーナリズムも猟奇的には取りあげていた。しかし、コロニア自身としては、猟奇ではない。コロニアは、この問題を

じっくり反省し、そこから、もう一度、コロナを見なおさなければならぬ。という議論が多く出た。一世ばかりでなく、二世にも書いて貰いたい。これは文学的でなく、報告書でよい。それは、文学の素材、基盤という意味からも価値があるとの、主張に賛意が寄せられた。

各篇の出来栄えについては、清谷氏のもものが秀れていたこと、生島氏のもものは、短かいが、その事実の迫力があることなどが語られた。

紀行文『心のふるさと（矢島健介）』

これは“紀行文”ではない“思ひ出話”だ。いや“小説だ”というふうな、議論の応酬があった。結局、作者が“小説”と主張すれば小説“紀行文”といえは紀行文、という、マリオ・アンドラーデの説が野尻氏から出、それでは“紀行文”ということにしておく、ということになった。

大体、コロナの小説そのものが、この紀行文の域から出ているという論が出、続いて、“小説”とは何か”という議論に移り、小説の技術論、本質論をやるうという風に発展したので、司会者が、もう一度“作品論”に戻ることを要求した。結局、情動的で、迫力はないが、ほの人びととしたものがあり、読める文章であったということに落ち着いた。

詩、『透明な空気の中の市街（横田恭平）』『アマリリス（藤田勇）』

『燃えない木（真木衿子）』

最初、「詩」についての一般論が出て、さかんに「詩」とは何か論じられた。感動が文字になる。リズムによる感動の表現、視覚的な反応による芸術感覚の伝達など、いろいろ論じた後、各篇への感想発表があった。大むね好意的な批評が多く、作詩のさかんになることを希むの聲が高かった。

「A Macula (Antonio Nojiri)」

最後にポ文の野尻氏の小説について、その艶色が話題になった。文章の巧妙さに対する賛意が寄せられたが、何故、こういうことが素材として取りあげられたか、に対する質問があり、作者からの応答があった。

結論的に言えば「愛情」を求める心の遍歴を書く為、との事であった。

以上で、大体、合評を終え、後は、賑やかな文学雑談となった。出席者の一部は、まだ議論の結末を求めて、どこか、席を変えて、第二次会を催したらしい。いつの研究会でも第二次回では文学にからまる珍談奇説が横行するので、それが楽しみだという出席者もある。

文学研究会（18回）

『牛の男』に就いて

発表者 清谷益次

“牛殺し”という、日系の血が混っている人間としては特異な職業を持つ、父が日本人、母がイタリア人である混血児が、親方の一人娘を愛しながらその母親と肉体関係に入り、親方の不慮の死後、事業を嗣ぐべく入（・）り（・）ム（・）コ（・）し、娘と結ばれるという筋である。

言うまでもなくこの作品は、六六年度「農業と協同」文学賞候補の一つに挙げられ、その後日本へ送られて作家の石川達三、浜野健三郎、評論家の松村剛の三氏の選考を経、今回第一席が決ったもので、「日本の文壇有名人の選を経て入賞作になった」という点で、コロニアの創作としては歴史的な意味を持つといえる。

きくところによると、候補作十二篇は予め浜野氏によってふるいにかけてられ、残った六篇が他の石川、松村両選者にまわされたということなので、日本における選者では、浜野氏の「眼」が相当大きな役割をになった、とみてもよさそうだ。面白いと思っただのは――全くの偶然かも知れないが――ブラジルに来たことのある二人の作家、つまり石川（戦前）浜野（戦後、最近）両氏が「牛の男」を揃って一位に推し、ブラジルを知らない松村氏がこれを三位に選んでいることである。作品の評価とということからは、このような結果が生じたことは何の関係もないことかも知れないが、この現象は記憶しておいて、これから後の、日本の作家のコロニア作品をみる眼とか態度とか言ったものに気をつけていたら、案外に面白いものが浮び上って来る

のではないか、という感想を持った。

さて私の読後感のまとめだが、まず私にはロベルトと呼ぶ同じ日系二世の写真屋以外には全く日系人及び日系社会との交渉のない、面も畜類屠殺業という、我々からみると何か空気の重たい世界に生きる人間としては、主人公のマリオが余りにも日本人クサク描かれていることが納得できなかった。これは作者がこの状況下においての主人公の“人間”の設定に配慮が足りなかったのではないかと思うのである。

ここに描かれているマリオは、そこら辺どこにでも見かける二世青年などに比べると、遥かに“日本的”なおいを漂わせている。

一般の日系人とは異なる環境の中に生きるひとりの日系人の姿を書くことが作者の意図であったとすれば、あまりにも“日本人”を意識したマリオの精神の仕組みはこの作の主人公として場違いだと思われる。そう言うテーマに対する作者の意図が初めからなく単なる思いつきだった、とは私は思いたくないのである。また、日系社会と隔絶しているが故に却て強く生じている“日本人意識”ということも考えられなくはないが、そうだとすると、そのような意識を抱くようになるプロセスがどこかで描かれていなければならぬだろう。

作品の第二章を、作者は主人公の生い立ちに当てているが、描かれているものは甚だアツケない。作品全体を通じて、マリ

才の気質とか性格とか言うもの、つまり主人公の人間像が一向に鮮明に浮び上って来ないのは、母親や他の父ちがいのきょうだい（全く日系の血のない）とのつながり合いかわり合いが少しも描かれていないことに原因があると思われるのだが、これはこの作品の価値を決める上で大切な点ではないだろうか。

創作における状況の設定や登場する人物の性格や動きはもちろん作者の自由であって、こういう条件の中では、こういう生い立ちと性格の登場人物はこう行動しなければならぬ、という決ったことは何もない。

作者は意のままに書いていい訳である。いかような虚構も許されるのである。

然し作品が、設定したひとりの人間の真実と、それが生きて行く姿を追い求め、描こうとするものであり、読者はそこに描かれるひとりの人間の世界にふれ、共感し納得することによって作品を読む悦び——小説の面白さとはこのようなことを言うのではないだろうか——を得るものだとすると、一つの状況（或は条件）の設定により登場人物に或る制約が加えられることはやむを得ないであろう。少くとも読者は、設定された一つの条件の中で、ひとりの人間の姿が、これがその状況の中における真実だ、と共感される位に描かれることを求めている。

「牛の男」で言えば、巧みにソツなく書かれているとは感じながらも、読後に強い不満を覚えたのは、やはり、日系二世（イ

タリア系二世でもある)主人公マリオの、これほど特異な環境の中で生い立ち、特種な職業の中で生きながら、余りにもスカツとした意識の状態、別な言葉でいえば何事につけてもキレイ事で終わっている描かれ方に、……ほんとにこんなことだろうか……という疑いを持たないではいられなかったからである。

私が常識的に過ぎる一読者であり、作者はもつと別なところにネライがあつたのかも知れないが、その生い立ちと環境から、つまりこの状況の設定から来るもつと混沌としたものを私は主人公に求めないではいられないのである。自分を日系だと意識することでの混沌、社会人としての混沌、その他もろもろの、このような条件下に生きるものにつきまとう精神と行動の混沌がある筈であり、その混沌が捉えられなくてはこの作品の場合の真実性も「力」も出て来ないのではないかと思うのだ。うまく出来ている割合にはウス手の感じを免れないのは、――何回も言うようだが――マリオの「人間」が作品の上に滲み出ているからではないだろうか。マリオの持つ強い日本人意識についても、そうなるには、父親から牛追いの道々で日本語を習った、という程度では説明のつかない、もつと何かがある筈ではないか。

浜野氏は批評の言葉の中で、

……日本移民の心のかげが作品の上に全く投影していないの

も他の作品に見られないことだ………  
とっているが果してそうだろうか。

私はむしろ、このような状況の中に置かれて育った者に日本移民の心のかげ（そういうものでありそうなものを）を不用意に持たせ過ぎたところに、この作品の不自然さも失敗もひそんでいるような気がする。「ペガ（妻が妊娠）したら、その子は日本人の血が四分の一になるわけだな」と考えた」というのは、日本移民の心のかげであり過ぎるのではあるまいか。

## 第一二回パウリスタ文学賞

### 入賞者発表

◎応募作品四〇篇、古野・尾関・武本・木村四委員選者の結果、六七年度入賞作品は「井戸」作者高野耕声氏、佳作入選「ほむら」作者原奈保子氏と決定した。

◎高野氏は昨年「草のいのち」で佳作入選、本年堂々入賞の金を射たわけ、おめでとう。

◎原氏は、惜しくも入賞を逸したがその力倆には既に定評がある。おめでとう。

## 文学研究会（19回）

ジョルジエ・アマード

― その人と作品 ―

発表者 山添 良一

今回ジョルジエ・アマードを取り上げて見る事にしたのは、彼の作品が終始一貫してブラジル、特にバイア州の風物、人間をテーマにしているからである。彼ぐらい、バイアの南部にあるカカオ（チョコレート）の原料）地帯を強く打ち出している作家は珍しい存在といえよう。

なるほど、エリコ・ベリシモは南リオ・グランデを、ジョゼー・アメリコ・デ・アルメイダとジョゼー・リンス・ド・レーゴは北伯のカンナ（甘蔗）地帯をそれぞれ舞台にして書いているし、社会学者ジルベルト・フレイレはやはり北伯の社会調査をテーマにした一大論文をものしており、いわゆるレジオナリズム（地方文学）の確立につとめている。

、ところがジョルジエ・アマードは二番せんじ、三番せんじになろうが、大同小異のテーマでも、バイアとカカオを取り扱っている。その筋立も、カカオ畑を持ったコロネル（ボス）とか学士さまのその息子におかされる貧乏な家の娘などで、大体型が決まっているようである。

まず最初に作者の生い立ち、経歴を紹介する。

ジョルジエ・アマードは一九一二年、バイア州南部のイタブナで生まれた。彼の父親はカカオの栽培をしていたが、二才の時大洪水とあって畑は駄目になってしまった。一家は暫くイタブナで細々とくらす。父親はまたカカオ栽培をはじめ。この頃の時代をテーマにテラ・ドストセン・フィン（果しなき沃野）という小説に書いている。

十一才の頃、ジョルジエ・アマードの書いた『海』という作文が先生の目に止まり、それからその先生の指導のもとにリュス・デ・ソウザ、ガレー、エルクラノなどポルトガルの古典をはじめ、デイケンスやスイフト、スコットなどの作品を読む。

一九二七年にはじめてア・ルーバ（手袋）という近代詩を発表する。

この頃から五、六年はロマンセ・ノルヂスチノ（北伯文学）の台頭が覚られる時期である。ちなみに例をあげると、一九二七年にはジョゼー・アメリコ・デ・アルメイダのア・バガセイラ（精糖工場）、一九三〇年には女流作家ラケル・デ・ケイロスのオ・キンゼ、カルロス・ツルモンデ・アンドラーデの詩集発表と、それに続く訳ではないが、一九三二年にジョルジエ・アマードは処女作パイス・ド・カルナバル（カーニバルの国）を出している。

そして、つけ加えるならば、この運動は続いて一九三三年には黒人を使役した大農制度と黒人がブラジルの社会文化に及ぼした影響を克明に調査して書いた、文学作品とでもいえるジル

ベルト・フレイレの報告書カーザ・グランデ・エ・センザラ（本宅と奴隷小屋）グラシリマノ・ラモスのカエテース、そしてブラジル南部ではエリコ・ベリシモの処女作クラリツサの発表が見られる。

一九三一年に発表したオ・パイス・ド・カルナバルでは既に見られるが、ジョルジエ・アマードの作品は、一九五八年ガブリエラ・クラブ・エ・カネラを出す迄、共産主義者を誇示している風がみられる。

そのためもあって、彼は政治的な圧迫を受けて何回となく海外で生活を送っている。一九四一年から四二年にかけては、アルゼンチンでブラジル共産党の旗頭カルロス・プレステスの伝記を書いている。

また、ジョルジエ・アマードは世界各国を訪問している。一九四八年にはポーランドで行われた作家芸術家平和国際会議に出席してハックスレーや、エレンブルク、ピカソなどとあっており、一九四九年にはロシア、北欧、中共に行き、一九五二年にはオーストリー、一九五七年には中近東を訪問している。

政治的には一九四五年、伯国共産党から連邦議員に当選（間もなく追放）、一九六〇年にはブラジル文学アカデミーの会員となっている。

次に主な作品を年代順にとり上げて検討をしてみることにする。

ジョルジエ・アマードの処女作はパイス・ド・カルナバル

(カルナバルの国)といって、これは一九三二年に発行されている。

この頃、まだ二十才位の青年作家であった作者は、大部分の文学青年が一度は考えてみる幸福ということについて書いている。

パイス・ド・カルナバルの筋は、或る一人のカカオ長者の一人息子が主人公である。

この青年はパウロ・リージェルというが、彼は金持のおやじに金を出してもらってフランスに留学していたところ、おやじが死んだので、彼はフランスの法律学校は出たが、学問よりも放蕩することと女遊びを覚えて帰ってくる。しかし、彼の心にはいつでも何か満たされない虚無感がある。金には不自由ないから次からつぎへと女を代えていくのだが、とてもその虚無感は満たされない、それに拍車をかけるかのように、一つの虚無主義者のグループの仲間に入る。ここにいる連中にとって幸福は存在しない。凡て虚無感なのである。ところが、或る日、パウロ・リージェルはマリア・デルルルスという娘に恋をする。金持のパウロと貧乏人のマリアの仲はすぐう(、)わ(、)さ(、)になるが、パウロはそんなことは意に介せず、彼女と婚約する。しかし、マリアは幸福である筈なのに、だんだんゆううつそうになってくる。とうとう或る日マリアがパウロに自分は死んだ恋人に処女をさへげてしまっていたのだと打ち明けてしまう。

それを知ってからパウロの決心は狂ってくる。現代人として、そのような過去を問わないという考えを持っていたにもかゝわらず、因習を踏みこえることが出来ない自分にパウロはなやむのであるが、結局彼女から離れていきまたもや女あさりに毎日を通すのである。そうした或る日、虚無主義者のグループの主宰であるチシアノが死ぬ。そのいまわのきわにパウロが彼に幸福は何であるかと問うと、チシアノは、それは我々の手の届かないものだと答えて息を引きとる。

これから先は、いわゆる共産主義者のプロパガンダになる訳である。

仲間の中の一人は、結婚したが平凡な毎日がいやになってくる。ところがもう一人の仲間パウロが会うと、彼はさっぱりした身なりをして、明るい顔で歩いている。不思議に思ってたずねてみるとその仲間は自分は唯物主義者になったからだと答える。いくらパウロが唯物主義は欠点だらけだといっても耳をかさないで、自分は神を信ずる代りに人間を信ずる、現代社会の中にある矛盾や偶像などは唯物主義によって取り除かなければならないと盛んにまくし立てる。

パウロはやり切れない思いを抱いたまま、カーニバルの夜、孤独な心でバイアを去るとというのが筋である。

つまり此の作品では、結婚しようが、宗教に入ろうが、心を満たすのは思想、それも共産主義であるといっているようにとれるのである。

次に『カカウ』という作品は、一九三三年に書かれているが、これは第一作のpais・ド・カルナバルに比べるとやゝ落ちる。第一作ではまだトマス・デ・アクイナスの幸福観について論争を交すところがあるが、「カカウ」は平面な、そしてたくましいヒーロに美しいヒロインがほれる大時代的な構成が目につく。

この物語りの主人公である良家の一人のジョゼーというセルジッペ生まれの青年は、父の死とともに無一文になってカカウのファゼンダに出かせぎに行く。そこでジョゼーはパトロン、つまりコロネルの娘のお気に入りになり、そして既に婚約したその娘から、自分は以前からあなたが好きだった。今からでも遅くないから遠い所へかけ落ちしようといわれるが、その頃、ジョゼーは、ファゼンダに存在する不合理にたえかねて、町に出る決心をしているので、彼女がいうことには余り関心を示さない。そして町に出てきてから共産主義の党員になって始めて生きがいを感じるといなのが筋である。この本では、クリスマスの日には使用人の家族達がみんなでコロネルのところにあいさつに行くことや、一年に一回くるパードレがミサを上げる場面が非常によくえがかれているが、また貧民の子供については面白い批判をしているので書き抜いてみる。

“小柄で、青ぶくれした子供達には三つの異常な点があった。足と、腹とセックスである。セックスは生まれ落ちた日から、す

ぐ横で親達が誰はばかることなく行うので、見てしつていたし、母が数人の夫をむかえるのも知っていた。おさない頃から、たばこで作った太いたばこをすばすと吸い、カシヤサ(地酒)はいくらでも飲んだ。又小さい時から支配人とコロネルを怖れることを覚え、そして、親達がカカオに対していただいている憎悪を見習うのであった。そして親達と同じように育っていく子供達は歴史の悪循環に過ぎない。”

これと同系統、つまり北伯の貧良や大地主の横柄をあばく一連の作品を次々に出している。

まず一九三五年にジュビアバー、三六年にはマル・モルト(死海)三十七年にカピタンエス・ダ・アレイア、四二年に彼の最高の傑作といわれ、そして、彼の生い立ちの記とでもいう、テラ・ドス・セン・フィンを出しているが、これもカカオ地帯の大地主同士の争いと姦通をおりこんだ、他の作品と余り変りがない。

一九四四年にはサン・ジョルジエ・ドス・イレウス、そして一九四六年にはセアラ・ベルメーリヤを書いている。セアラ・ベルメーリヤについては、終りの方で少し私見をのべることにする。一九四六年以後、彼はバイア・デ・トドス・オス・サントスというサルバドル市の名所旧跡案内のようなものも書いているが、どちらかと云えばセアラ・ベルメーリヤから一九五八年、ガブリエラクラボ・エ・カネラを出すまで、ジョルジエ・アマードは創作よりも政治の方に専念している。

一九五八年出したガブリエラ・クラブ・エ・カネラは、テラ・ドス・セン・フィンの第二部とでもいうものである。前作ではイレウスという町の開拓初期をえがいたとすれば、第二部では、町が少し発展を始めた頃になっている。

テラ・ドス・セン・フィンでは、大地主達がまだ地主の決まっていないカカオの作れる原始林を奪うために血の雨をふらせるというのが主軸になっている。西部劇ブラジル版というところである。しかし、ガブリエラ・クラブ・エ・カネラでは、それらの大地主達も二代目になり、そろそろ落日になりかけた時代がとり上げられている。つまり斜陽化していくコロネラット（大地主制度）の悲哀とでもいったものが感じられる。

その次に出したのはベリーリョス・マリニンエイロス（老船乗り達）というコント集である。これは既に隠居した老人達の生活をユーモラスに描いた、どちらかといえばふざけた作品である。その代り作者が自由に書き流したものであるせいか、作中の人物が非常にいきいきとしている点が面白い。わけでも、キンカス・ベロ・ダグア（よっぱらいのキンカス）などという一編は、数十年間一家を支えてきた真面目の標本みたいな一老官吏が娘や息子がかたずき、官職を引退するとがらりと人が変わったようになり、すぐ貧民窟に住み込み、酒をあびるほど呑み、よっぱらい仲間と過す。そして死んでから、お通夜をしていた貧民窟の浮浪者に町中をさんざん担ぎまわされて酒を飲まされおしまいと海にとび込む（これは浮浪者達の言）下りで終ると

ころなどてつて的にふぎけた作品である。一番最近の作は、ドナ・フロール・エ・セウス・ドイス・マリドス（フロリンダ夫人の二人の夫）というが、これはロマンチズムへの後退ではないかと思わせる作品である。

未亡人になったドナ・フロルが再婚して後も、前のやくざな夫を忘れる事が出来ない。その面影が魂となつてしよっちゅう彼女の許に現われるというのが筋であるが、特に面白いと思うのは、新しい真面目な夫にドナ・フロールが肉体的と精神的に感じる不満をそのまま述べず、彼女をあの世から訪ずれる夫の魂に訴えるという手法である。ドナ・フロルは料理学校を開いている、それもバイア料理である。ジョルジュ・アマードはここでも各章の頭にバイア料理の作り方を入れて、ぬけ目なくバイアの宣伝を行なっている。

セアラ・ベルメーリヤ（アンドウ・ゼンパチ氏抄訳）という本の紹介が後になってしまったが、これは、同じく北伯のセツカ（旱魃）地帯をテーマにしたビーダス・セツカス（尾関興之助氏訳Ⅱひからびた生活）と併せて検討して見たいと思つたからである。

セアラ・ベルメーリヤはカカオのファゼンダを追われた一家が『赤い沃土』を求めてサンパウロ州に来る途中の出来事が主軸になっている。

旅に出るときは一家一三人、そして猫一匹であったのが、セツ

カ地帯を着のみ着のまままで通ってくる道中で次々に倒れたり、とどまったりで、結局サンパウロへの最終コース、ピラポラに着いたときは、老夫婦とむこさん、子供一人にマルタという娘一人になっていた。ところが、無料パスを取るためには健康証明書があるのだが、おやじは長い旅のため結核にかかっている。医者はとも証明書をくれそうにない。しかし、一家の窮状を見かねたマルタは、既にフィアンセがいるにもかゝらず、その検疫所の医者に処女を許して父のパスを手に入れる。後でそのことを知ったおやじはひどく怒るのだが、娘の善意とその他に術がなかったことを知っている手前、その怒りをぶつつける所がない。この貪乏ではあるが平和な一家の上に起ったお互いの複雑な気持、そして、娘がいなかったため、そのような手段がとれず、いつ出発できるか分らない難民達の羨望などが克明にえがかれている。

このように自らを亡して一家をサンパウロに送り出したマルタは、苦界に身をしずめていき、家族のものは二度と彼女の消息を知ることがない。一方、サンパウロに行った家族は、落ちついた生活を得る。それから数年後一度もマルタという名を口にしたことがなかったおやじは、いまわの際に「マルタ」と呼びながら息を引き取る。

この後で、エピローグとして、若い時家出してカンガセイロ（北伯の匪賊）に身を投じたマルタの兄達二人や、共産党員になって活動する。

やはり家出したもう一人の兄などの消息が語られるが、これはやはりつけたしのような感じで、作品のヤマはセルトンを脱出してから、マルタが身を売って一家を救うところ迄ではないかと思える。ここでも、ジョルジエ・アマードは社会の不合理にいかりをぶつつけているようである。

ビーダス・セツカス(グラシリアノ作)は、これもやはりセツカ地帯を転々として歩く農村労働者一家の生活である。夫婦と子供と犬が一匹の一家が、あるフアゼンダに辿りつき、そこでやとわれてくらしている中に起る事が簡潔な筆致でえがかれている。理由もないけんかを売られて警官に牢屋に一夜ぶち込まれるフアビアノ、病気になったため、狂水病にかかったのではないかとのうたがいで射殺されるバレイアという忠犬、ようやく肥やした豚を町に持って行って売っていると、執念ぶかく税金を取り立てにくる税吏、こういったエピソードの積みかさねでノルデステの貧困を現わしていく。

ここで二つの作品の共通点といったものを上げると、いずれも北伯の農民の貧困をとりあげ、原因がセツカとそしてラチフンデオ、つまり豪農達の搾取になっていることである。

セアラ・ベルメーリヤでは、コロノ(労働者)達を追い出す地主、ビーダス・セツカスでは利子や訳の分からない金を取り立てて、わずかなフアビアノの貰い分をますます少くする地主がいる。

そしてどちらも、北伯のそういった農民に対して何もしない政府を直接攻撃しないながらも、相当批判的にみているのである。つまり酒を飲んでけんかを売ったりする外、なにもしない警官、せつかく肥やした豚をフアビアノが売っていると、やかましく税金を取り立てにくる官吏、若い娘が来たら食い物にしようとしている検疫所の医者に対して、読者はいかりを禁じ得ない気持になるだろう。

では、人間が空腹の極限状態になった時にはどうなるか、二人の作者の見方の差を訳出してみる。

『彼等がうつらうつらしていると、プレーアをくわえてきたバレイアに目を覚された。みんな声をあげて立ち上った。大きい方の子供は見終らぬ夢を払いのけるかのようにまぶたをこすった。シニヤー・ビトリアは犬の鼻先にキスをあびせた。本当のところ、彼女は犬の鼻先に血がついていたので、キスにかこつけてその血をなめていたのである』

これは、ビーダス・セツカスの一部分である。ひもじさでふらふらになったフアビアノの一家が、犬のくわえて来た獲物を食べる場面である。

セアラ・ベルメーリヤでは、うえをしのごためみんなが娘がかわいがっていた猫を食べる所をこう書いている。

『おしまいに、猫は草むらの中に逃げ込んでしまった。アゴスチンニヨはまるでマルタのせいのように、いかりを込めた顔で

彼女をにらんだ。

彼女に哀願するような眼差しでみんなマルタを見た。マルタはみんなの気持がいたい程分った。長い間、彼等の視線に耐える自信がなかった。

とうとうマルタは思い切ったように立ち上り猫を呼びに行った。猫は彼女のそばに走りよった』

描写はこれで終わっている。おそらくジョルジュ・アマードにはそれ以上、つまり猫を殺したり、みんなでその骨をしゃぶったりするようなむごいことを書くことができなかつたのではないか、と思える。また、リアリストよりもロマンチストであるためか、ジョルジュ・アマードのどの作品にでも貧乏のどん底にありながら、何か一つ当ればたちまち金持になれるような希望がある。セアラ・ベルメーリヤでも、家族の者がセツカ地帯を抜ける迄には次々に死んで行き、マルタは父親のパスを取るためには身を亡してしまふ。しかし、とにかく、サンパウロに行けばなんとかなる、という非常に明るい希望がそこにある。そして、グラシリアノ・ラモスに比べると、政府の役人に対して多分に同情的な点がみられる。

たとえば、病気の父親のパスを取るため、マルタが処女をあたる検疫所の医者は、サンパウロにノイバを置いてさ(、)い(、)は(、)て(、)の町に来ている。

そこで救いようのないような貧しさに生きる難民を相手の仕事はやり切れない役目で、毎日酒を飲むか、女を買わなければ耐

えられないという風に書いている。つまり、そういった面を書いて不合理を少し正当化しているのである。

一方グラシリアノ・ラモスは感情をはさまず、物事を正確にえがくだけに専念している。そして、北伯の農民の生活に対してあまり希望をもたせていない。大地主の搾取に耐えかねて出て行くフアビアノは、なるほどかすかな希望はもっている。今度は小さい農場にすみついて、少し生活がよくなったら子供を学校にやろう。自分よりもましな生活をさせてやろうと。しかし彼等を待ち受けているものは、結局今迄のくり返しではないかと思われるのである。

以上がロマンチストのジョルジエ・アマードとリアリストのグラシリアノ・ラモスの違いではないかと思う。

又、文章においてもグラシリアノ・ラモスは常に正確な折目正しい時には冷たい言葉使いをしているが、ジョルジエ・アマードはこ（ゝ）と（ゝ）さ（ゝ）ら（ゝ）にあらっぱい、時には下品な表現を使っていることが多い。

このように対照していけばまだ色々な点が上げられると思うが、片方はまだ五十五才の作家、そしてグラシリアノ・ラモスは既に物故した作家である。

終りにブラジル文学の権威アントニオ・カンジドの言葉を書いてしめくくることにする。『ジョルジエ・アマードのテーマは非常に限られている。しかし、彼の作品は全部一連のもので、一つの小説からもう一つの作品が生まれてくる。』

なるほど、スオル（汗）の浮浪児達はジュビアバーの主人公になり、パイス・デ・カルナバル（カーニバルの国）でちよつと触れるカカオはテラス・ド・セン・フィンでは中心のテーマになり、テラス・ド・セン・フィンでちよつと顔をのぞかせるカカオの仲買人はガブリエラ・クラブ・エ・カネラでは強力な輸出商ムンジンニヨ・ファルコンとして登場してくる。

セアラ・ベルメーリヤでスターリン賞を受け、ノーベル賞には二回もブラジル側でノミネートされた作家に将来の活動を期待したい。



### 「コロニア文学」

#### 第六号について

★本号は、一〇月発行の予定で、九月はじめ原稿を印刷にまわしたのであったが、印刷所の都合で、ひどく遅れてしまい。真に申し訳ない。

★第六号は、来年三月発行の予定、韻文の投稿は少ないが、小説（創作）は、ぞくぞくと寄せられ、既に一五篇に達している。

★一一月二二日のパ紙に、第一二回パ文学賞入賞者発表を見た。入選「井戸」高野耕声、佳作「ほむら」原奈保子。この二作品に対する新鋭実作者側からの批評座談会を催し、その記録を第六号に載せることにした。

★特集、私の終戦、・コロノ時代の思い出、共に、掲載を継続、興味ある物語りが発掘される筈である。

★韻文発表の大型化をねらい、各分野から、一人三〇首、五〇句の連作体寄稿を依頼してある。量質が共に打ち出す感銘は、鮮烈であらうと思う。

★第六号に御期待を乞う。

## コロニア文学新刊書評 (2)

### 『番茶句集』

この句集は、故中熊番茶氏（本名一雄）の遺句集である。本年一月、番茶氏の弟子約二〇名によって、遺句集刊行会が結成された。そして、石井青泉、長谷川清水、大屋登志、清水一角、清村卓史、永尾茶人、坂本緑茶の七名が委員にあげられ、石井青泉氏を代表として刊行されたものである。発行は一九六七年七月、サンパウロ新聞社。四六版、本文二二九ページである。

中熊氏は、一九五八年一二月、享年六八才で病致した。その年譜によると、最初短歌を作り、それにあきたらず一九三〇年より俳句をはじめたとある。しかし、すぐ中止し、一九四二年より、本格的に句作に打ち込み、死に至るまで精進を怠らなかつたとのことである。その間、ブラジル時報、輝号、詩魂、旭号、サンパウロ新聞などの選者として、コロニア俳句の普及と

向上につとめた。

番茶氏の作風は、「写生を重んずるホトトギス系に不満であった」と年譜にも記してあるので、いわゆる、近代俳句系であったと言えよう。渡部南仙子氏は、その序の中で、「大分にロマン抒情に豊んで色端な詠いぶりである。あくまで大和魂の持主でニッポンジン。」と書いている。

踊り子の情投げて捨つる舞扇

さびしくば死ねとささやく秋の風

春雨の軒端は軽く打つ鼓

零れ落つ乳をそうびの芽に搾り

こういう句は、なる程抒情味が濃いのが、やはり、その本領とするところは、主観を強い表現力に托した直截さにあると言えよう。つまり生命の根源追究形である。であるから、縦横無尽に詠んで、何ものにもとらわれない。こういうところは、素人も面白がられたであろう。

穴を出て蛇の根性陽にさらす

太い掌で焚火の煙を抑え反る

日盛りに多情の尻をまわしゆく

よだれよだれ這う子に赤き唐辛子

だから、このような俳句も作れるわけであり「勝鶏のも（、）う（、）よ（、）か（、）ろ（、）う（、）に（、）まだ歌う」とか「大胆にあ（、）け（、）っ（、）ぱ（、）な（、）し（、）の昼寝かな」というような俗語の混じったものも作っている。

稲妻のもの干竿にとまりけり  
花曇りみてくれ骨と皮ばかり  
去るものは追わず芭蕉の花に座す

このような痛烈な句もあって、俳句一代を賑やかに飾っている。  
一本にまとめた方々の労を多としたい。

(夏)

## 小説



虚構の果て

30枚

伊那 宏

私が、単独花嫁移民として主人のもとに嫁して来ましたのは、  
去年の四月のことでした。

主人は、四年間の契約を無事済ませ、その年の一月、パトロ  
ンの援助で独立しておりました。私と主人とは同郷ではありま  
したが、まったく面識のない間柄で、県庁の仲介のもとに二つ  
隣の村の今の主人を選んだのでした。近隣のよしみで、主人  
の生家へ何回となく訪れ、又、主人の生家からもやはり同じよ

うな訪問を受けては、親交を温め、文通期間約六ヶ月という超スピードで、二人の間はまとまり、去年の三月初旬、「独立した。一刻も早く来たれ」、という主人からの催促で、大した不安も持たぬまま渡伯して来たのです。

大した不安も持たぬまま、といつては正確でないのですが、でも、一度として見たことのない男性、又その性格もまったく把握しようもない地球の裏表に住んでいる間柄とはいえ、やはり、主人の両親、兄弟姉妹から連想される主人のイメージというものに、私は、ある程度の確信と満足がありました。又、主人は優秀な青年として県庁でも将来を嘱望していた。貴女はこんな男性とめぐり合うことが出来て、運のいい方ですよ、と主人が渡伯する当時、いろいろお世話になったという太田さんからも言われ、もうこれっぽちの不安も、いえ、ただ、初対面の時のことをあれこれと想像し心配した以外、まったく不安を感じずに船上の客となったと言った方が、やはり正確なのです。不安がなかったのです。私は、もう、掛値なしに見知らぬ主人を信頼しておったのですから、今思えば、そんな世間知らずの甘い考えでいた自分が恥かしくてなりません。

同県から同県出身青年のもとへ嫁いで行く私と同じような女性が三人居りました。私達はもう姉妹のように親しくしております。また、お互いの主人の概様から細部にわたるまで、何の憚ることなく、時には嬌笑しては語り合ったものです。そして、不思議なことに（ほんとうは当たり前のことかも知れませ

ん)、誰もが自分の主人というものを、絶対信頼してしまっており、言うことも多くがお互いの主人の自慢めいたことで、不安という翳りの一片すらも抱いていないことでした。初対面のことにふれた時、私が、冗談めかして「ふつつか者ですが、今後何ぶんよろしくねって、頭を斜めにまげてちよっと下げる。っていう図、悪くはないわね。それとも、しおしおと腰をくねらせて言おうかしら」なんて言うと、みんな口をそろえて、「そりや初めの方がいいじゃない。ブラジルはレデイの方が威張っているっていうがら」。きやきや騒いで、それこそ楽しい想像に胸は踊るばかりでした。

サントスに船が入港し、埠頭に横づけされると、あれほど初対面の想像を逞しくしていた私達の心に、やはり、「主人に会う」という緊張が強く支配して来ました。K子さんなどは、「ご主人の写真を取り出しては、「間違えないようにもう一ぺん見ておかないくちや」などと笑っていました。私達だって気持は同じこと、笑いにこそ隠したけれど、その内には、やはり真険なものがあったのです。主人の顔が解からなくて、「鵜の目鷹の目」なんていうのは、笑うにも笑えない光景ですもの。

でも、案ずるより産むが易し。出迎えの主人達は、顔こそ日に焼けていましたが、判別に苦しむほどのことはなく、それぞれ想像と合致していて一目で解りました。

こういう場合不安のあとに来るもの、それはもう安堵に違いありませんが、でも私の場合だけが違っていました。顔は想

像通りでしたが、性格がどうやら私の想像と違うのです。そりやあ写真でしか知らない妻を迎えたんですもの、主人だつてにっこりして、私が「よろしく」とひどく慇懃に言うのと、「こつちこそ」と言つて思いやりある風に見えましたけど、でも私にはその時の主人の態度に、高慢つていうのかしら、自信過剰つていうのかしら、変に心から飛び込めないものがあつて、あるこだわりを感じたのです。人間つて、第一印象である程度その人を読むことが出来るのですが、そして、第一印象が悪くても、実はその人は良い人だつたとあとで認識する場合もあるし、その反対に、第一印象が良くても、次第にその人との間に溝が生ずる場合もあつて、即座に相手を判断するのは間違いかも知れません、私が主人に感じたものは、もっと異質なものだつたのです。

なんて申しますか、印象が悪かつたとか良かつたとかではなく、もっと別の、そこには冷たい感情の発生（それはあくまでも主観的なものですが）があつて良い悪いを越した白々しいものだけを感じ取つたのでした。

幸せを築かんがためだけの希望を抱いて、はるばる日本の裏側まで来た私にとって、それは悲しい失望でした。少なくとも、同じ運命を背負つて一緒に来た他の三人の方達には、この埠頭が幸せへの起点となり得たのに反して、私には、不幸への出発点となつてしまつたようでした。

時間が有るから街へ出てみようということになつて、みなぞ

ろぞろと港内を出て行く時、他の三人の方達は、何の躊躇もなく、ご主人と腕を組んで嬉々として行くのに、私達にはそれが出来ませんでした。仲のよい姿を眼前にして、私は卑屈な自分を見つめていたのです。

「これから仲ようやっついていこう。そうしたければ」と、主人が何か迫られたように戸惑いを伴いながら言った時、私には、やはり、主人も私と同じようなこだわりを持っているのだということに気づきました。

主人にとびついていかなければという感情にかられながら、しかし、私の心はそういう接近を避けているようでした。いけないことです。自分の方から打ち溶けていかなければ……、それが惨めな自分を救う唯一の道なのだ。そういう思いに責められながら、やはり私は出来なかつたのです。

日本女性特有のあの従順というものを実践するには、強い勇気を要す自分の心の偏屈に、たまらないほど焦燥を感じながら、私は、主人のそんな言葉に、「ええ」と沈むような声で答えただけでした。

「ブオツセ等何しとるんじゃ、他人行儀みたいによそよそしゅうして」

K子さんのご主人が、振り返って私達を揶揄しましたが、それは、K子さんのご主人にとって単なるからかい、自分達の幸せを皆に示そうとするいえ分かち合おうとするだけの単純な喜びに相違ないのでしたが、私と主人は、そんな幸わせの中に無

条件に飛び込めないこだわりを痛切に感じていたのですから、K子さんのご主人の言葉に戸惑い、それでも笑いながら「要らぬお節介するな」と主人が答えました。「紳士と淑女だからなあ」。

K子さんのご主人はあくまでも無頓着。みんなの笑いの中で、私は、K子さんは幸せになる人だとつくづく感じたのでした。

主人は、サンパウロ市から三十キロメートル程離れた近郊で、主に野菜を栽培しておりました。近郊といっても起伏の激しい地で、大袈裟に言えば日本の山間地帯にも似た地形で、主人の耕地の近くには日本人は少なくいたとしても一キロも離れていました。

まさに山間の一軒家といううら寒い環境で、私のブラジルに対するイメージは、いっぺんに塗り変られてしまったのでした。

私と主人の二人だけの生活が始まりました。結婚第一夜も味気ないものに終り、次の日から主人はもう仕事に出かけ、私は、こそこそと自分の荷物を整理し、カフェーも朝食も全て主人の指図どおりにし、迎える夜はやはり白々しい中に終るような、全て単調な日々でした。

当初は主人のパトロンやら、その家族の人達が訪ねてくれたりして、多少気の休まる思いもしましたけれど、でも、初対面の時のあのこだわりはいっこうに消えてくれないのみか、淋しい環境の中であって、私は生れて初めて郷愁のやるせなさを味

わいはじめていたのです。

主人は確かに仕事熱心な人でした。作物の成績もすこぶるよく、「トマテが一箱三コントもしているから、今度は儲けが大きいぞ」とか、「今アボブリニヤを植えておけば必ず当たる。これから忙がしくなるから、君（主人は私のことをいつまでもそう呼ぶのです）にもできるだけ手伝ってもらわないと」とか言つて、一人で悦に入っているのです。言うことといえばそんな仕事のことだけで、そういう主人に、私は少しも打ち溶けていけないのでした。

主人は、アマーロというもう六十過ぎた老人一家を雇用していました。

アマーロの妻は黒人で、後妻でした。十三の娘を頭に四人の子供がいて、働き手といえば、アマーロと娘のマリア、その下の九才になるジョゼーという男の子だけです。勿論彼等は満足 of いくような働きをするわけではなく、ただ、見るからに田舎者で、十クルゼイロ多く支払らただけで、卑屈なほど従順になつてくれることが、主人には気に入っているようでした。

そんなところにも主人の性格が現われているのでした。

トマテが収穫に入ると、アマーロ一家の人手では足りなくなり、主人は、近所に住む植田さんという日本人を臨時に雇いました。植田さんは三十年前七才の時渡伯して来たといひますから、勿論結婚しております。奥さんは二世ですが日本語がひどく達者でした。旦那さんより体格が良く、肥満して、動作が実

に鈍重でしたが、割合愛想が良く、笑うと眼が糸みたいになつてまるで泣き顔になるのです。

植田さんはひどい近眼でいかにも人の好きそうな方ですが、どこか生彩のない無気力さを感じさせます。

私は、二人の姿に真の日本人と違った、いうなれば日本的な何ものもない、まるで日本人の顔をしただけの現地人いえカボクロとでも申しましょうか、そんな異様なものを感じて内心唾然としたものです。植田さんはその無気力さゆえ、自立という術も知らず、自然その日その日の暮らしというカボクロの生活に陥ってしまったのでしよう。移民のなれの果て。二人の姿はまさにそれだと思わずにはおれませんでした。

とにかく、植田さん夫妻の出現が、白々しい私達の生活に、ある変化を及ぼしたのは事実でした。「苦」が「楽」に移行するそれではなく、空々しい中に又一つの空間、それは多分、不安、疑惑とでも説明すべき黒い淀みに塗られた不吉な空間が生じたのです。

そのことは、主人の態度に現われた変化で知ることができました。

私は、主人のいつさいの過去というものを知りません。主人の親戚の方々や県庁の人達は、主人をさして品行方正なる青年というレッテルを私に与え、又、私自身、それをそのまま鵜呑みにして、主人の人柄をまるで信じきってしまったのですから、まさか見も知らぬ主人に、何らかの汚点があるうなどと

は、疑つても疑いようがなかったのです。今でさえ、たとえ夫婦仲が円満にいつてないにしても、私は、そのような種類の想像を主人に対して抱いたことは一度もなかったのみか、夫婦の不和の原因が、私の方に多分にあると思っていたのですから、主人の過去ということなど夢にも考えなかったのです。

主人との間に溝が生じてしまったということは、私が自分の心の中をためらいもなく開いていかないとところに原因があるのだと感じて、又、そうしようと努めはじめた時には、二人の間の溝は、自分でも驚くほど深いものになっていたのです。

そんな状態の時、植田さん夫妻が現われたのです。

主人の植田さんの奥さんを見る眼に、私を見るそれと違った異質なものがあるのを、私は見逃がすことが出来ませんでした。そして、植田さんの奥さんの主人を見る眼のそれにも。多分、女性特有の本能的鋭さで感じたのでしよう。そこには血塗られたような濁った男女の汚らしさが、まるで何も知らぬ私を嘲笑うかのように堂々とさらけ出されておったのです。何かがあるのだ——という直感が、獲物を狙った豹のような勢いと鋭さをもつて私に襲いかかって来ました。男と女だけの世界にあつて、その答えはもう考える余地のないほど明瞭なもの、いいえ、たとえそれが私の想像したような形のものであつたとしても、私は信じたくありません。信じてはならないのです。もし、私の想像どうりのものであつたとしたら、自分を惨めにするばかりか、生きる術も知らぬ絶望へと陥し入れる結果になることは、

考えなくても解っていることなのです。信じてはなるまい。何ごともありはしないのだ。それは単なる私の思い過ぎしなのだ。でも、そう信じようとすればするほど、あの濁った嘲笑いが私の身边につきまとうのでした。

煩悶の中で、私の心に次第に主人への不信感が募ってきました。

品行方正などというものは、きっと周囲を欺くためのヴェールに違いないのです。私は元来、品行方正なる人物というものに反感を抱いております。そういう人達は、その内に複雑な感情と行動を秘めているものなのです。そして、己の内情を外部に覺られまいとして、そのために自分を一層良く見せようと、「方正」という手段を用いるのです。それは虚飾。弱者の常套手段。

私はなぜ品行方正というレッテルを持った男を夫に選んでしまったのでしょうか。今は後悔で自身を苛んでおります。

トマテの収穫がようやくやく伸びはじめた、多忙なある日のことでした。

収穫の合間に、摘芽と誘引の同時作業をしながら、ちようど私の居る一つ前の畝で植田さんが働いていたので、私は、何気なく植田さんに話しかけていきました。

話といってもいたって通俗的なことでしたが、「はあ、おかげさまでどうやら」とか、「いいえ、もうそんなことなどいっこうに」などと、頼りないくらいひどく物腰のやわらかい植田さん

が答えるのを聞いていて、私は、主人との生活の中ではじめて、ほのぼのと気の安まる思いを経験したのです。私は、まるで溺れた者が藁にでもすがるような感じで、植田さんと話をすることに、何の躊躇も無くしておりました。

私は続けて話していきました。

「植田さんは、戦前に来たのですってね」

「ええ。四年前でしたか五年前でしたか、いつでしたかはつきりと覚えていません、はあ」

「日本が戦争を始めた時、びっくりしたでしょう」

「そりゃあ、もう」

「私なんか戦争の記憶ちつともないけど、でも日本は負けてよかったんですよね。天狗の鼻をぺしやんにされてよかったんですよね。民主々義国家とやらになって、私達なんか幸せになれたんだと思っています」

私はひどく饒舌になっている自分を発見しておりました。いえ、戦争のことなどどうでもよかったのです。負けていようが勝っていようが、そんなことは植田さんと話をするために、少しだって重要なことではなかったのです。ただ、私は考えもなく、それこそ藁を掴んだ時の喜びの中で、訳もなく口走っていたのです。

でも植田さんは違っておりました。私の言葉を聞いたら、妙に悲しそうな、いいえ、不審そうな顔をして、「そうですか。日本はやっぱり負けたのですか」

それを聞いたとたん、ブラジルへ来て初めてほんとに初めて、私は腹の底から笑いが込み上げて来たのです。その時の植田さんは、子供のような無邪気な表情をしておりました。「罪のない人」って植田さんのような人のことではないかしらと思ったほどです。

「負けたとは聞いておるんですが、わしにはどうしても信じられないのです」

「いやね。ほんとうにそう思っていらっしゃるんですか」

「日本は、ほんとうに負けたんでしょうか」

「決まっていますよ。もう二十何年も前に負けているんですよ」

「そうですか。負けたんですか。やっぱり」

お可笑さというよりも、それはもう驚異でした。意識的に私をからかっているとか思えないほど、植田さんの沈痛の色は真面目で現実離れがしていたのです。

「でも、負けたとしても、日本は、ぶざまな負け方はしなかったのでしょうね、ねっ、ぶざまな負け方はしなかったのでしょうね」

「そりゃあ、もう、大国相手に四年間も戦ったんですから」  
植田さんの真険な口調に対して、私はそう言わずにはおれませんでした。

そして、「ああこんな草深い異郷に、真の日本人が生きているのだ」という強い感慨を受けたのでした。

そんなことがあって、私は、あの人の好い無気力ないかにも

無能としか思えない植田さんという人に好意を持ちはじめました。好意といっても変な意味のものではなく、ただ単なる好意と言ったらお解りになるでしょうか。そして、そういうかすかな感情が、白々しい主人との生活の中に、密かな安息を齎たらしてくれたのも事実でした。

これも、トマテの収穫がほぼ終りに近づいたある日のことでした。

主人のパトロンのところに働いている平林さんという青年が、主人を訪ねて来ました。

近く独立するのであるが、自分に対するパトロンの態度に近頃不審を抱いている。いろいろ相談事を持っていっても、それを避けようとする不誠実さがあって面白くない。このままいけば自分は独立が不可能になる。先輩の知恵をおききしたい。まあ端的に言えばこんなことでしたが、平林さんは、もう自殺でもしそうなほどうちひしがれて、そうして、「何のための四年間だったかわかりやあしない」と、自嘲の笑みをさえ浮かべておりました。

トマテをちぎっている時でしたから、私には畝越しに主人と平林さんの話が、手に取るように聞えてまいりました。私は聞きながら、その時、パトロンの多大な援助で独立したという、主人からの手紙の文句を思い出しておりました。私はその文面を信じておりましたから、平林さんの言葉にちよつと不審なものを感じましたが、でも、平林さんは見るからに真面目そうな青

年でしたから、まさか誇張して物事を言うような方ではありません。すまい。すると、主人が、パトロンという人物を、さらに疑うなら、自分という人物をより良く印象づけようとするための、偽りの手紙を書いたのでしょうか。自分という人間は、このようにパトロンの信頼を受けているのだという、虚栄を張った手紙を送って来たのでしょうか。そういえば、私が主人のところへ来て、もう一年になるというのに、パトロンが主人のところに見えたのは、数えるほどでしかありません。そう遠く離れているわけではないのに、何か私の知らない複雑なことが、主人とパトロンとの間に淀んでいるのでしょうか。

その想像が単なる私の飛躍でないことが、主人の次の言葉ではつきりしたように思います。

「遠慮せずに来るだけしぼり取るんだ。凶々しくやらなくちや君の四年間が台無しになるんだぜ。引っ込んでいたら、結局パトロンの思うように遇られるだけだ。エンシャーダ一本でもいい。鍋釜一つでもいいではないか。俺なんか借地契約書に強引にアシーナしてもらったんだ。それから一回だけトラットーを借りた。それだけだったんだ。四年間の代償がこれだけでは安過ぎるんだが、でも、君が、そのままパトロンの態度におされていたんでは、それこそ無漸じゃねえか。四年間が泣くぜ」

主人が、私に嘘を知らせたというのはもう事実でした。私になぜ面と向って真実を話してくれなかったのでしょうか。私は、腹の底に小さな怒りが燃え上がって来たのを感じておりました。

「とにかくな、俺達にとって四年間のうち少なくとも二年間は、パトロンの為だけの期間だったのだ。そりゃブラジル農法を学ぶかわりに、雀の涙のごとき給料で働いたんだから、利害関係は差し引きゼロとしても、その間に過重労働で酷使された肉体と精神の損失はどうなるんだ。そんなこと関係ないとはまさか言うまいな。その代償だけでも、立派に借地契約書にアシーナし、なお泥壁でもいい家の一軒でも建ててくれるのが、収入とてない俺達青年を使う人間のとるべき道じゃねえか。それがなんだ。独立間近になって急に態度を冷たくさせるたあ。家を建てる金がないんなら、独立させるための暖かい気心の援助だけでも立派なもんじゃねえか」

何が主人をそのように昂ぶらせているのか、私には皆目見当が付きません。まるで仇敵に対するような罵倒でした。

「そうですよ。せめてそれだけでも」  
恨めしそうな平林さんの言葉には、もう全てを諦らめていると  
いうような響きがありました。

「凶々しくやれ、凶々しく。でもな、気嫌をそこねちゃだめだぜ」  
平林さんは、ええ、と力無く領づいて、それから、何を思った  
のか、

「あの女ですか、例の」  
セスタをさげ、「今日わ」と言って通り過ぎた植田さんの奥さん  
の後姿を見て、突然妙なことを言いました。

「忙がしいから来てもらっているんだ」

主人はちよつと狼狽して、それから、ふふんと薄気味の悪い笑い方をしました。

「いまだ熱ありですか先輩」

「向こうにな」

「どうですか」

「馬嘩言うな。お互いにもう良き縁を持っている立場にあるんだ。めつたなことを言うな」

それはもうひそひそ声で、かろうじて私の耳に触れるほどの会話でしたが、でも、その言葉の響きは、妙な不愉快さを伴っておりました。そして、今まで、私の心の中に重たく蟠まっていた主人に対する不審の念が、まるで、あの無気味な原生動物の繁殖のように、じわじわと大きく広がって来たのです。

「でも先輩惜しかったですね」

「何がよ」

「あの女に手をつけなけりやあ、パトロンの娘をもらって」

平林さんの軽口を、主人のしつと遮ぎった声がかすかに聞えてまいりました。やはりひそひそ声でしたが、トマテをちぎる手を休めて、葉隠れにじつと聞き入っていた私には、はっきり聞えて来たのです。

私の想像はやはり間違いないものでした。そんな、確信に似た想像をしながら、信じまい信じまいとしていた私の制心は、その時、バリバリと音を立てて消滅して行つたのです。絶望を伴った戦慄で、私の身心は小刻みに震え、同時に、全てのもの

を失ったのだという悲哀が、ひしひしと身心をむしばんでいくのを、痛いほど感じていたのです。

その夜、私は、植田さんの奥さんを明日から来させないよう  
に、冷たく主人に命令しました。もう思慮も何もあつたものでは  
ありません。ただそうしなければ、自分が惨めになることだ  
けが解っておったからです。私は主人に何も追求しませんでし  
た。もう答えが明確になっているのに、追求など不必要なもの、  
もし追求してみたところで、男のエゴイズムとやらに、私は一  
層絶望の底へ叩きつけられてしまうことは明瞭なことなのです。

主人と私との生活は、以前より一層冷たいものになりました。  
私に嘘をついていた、秘密を持っていたということだけで、私  
は、主人の全てを信じようとしないう冷たい女になっていたのだ  
す。夜の営みも出来る限り拒んで、そうして、主人の強引さに  
負けた時でも、それはただ単なる機械のような、感情を伴わな  
い白々しいものにしておきました。冷たく遇らうことが、私に  
とって唯一の、主人に対する精神的な復讐なのでした。

はじめのうち、主人は、そういう私の変化に戸惑い、次には、  
気味の悪いほど気嫌を取り、そうして、てこでも動かぬ頑なな  
私の心を知ると、腹を立て、次第に私を無視するようになって  
行きました。

それは当然の結果に違いありません。そういう結果を心のど  
こかで望んでいたはずなのに、でも、いざそういう結果が現わ  
れると、私は次第に心細くなって来たのです。復讐のつもりで、

片意地にも冷胆にして来たその対照が、私から離れて行ったからでしようか。それとも、そういう形でもって男に甘えてみたかったという、無意識な女の哀しい欲望が、私の心のどこかにあったからなのでしようか。

もう主人と私との間には、幅の広い深い溝が出来上がっていました。たとえ、相手が妥協してみたところで、少しの縮まりもあるはずのない大きな溝なのです。そして、その溝をはさんだ一方にあつて、今、私は、ひしひしと一人ぼっちという淋しさを味わっているのです。主人と共に働く姿も、主人のためではなく、まぎれもない私個人のためなのです。

もうトマテも終わりました。

主人は朝から所用あつて町に出かけております。トマテの枯木とエスタツカの除去作業に、植田さんが働きに来てくれます。

家の中に居たたまれないほど淋しくなつて、私は、植田さんの働いている畑へ出かけて行きました。

「お早ようございます」というと、その声に驚いた様子で、植田さんが振り向きました。

「大変ですね。私もお伝いしますわ」

「いいんですよ、奥さん」

「二人で家に居たってつまりませんから」

「ご主人は？」

「町よ。朝から」

植田さんに対した時の私は、自分でも不思議なほど浮き浮きしているのです。無気力でお人好しの植田さんには、これぼつちのこだわりも感じないせいでしょうか。でも植田さんは違うようです。どこか初心のようところがあって、私の存在にひどい気詰りを感じているようでした。その時、私は、そんな植田さんにひどく意地悪な自分になっているのを知りました。

私は、何も憚らず口を開いておりました。

「植田さんは、私の主人の過去を知ってらっしゃいますの」  
それはもう、からかいに違いありません。でも植田さんは、真面目に首を傾けて、

「さあ、いつこうに」

「そんな噂を聞いたことも？」

「何のことでしょうか」

「女関係よ、もちろん、植田さんほんとうに何も知らないの」

「はあ、そんなこと少しも」

植田さんはあくまでも真面目でした。隠すなんてことはこれっぽちも知らないような純朴な人なのです。自分の妻のことを何も知らずに、そうして、幸せそうに暮している。私は、なんだかひどく腹立たしいものを感じる反面、妙な悲しさと侘しさを味わいました。

「植田さんは、お幸せ？」

そんな複雑な心理から、ひやかしの気持などこれっぽちもなく、殆ど真剣に私はそう聞かずにはおれなかった。そうして、ふい

にその時、心底から植田さんの赤ちゃんを欲しいと思ったのです。それは、自分で説明のしようもない衝撃的なものでした。

その欲望は、突然湧き上がった泉が地をほうのように、私の心の中を確実に潤して行きました。

私は、植田さんを、愛したのでしょいか。いいえ、それはきっと、主人に対する復讐の極点が、突然考える間もなく、新しい対照を捕えて燃焼しはじめたものなのでしょう。主人が愛し関係した女の夫の子供を生む、こんな確実な復讐があるうなどは、今の今まで考えても見なかった事でした。恐しい女です。

トマテを集める仮小屋が、その時私の思考の全てを捕えておりました。

そして、めまぐるしく廻転する思考の中に、やはり自分は植田さんを愛したのだ、という勝利にも似た安息が生まれているのを、強く意識していたのでした。

(終)

(一九六七年三月二四日)

お知らせとお願い

◇「コロニア文学会」は、本年一月、在海外の文学団体として、在東京の「日本文学振興会」に登録しました。

このことによって、「コロニア文学」誌掲載作品は、一応、芥川賞、直木賞選考の対象として取りあげて貰えることになりました。

◇「コロニア文学」は、本号裏表紙上部に印刷しました如く、本年九月本会員、野尻アントニオ弁護士を代表者に立てて、本誌を国内雑誌として登録しました。

このことによって、市販も可能になったわけです。

◇本誌、第二、三号を編集した前山隆氏は、サンパウロ大学社会人類学科のマスターコースを終え、八月末テキサス大学に留学のため渡米しました。本会の創立に参加し、その成長に情熱を傾けた前山氏です。渡米後も、彼の地の日系文学団体と接触し、本誌への連絡、寄稿を続けてくれるとのことでした。彼が学業を完成して、帰伯の日を待っています。

◇「コロニア文学」誌を日本の「毎日新聞」「日本読書新聞」などの一流新聞が取りあげてくれました。そして、その異色振りを紹介したので、最近、日本からも、入会申し込みがぼつぼつ来ています。

◇一九六七年度会費未納の方は、なるべく早目に、是非御納入ください。

諸式高騰の折から、折り入ってお願い致します。

小説

埋葬 26枚

福村 琳

その朝、私達がN町の病院に着いた時、車の前を横切ってみすばらしい服装をした黒人の女が正面の階段を登って行くところであった。

その階段の上に私の妹のマリアが放心した表情で立っているのが見えた。

一睡もしなかつたらしい彼女の顔はひどく張れぼったくなり真黒な髪も埃っぽく疲れていた。私を見つけたマリアは飛び下りるような勢いで階段を降りると、私の胸に飛込んで来て泣いた。私は言葉もなくマリアのすすり泣いている肩を抱いているより仕方がなかったのだけれどマリアの二人の子供の先々の事を想うと胸がしめつけられるように痛んで私の眼頭にも涙があふれてくる。

マリアの良人のジョゼが昨日の夕方、病院に担ぎ込まれた報告を受取ったのは今朝早くであった。その報告に来た私の弟のマルコは「何しろ夜分遅くだったし、姉さんに報せても何んだと思つて、マリアは昨夜中病院に居たのだが医者には面会謝絶をされていたし、ジョゼはもう虫の息でどうにもならなかつ

たんだ」。台所にいてマルコが良人の光男に事情を話をしているのを聞いた時、頭の血がスーツと退いて私は危なくその場に倒れそうだった。妹のマリアもかわいそうであったが、その時私は何かしらほっとしたものを感じていた。何も彼もこれで巧く行くのではないだろうか。

マリアも私も。しかしジョゼが死んでしまったとはなんということであろう。私は身仕度を整えて良人と一緒にマルコの車に乗った。雨上りの日曜日だった。空は青く晴れ渡って道々の山の緑がまぶしく目にしみてならなかった。リオ・デ・ジャネイロから一時間近くN町はどの店も開いていて町の通りは人混みで一杯だった。病院はN町の中心を上に登った静かな場所にあった。

私がジョゼ・ロドリゲスを知ったのはもう十年前のことであろうか。マリアはその頃R町の近くに農園を持っている日本人の私達の父母の仕事を手伝っていた。マルコは未だ少年であった。私はR町の叔母の家において、叔母の洋裁の手伝いをしながら週に二度リオのO氏のアトリエに通って油絵を習っていた。

その頃は抽象絵画の全盛期で日系のN画伯がブラジルの画壇に光彩を放って間もない頃であった。私は抽象画は好きではなかったけれど、リオに行った時はギャラリーを廻るのが楽しみの一つであった。暗い色調の単純な画面を持つパンセツテの絵に、心を魅かれていた。このような絵が描けるまでには画家はどれ

程の忍耐と精進を持続して行かなければならないことであろうか。芸術家には大体二つの型があるようだ。パンセツチのように生前は恵れない生活に喘ぎながら死後になって作品に光輝を得るものとN画伯のように華々しいスポット・ライトを全身に浴びて流行の波に乗り上げるものと。両者ともそれは人生に於ては動かし得ぬ事実であろうと私は思ってみた。髪型や洋服ほどに流行の激しい落差はないけれども流行の頂点に乗っている芸術家の心境はどういうものであらうかと想うこともあった。

その年の大きなサロンに入るとN画伯の人眼を圧するような大作が会場狭しと陳列されているのを見ると同じ日系人としての優越感を感じつつもこれから五年、十年後のこの人気画伯の将来を想像してみるのである。その頃も又この画家の絵は矢張り斯うしてサロンの会場の中央に大きく位置しているものであるうか。流行作家の絵は流行の波に左右されながら、満潮はやがて干潮に変わって行く過程の一つに過ぎないと私は思うのだ。私はいつも自分の絵が描きたいと思っていた。ヨーロッパやアメリカにどんな絵画の新型が誕生しようと自分の心で感じ、自分の眼で把握出来る自分のみの世界を求めたいと思っていた。長年師事していたブラジル人のO氏が個展を開くことになって私はO氏の個展会場にしばしば出入りする日が多くなった頃、O氏に紹介されたのがジョゼ・ロドリゲスであった。ジョゼがどんな職業を持ち又どんな生活をしているのか私には解らなかったがポルトガル系の白い肌と黒髪を持ちカリオカ特有の弁舌爽

やかな彼の態度は、最初の頃私には嫌悪のみ感じられて仕方  
なかった。私が生まれたR町は田舎だし私のような田舎育ちに  
はジョゼ・ロドリゲスの口髭の下の赤い唇を流れる言語一つ一  
つが如何にも経薄で内容の無いものに思われてならなかったの  
だ。彼の黒い髪はいつも髪油で整えられ白いワイシャツに結ば  
れているネクタイは会う毎に違っていた。

O氏の個展の終わった頃、私は写生旅行を計画していたけれど  
も一人で出掛けるには懸念が立った。カアボ・フリーオの砂丘  
を見たいと思っていたのでO氏に話すと、ジョゼに連れて行っ  
て貰ったら良いだろうと言う。ジョゼが何処からか自動車を都  
合して私を迎えに来てくれたのは五月の終り頃であった。叔母  
の松代は眼鼻立ちの整った女であったが、日本人の少ないR町  
では昔風に日本人同志の姻婚は難事であったから婚期を逸して  
三十才頃になってやっと見合の相手を見つけたもののその男の  
情婦と思われる女から、男と女の間には赤ん坊がいるという話を  
持ち込まれてすっかり青くなって縁談を強く断り、松代は其後  
ずっと独身を通して洋裁に打ち込んでいた。私の父が其後も見  
合の相手を探して来ても叔母は決然として結婚を避けていたよ  
うである。ジョゼが訪れて来た時、叔母の松代が嫌っていたの  
は当然だったけれども私は写生旅行が大事だったので叔母の怒  
るのを無視してジョゼの運転する車に乗って行った。ジョゼの  
運転は見事なものであった。私は充分に満足し、其後のドライ  
ヴの美しい景色は怒りにふるえた叔母の表情を忘却してくれた

ようである、R町を出発して四時間後にカアボ・フリーオに着いたがもうすっかり正后を過ぎていた。私達は海辺のホテルで食事をし、白い砂丘の続く限りを車を飛ばした。パンセツチが生前好んで写生をしたという丘の上に立った時、私はジョゼの逞しい腕を頼しくさえ思った。紺青の海に真白な波が大岩にだけ散って、風は女の私を吹き飛ばすかと想う程強く吹いていた。写生帖がパラパラと頁をくって私の手から逃れようとしていた。白い砂丘はこの世のものでないような神秘に満ちていた。私はジョゼの手を振り切って白い砂の中を走って行った。

何処までも白い砂が夢のように続いている。私はまるで昨日までの私でない自分をその時に感じていたのだ。何か知らない運命の力が私をぐいーと白い砂丘に追い込んでいるようであった。風は砂丘の蔭ではもう吹いていなかった。私は疲れて白い砂の上に仰向けに倒れて眼を閉じた。風の音が遠くなったようだ。うつすらと眼を開けると真青な空に絹糸のような細雲がいくつもいくつも流れていた。ジョゼがその時私の傍に坐っていた。

彼は私を抱き私はそうあることが自然のような気がした。心臓が高まって息苦しくなり、ジョゼが唇を求めると私はそれに応じた。その夜、私はもうR町には帰らなかった。海辺のホテルで私はジョゼの逞しい身体に包れて生まれて始めて女になったのである。朝、白いレースのさざ波のようなカーテンを通して柔く陽が照っていた。私はぎゅちりと私を抱きしめている男の、まるで子供のような寝顔を見つめていた。眠りからさめた男が

私をかたくもう一度抱こうとしたが、私はふりほどいて浴室に入ってしまった、その時に私を待っているであろう叔母や、この時間にはもう鶏舎の仕事を始めているであろう父や母の顔を思い浮かべていた。私は涙があふれて浴室の中で声を出して泣いた。

ジョゼに送られて夕方私達が叔母の家に戻ると、報せを聞いてやって来た私の父の怒気はまるで鬼のようであった。昭和初期に祖父と共にブラジルにやって来て、奥地を転々としてからR町の近くに落付いと父は五十年近くの才月を農場生活で送って来ているだけに昔風な頑固そのものの性格で、私とジョゼの結婚は最初から許されるものではなかった。私は父に罵倒され、恥しめられるだけの立場であった。気の弱い母はオロオロして、やっと父をなだめすかしてはいたが松代叔母でさえ掌を返したように私に冷たく当たった。私は叔母の家にいるのも苦痛になり、意を決してリオのO氏の家に寄宿することになった。父母も叔母もそれには反対しなかったようだ。O氏夫人は聡明な人だったから、すべてを了解して私がR町を去ることを喜んでいてくれた。ジョゼとは其後O氏の家で時々会うことはあったが、さすがにホテルに泊るようなことはしなかった。私はO氏の援助で公務員の職を得て働くようになったが、O氏の下宿代を払い日々の小さな買物にも不自由のない生活であった。絵も勉強を続けていたしジョゼはその頃、テレビ女優の、姉のアルバイトと一緒に住んでいて日曜日など私とそのアパートを訪ね

ると夜の遅いジョゼの姉はピジャマ姿でいたりしていた。髪の毛を明るい金色に染めて生きわのところだけ黒々と見えたりすることももある。気さくな女で、私にはやさしかった。ジョゼに私以外に他の恋人のいることもその姉に聞いた。その頃の私はなんとかしてジョゼを私だけのものにしようと躍起になっていた。その家は人出の激しいアパートで私には落着かない処であった。私がジョゼに会おうと思っても彼はいつの間にかテレビの俳優達と何処かに出掛けたりして三度に二度は彼に会えなかった。私は焦躁し、失望し、輪をかけたように血眼になってジョゼを探した。彼に会える日があると私は必死になってジョゼの情慾を誘おうとした。私は彼に捨てられることが恐しかったのだ。私は彼の如何なる我俣にも忍従し、彼の歡心を買うことに一生懸命になっていた。そうしたその頃の私の姿は今になつてみれば我ながら可哀想な程捨身なものがあつた。そうして又月日が経つて行くと、ジョゼは私を本当に愛してはいないと疑うようになって行つた。

ジョゼの姉は一昔前は有名な歌手であつたそうだ。彼女はアルゼンチンの男性歌手と結婚してアルゼンチンに渡り、機会を得て日本にも行ってタンゴを唄っていたそうであつた。私にも見せてくれた日本劇場のポスターは大仰なポーズを取つた華やかなイヴニング姿で美しい女であつた。しかし日本から戻る頃になつて彼女はアメリカ人と恋愛をし男性歌手とはそのまま別れてしまつたらしいがブラジルに帰つて来てからの彼女は一年

毎に人気を失い、辛うじてテレビのドタバタ喜劇に登場する位なものであった恋人のアメリカ人は既に姿を消していた。そのようなジョゼの姉が突然自殺をしたことは私には今になっても生々しい記憶につながっている。彼女は身体中にアルコールをふりかけ、自ら火を放って焼死したということだった。火だるまになってアパートの台所の床をのたうち廻っている、人気を失ったあわれな女優の姿を想うと堪えられない悲しい思いがしてならないのだ。現実には鳴っている華やかな拍手の音が、いつしか少しづつ消えて行つて其処に大きな闇の世界のみがあると思いつめることは恐いことであつた。しかしどのような境涯にあらうと時計の振子は常に刻みつづけている。私はジョゼの毛深い白い肉体に別離し訣別の旗をもつて立上る勇氣が必要であつた。このままの関係を続けることは私にとって破滅があるばかりであつた。その頃から私は少しづつジョゼから遠ざかろうと決心をしていた。私は暇を見ては絵の製作に精進した。O氏の後援で私がささやかな自分の個展を開く日が来た。私は二十枚ばかりの油絵と五枚ばかりの素描を会場に飾つた。その中にはジョゼの姉のテレビ女優をモデルにした絵もあり、ジョゼにポーズを取らせた絵もあつた。どの絵にも自信なかつたが自分で一心になつて描いた絵ばかりだった。イナグラソンの会場にジョゼも姿を見せていた。彼は私の知らない新しい女友達と歩いていた。私は自分の心の底に嫉妬を感じた。その嫉妬の炎はめらめらと燃え上りそうであつた。私はそれに堪えることに

危険を感じていた。そのような日々、山本光男に会った。彼は日本から来たばかりの画家であった。私は自分の父母が日本人でありながら、自分は日本語の話せない二世娘であることにいつも劣等感を抱いていた。妹のマリアも弟のマルコも小さい時から日本語をあまり知らないで育っている。ブラジル人の中にいて日本人扱いを受け、又日本人の中にあってブラジル人扱いを受けなければならない自分達の二世の立場はいつも皮肉なものであった。私がジョゼと肉体関係を持ち始めた頃は、私はジョゼの毛深い白い肉体を自分のものにすることによって私はそれに同化出来得る自分を想像した。彼が私の肉に在って私と同化し、彼の白い肉体が私の身体に歓喜を見せることによって満足を見出そうとしていた。戦争中私は未だ幼なかつたけれどR町の映画館で見たアメリカの戦争映画に出てくる日本人兵士のひどく誇張された姿を忘れることは出来ない。飢えて頬骨の飛出した日本兵は残酷なまでに黄色い顔をしてスクリーンに映っていた。あの顔が父や母と同じ血統を持つ日本人なのであろうか。密林によるめいて消えて行った日本人兵士の印象は私に其後幾多の才月を経ても忘られない少女の頃の思い出である。私がジョゼのアパートによく行った頃、テレビ女優のサーラには壁一杯の鏡があった。何気なく顔を上げるとみんなの中に黄色い顔をした日本人の女の顔があった。それはジョゼやテレビ女優や又その仲間達の肌の色とは異質なものであった。私はいつも抵抗を感じなければ

ならなかった。ジョゼとの関係にあつて異質なものを感じることは其の他にいくらでもあつたが夫婦生活になればそのことはもつと大きくひろがって行くか或いは女は男に忍従することによつて異質の認識を失つて行くものなのであろうか。それとも異質を認めることによつて相対的な和合が生まれるとでも言うのであろうか。しかしあの頃の私にとってはジョゼを愛することに喜びを持つよりも苦悩のみを感じることが多かつたのは事実だつた。私が絶えず確実なるもの、固定したもの、自分のものとしてジョゼを愛したにも拘らず、ジョゼは私の愛情を深く知ることなしに私のみに捉われない自由を欲していたようだ。ジョゼの姉が私に言ったように彼にはその頃二、三の女友達があつたし、その女の一人一人とジョゼがどのような関係を持っていたものか私にはよく解らなかつたのだが私の居る前で女から彼に電話がかかつたり、約束を交わしたりしていると私の心は乱れて行つた。

「貴方は、どうして私だけ愛せないの」

「女は棄てたい程沢山いるよ」

ふてくされたような表情をしているジョゼを見ると私はムラムラと怒りがわいて来たのだ。こんな男にどれ程に真実の愛情が解るものかと思つた。

私はテーブルの上にあつた灰皿を掴むと、洋服ダンスを開いている彼の背中めがけて、思い切りよく投げつけたのだ。灰皿は彼の肩をかすめてダンスの鏡に当り、ガチャンと大きな音をた

てて鏡を割った。ジョゼは真赤な顔をして私を睨むと、私の両頬を激しく打った。その時にテレビ女優が驚いてやって来たのでジョゼはそのまま何処かに行ってしまった、私は床にくずれていつまでも泣いていた。もうジョゼとは別れようと泣きながら決心をつけた。私が光男と結婚したのはそれから間もなくである。ジョゼとのことは少しづつ忘れ去ろうとしていた。テレビ女優が自殺してからジョゼは追われるようにあのアパートを去っていたし、何処へ行ったものか私は知っていなかったのだ。

それから二年の月日が流れた或日のこと。R町から突然私の父母がやって来て妹のマリアがジョゼ・ロドリゲスと結婚式を上げると言い出したのだ。マリアは二、三年前まで父母達の農園を手伝っていたが其後R町の資産家の家に家事見習いをしていることは私も知っていた。結婚後私は光男と二人でR町の叔母の家や父母の農国に行くことは度々あったがマリアがジョゼをどのようにして知ったものかは私には判らなかった。「マリアも馬鹿な女さ、あんな与太者にひっかかって子供まで孕んでいるというじゃないか、そうともなればどっちにしろ一緒にしてやった方がいいと思ったのさ」父もジョゼを納得させるまでには随分と骨を折ったそうであった。マリアはR町のオニブス会社を持っていて、マリアを知るようになったらしかつた。ジョゼは私に似ているマリアを見てそのままにしては居られなくなったのであろうか。しかしそれにしても私と別れ

た彼が私の妹のマリアと一緒にになるなどと、私には信じられ難いことであった。これ程の人口密度の多い都会の中で、よりもよってジョゼがマリアと結ばれるなどと、これは一体どういうことであろう。何か知らないが大きな宿命を感じない訳には行かないのだ。光男は私の結婚前のことは何も知らないでいる。私は出来るだけ良人の前では平静を装うことに努めた。光男はリオの有名な百貨店のウインドウ装飾の仕事をしていたし私も又結婚後も子供が出来なかったので継続して公務員の職を生活の足しにしていたので私達は生活には楽であった。土曜日、日曜日を二人の絵の製作に当て、お互いに絵の批評をし互いにその個性を尊重し合った。ジョゼのような肉体の逞しさは光男にはなかったが、お互いに絵を描く身にもなれば却ってその方が製作には展開があるように私には思えた。光男は常に製作に当って、光と影の中に色彩のニアンスを求めていたし波の風景画は貧民街が多くモチーフに扱われていた。私は人物を数多く描き自分のイメージをデフォルメしようせ苦心していた。

マリアとジョゼ・ロドリゲスの結婚式には私達も出席した。マリアは妊娠三ヶ月であった。ジョゼは私を見ると意外な程幸福そうな表情をしていた。マリアも嬉しそうであった。

マリアの肩を抱いて私達は病院の中に入って行った。うす暗い廊下のつき当りに中庭があつて、その辺には患者らしい人達や病院の看護婦などが歩いていたが中庭を奥に進むと樹木の向

うに別棟の家があった。其処の入口には血だらけのガーゼのようなもの、軒下に棄てられているのを見た。

屍臭が重く淀んでいる。最初の部屋の鉄の寝台には、白いシートから黒い二本の足首だけが見えていた。其処には私達がさつき病院に着いた時、入口の階段を登っていた黒人の女がボンヤリとして椅子に坐っていたが時々思い出したように白いシートを上げて死人の顔を見つめている様子であった。ジョゼの死体はその次の扉の向うにあった。二人の男が今やつと死体の衣服を替えてやったばかりのところであった。ジョゼはその大きな身体をすっかり硬直して不気味な程静寂であった。私はふるえるような感情を制してジョゼを見た。顔がまるでフット・ボールのように膨張している。

あのうすい唇が醜くふくれ上って紫色に腐った色をしてけた。額の真中が横に十センチばかり大きく裂けて其処は既に縫い合わせてあったが咽喉には真赤に裂けたままの傷があった。桜色をしていた彼の美しい皮膚は、黄色ともゴム色ともつかない妙に汚ない変色を見せて閉じている両眼の附近はドス黒い斑点に覆われていた。これがほんとうにジョゼなのだろうか、信じられなかった。しかしよく見ると見覚えのある部分が眼に映ってくる。

ネクタイの外れた白いシャツの下に白い毛の混った黒い胸毛が見えていた。

彼の手はまるでゴム人形の手のようだ。靴下のない真白な足が

行儀よく上を向いて並んでいた。そして何も彼もが動こうともせず固く静止している。

「ああこんなになって、なんということだろう」マリアの絞り上げる様な声が悲しく私の肺腑を突いた。

ジョゼは昨日の夕方、食事を早目に終えて家を出たそうであった。オニブス会社の当直になっていたそうである。マリアの家を出て五十メートルぐらい離れた地点の町のまがり角に来た時、前方を走っていた貨物自動車の後部の車輪がアツというまに空中に飛び上り、激しい勢いでジョゼの前頭部を強打したそうであった。居合わせた町の人々が駆けつけて来た時、ジョゼの両眼はガラス玉のように前に飛び出し額は大きく割れていたそうであった。

マリアがジョゼと結婚してから私は出来るだけ二人に会うまいと思っていた。マリアに二人目の子供が生まれてから間もなく、私はR町の父母の農園に行つて父からジョゼの消息を聞いた日があった。ジョゼはオニブス会社の事務員をしていて最低給料に近い収入しかなかったそうであるがテレビやタイプライターを月賦払いで買つたりなどして月半ばになると金もなくなり、そちこちで借金などするのだそうだった。タイプライターを買った店では契約書に保証人として私の父の名前があったのでジョゼの支払いが滞納するとジョゼの住んでいるN町からR町の父のどこまで集金人が来るということであった。恥知らず

にも程があると父は怒り、たまたまマリアが子供をつれて金策の相談に農園に来ると、そんな亭主なぞ捨てて家に戻って来いと父は怒鳴ったそうであった。そんなことがあってからマリアは二人の子供をつれて私を訪ね借金を頼みに来たのである。一番目の女の子はもう大きくなりジョゼに似て澄んだ美しい眼をしていた。二人目の赤ん坊は男の子でどちらも可愛いと思っただがその日暮しのようなジョゼの投げやりな生活態度には私も腹が立って来るのであった。或年の真夏であった。光男が友人と写生旅行に行ったことを幸いに私はマリアの住んでいる町に行った。その日は朝からうだるような暑さであった。土埃りの立っているN町の外れにマリアの家を探した。同じような作りの家々が十軒ばかり集ったヴィラの中の家の一つであった。小さな子供達はその袋小路の中で二、三人代りばんこになって三輪車に乗って遊んでいたがマリアの娘の姿は見えなかった。家の中から半ズボン一つだけの姿でジョゼが笑いながら私を呼んでいるのを見た時、私は後悔してこのまま帰りたいと思ったが兎に角彼等の家に入ってみた。マリアは子供達を連れてR町の父母の農園に遊びに出掛けていて留守であった。「もう一週間にもなるんだよ。そろそろ帰って来て貰わないことには僕だって困るからな」台所に入ってみると、汚れた鍋や皿で一杯であった。私がどうやら食事らしいものを作って食卓を作っていると、台所の入口に立ってジョゼは照れたように私を見ている。

「久振りだったね。何年ぐらいになるだろう」

「何年になろうと余計なお世話よ。女房子供を追出して自分勝手に好きなことをしているなんて、恥知らずにも程があるわよ」  
「そんなことを言ったって、マリアは好んで子供達を連れて農園に出掛けたんだから僕の知ったことじゃないさ」

「貴方は一体、妻や子供が可愛くないの」

私はジョゼの歯がゆさにじりじりしていた。ジョゼは椅子の上  
にゆっくりと腰を下して、見上げるように私の顔を見ている。

「ねえ、今だからこそ聞くけれど、どうして貴方はマリアと結婚する気になったの、私の妹だってことを知っていたとでも言うの」

「ああ勿論知っていたさ。知っていたからこそマリアが好きになったのかも知れない」

急に腰を上げてジョゼは私の腕を取った。凄い力であった。私は裸に近いジョゼの身体に抱かれそうになって必死になつてもがいた。大声を上げては隣近所があつた。そして私は力づくでジョゼの接吻を受けた。甘酸っぱいジョゼの強い体臭がふつと私の忘れていた過去を整えらせ、私はジョゼの胸に抱かれて行った。私はジョゼを愛しているとでもいうのであるのか、それとも一体これは何んなのだ。荒々しい男の息づかいの下で私は涙があふれて来て仕方がなかった。

「貴方はマリア以外に他に女は作っていないようね」その事が終ってから私は身繕いをしながらジョゼに言った。

「ああ僕も四十を過ぎた年だしね。年を取ってくると昔のように

は行かないさ」

汗ばんだ裸体をそのままに寝台に裸になって横たわっている男の姿を私は見た。そう言われてみればあの頃からもう十年近い才月が経っていたのだ。

男の白い身体は今ほ妙に肉も落ちて肌色もあせ、黒い胸毛にも白いものが入り混っていた。

今此処にジョゼの死体が横たわっている。あの頃私を求め、私を愛撫したジョゼの肉体は今ほ見るからに醜悪そのものであった。そして肉体はこれから腐敗を始めようとしていた。ひっそりと静まり返っている。信じられないことだ。これが死というものであろうか。何も彼もこれで終ったというのであろうか。

弟のマルコが依頼した葬儀屋がやって来た。ジョゼ・ロドリゲスの死体はその男達の手によって納棺されようとしていた。私はマリアの手を取って、そつと裏口に出た。明るい陽の光りが高い木々の葉蔭からこぼれ落ちていた。良人の光男は甲斐甲斐しく他の男達と一緒に釘づけにした屍棺を霊柩車の方に運んで行った。N町の高台にある墓地は涼しい風が吹いていた。丘の上には人夫達がすでに穴掘りを終えて待っていた。屍棺はやがて一行の手から人夫達の手へ渡り、穴の中に下された。人々は手に花を持って死者への訣別を始めた。私は良人の光男に肩を抱かれて立っていた。マリアのすすり泣く声にまじって棺の上に落ちる、鈍い、重い土の音を聴いた。

(完)

コロニア文学第五号・けいさい作品の選后感

選考委員

尾 関 興 之 助

矢 島 健 介

弘 中 千 賀 子



選後寸評

尾 関 興 之 助

コロニア文学第2号へ寄せられた作品の掲載選考をするのがわれわれの役目である、各作品にたいする寸評次の通り

「紺青の城」 醍醐麻沙夫

この作品は非常に観念的である、ということは作者の現実観が土についていない、身振りばかりでしかも饒舌が多過ぎる。大出という主人公にしてはいうことなすことが余りにもこどもじみている。もっと生活のにじみ出た作品が欲しい、筆先を器用に動かしているといわれてもしかたがない。

「虚構の果て」 伊那 宏

この作者には作家的な素質がある。

ただこの小篇は女主人公のモラルをもっと鋭く追求しなければならぬ、写真結婚による主人との初対面における違和感、たゞ冷たいとか高慢だとかでなく心理的な掘下げが欲しい、また植田という旧移民（小作）に抱く親近感などの解明と彼に抱いた愛情の必然性をもっと強く描かなくては本物でない、何か物足りない作品である。

「タイム・イズ・マネー」

蓼科冴智雄

死を予期した父の警句としてとるとしてもこの題は一寸ふざけているようだ、それに人間味のある父が死んで始めて兄と私がこの句の本当の意味を悟ったというのも大人気ない、そんなに哲学的な含蓄ある言葉だとはおもえない、凡作。

「贗」

堀江 一声

銃撃士とは一体何か、読んで見るとカッサドル即ち獵人のことである。字句の意味もみきわめずに呑気に使う作者は作家として既に落第である。

「移 植」

川原 奈美

篇を追うに従って作家の腕がにぶり少くとも第一回作に見られた新鮮味は消失したようである、無理に作品を引伸ばさずに

いいところで切上げた方がよい、離婚した夫との奇遇など真実味もなくその夫をとりまく物語りは退屈きわまるものである。

「日照雨」 川原 奈美

この作品は読み応えがあった、同じ作家の作品とはおもえない、病んだ老婆とそれをとりかこむ家族の動静がよく描けている、老婆の追体験には現実味がある。

特に若くして院代さんと結婚しブラジルへ渡った動機や挿話は生々としておもしろい、しかしどうして美輪お婆さんとよんだりお婆さんというのか、たゞの美輪とか祖母とよん

だ方が文章がひきしまるとおもう、移民時代の生活や耕地脱走などの物語には現実的な感じがにじんんでいる映画でいう「フラッシュ・バック」手法による現在と過去のつなぎ合せはうまい、たゞ一寸腑におちないのは院代の死ぬ前の話は非常に陽気でそれ以後の述懐は暗く陰気である、罪の意識とすれば前半にも出てくるのではないだろうか、二重性格の主人公のようにとれる、力作である、ちよつと整い過ぎて中間小説的なあと味が残る。

「朝の気分」 野上千枝子

書けば書ける人である、しかしこの題にはひっかゝる、これでは子供の作文と見られてもしかたがない、この小品はきれいな点張りで特に魅力はない 「やがてパツと眼をひらいて何かを

振りはらうような手つきで」では小説にはならない、やはりこれから一步悪の道にはいったところから始まるといえよう。

「轍のない遺」 米沢 享

この作品には残念だが何一つとりえがない、素材も構成も筋も陳腐で文章のうまみもない これではもらえない。

「迷 夢」 安部義郎

いくら夢物語とはいえこれは夢の部類にはいらない、余りにも通俗的で少しの真実性もない、歴史の実証性もないし奔放な想像界もない。いぢけたけち臭い物語、それならそれでいゝが、この作品は駄作である。

「アマゾン彷徨」 高橋 英一

アマゾンに住む一邦人の狂った行動を主軸とした物語だが文章も幼稚だし事体の中心がはっきりとしない、このストーリーを意味づける主体が明確でない、作品の意図をつかんで書いてもらいたい。

「陰翳の歌」 石城 秀節

井田という主人公が妻の昔の恋文をタネにゆすられるという物語だが文章も幼稚、構成も貧弱、何一つひきたつものがない、現実感もないしユーモア味もない、作者よもっと自重せよと

いゝたい。

「香れバラ」 高山 東作

この作家には才分あることは前から認めているが、このロマ  
ンチックな精神は尊いものである、たしか手法とたくみな描  
写は作品と楽しいものにするがこの作品は主題があいまいであ  
る。たゞの異国趣味がのぞくだけで何をいゝたいのかわからな  
い。書くということはなにか訴えたいモチーフがあるはずであ  
る、もう少し鮮明に出せないものだろうか、

「埋 葬」 福村 琳

これはまた新しい作家のようである。しかしなかなかうまい、  
一人称の私が女主人公である伯人の女たらしに誘惑され同棲す  
るようになる、しばらくたつと捨てられる、ある日その男が自  
分の妹と結婚したことを知ったがまたしてもその訪れた男と肉  
体関係を結ぶことになり人生の複雑さを描く、物語はロドリー  
ゲスというその男が病院で息をひきとるところから、フラッ  
シユ・バツクの手法を用いて淡々と語りだすものでコロニアに  
はめずらしい筆達者である。

文学的な素養を積んだ作家であることがわかる。近頃まれに見  
る佳作である。これだけの素材と内容をまとめるのはかけ出し  
の作家にはできないことである、大いに次作を期待したい。

(一九六七・八月)

## 作品寸評

矢 島 健 介

毎年各紙で募集され、又コロニア文学誌の毎号の選後評を読んでいると、一こうに佳作が無いと言う印象を与えるが、今度原稿を通読して、そうとばかりは言えないものを感じた。それぞれ熱心でうまいし、面白く読ませる。採否は紙一重と言えるかも知れない。程度を上げるときりはないが、日本のように純文学物、大衆物、というような区別があつたら、それに近い作品が多く力強く思った。

香れバラ 高山 東作

でつち上げの恋愛劇よりすつきりしていて、感じがいゝ。目新しいこともないが、作者が旅（遊びではない）というものからある程度人生を抽出しているし、所々うまい言葉使いもある。だが半面「しばらく」「そんなとき」「それから」というような接続詞の連発を感じさせた。

最後に「日本人の目が細い」と言われ、その男に一撃を与えるあたり、現実では大人げないが、奉公人の主人公が誰にもあたれない憤懣感をそういう形で現した小説ととればうなづける。最後の詩はなくともいゝし、表題は俗っぽい。

出 発 南条 星路

最初からどぎつい男女の痴戯（ぎ）が現れる。それはそれでいゝとして何としても俗っぽい。何か特臭な、そういう場面を描く

ことによつて男、或は女の執念とかを現すのなら生きてくるが、ただの遊戯では何とも致し方がない。作者は文学というものをもっと突っ込んで考えなくてはならない。考えているとしたら表現が淡すぎる。面白く読ませるのが小説と言えても「出発」の場合文学からほど遠い。登場人物の生活、背景、人生というものを中心に、性生活はその一部として扱うともっと生きてくると思う。コロニア文学もこういう小説より一歩進んでいると考えられたい。

轍のない道

米沢 享

技巧に秀れていてとれない作品とその反対に、文章のまずいわりに考えさせるものがあるとしやら、米沢氏のは後者といえる。

少しもたまたしているが物語を暗示的に出発させたのはいゝし、消息をたつた娘を気にする妻と、同じく苦しみながらも、妻の行動や娘を批判し、もう子供ではない筈だから、とある面で許している親父の考えかたも平凡だが一応出来ている。

博子が両親にあてた手紙が物語の中心で、これは実にうまい。作者は自分の智能をこの手紙に集中したかの感さえあるが、二十そこそこの娘に人生をさとしたような手紙を書かせるのは、少し出来すぎていると思う、もう一つ自分の子供の名を「貞祐」と名づけ、貞を天からの祐けだと説明するところなど二世の娘にはとても出来ない芸当だ。それに前半では両親の杞憂に比重がかゝっているが後半では娘の感情に移って行くのも、短篇と

しては無理じゃないか。

陰翳の歌 石城 秀節

表題のうまい作者だが、会話が平凡、うんと省略していゝ。妻の昔の恋文を売りつけられて苦しむ気の弱い男の心境はよく描けているが、後半が種明しのようにくどくどと並べたのが蛇足、それほど読者に親切でなくともいゝ。

埋 葬 福村 琳

一応出来た作品である。男女関係はありふれているが、文章の綾で読者を引きつける。一人の流行画家の、五年、十年の行末を考え「満潮はやがて干潮に変わって行く」というような独りよがりな所もあるが、会者定離と言った物語の構想からそれを生かし得ているし、二世の私を中心にジョゼ・マリア、それに一世から二世に移る過渡期の時代相を淡いがよくこなしてある。女が男にひかされる過程をもう少しほしかったが、その他はまらず及第。

迷 夢 安部 義郎

文章のうまい作者で、苦心のあとがうかがえるが、素材が素材だけにどうしても概念的になり勝ちだ。架空になり勝ちなのをかなり主人公に引きつけてはいるが、その為に又臣連事件とかけ離れた存在となっているような気がする「信仰が異なる故に物の見方がちがう」と考えることも臣連と結びつけるのはとりよようによっては無理だ。勿論押川の場合とし、臣連事件異聞とすれば通じるが、背景にもっと臣連事件の真相にせまっしてほし

かった。それはむづかしいことだが――

押川が娘の萩江に洗礼を受けさせられ、ある心の安定を得る最後のくだりも道徳的に美しくても、文学的には俗っぽくした。最後まで人殺しの本音を吐かなかったのはまずい、としよう。

朝の気分 野上千枝子

軽いタッチの短文で、独創的なものが少く、繊細なわりに物足りないものがある。夫はある程度見ているとしても、妻が貰った魚に戸迷いを感じない所など書き足りない。或は魚屋となれあいの感を抱かせて、この短文を殺している。

鷹 堀江 一声

文学好きであっても、まだ修業が足りないようである。作者だけがわかっている文章でなく、読者に訴えるためには、それぞれの登場人物を彫刻的に造形する必要がある。

虚構の果て 伊那 宏

「女房は旦那さんより体格がよく、肥満して動作が実に鈍重でしたが、割合に愛想よく笑うと眼が糸みたいになるので泣き顔になるのです。」

「植田さんはひどい近眼でいかにも人の良さそうな方ですが、どこか生彩のない無気力さを感じさせます」、等々、現地邦人を把握する目がよく行きとどいているし、構想にもそつがない。

続 移植 川原 奈美

すごく自分の意志で動いている女なのに、終章で、「いつか自分の意志に依って動いたことがありますでしょうか」という所

少しひっかかったが、落付きのない、異状な心の状態として、手紙をやぶってしまう所ですくわれている。シルバーノに近づきかけて、それ以上発展させないのも非凡な手腕だ。省略のきいた文章で、読者を引きつける。少しの傷はあっても、内面のよさは高く評価されてよい。

TIME IS MONEY 蓼科冴智雄 前号で〈人間の悲哀〉というものを掌に乗せて示すように書いた作者、今度はすごくおどけた、と思つて読んだが終章で、同じく〈人間の悲哀〉に引き込んで行く。コント風な作品に手なれた作者で、いゝものを持っていなが、繰返すと掌の内がばれてしまうことにもなる。

日照雨 川原 奈美

石塔倒しの因習はどこかで読んだことがあるし、蝗の襲撃も聞いた話で新鮮味はないが、そういうものを作品化し、文学の域まで高める、と言うことが、コロニア文学愛好家の希望であるとしたら、この作品は、そういうものゝ一つの試みとも言える。

成功とは言えないまでも棟腐な素材をもつてこれだけ引きつけるのは、作者の素質がものを言っているのだろう。

ただし「夏の夜明け」以後の文章はなくともよかつたように思うし、革命騒ぎが、一九三二年のものとしたら、その頃の棉の値は二十ミルもしてなかつた筈だ。

紺青の城 醍醐麻沙夫

きめはこまかいが廻りくどいとも言える文章、だが、所々独創的で気がきいている、書きなれた人のようだ。作者は新来者らしい。新来者は我々がすでに見あきたものを新鮮な感覚で盛り上げる手腕を持っているが、それは発見でないからすぐ常識化される恐れがある。舞踊コンクールの場面などもその一つで、少女との関係上必要としてももう少し簡略法はなかったものか、かなりインテリである主人公が、芸能に引かされてゆくのはいゝが、レコードの手違いから順子の手はずの狂ったのも気づかずに居る、と言うのは平凡な男をさらしているようで買えない。

この素材は恋愛を中心に持って行かないで、芸能というようなものを掘り下げると面白いものが出来るのじやないかと思った。読ませるための男女関係なら捨てた方がいゝ。

アマゾン彷徨　高橋　英一

何かにとりつかれた男が、家族をうながして東に向う、という物語で「特異」ということでは、この度の作品の中で唯一のものだった。うまくやると「檜山節考ブラジル版」が出来そうだが、なかなかむづかしい所だ。「神仏を信ずる、」だけでは漠然とする。やはり独特な宗教を持ち出し、東に向って行くことに憧れとか希望、人生の徒労というものを暗示的に示すのならいゝのだが、「腹がすいて帰ってくる」のでは常識的、当然の帰結として頂けない。事故によって家族が傷つく場面もあるが、この物語の場合、主人公の梅次を殺した方が、読者をほっとさ

せるものがあるような気がした。

## 読後の感

弘中千賀子

“陰翳の歌” 石城秀節

厭味のない文章だがやゝ粗雑だと思う。それに“感情のぶすぶす”を持って余す”などという表現、気になる。

お話としてはかなり面白いと思ったが、只それ丈のものという気がする。

“轍のない道” 米沢享

この人はいつも題のつけ方がうまいと思っただけ、卒直に言わせて頂くと、会話がまずい様な気がする。例えば中年夫婦の、妻がその夫との会話の中で“不逞の臆測でしょうか”などという固い言葉をつかうものだろうか。家出した女子大生の悩みも平面的に描かれているし老教授の人間も書けていないように思う。

“埋葬” 福村琳

登場人物のどれもいさゝかピンボケな感じがする。ジョゼーの埋葬に立ち会った”私”の気持をもっと掘り下げ、それを主体にして書いたら、“私”の周囲の人物像も、もっとはっきりして来る様に思えるのだが…。筋立ての方に重心がかゝってしまつた様に思えてならない。

“迷 夢”

安部 義郎

ゴタゴタしていて一寸読みづらい感じ、結局それは重病の床の夢だったという結末に辿りつくまで読者の方では一寸混乱する。押川という主人公の矛盾だらけな性格が、もう少し書けていたら、実に人間くさく、あくの強い面白い作品になったのではないかと少々残念である。

“香ればら”

高山 東作

情景描写の腕、かなりのものだと思った。放浪性のある、“私”と杉本がサンパウロ市から、アルゼンチンまで流れてゆき日本人の農園で働く。実習生の自殺事件があったり、友達の松本や、そこでの先輩島崎とのからみ合いなどの中に無気力な“私”という人間が捉えられている。あまりまとまりがよいとは言えないこの一篇の中に流れている虚無感の様なものが不思議に読む者に訴えてくる。

“虚構の果て”

伊那 宏

小説の形式も整っている様だし、文章も相当うまいのだが、筋が平凡だと思う。心理描写も類型的だと思う。

“TIME IS MONEY” 蓼科冨智雄

一寸した思いつきで書いたコント。可もなく不可もなしと言った感じ。

“鷹” 二

堀江 一声

当て字、誤字が御飯の中の砂粒の様に気になる。“鷹”二、となっているので続編なのだが、私には、何んとも批評のしよう

がない。だがいかにもブラジルの農村らしい土くさゝは不思議な魅力を漂よわせている。このまゝでは、まとまりが悪いのではないだろうか。特に結びの方が投げやりな気がする。

“紺青の城” 醍醐麻沙夫

すぐれた描写力、垢抜けした玄人っぽい文体。巧みな比喩。今まで読んだ中で飛び抜けてうまいと思った。未完、六で終る予定、と書いてあるが、宮沢良一という本篇の主人公の姿の中に、戦後渡伯して来たインテリ青年の思考と行動が、こゝ迄では、やや観念的に捉えられているけれども、後半の完結を待つて完全に彫り上げられたときには、“コロニア文学”誌の一つの収穫になるのではないかと思った。

“アマゾン彷徨” 高橋 英一

「東山三十六峯、草木モネムル丑満刻、夜十夜十五条ノ橋ノ上二現ワレタ。

神様、私ハ、イマ行キマス。東ノ方へ。待ッテイテ下サイ、私タチヲ。

必ズ行キマスカラ…。キット行キマスカラ。」神がかりの様になってこんな言葉を書きつけた紙片を家の壁に残し、厭がる妻子を連れて只東の方へ歩きつゞけるが一晩風雨にさらされて又帰ってくるという筋、このまゝでは作者の意図し、訴えようとするものが何なのか私には解らない。

“出 発” 南条 星路

こういう小説は、もはや陳腐と言うより外ないと思う。それに

文章や言葉にも、もう一寸神経を使って書かれたら、と思う。

“朝の気分” 野上千枝子

さらりとした厭味のない文体、どことなくユーモアも漂っていて読みやすいのだが、いかにもありふれた筋立てだと思う。結末の、美男の魚屋が鯛を只で置いて行くというのも、少々突然で取ってつけた感じ。そこまで書かなくても、美男の魚屋を対象にした人妻の、ほのかなよろめき心理は書けるし、その方が自然ではないかと思った。

“移植” 続編 川原 奈美

渋滞のない文章、一人称の形式の小説の中にはさんである会話も適切でうまい。移植した鉢植えの松が枯れた、ということに暗示された“私”(ユミ)という人間の運命と。移民というものが、異国に馴染み、根を下してゆくことの困難さをシンボライズしていることも、全くうまいと思う。只結末のあまりにも小説的な手法。こうした結び方は初めてではないけれど。物語りの面白さへの配慮に作者の重心がかかりすぎているようで、読み終わった私の頭の中にユミという一人の女の実在感がかえって薄れてゆく様な気がした。読者というものは全く欲張りで勝手なものだと思うけれど…。

“日照雨” 川原 奈美

女性作家というのは遠い”かたりべ”の昔から本質的にストオリイ・テイラーだそうである。この人はとにかく読ませる作家である。登場人物の描き方が平板な様な気もするけれど。

日照雨の使い方。お美輪婆さんの“かたりべ”的な面白さ。コロニアの数少ない女性作家の中でも貴重な才能だと思う。川原さんの今後の作品をたのしみに持っている読者の中の、私もその一人である。



## 地 方 文 学 界 の 動 静

クリチーバ地方の文学する人々

### ☆その作品と生活☆

梨花の香に満ち溢れ、ピアノの音が流れる住宅街の家々に、紫の藤が垂れ、舗道の芝生にも、あじさいが咲きこぼれる。カテドラルの晩鐘が響き渡る中央公園の、黄金色のイペーの花が、ほろほろと散りかかるベンチには、手風琴にもたれた盲目の即興詩人が、ひっそりと、憩っている早春の夕べ。

黄葉したプラタナスの並木道を、黒衣を裾長に着た二人の尼僧が往く彼方から来る白いジャケットにラケットを抱えた、少女達の明るい声が、紺青の空にはねかえる晩秋。

詩情豊かな、北欧の古都にも似たクリチーバ市は、三世紀の歴史を持つ、人口六十五万のパラナ州の首都である。

ブラジルのコインブラと呼ばれ、国立大学（十二学部）、カトリック大学（七学部）、中学七十五校、小学百二十七校、うち日系学生約三千人。

又そこには、古典文学や専門書などを備えた日本書籍の部屋もある、白堊の州立図書館も含めて、四十七の図書館を持つ、文化運動の活発な学徒の町である。

日本人がこの地に足跡を印したのは、五十年前であるが、一九三七年、ポンタ・グロッサ郊外に、水野竜がコロニア・アルボラーダを建設するに及んで、クリチーバの街にも、日本人の顔を散見する様になった。急速に日系人の進出をみたのは戦後で、以来、市内に約六百家族、近郊地帯を合せて、千百家族の現状に至ったのである。

その地方の文運の消長は、その属する社会の経済的盛衰や気運が影響するものの様であって、且て、北パラナ地方が、燎原の火の様な盛んな開拓当時、コロニアでは、堀田栄光花が主宰したパラナ・ペンクラブの活気ある文学運動があり、各分野に亘る絢爛たるメンバーを想起することが出来るのである。

クリチーバ地方に於ける文学運動の嚆矢は、一九四五年に、山崎南泥や宮崎扶双、怪城、北竜兄弟らによっておこされた。俳句の松の花吟社である。以来二十数年、幾多の優秀な俳人を世に送り出し、南泥主幹を中心に、十数名の会員で、サロン気分の和やかな月例会が、綿々として継続している。

一九五〇年代初期には、小倉清、井上又次郎などの、格調高

い評論を発表した人々が居り、渡部南仙子も在住していた。当時、氏は緑野神太のペンネームで、短篇小説『梨奈のはなし』を文芸パラナ誌に発表し、亜舞凡々で川柳をものし、齒に衣きせぬ適確無類の文芸評もした。

『曲水』の同人で、

青ぶどう女みごもりてはやさし

魚の目の死にても光るマチスの青

という様な色彩感豊かな俳句を作っているが、本格的に絵画を初めたのも、この時代である。多才多芸のこの人の六年間の在住は、何らかの形で、文学的な種子を、この地に遺されたものと思われる。

こうした高水準の文学発表はみたが、散発的なもので、永い間、後続する人々がなかった。

宗匠山崎南泥はクリチーバ在住二十六年、吟社を創設して、今日の隆盛をきたしたのは、氏の尽力に負うところが大きい。建築技師である氏は、七十才の高令にも拘らず尚、一建築会社に籍をおき、重役待遇で一室を持ち、閑職にある。東北弁で大笑いする磊落な性格は、明るい親しみと信頼感を人心に与える。万年会長型の名士で、どこの会合にも、夫人同伴の氏を見かける愛妻家である。

俳歴の古い人だけに、

鷺舞うて花藻流るる国境

磯の春石斧砥ぎしという巖

などという、構想の広大な、沈潜した境地の秀句がある。

吟社創立者の一人、宮崎北竜は、

いかにも道産子らしい重厚素朴な農人である。

移り来て南パラナは柿の秋

真赤な実をたわわに垂れた、柿の木

のある氏のシャカラからは、クリチーバ平原の彼方に海岸山脈が望める。

午を見し双眼鏡を春山へ

ばらを三万本植え、牛を飼う句作三十年のベテラン俳人。

ばら剪って牛乳を搾ってからが閑

成人した息子達を相手に、今でも、いかつい靴を履いて鋤をはなさない。

世にへつらわれないが温かい人柄のゲーテ詩集を愛読する田園詩人である。

四本光男は、飄々とした、いかにも植民地的風貌の俳人である。釣りと麻雀が俳句よりも好き、と云い乍らも、流石に俳歴二十年、

掛売りはせまじと決めて懐手

ほの暗き厨に蛇を釣りいぶす

などの秀作をもつ。

猫の蚤なかなか絶えず日向ぼこ

の久子。 珈琲蒔の縄尺借りて木の実植う、 の颯舟ら弟妹と三人共営の家業は順調で、市立公園よりの住宅で、雨の夜など

は、家庭句会を楽しむという羨しい雰囲気をもつ。

新進の俳人斎藤円岳は戦後移民で、日本の医学博士の肩書をもつ人。秀才の息子達が、それぞれ独立しているので、町のほとりに閑居して、ホリネス教会通いが仕事といった、よき境遇である。いこま正に師事して、俳歴僅か二年というに、やはり高い学識がものをいって、

異人恋う子に妻も愚痴遠蛙

秋風や乳房地に置き山羊憩う

などの秀句を『鶴』誌にのせている。

今では作句を休んでいるが、パインイラ吟社出の鈴木夢座も、忘れられない俳人であろう。十年前にクリチーバに移転。松の花吟社中興の功労者である。

我が心読むか時雨の豆腐売り

成功とは虚ろな言葉椰子の花

とは云つても、中央市場内に薬局をもち、先ずは成功者の一人。何事にも一家言をもつ、珍しく博識な俳人である。

日本からの俳人森冬葉とその息子達、建介、淳介、律夫ら俳人一家も近郊に住み、

げんげ摘む吾は明治の子なりけり

冬葉。

●に夜業の露や星に発つ 建介。

春昼の大樹を盾の野糞かな 律夫。

他にも大塚誓春の

霧の市行き会う女馭者ばかり  
や、石原良風の、

島一つ売り買う話皆跣足  
などの秀れた俳人がおり、

大漁旗 掲げてくるかや夏の海  
の佐々木良江、

自動車を盗られし騒ぎ朝寝覚も  
の土屋福美、

耕して珈琲刻の水鏡  
の青木ちさえなど、達者な閨秀俳人も多い。

ここに、それぞれの句が思い出せないので、残念ではあるが、  
平藤正慶、猿稿塾水、原白翠、加納加舟、鈴木素行など、俳句  
部門は多士済々である。

近くのパラナグアにも、大石青村が率いる黒汐吟社がある。  
パラナグアと云えば、コロニア第一級の川柳人藤田蚊奇智と、  
その夫人で短歌の藤田美砂子が健在である。

一九六〇年は、クリチーバが、二人の文芸人を得たよき年で  
あった。

短歌の本庄研一と創作の生駒正である。

生駒正は、処女作『カルモの角笛』で、よみもの賞作家とし  
て登場した。奥ソロ地帯で、一九三八年頃から、短歌と俳句を  
はじめ、後『鶴』によって俳句開眼した。その頃、『道化者』が  
よみもの賞に、『泥にまみれて』が文芸パラナ賞に入選し、最も

油の乗りきった時代で、新聞紙上に、盛んにエッセイを発表している。クリチーバ移転の前後十年程の空白時代において、生島かおると改めて、カムバック第一作『離愁』を第七回パウリスタ賞に、次いで『黒い壁』『疣』と毎回力作を応募して、精力的な文学への情熱を再燃させている。

春風駘蕩とした容貌ながら、事ひとたび文学論となると、秋霜裂帛のきびしさを持つ氏は又、コロナに数少ない批評家でもあり、吉祥寺大と称して、文芸批評も発表している。氏の持つ豊富な題材と、応々にして、家業の製菓業を忘れしめるという、文学に対する不屈の執念とは、今後共、あの繊細微妙な文体の小説を書き続けてゆくことであろう。数に於て圧倒的に多い『木蔭』による周囲の俳人達をよそに、信仰にも似た根強さをもつて、よく『鶴』を守る孤独な俳人でもある。

野火止めの祈りこだまの夜となれり

完璧の夏空の下癒えにけり

など、最近は目ざましい進境をみせている。画や写真や釣もよくする趣味の人で、パラナ画壇に彗星の如く現れた少壮画家フエルナンド・イコマは氏の三男である。

本庄研一の歌歴は古く一九三八年に、晶山充らとアサイ歌会をおこし、『南回帰線』『パラナ松』などの合同歌集を出しているが、前者の『民族』一連や後者の清冽な秀歌と『アサイ歌壇のあゆみ』の文章とは、高く評価さるべきものである。虚無的な都会人のセンスを持ち乍ら、決して妥協を許さない産青へい

的根性を併せ持つ人。子息達と共同経営になる種子類、農薬、肥料、農機具類の輸入商、アグロスール有限会社の社長である。

砂浜に耳つけ眠る夜もすがら夢の

切れ目にひびく潮騒 専ら海釣に専ら海釣に遊び、

造形のいとなみつづけいる蘭の固き蕾の晦渋とわれと 温室を持つ温室を持つ蘭蒐集家。

余剰なる枝剪ることの易からず果樹もさびしき冬の貌もつ

『世の終りの瞬間まで林檎を植えることを止めない』という大地への愛着を捨てず、南パラナ果樹研究会の会長でもある。昨今は作歌の方を、暫く休んでいるが、真木研一のペンネームで、端正な達意の文章で、随筆を新聞紙上や文章会に発表している。又、まれに見る蔵書家で、非常な読書家である。

とじ終えし冬の用意の蒲団をば西日に干して心足らえる ぼのぼのとした温さをもつ家庭短歌の真津緒との、羨しいおしどり歌人である。

他に小堀行男や梶田きよ、斎藤貞子らの閨秀歌人もいるが、未だ歌会を持つに至っていない。

創作部門の北原寒三は、且て、アリアンサ植民地に二十七年間も在住し、日語教師、産業組合の要職にあったという経歴が、人柄に滲み出た、酸いも甘いもかみわけた苦労人である。息子達の製材所の出資者として、目下、悠々自適の生活を送っている。

前任地では、児童の学芸会から、青年団の演芸まで、台本を書

き、演出もした演劇畑の人で、好きな道で、短篇小説『歲月』を文章会に提出したが、その澱みのない文章と巧みな構成とは、処女作とも思われない佳作である。

第一回よみもの賞で、処女作『辞表』が人選した摩耶晃は、以来、数多い随筆風のを、新聞雑誌に発表したのが、『日短か』『あじさい』、『子守唄』などの短文が好評であった。十数年間、ペンを折って隠遁していたが、まやあきらと改めて復活し、『灯』を農業と協同志に発表して再び、新聞などに短文を書き始めている。現在、家業の町工場では、ベンチにあつて、専らピンチヒッター役である。

その他にも、田口朔太、豊島健穂など隠れた文筆家も潜在しているらしく、多くの学識者、文化人の多いこの地方には、まだまだ筆の立つ人々が居るのではないかと思われる。

日系二世を中心にして、一九四九年創立のクリチーバ学生連盟がある。

現会員は約九百人で、活発な文化運動をしている。日本文字のものも含めて、千六百冊の蔵書を持つ図書館を備え、日本語教授の部門もある。

毎号の機関誌ア・ボス・ダ・ウニオン紙に発表されている、農大生ネルソン・タジマの詩は、権威ある筋からも注目されていて、近く、詩集出版の運びになっている。

昨年から、北原、まや、真木、生駒などで、文章会を初めており、隔月に、作品を持ち寄って、切磋琢磨の場としている。

松の花吟社では、創立二十五周年を記念して、合同句集発刊の企画があり、最近は、俳文会も併催して、意欲をみせている。この地方の雑誌類の講読数は、所謂カストリ雑誌百二十冊に對して、中央公論三、文春二十五、新潮二、鶴二、木蔭九冊と、余り多い数ではないが、経済の確立と共に、その数量も増加されるであろうし、ここの文学運動も、よき環境をもつシダー・ソリーズ（微笑の町）クリチーバの発展の様に、静かな、しかし絶えざる前進を続けてゆくことであろう。

（一九六七・六・一五）

## バーレ・デ・パライーバの文学的点描

江尻 潤

高い梢のかなたに

日ましに蒼む空

空の色に染みて

これもまた

日毎に蒼む海岸山脈

と、当時、モヂ附近に戦禍を避けて住んでいた古野菊生氏が唄ったような海岸山脈すなわちセーラ・ド・マールと並行して日本の連山を想わせるミナス山脈が幽玄な容姿を長々と横たえている。

その間を、今や副線道路が完成しようとしているリオ・サンパウロ街道すなわちビア・ヅットラが山を断り谷を埋めて真直につづく、そのビア・ヅットラを時々横切って左に入り、右に戻ったりして、遠くリオ市まで流れ出る河が、リオ・パラíbaである。

この河の源は、今回数世紀に稀有な出来事だと云われるカラグアタツーバの水害の元になった同じ峯の海岸山脈である。リオ・パラíbaは、パラíbaナ辺りから相当な河幅になるか、ジャカレイの町の近くを通るころになると、その河の両沿側が平な湿地帯となり、それは中央線水田地域となり、その幅も二キロから七、八キロほども広くなり又狭くなりしてサン・ジョゼー・ドス・カンポス、カサツパーバ、タウバテ、ピンダ、アパレシーダ、グアラチンゲタ……と昔から、日本人移民が水田トマテ、バタダ作りに苦斗してきている、この辺一帯をバーレ・デ・パラíbaと呼ぶのである。

このバーレ・デ・パラíbaは、五十年も前から日本人に目をつけられて大規模な農業が繰返されながらいつも盛衰して長い間、日本人コロニアに忘れられていたが、近年ようやく脚光を浴びて、急激に日系農家が増えはじめたところである。霜は殆どおろりず、リオ・パラíbaの増水で時には大被害を受けながらも、その冠水のために、害虫や疫病は抹殺されて、同じ土に毎年トマテもバタタも連作できるといふ特殊地帯である。霜が降りないのは、リオ・パラíbaの水が豊富なためと標高が

六百から七百メートル以上ある盆地々帯のためでもある。ただ、農作者はリオ・パライーバをどう受止めるかという問題だけに成功、不成功が賭けられているのである。

このバーレ・デ・パライーバの特別事情がようやくコロニアの日本人農家の目をつけるところとなりつつあり、モヂ、スザノ方面からも、次第に転入しつつあるのが、サン・ジヨゼー・ドス・カンポス附近である。

この天然に恵まれたバーレ・デ・パライーバに、且てコロニアの関心が薄かったためか文学人口も至って稀薄である。

先にリオよりの方から見て行くと、ピンダモニャンガーバ市の郊外に百姓をしている歌人の坪田義雄がいる。

彼は且てその附近に居住していた新納潤魚の感化で歌を作りはじめたらしく。その先輩の新納氏リオ市郊外に転出して、歌人は坪田ひとり取残されてしまったが、彼はその孤独な歌の交わりを登山電車に乗ってカンポス・ド・ジヨルドンのグループに見つけ出している。毎月持たれるカンポス歌会の忠実な出席者としてもう年目は古くなっている。

ピンダの次のタウバテ市には、且て椰子樹同人であつた高尾一がいる。

けれども、近年は事業に没頭しているのか少しも歌作を發表していない。

同市に、婦人子供用品の店を開いている高野操さんは、菅野みさおのネームで孤軍奮闘している文学人である。パウリスタ文

学賞の選外佳作「ウバツバにて」で高野さんの文学的手腕が認められている。よく繁昌する店の仕事が片附いて夜半に執筆をするという高野さんの努力は高く買ってもいい。小説の他、短歌もぼつぼつ作っているという高野さんの家でタウバテ歌会を発足させようと、サンジョゼーから江尻潤、森元三山らが応援して歌会を持ったが地元から誰も集まらず、二回目に古川継氏が参加しただけで未だタウバテ歌会は陽の目を見ていない。

サン・ジョゼー・ドス・カンポス歌会は、江尻潤が移転してきた年、コチア産組倉庫現主任の深沢喜久雄氏の提言で、オリオン・クラブを借りて、サンパウロより清谷益次、川原ひろし、小笠原富枝、陣内しのぶ、弘中千賀子ら先輩歌人の来援によって発会した。

その時、参加した地元の森元三山、大月博、深沢喜久雄の他、後に飯田義勝、同静子が加わって毎日必ず歌会が開かれるようになって、もう四年ほどになる。

森元三山は、本名佐藤忠雄、俳人としては佐藤寒月として作句歴はもう古い。一九六四年に発刊した句集「樹海」はアマゾン時代のグループの一人として寒月の三十句を載せている。彼を中心に飯田義勝、深沢喜久雄らが念腹系の俳句を作り、毎月句会を持っている。この時には、かくれたる俳人として小番徳郎がいる。

彼はチエテ移住地以来の句作年月二十年余りである。その他PL教団の機関誌に歌を発表している人もあるらしいが筆者には

不明である。

佐藤忠雄は、寒月の名で俳句の他、民謡風の詩、小文、覆灯火の名で川柳と、何でもやるとばかり文学づいている六十年台の元気者である。

筆者は、吉本青夢、大場時夫、森谷風男らとモヂアナ時代に文芸誌（斧）を発刊したころは滝譲二の名で短歌を、江尻潤の名で詩や小文を書いていたが、クリスチャンになってから十年余り、文学に遠去かりというより、キリスト教文学に専念し、その毎月の機関誌を発行しており、日本に勉強に行つて来て牧師となり北パラナに赴任してロンドリーナで大場時夫、森谷風男と再会、もう一度、短歌を復活、現在に至る。川柳も十年あまり作つて小野蛙人のペンネームも少しは板についたようだが、一番好きな現代詩の創作は、時折りしか出来ない。筆者が詩に惚れ込んだのは三十年前に古野菊生と同船でブラジルにやつて来たことに影響するのかも知れない。

江尻潤の名は、清水市江尻町の出身であるから付け、小野蛙人は小野道風の見た柳に飛びつく蛙にあやかった。何分本職が忙しいので書きたいと思つている小説が仲々書けないでいる。但し「野の声」VOZ DE CAMPOSという十二ページの月刊キリスト教誌のスペースを一人で殆ど埋めているのだからコロニア文学活動の一齣を進めていることにはなるだろう。

## トメアスーと文学活動

加藤 三浪

此方では、文学活動と言うには、ほど遠いのが実状である。

“人間棲むところに文学あり”といわれておるが、文学と言え  
ば、社会の一部の人のもののように考えられている、邦人コロ  
ニアとして、貴会の文学組織活動は、邦人社会の大きな発展を  
ものがたるものである、従って文学同好の士が相寄るには、か  
なりの集団が必要かと思われる。

このトメアスーは、広莫たるアマゾンの未開地に、ほんのわ  
ずかな小面積が開拓されたにすぎない、原始林にかこまれた孤  
島である。南部諸州のように、発達した道路によって都邑が連  
なつて発展するとは異り、他と連結ある文学活動する訳  
にはいかない。

トメアスーは、開拓三十八年の歴史を持ち、隣接する第二移  
住地をふくめて、邦人は約五〇〇家族、三・〇〇〇人の集団に  
すぎないが、移住地というより村落的な感じになってきた。

一九六四年、地区併合合会によって、トメアスー文化協会が  
結放され、六六年に文化会館が完成して、小さいながら文化活  
動をやっておる。

文化活動の一部門である文芸部は、今のところ俳句会と、「花  
胡椒」誌の発行と、トメアスー親睦会の月刊紙、「緑風」がある。

トメアスー俳句会は、青木月斗先生の、直弟子である、故吉丸丘南師によって、一九六〇年に発足して、丘南師亡き後は、中心となる指導者はないが、青年をまじえた同好の士が、二〇名で、月二回句会を催しておる、俳句にかぎらず、師事者のないことは、進歩がむずかしい。

当地方のように、熱帯地の場合は、句作する上において、季語が問題になってくるが、俳句は作句する地方の気候、風土による、自然と生活を観察して、昔から詠まれておる。

従って、アマゾンのように四季がなく、雨季と乾季の地方は、日本の才時記にとらわれることなく、応用できる季語と、その地方独特の風物を季とした句作であってよいと思われる。俳句会では、アマゾンの句を作ることに関心しておる。ブラジル南部には、四季があっても、地方色豊かな実生活から生まれた句は、人を感動させる秀句が多い。

「花胡椒」は、トメアスー俳句会誌として発行されたが、隠れた、俳人、歌人、詩人などから寄稿があり、文芸愛好者が多く潜在することが察しられ、「花胡椒」は一俳誌にとどまらず、一般から随筆などをふくめた、文芸部の機関誌として、年三回発行することになった。

「緑風」は産業組合の青年諸君が主である親睦会の機関誌であるが、産組の動静と、一般からの寄稿を發表している。

近年日本語の普及と、女流短歌会が近く発足の気運にあることは、詢に喜ばしい限りである。

## 原稿用紙

◎本会調製の原稿用紙は、特に文学作品執筆便宜を考慮して作ったもので、会員間に好評を得ています。

紙質がよく、体裁が美しく、しかも格安の為、利用度が増々高くなっています。

現価、百枚一綴り（一枚は20×20 字詰）二、二〇新クルゼイロス。

◎御注文あればすぐにお送りいたします。

「コロニア文学会」

## 『コロニア文学会』

### 会 員 募 集

コロニア六十年の歴史を刻んで、はじめて誕生した「コロニア文学界」Gremio Literario" Colonia" は、今日約六〇〇名の会員を擁して、文学運動を展開しております。

毎月一回、第三金曜日の夜「文学研究会」を開き、機関誌「コロニア文学」を発行、今回、第五号を送り出しました。

こうして、日系コロニア社会の、たくましい生活と思想を主

題とした文学作品が生み出され、ぞくぞくと発表されつつあります。

日本語はもとより、ブラジル語による文学追求を進め、コロニア独特の境地を開拓したいというのが、私たちの念願とするところでは。

文学愛好者は言わずもがな、コロニアの精神発掘と、その展開に関心を寄せられる方々、コロニアにこよなき愛着を抱く方々の積極的な御参加を希望いたします。

#### 要 項

一 目的、文学誌発行、文学研究会開催、文学賞設立、その他あらゆる文学関係の運動を推進する。

二 会員、入会を希望し、会費を納入したものを会員とする。その資格には何の制限もない。会員は作品を投稿することができ、「コロニア文学」誌の無料配布をうける。

三 会費、年額十五新クルゼイロス。

(二回に分納も可)

四 入会申込み宛名

サンパウロ市サン・ジョアキン街三八一番 日本文化センター内

「コロニア文学会」

コロニア文学会

代 表 鈴 木 悌 一

## 『コロニア文学』

### 作品募集

左によって、本会々員より作品を募集いたします。

一、小説①一〇〇枚内外

②三〇枚内外

③三〇枚内外

二、評論（文学、美術、学術、社会）三〇枚内外

三、随筆 紀行文、二〇枚内外

四、韻文 ①詩（訳詩）一人二篇以内②短歌一〇首以内、③俳句一〇句以内、④川柳一〇句以内

五、短文（生活文、地方通信）五枚以内

六、特別募集 ①「私の終戦」二〇枚内外、②「コロノ時代の思い出」二〇枚内外、③「短篇自叙伝」五〇枚以内、

### 応募規定

一、必ず原稿用紙（20×20）を使用してください。

（本会調製の良質原稿用紙があります。一綴（一〇〇枚）を二、三新クルゼイロスでおわけしています。御注文に応じ直ちにお送りいたします。）

二、誌上筆名はさしつかえありませんが、原稿末尾に本名、略歴、連絡先を明記してください。

三、掲載作品は返しません。掲載しなかった作品は、作者の希望により返還します。

四、掲載作品には、本会々計の許す範囲内で稿料を出します。

五、作品の採否は、本会の選考委員会におまかせください。

第六号の選考委員は、水野林、山里アウグスト、武本由夫  
六、原稿~~ズ~~切、

第七号、一九六八年二月末

第八号 同 四月末

七、投稿宛名 サンパウロ市

サン・ジョアキン街三八一番 日本文化センター内

『コロニア文学会』

G r e m i o L i t e r a r i o " C o l o n i a "  
R u a S a o J o a q u i m , 3 8 1 S a o P a u  
l o .

コロニア文学会

新入会員名簿 (ABC順)

一九六七年六月〜一〇月

A 阿部パウロ

B 盆子原国彦

F 福村林二、藤田文吉、藤原宝造、藤井繁美、藤井素介

H 広瀬富保、広田三郎、平川早美、原田佳一、林田瓢耕、東保

広、本庄緑南、畠山道生、

I 池田垂二、岩部俊夫、池田豊年、生駒正、乾昌平、石井三郎  
K 風早峻、近藤信夫、川口幸子、黒田八重子、川久保すみ子、加藤正一、川俣正示、古田土芳次

M 村松正太郎、本山寿子、森谷風男、松井衛、峯定実、武藤新平、武藤格

N 中村英雄、中島篤、永田泰三、中野節子、中谷修、中隅哲郎、中川清人、榑崎巧

O 岡村綾子、大西阿哲、大場時夫、大橋干城

S 佐藤正記、斉藤幸、鈴木信男、

T 高橋英一、谷上きよ子、高柳清、竹林光、坪井武、滝井康民、竹中正、高瀬準三、谷口重徳

U 浦谷賢造

Y 山口道夫、山内矩子、山本精次、山田一馬、吉田耕作、八幡与三、安村恵定、吉村泉太郎、横谷乗種、山本昭吾

## 後記

\*本会発足以来、順調に伸びて、現在会員約六〇〇名、一〇〇〇名というのも夢ではないといえましょう。会員はできるだけ同好の士を御勧誘ください。

\*九月はじめに原稿を印刷にまわしたので一〇月には発行の筈でしたが印刷所の都合で遅延してしまいました。

\*来年は、理想とする年間四回発行に漕ぎつけたく、努力したいと思えます。

\*本誌は日本の一流新聞、雑誌社、地方有名同人文学雑誌社などに全部で約七〇部を送っております。近頃段々反響があつて、その特異な存在が認められていることもわかりました。これで質的な水準の上昇があれば、申し分ないと思えます。ぜひ、頑張りたいものです。

\*諸物価高騰の折から、印刷費もかさみますので、会費はなるべく遅れないように御納入ください。

\*発行援助の意味で、コロニアの各有名商社から広告を頂いており、非常に感謝しております。今後ともよろしくお願い致します。

(武本生)

コロニア文学第五号

発行一九六七年一月

(会員へ無料配布)

編集人 コロニア文学会編集委員会

代表 鈴木 悌一

発行所 サンパウロ市 サン・ジョアキン街三八一番 日本文  
化センター内コロニア文学会

Grêmio Literário "Colônia".

Rua São Joaquim, 381. S. Paulo

Tel. 36-5212

印刷所 パウリスタ印刷株式会社

オスカル・シントラ・ゴルジーニョ街四六番

(132. 137ポルトガル語文)